

無個性より苦勞してます。

ソウルゲイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

優れた個性を持つがゆえに苦勞を強いられて生きる少年「造理鍊」。彼の行く末は如何に・・・。

小説は初挑戦です。作者は全くの素人ですので長くは続かないと思います。尚、後からの編集が多いのでご注意ください。

目次

第1話	1
第2話	6
第3話 (主人公紹介有り)	12
第4話	15
第5話	20
第6話	30
第7話	41
第8話	46
第9話	57
第10話	69
第11話	82
第12話	90
第13話	97
第14話	106
第15話	113
第16話	121
第17話	136
第18話	144
第19話	154
第20話	161
第21話	166
第22話	171
第23話	181
第24話	190

第 3 4 話	第 3 3 話	第 3 2 話	第 3 1 話	第 3 0 話	第 2 9 話	第 2 8 話	第 2 7 話	第 2 6 話	第 2 5 話
302	292	277	269	258	249	239	227	218	199

第1話

”個性”と言う超常が伴う現代、”ヒーロー”と言うものが公的職務と認められ、個性を使って犯罪を犯すもの者”ヴィラン”を取り締まる社会となった。

そして、圧倒的な強さを持ったヒーロー”オールマイト”の登場により、ヴィラン発生率は年々減少し、その存在そのものが抑止力となり人々に平和と安心を与えていた。

——だが、全ての人々に平和と安心が与えられる訳では、決して無い。

「追いつめたぜ、クソガキ！」

と、口うるさく叫ぶ男。

都心のとある場所、閉鎖された工場の中に集まる複数の男達。

彼らは世間で言う”ヴィラン”と呼ばれる連中である。

そして、その男達の目線の先には……。

「やれやれ、追い詰められたか……」

一人の少年が立っていた。

少年は諦めたかのようにため息を吐く。

見た所、少年は制服を着た学生で、眼鏡を掛けたインテリ系の男子。

少年はヴィランに追われ壁越しに立たされており、周りは完全にヴィランに囲まれている。

「散々苦勞させられたがもう逃げられねえ。大人しく俺たちに協力すれば痛い目に合わずに済むぜ」

「……」

少年はヴィラン達を黙って見つめる。

——そして数秒経った後。

「分かりました。あなた達に従います」

彼は両手と膝を地面に着け、そう言い放った。

「がぁはははは！ それでいいんだよ！ ガキは大人しく強い大人の言うことを聞いてればな！」

「素直になることはいいことだぜ？ ガキ！」

「ソウダ！ ソウダ！」

高笑いをするヴィラン一同。目的が達成されて喜びに浸っていた……だが、その時

「がははは！ グウアツ!？」

突然、床のコンクリートの一部が拳の形をして、勢い良く盛り上がりヴィランのアゴに直撃——さらに

「ギヤツ!？」

「ノワア!？」

「ウギヤツ!？」

他のヴィラン達にもコンクリートナツクルがアゴに直撃。

ヴィラン全員が見事に宙を舞い、地面に倒れ込みノックアウト。

全員が意識を失い動かなくなったところで、少年は静かに立ち上がる。

「馬鹿が、子供に簡単に倒される大人が強いわけ無いだろう……」

倒れこむヴィラン達に少年は冷たく言い放つ。少年はポケットからスマホを取り出し

「もしもし警察ですか？、ヴィランがいるのですぐに来てください。

場所は——」

手馴れてるかのように警察に通報する少年。彼はその場で警察の到着を待った。



「全員をすぐに収容しろ！ 気を失ってるからと言って油断するなよ」

「了解！」

ほどなくして、警察が到着。

その中には数人のヒーローも居て、ヴィランを収容していく。そして、指示を出していた警察の人が少年に近づいていく。

「到着が遅れて申し訳ない……また狙われたんだね」

「もう慣れっこですよ、塚内警部」

「ははっ……」

顔見知りなのか、特に気にすることも無く返事を返す少年。

「ヴィランの相手を」慣れっこだ」と笑顔で言い放つ少年に、思わず苦笑いを浮かべてしまう塚内警部。彼は少年に事件に至った経歴を詳しく聞いていく。

——すると、一人のヒーローが近づいてきて

「君！無事で済んだからいいものを、学生がヴィランと戦うなんて無謀もいい所だぞ！個性の使用も禁止されているのだから！」

少年に対し説教を始めた。

極当たり前のことを言っているが、事情を知っていた塚内警部が止めようとする。

——だが

「申し訳ありません。自分の行動が浅はかだったと深く反省しております……」

それよりも早く少年がヒーローの前に立ち、頭を深く下ろして謝罪する。

少年の素直な対応にヒーローは感心の意を見せるが、それを見ていた塚内警部は険しい顔になり、ヒーローに再び声を掛けようとするが……。

「ですが、あえて言わせていただきます」

「またも少年が塚内警部よりも早く口を開き、顔を上げてヒーローに語りかける。

「抵抗しなければ、俺はヴィランに連れ去られていた。ヒーロー以外の者が公共の場での個性の使用が禁止されているのは重々承知していますが、法律に従っていたら俺は救われなかったということも理解していただきたい」

少年は無表情でそう言い放つ。

何の感情も籠ってない言葉にヒーローは思わず息をのんでしまう。「そのへんでいいでしょう。彼もヴィランに追われて疲れています……そろそろ家に帰してあげないと」

塚内警部が割って入る。

「部下に家まで送らせるよ。くれぐれも気を付けて……我々はいっ

でも君の味方だよ、造理君」

「ありがとうございます」

塚内警部にお礼を言い頭を下げた少年は、部下の警察に連れられてその場を後にした。

「造理?・・・あ、造理つてまさか」

「そのとおり、彼が”造理 錬”だよ」

「彼がああ噂の・・・」

何か思い出したかのように声を挙げるヒーローに塚内警部が言い放つ。

「造理 錬つくり れん・・・私が知る中でも特に不幸な人生を送っている少年だよ」

塚内警部は少年を乗せ、走り去っていくパトカーを悲しげなめで見つめる。

◇◇

警察に送り届けられ、無事に家にたどり着いた少年”造理 錬”

家には誰もおらず、部屋に入ると錬は疲れたのか、そのままベットに倒れこむ。

「毎度のことだが、疲れるな・・・」

溜め息を垂れながら愚痴をこぼす錬。

彼はとある事情によってヴィランに襲われることが多く、警察やヒーローに何度もお世話になっていた。

「最近ヴィランに襲われる数が増えてきた。やはり、あの噂は本当なのか?・・・”オールマイトの弱体化”」

錬は以前ヴィランに襲われた時にふとヴィランが口にした言葉を思い出す。

錬自身もオールマイトの事はよく調べており、昔と比べて彼の一日の活動時間が短くなっていることに何となく気づいていた。

「もしそれが本当なら、ますます危険が増えるな・・・やっぱり取るしかないか・・・ヒーローの資格を」

錬は静かに、そして冷静にヒーローになることを決意する。

これは不遇な人生を送っている一人の少年の物語である。

第2話

「造理、お前の進路希望なんだが、ヒーロー科でいいんだな？」
「はい」

とある中学校の職員室。そこで一人の生徒と教師が話していた。
造理 錬とその担任である。

新年度を迎えた春の季節。中学三年生になった錬は担任と進路について相談していた。

ヒーロー飽和社会になった現代、誰もがヒーローを目指し、生徒の9・9割がヒーロー科を志望である。担任である彼も受け持ったクラスの生徒全員がヒーロー科志望だったため特に気にすることではないのだが目の前の生徒、錬にだけは違う思いを抱いていた。

「お前の場合は事情が事情だけにヒーローを目指すのは仕方がないとわかつてはいるが・・・本当にいいんだな？」

「もう決めたことです。今の俺は一般社会で生きるほうが大変ですから」

「そうか・・・よし！、なら” 雄英高校” にしろ。あそこなら警備も軍隊並に嚴重だ。ヒーロー資格の取得に専念できるだろう？」

担任はヒーロー養成学校最高峰、” 雄英高校ヒーロー科” を進める。

「雄英、ヒーローアカデミアの最高峰・・・受かりますかね？」

「お前は俺が受け持った生徒の中では一番優秀な生徒だ。勉強も運動も常にトップ・・・俺は自信を持ってお前を推薦するぞ」

「ありがとうございます。先生には感謝しますよ。俺にここまで気にかけてくれる人は、そうは居ないですから」

「俺は教師の責務を果たしてるだけだ。お前の健闘を祈ってるぞ」
「ハイ・・・では」

錬は担任にお辞儀をして、職員室を後にする。

「はあく……」

職員室を後にした鍊を見送った担任の教師は椅子に背もたれ、疲れの様子を見せる。

「お疲れですね先輩？」

「まあな」

「でも、これで不安材料が取り除かれますね」

「おい！そんなことは思っても口に出すな！」

「!?……すみません」

後輩の教師に話しかけられる担任。後輩の失言に対し思わず声を荒らげる。

「彼は本当に凄いですね。あんな人生を送っているのにケロつとしてるんですから」

「完全に慣れちゃってるのさ。ヴィランの出現で動じるような精神はとっくに捨てちゃってるよ」

担任は鍊の心情を察したように発言する。

「僕も昔はヒーローを目指してましたが、無個性だった故に諦めました。……でも彼を見ると自分が十分幸せだったことが理解出来ます。」

「個性が有ろうと無かろうと結局は平穩に過ごせることが一番幸せなのさ。……俺にはヴィランに襲われ続ける人生なんてマツピラだぜ」
「彼の人生に幸あれ、ですか？」

「そうなることを祈ってるよ」

担任と教師は少年、造理 鍊を心の底から祈った。



造理 鍊……彼のことについて少し語ろう。

彼はごく一般の家庭に生まれた男の子であった。

両親も父は一般の営業者、母は専業主婦とごく普通であり、けして

裕福とは言えないが生活水準は平均的で特に問題の無い家庭であった。

父親の個性は”分解”。

分解とは言っても何でもかんでも分解出来るわけではなく、対象となる物の構成を正確に理解していないと分解が出来ないため、知識のない人間からしたらあまり役に立たない個性であった。

母親の個性は”再構築”

壊れた物を元に戻すことができるが、こちらも対象をよく理解していないとうまく発動できない。

一般人では精々、割れたコップや皿を元の状態に戻す程度である。

そんな両親の下に生まれた錬は幼い頃に個性診断を受け診断の結果、父と母の複合型の個性であると診断された。

しかし両親は個性に関しては無頓着であったため、とくに気にする事は無く、平穏な日々を送っていたが、錬が診断を受けてから数年後、錬が六歳を迎えたころとある出来事が起こった。

ある日の夜、家族三人が仲良く夕食を食べていたとき、錬が両親にある物を手渡した。

——それは金色に輝く石、「金」それも純金であった。

最初は玩具かと思っていた両親は錬にどこで買ったのかを聞いたが、錬は個性で造った、と答えた。

——錬の個性”錬金術”によって

錬の個性”錬金術”は物質の構成元素や特性を理解できれば、それを分解し、更に同質の物であれば別の物に再構築することができたのである。故にただの石から金を造り出すこともできた。

錬は両親と違って個性にかなり興味を持っていたため、親に内緒で個性の研究、実験をし、道端に転がってるような石ころを金に造り変えてしまったのである。

錬は元々とても賢い子供であり、幼い頃から勉強も運動もでき、同世代の子供たちから二つ三つ抜きん出ていた。

知力がとりわけ高く、学んだ事もすぐに覚えてしまう、いわゆる天才の部類に入る人間であった為、錬からすれば道端に転がっている石

ところで金を生成することは難しいことではなかったのである。

鍊は、けして裕福ではなく苦勞をしている親の為にと思い、恩返しの意味も込めて金をプレゼントしたが、これが切っ掛けで彼の環境は大きく変わることとなった。

金を造り出せる個性、これは資本主義の現代においては神懸かりとも言える個性であり、無限にお金を生み出せるものであった。

それを理解した両親は狂ったかのように大喜びし、二人はすぐに行動を起こした。

それから一年が過ぎたころには生活が激変していた。

両親は古物商の許可を取得し、鍊に大量に金を造らせ、それで稼いだお金で豪華な家を建て贅沢三昧の生活をしていた。

父親は何台もの高級車を乗り回し、若い美女を連れては何百万円もする酒を飲み明かし、母親はブランド物の服やバック、宝石などを買う漁り、若い色男を連れては豪華な食事を楽しむ。

あまりに変わり果てた両親を見た鍊は戸惑う日々を送ることになった。

そんな日々が続いたある日、豪華な生活をしている両親に、テレビ出演の依頼が来た。

有頂天になっていた両親はこれを二つ返事で引き受けたが、これが鍊の人生を大きく狂わせる事となった。

テレビで、それも全国ネットで言ってしまったのである。

——”息子の個性で優雅に暮らしています”と。

贅沢な生活を送ったせいなのか両親の頭はどうかしており、どうやってお金を稼いでいるのかテレビの前で極め細やかに説明してしまったのである。

個性は公的な場での使用は禁止されているが私有地での使用は問題ないため、何も悪いことはしていないと言い切る両親であったが、問題はそこではなかった。

テレビに向かって言ってしまったがために、それを見ていた良から

ぬ者達、動き始めてしまったのである。

——“そう、”ヴィラン達”が

ヒーロー飽和社会、特にナンバーヒーロー”オールマイト”の登場によって成を潜めることになったヴィラン達、それも組織的なヴィラン達が活動資金を求め、鍊を狙うようになったのである。

テレビ放映されたその日を境に鍊はヴィランに狙われるようになり、さらに鍊にとって最悪……いや、最低と言える事態が起こった。

——両親が鍊を置いて逃亡したのである。

元々狙われていたのは鍊であった為、両親は金と共に鍊の前から姿を消してしまい、鍊は警察に助けを求め、警察は両親の捜索をしたが、両親はすでに名前を変え海外に移り住んでいたのである。

子供のことを聞いても知らぬ存ぜぬを言い渡され、警察からそのことを聞いた鍊はすぐに自分の置かれた状況を理解した。

——”自分は捨てられてしまった”と。

だが、鍊は冷静であった。

元々賢かったこともあつて過ぎたことを考えることはなく、これから先のことを考えていた……と言うよりも鍊の中での親に対しての愛情が薄れていたのである。

親も鍊の事は”金のなる木”としか考えないようになっていたため、残りの人生を遊んで暮らせる金が有れば、鍊は不要であった。

そんな鍊に対し、警察は鍊の今後について頭を悩ませていた。

ヴィランに対して知名度が上がってしまった為、鍊を海外に住まわせることも検討されたが日本以上に治安が良い国もそうそうあるわけが無く、仕方がなく警備が厳重な児童養護施設入れようしたが、鍊はこれを拒否。

ヴィランに狙われている自分が居ては、他の人たちに危険が及ぶことを鍊は理解していたため、一人暮らしを志望したが、流石に小学校に上がったばかりの子供に一人暮らしをさせることは無謀であると警察は判断する。

しかし、鍊が言っていることもまた事実であるが故に、悩みに悩んだ末、警察の監視の下で、政府が用意した家に住むことになった。

——鍊の一人ぼっちの人生の始まりであった。

——以上が造理 鍊に起こった出来事。

それから数年が過ぎた現在、鍊は今でもヴィランに狙われ続けている。

彼は己の身を守るために独学で戦闘術、護身術、逃亡術などを学び、長年ヴィランに襲われ続けた結果、並みのヒーローに匹敵する程の戦闘力を兼ね備えてしまった。

今まで、うまくヴィランをあしらって来たが、ヴィランが活性化していることを肌で感じてしまったが為、個性が制限されている今の状態に限界を感じ、大っぴらに個性が使用出来るヒーローに成ることを決意したのである。

——他ならぬ、自分の為。

第3話（主人公紹介有り）

時刻は夜の9時。

場所はとある家———と云うか錬の家。

その家の一室で錬は———

「91、92……」

日課のトレーニングをしていた。

だが、それはただのトレーニングではなく逆立ちをしながらの腕立て、……いわゆる逆立伏せであった。

プロの体操選手でも10回出来れば凄いレベルのトレーニングを錬は当たり前のようにこなしていた。

———実は、彼の筋肉に秘密がある。

みんなは”ピンク筋”と言うものを聞いたことはないだろうか？。

簡単に説明すると、人間の筋肉は主に二種類で構成されており、力が強く瞬発力があるが持久力が低い”白筋”、逆に持久力は高いが力は弱い”赤筋”の二つが存在する。

人間の筋肉は主にこの二つの筋肉で構成されているが、実はもう一つ筋肉が存在する。

二つの筋肉の長所を兼ね備えた中間的筋肉、それが”ピンク筋”……錬の肉体はそのほとんどがピンク筋で構築されているのである。

本来ピンク筋はとてもなく、常人では一割にも満たず、そのパーセンテージは一生変わらないとまで言われているが、錬は己の個性”錬金術”を用いて長い時間を掛け、そのパーセンテージを変えてしまったのである。

錬金術の本質は”理解”し”分解”し”再構成”するものであり、錬は己の個性”錬金術”で白筋と赤筋のほとんどを長い月日をかけてピンク筋に再構築してしまったのである。

錬の肉体は細身ではあるが、無駄がなく構成された超強化ボディと

成っていた。

ちなみに体脂肪率は7%・・・。

「99、100!・・・ふう〜」

取り決めた回数をやり終えて一息をつく錬。

超人的な肉体を手にいれた錬のトレーニングは凄まじく、常人では不可能なことも当たり前になす日々を送っている。

トレーニングを終えた錬は、汗を流すためにシャワーを浴び、風呂に入る。

「ハア〜・・・」

湯船に浸かり大きな溜め息を吐く錬。

「入試試験まで後3日。倍率は300を超えると言うが・・・問題ない」
雄英高校ヒーロー科の入試試験を3日後に控えている錬だが、その顔は余裕に満ちている。

倍率は300、偏差値79の超難関の試験であるが、勉強も運動も出来、何より永年ヴィランに襲われ、時には戦闘までこなして来た錬にとつて、雄英の入試試験であっても動揺することはなかった。

「ふう〜・・・」

錬は気持ちよく湯船で温まる・・・



風呂から上がった錬は寝巻きに着替え寝る準備をする。

——がその前に、一度これまでの人生を振り返ることにした。

「ヒーローに成れば個性が自由に使用できる。ヴィランへの対抗策も大幅に増えるはずだ。何よりヴィランによる襲撃も減るはず・・・」

ヒーローの資格さえ取ってしまえば個性を使って堂々とヴィランを振り返りに出来る。

錬は今まで人目に付かないようにヴィランを誘い込み処理するよ
うに心がけていたが、資格を得ればその必要もなくなる。

「残りの三日間はゆっくり休んで、英気を養うか・・・」

錬はベットに入り、ゆっくりと眠りに付いた。

|

第4話

「朝日が眩しいな……」

俺の名は造理 錬。散々紹介されてるから名前は言う必要ないと思うが、一応紹介しておく。

俺は今現在、“雄英高校”に向かうために朝日が昇る時間、海岸近くの道を歩いている。

今日は雄英高校ヒーロー科の入試試験、当日。

まあ、こんな朝早く家を出る必要はなかったんだが、家にいてもやることは無く、早朝はヴィランの出現も少ないため、俺にとっては都合がよかった。

本を読みながらのんびり雄英に向かうことができる。

——読書は実に良い。

元は知識を得るために始めた読書であったが、知識欲が高かったのか今ではそれが日課となっていた。

たわいもない話しをしてしまったが、そんな感じで俺は雄英に向かって歩みを進める。

「わああああああ!!」

「？」

読書をしながら海岸沿いを歩いていると海岸から叫び声が聞こえてきた。

遠くてよく見えないが、海浜公園がある場所で一人の男がガラクタの山の上で空に向かい叫んでいるのが分かる。

俺と同じ年くらいか？ こんな寒い早朝に、しかも上半身裸で一体何をやっているのかと疑問視していたが、あいつ周りをよく見ると奇妙な点に気づいた。

——浜辺が綺麗になっている。

あの沿岸は漂着物と不法投棄で、辺り一帯がガラクタで埋め尽くされていたはずだが、綺麗サツパリ無くなっていた。

あいつがやったのか？ 奉仕活動にしては随分過剰だと思うが、もし一人でやったのなら凄いガッツだな。

叫び疲れたのか、倒れこむと突然巨漢の大人が彼を抱き抱えた。
2メートルを裕に超えるだろうその男……。

何だか、オールマイトのように見えるんだが、気のせいだろうか……？。

——まあ、気のせいだろうな。

こんな所にオールマイトが居るはずもなく、何より彼の事務所は東京港区の六本木にあったはずだ。

他人の空似か、もしくはへアーを真似た熱狂的ファンか何かだろう。

これ以上、気にかけても仕方がないし、さっさと雄英に向かうとするか。



「今日は俺のライブにようこそー!!! エヴィバデイセイハイ!!!」

「(シ——ン……)」

静けさが広がる。

「こいつあシヴァ——!!!受験生のリスナー!!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!! アーユーレディ!? YE A H H!!!」

「(シ——ン!!)」

更に静けさが広まる。

俺は今現在、雄英高校の講堂で他の受験生と共に説明を受けている。

説明をしている人物はボイスヒーロー”プレゼント・マイク”。

その名の通り現役のプロヒーローであり、ラジオなどもやっているとにかくテンションが高いヒーローである。

あまりのハイテンションに唾然としている者、呆れている者、何故か口を抑えて感動している者など反応は様々だが、誰も返事を返さない。

——と言うより返す度胸が無いのがほとんどだろう。

特に返す必要もなく、本人も気にせず話を進めていく。

試験のルールは機械で出来た三種類の仮想敵を相手にすること。

三種類の仮想敵にはそれぞれポイントが設けられ、それを行動不能にしポイントを稼ぐのが目的らしい。

何て単純な課題なのだろうか。

力を量るといっただけならいざ知らず、こんな野蛮な試験でヒーローの器が見計れるのだろうか。

……いや、ヒーローとて所詮、力がものを言う世界か？

オレは若干の呆れを顔に浮かべつつ、配られたプリントに目を通していたが……。

「質問よろしいでしょうか!？」

一人のメガネを掛けた受験生が質問をし出した。

俺と同じようプリントの内容に疑問を感じ、そのことに対して聞いていたが……。

「その縮毛の君、先程からボソボソと気が散る!! 物見遊山のつもりなら即刻、雄英から去りたまえ!」

突然、別の受験生に説教を始めた。

指を指された縮毛でそばかすの受験生はたじろぎ、周りの受験生はクスクス笑っている。

全く何様のつもりなのか、同じ受験生の立場にいる者にそんなことを言う権利がある訳でもない。

難癖と言うより、言い掛かりだな。

「ついでにそのメガネの君「?」」

なぜか俺にまで話しを振ってきた。

確かに俺も少しボソボソと声を出していたがそこまで気が散ることか? ……ていうか、お前もメガネだろう。

「君もボソボソ気が散るし、何なんだ、そのやる気なさげな顔は? 君も物見遊山のつもりなら即刻、去りたま「黙れ」、!？」

癪に障った俺は、あえて言い返すことにする。

「同じ受験生であるお前にそんな権利なんてない。そもそも、その程

度で気を乱すような未熟者が雄英なんかに来るな」

「!?」

メガネの受験生はたじろぎ、俺は更に続ける。

「何より説明を途中で遮り質問をするのはマナー違反だ。……身の程を知れ、愚か者」

「うっ!?!」

正論で返してやった為、メガネの受験生は歯を噛み締めながらも大人しく座った。

先ほどとは打って変わって静まり返り、全員が俺を見ていた。

俺の前に説教を受けた縮毛の受験生もこちらを見ている。

変に目立つような真似をしてしまったが、理にかなっていない説教を受けるつもりはない。

「オーケーオーケー、アツくなるナー!! ちゃんと説明するぜー!」

説明を続けるプレゼント・マイク。

説明を聞いていくとプリントに記載された四種類目の仮想敵はポイントが設けられていない、妨害目的の所謂”お邪魔虫”のようなものらしいが、これは少しおかしい。

仮想敵の倒すことが目的ならば、全ての仮想敵にポイントを設けるはずだ。

——何か秘密があるな。

仮にもヒーロー養成学校の最高峰”雄英”の実技試験が仮想とは言えヴィラン退治だけをすればいいわけがない。

そもそもヴィランにポイントが設けられていることもおかしい。

このルールだと、受験生の足の引っ張り合いは目に見えている。

他の受験生への悪質な妨害は反則らしいが、躍起になってしまう者は必ず出てくる。

ヒーローの本分はヴィラン退治と人助けなのだから、むしろ協力プレイなどをさせる方が効率的のはずだ。

——? 人助け?

「……ああ、なるほど。そういう事か」

試験の本質を見破った俺は、軽く吐息を吐いて疑念を晴らしたの
だった。

第5話

「……………広いな」

プレゼント・マイクの説明会が終わった後、俺を含む受験生一同はバスに乗り試験会場にたどり着いた。

現在、会場の扉前で待機している。

試験会場は複数に分かれており、受験生はそれぞれ指定された会場に向かったが、目の前にはビルが立ち並び、街と呼んでもおかしくないほどのだだっ広い会場があった。

さすが雄英、こんな広い会場、それも複数ある会場が敷地内にスツポリ入っているとは凄い規模だ。

——いや、感心している場合ではないな。

周りを見渡すと、同じ会場となった受験生達がウォーミングアップや精神統一などをしているが、俺は何時でもスタートできるようにスタンバイする。

今までの経験上、油断をしていると必ず痛い目を見ることになったし、そもそも実戦にカウントなどある訳が無く……………。

『ハイ、スタートー!!』

「!? やっぱりなあー!!」

合図が出た瞬間、走り出す。

——俺だけが。

「……………ん? え?」

『どうしたあ?! 実戦じやカウントなんざねえんだよ!! もう一人走ってるんだから、走れ走れ!! ……賽は投げられてんぞ!!?』

それを聴いた全員が出遅れて、慌てて走り出す。

試験は開始された。

◇

スタートダッシュは無事成功。

会場の中心部まで進み、やるべきことは……………

「58ポイントー」

必要な敵ポイントを稼ぐこと。

制限時間は10分、誰よりも早くスタートしたおかげで、開始3分で多くの仮想敵の撃退に成功。

機械で出来た仮想敵。

見た目に迫力があるが、装甲は思ったよりも脆く、これならば簡単に破壊できる。

”錬金術”でメイスを造り、向かってくる仮想敵をなぎ倒す。

機械が相手なら、刃物より鈍器の方が効果的だ。

そして、複数の仮想敵が同時に襲ってきたら……

「《錬成》！」

俺の周りの地面をニードル状に構築して一気に破壊、これを繰り返す、だけで十分だ。

相手の動きは単調で、おそらく試験用に動きを制限させているのだろう。

これならいくら来ようと俺の敵ではない!!。

「77!・・・80ポイント!」

『あと、6分2秒〜』

残り6分で80ポイント・・・上出来だ。

仮想敵を倒しながら他の受験生を見ていたが、ほとんどが20、30ポイントと行ったところ。

これだけでも十分、合格ラインと言ったところか……。

「オラア!! 61ポイント!!!」

「!?!」

大きな声がし振り向くと、とがった金髪をした人相の悪い男が仮想敵をノリノリで破壊していた。

あの男、仮想敵に触れて爆発させてるが、対象を爆発させる個性なのか?

——いや、それで自分にも被害が出るから違うな。

おそらく手の平から爆破エネルギーのようなものを出す個性だろう。

あいつは個性が戦闘に向いているおかげで、他の受験生よりも多く

仮想敵を撃退できているようだな。

——だが、隙が多い。

「《錬成》！」

「!？」

俺はあいつの背後に迫っていた仮想ヴィランを破壊する。

目の前の敵に集中しすぎているせいか、あいつの背後は隙だらけであつた。

「おい、てめえ!! 俺の獲物を横取りしてんじやねえよ!!!」

「簡単に隙を見せる奴が偉そうな口を叩くな、未熟者!!」

「なっ!?!、てめえ!!!」

助けてもらった相手に対して罵声を上げるなんて、失礼にも程がある。

俺が助けなければ大怪我は免れなかったぞ？

おそらくこいつ、育ちがあまりよくないな……。

「精々、後ろに気をつけろ。いつでも誰かが助けてくれるとは限らないぞ?」

「くっ! てめえ、待ちやがれ!!」

俺は無視して走り出す。

こう言う奴は相手にするだけ時間の無駄だ。

『残り5分〜』

制限時間の半分を切ったか。

——ならば、そろそろ

「[THOOM]」

お邪魔ギミックが出てくる。

現れたのはとてつもなく大きな仮想敵。

ビルや建物をなぎ倒し、所狭しと大暴れをしながらこちらに向かってくる……デカイな

「逃げろー!!」

「あんなの無理だあ!!」

「お母ちゃーん!!」

パニックを起こす受験生達。

圧倒的な脅威に恐れをなした連中は、我先にと逃走していった。

まあ、あの大きさの上、ポイントが設けられてない0ポイントの仮想敵だから、臆病者はさっさと逃げてしまおうだろう。

よく見たら、さっきの失礼な金髪野郎も敵わないと悟ったのか逃げている。

「ケロ」

「ありがとっ!」

「ん?」

妙な声が聞こえ振り向くと、カエルみたいな少女が足がすくんで動けなくなっている受験生を助けていた。

試験の意図に気づいているのか?、それとも正直から出てくる行動なのか?、どちらにしてもヒーローとしては正しい行動だな。

しかし、思ったより動けなくなっている奴が多いな。

彼女一人で助けられる数では無い。

「ケロツ!」

「キャツ!!」

救助に気を取られすぎていたのか、超大型仮想敵の接近を許してしまっている。

しかし、声は二人分聞こえたんだが、カエルの少女一人しか見当たらない。

だが、彼女何かを抱き抱えている?

——透明人間か?

もしそうなら、彼女よく気づいたなあ。

——て、感心している場合ではないな。

助けるか。

「《錬成》!」

俺は個性を発動した。

◇

「!、数が多すぎるわね」

”蛙”の個性を持った異形型の少女。

超大型仮想敵が出現した直後から、個性特有の”舌”を使い、逃げ遅れている受験生の救助にあたっている。

「助けてえー！」

「ケロ？」

彼女が振り向くと瓦礫が詰まれている場所から声がする。

そこに人の姿は無いが、確かの声が聴こえた為、よそよそと近づくと

「誰かいるの？」

「いるいる、ここにいますよー！」

そこには宙に浮いた手袋がある。

「透明なの？」

「そうそうー！、やっと気づいてくれた」

なんと”透明”の少女が瓦礫に挟まっていた。

”透明化”の個性を持った少女は、超大型仮想敵が崩した瓦礫に体を挟まれ、身動きが取れずにいた。

透明であるが故に、誰にも気づいてもらえず困っていたのである。

「完全に嵌ってるわね、抜けないわ」

「どうしようー！」

瓦礫が重く、蛙の少女一人では動かすことが出来ない。

透明の少女は困惑しているが――

「THOOM」

「ケロツ!？」

「キャツ!!」

超大型仮想敵はそんな彼女達を待つてはくれず、容赦なく向かってくる。

彼女達は絶対絶命のピンチに追い込まれていたが――

「《錬成》!!」

「!？」

突然、自分達の目の前の地面が盛り上がり、巨大な柱となって超大型仮想敵に襲いかかった。

巨大柱が命中した超大型仮想敵は大きくよろけ、横転する。

「無事か？」

「!？」

少女達が振り向くと、そこには手を地面に付けたメガネの少年がいた。

◇

「(間に合ったな)」

超大型仮想敵を横転させることに成功した俺は彼女達の元に駆け寄る。

よく確認すると、透明の少女の下半身が瓦礫にスツポリハマッており、下手に瓦礫を退かしたら下半身が押しつぶされるかも知れない。

——ならば

「《錬成》」

「!？」

瓦礫を全て分解し、別の形へと再構築すればいい。

彼女の上に乗っかっていた瓦礫をトンネルに錬成し、彼女を引き抜く。

「怪我はないか？」

「!? うん。かすり傷だけだよ」

「あなたの個性、凄いわね、ケロロ・・・」

俺の個性に驚く二人。

だが、そんなことを気にしている場合ではない。

超大型仮想敵が起き上がろうとしている。

「あのデカブツは俺が何とかする。二人は今の内に避難してポイントを稼いでいろ」

「でも、他の仮想敵はほとんど倒されてしまったわ」

「どうしよう！私あんまりポイント稼いでな「敵ポイントじゃない」：!？」

十分な敵ポイントを稼いでいない透明の少女が慌てふためいていたが、落ち着かせる。

「稼ぐのは敵ポイントではなく、”救助ポイント”だ」
「救助ポイント!?!」

”救助ポイント”。

これこそが、この試験に隠された真実。

人命救助はヒーローにとつて当然の行いだ。

仮想敵にポイントが振り分けられているのは受験生の戦闘力を測るためだけではなく、目先の獲物だけに囚われず、如何に我が身を犠牲にして他者を救うことが出来るかを測るものでもあると予測する。

救助活動を行った分だけポイントに成るはずだ。

そうでなければ”お邪魔ギミック”なんてものは必要ない。

俺は二人にその事を伝える。

「まだ、逃げ遅れている奴が居るはずだ。そいつらを助けてれば十分ポイントが稼げるだろう」

「でも、あなたあんなデカイの倒せるの?」

「相手が機械なら簡単だ」

「?」

蛙の少女が首を傾げる。

説明している時間はないから、二人を説得しきつさよこの場から離す。

二人は半信半疑であったが、俺の言ったことに信憑性を感じてくれたため、素直に伝えてくれた。

「……さて、始めるか」

俺は、超大型仮想敵に向かって行つた。

◇

「大丈夫かなあ? あの女」

「わからないわ。自信满满みたいだったけど……」

鍊と別れた”蛙”の少女と”透明”の少女。

二人は鍊の言葉通り、別れた後も救助活動をしていたが、今ひとつ信じきれていなかった。

無論それは”救助ポイント”のことでは無く、あの超大型仮想敵を倒せると言うことがである。

圧倒的なデカさとパワーで建物をなぎ倒していく巨大な怪物。

正直に言つて、ミサイルでも無ければ倒せないだろう。

彼女達は、そんな圧倒的脅威に立ち向かつて逝つた……いやいや、行つた鍊のことが心配で仕方が無かつた。

——だが、その時

ドゥああああああん!!

「!!?」

大爆発!

突然の轟音に驚くは二人が後ろを振り向くとそこには巨大な爆炎が空高く舞い上がっていた。

◇

「THOOM」

「見境がないな!」

二人と別れた後、超大型仮想敵は俺をターゲット絞り込み、建物を崩しながら俺を追いかけてくる

相手の気を引き、その際に逃げ遅れた他の受験生もしっかり救助し、ポイントを稼ぐ。

これで救助ポイントも十分稼げたはずだ。

俺は超大型仮想敵に集中する。

——まずは

「《鍊成》」

巨大な壁を鍊成。

これから行うことによる周囲の被害を考え、超大型仮想敵の周囲を壁で囲い、相手の動きを制限させる。

俺をターゲットにしてくれているおかげで、壁に向かって行くことはなく、ひたすら俺を追撃する超大型仮想敵。

——そして俺は

「《錬成》、《錬成》、《錬成》！」

超大型仮想敵が崩した所々の瓦礫を”ある物”に錬成していく。

「よし、仕上げだ。《錬成》！」

仕上げとして地面の一部を分解し、穴を掘る。もちろん蓋を付けて。

これで避難場所は確保した。

——後は

「《錬成》！」

「!!?」

再び巨大柱を錬成し超大型仮想敵を横転させた。

——準備、完了だ！

俺は先ほど造った穴に飛び込み、二つの石を両手に握り、瓦礫を錬成して造った”ある物”に向かって振りかざす。

——”火薬”に向かって。

「アディオス」

手に持った石、”発火石”を重ね弾いて火花を起こし火が舞い起こる。

俺は燃焼物と酸素を個性で生成し、空気中の塵を導火線にして発火石で火を起こした。

舞い起こった火は”炎”となって、大量の火薬に向かって一直線。

後は言うまでもない。

俺は直ぐに穴のフタを閉め、耳を塞ぐ。

ドぐああああああん！

外では轟音が鳴り響き大爆発を起こした。

——しばらくした後

「ゴホッ！・・・煙いな」

俺は自分で造った穴の蓋を開け、外に出る。

周囲はまだ、爆発のホコリが舞い上がっているが徐々に晴れてゆき、周囲の全容が明らかになっていく。

「・・・ここまでやる必要なかったな」

目の前には大きなクレーターが出来ており、超大型仮想敵は見事にバラバラに吹き飛んでいた。

爆発による破片が遠くに飛ばないように周囲一帯を壁で覆ったことが功を奏し、壁は一部倒壊しているが周囲に被害はほとんど無い。約200キロの火薬を生成したが、これなら半分でも事は足りていたな。

——そして

『終了~~~~~!!!』

終了の合図が鳴り響く。

雄英高校入試試験は、無事終了した。

果たして結果はどうなる事か・・・。

第6話

「君をスカウトしたい」

雄英高校の入試試験が終わった数日後の事、俺は困惑をしていた。現在の時刻は夜七時、場所は俺の家、俺の目の前にはスーツにネクタイを締めたネズミのような人間……人間のようないなネズミ？

どちらか分からないが、とても奇妙な存在が居た。

そして、隣には長髪に無精ヒゲのくたびれた外見の男性の姿もある。

何故、このような状況になっているのか色々事情がある。

◆◆◆

「実技総合成績が出ました」

雄英高校のとある一室、そこにはたくさんモニターが設置されており、そこには複数の人間がそれを見ていた。

——雄英高校の講師、プロヒーロー達が。

「2位の受験生。救助Pは0だが、77Pとはなあ！ 派手な個性で敵を寄せつけ迎撃し続けたタフネスの賜物だ！」

「対照的に敵Pが0で8位。アレに立ち向かったのは過去にもいたけど、ブツ飛ばしちやっつたのは久しく見てないね」

「思わず”YEAH!”って言っちゃったからな——」

「だが、最も注目すべきなのは……」

講師一同は1位となった受験生の成績に目を宛てる。

——造理 錬の成績に。

「敵P82、救助P73、計155Pで堂々の1位。2位の倍以上……物凄い成績だ」

「スタート時、他が戸惑う中で誰よりも早く飛び出し、試験前半だけで多くのPを稼いだ。しかも彼、この試験の意図に気づいてたね」

「すげえのは、アレを倒した時の仕掛けだなあ！ 壁まで造って、周囲に被害が出ないように注意まで払っているぜえ！」

「とても強力な個性だな。その使い方も十分に熟知してるようだ」
「造理 錬。彼があなの……」

ここに入る全員、プロヒーローであるため錬の素性は知っていた。
「親の不適切な行いが原因で、ヴィランに狙われるようになってしまった少年。普段はヒーローと警察によって事を脱しているが、時にはヴィランを返り討ちにもしてるらしい」

「一般人なのに戦闘経験豊富とはクレイジーなやつだなあ!——」
「事情が事情なだけにやむ得ないでしょう。……この成績、一般での入学は惜し「ならスカウトしよう」……根津校長!？」

雄英高校の校長“根津”が声を挙げる。

「これだけ優秀な成績を叩き出したならスカウトに値するさ! 特待生枠とは別に、有能な若者を直接招き入れる“スカウト制度”。雄英創設らしい片手に数えるほどにしかなかったけれど、彼なら十分資格がある……」

「確かに。彼は筆記試験でも1位を取っていますし……」
「筆記、実技合わせると歴代でもトップクラスだ」

「賛成ですね」

「いいぜ! いいぜ!! ” Y E A H ! ” って言っているかあ!？」

講師一同、錬の特待生入学を認める。

——だが

「俺は反対です」

「!?!」

「相澤君?」

——ヒーロー科の講師、相澤 消太。

彼だけが反対の意志を見せた。

「確かにこいつの成績は優秀です。……ですが志望動機が気に入らない」

「志望動機、……それは」

「確か、『我が身のために』だったか……」

相澤は錬の志望動機、——ヒーローになろうとする動機がどうしても気に入らなかった。

「『我が身のために』、それはつまり”自己保身”の為にヒーローを指しているということ・・・これは”我が身を顧みず”のヒーローの理念に反しています。志の無い奴にヒーローが務まるとは思いません・・・何より、こいつは人を殺害している」

「・・・」

その言葉に皆が押し黙る。

実は造理は人を殺めているのだ。

それは決して情動による、身勝手な殺しなんかじゃあなく、己の命を守るためにしてしまった、正当防衛。

当時、10歳だった造理が襲ってきたヴィランを撃退して大けがを負わせてしまったのだが、血を多量に流す怪我を負わせたことで出血多量となり、命を奪う結果につながってしまったのだ。

「確かに、それも問題ではあるな・・・」

「でも、それは身を守る為に仕方がなくしたことで、」

「それですべてが許されるなら、法律なんて意味をなさないでしょう」
相沢が口を挟む。

「過去の過ちだけなら償えばすむ話ですが、心意気が歪んでいるのはいただけません。仮に奴がヒーローになったとしても、矜持を重んじることはないでしょう」

「こんな言葉を入学願書に、堂々と書いているからねえ」

「試験での救助活動も、試験の意図に気付いての行動かもしれないしなあ・・・」

相澤の言葉に少なからず賛同する者が出始める。

——だが、そこで

「私はそうは思わないね!」

「「オールマイト!?!」」

ナンバー1ヒーロー”オールマイト”がその考えを否定する。

「彼は合理的に物事を判断し行動しているだけさ! それは育つて来た環境故にそうなってしまっただけに思える」

「それは言えますね。幼い頃から悲惨な人生を送っているなら尚更です」

「他者に頼らず己の力で、・・・彼は一人で生きてきたも同然ですからなあ」

オールマイトの言葉に皆が同意し始めた。

「なら、決まりさ」

「校長・・・」

根津校長が決定を下すが、相澤はまだ納得していない。

「ヒーローに相応しいかどうかは、入学させてから判断すればいいさ。そもそも動機なんて最初は不純なものさ。目標を持たせ、成長させろ・・・それが教師である我々の役目さ」

「そのとおり！もし彼が誤った道に進もうとしたら、引き止め、それを正し、道を示して上げればいい！我々はヒーローなのだから!!」

「そうだなあ！」

「ですね！」

「YEAH!!」

今度こそ全員が同意した。

「では、造理 錬を特待生として迎え入れよう！」

「賛成!!」

「・・・」

こうして議論は無事終了、会議の幕が下りた。

——相澤だけ、沈黙を貫いて。

◇◇◇◇

「という訳で、君を雄英にスカウトしに来たのさ」

——今に至る。

ネズミの人は雄英の校長先生であり、隣のくたびれた人はヒーロー科の講師とすること。

俺をスカウトするために、こうして自宅まで直談判しに来たらしい。

話しの内容は理解した。確かにスカウトと成れば、学費も免除され

るし、元々奨学金を申請しようとしていた俺からすれば、おいしい話だ。

デメリットは特に無いし、良いこと尽くめだ。

「本来、特待生を含めて一クラス二十人となるのだけど、今年は二十一人となる。・・・君は雄英のスカウトを受けるだけの特例を出す程の成績を納めたのさ。雄英の歴史でも希のね」

「恐縮です」

「謙遜しないでいいさ。まあ、反対意見もあつたけど雄英は君を歓迎したい」

「・・・反対意見があつた理由は、俺の志望動機が原因ですか？」

「・・・」

沈黙はYESイエスだな。

そのことに関して議論される可能性は視野に入れていたが、こればかりは考えを変える気はない。

俺は今でもヴィランに狙われ続けているし、ヒーローに成つてさえしまえばヴィランに襲われる頻度は極端に減らせるはず。

ヴィランの目的は俺の命ではなく、個性・・・つまり俺に協力させることが目的だから、わざわざヒーローを勧誘しようとするヴィランなんていない。

「俺の動機が、ヒーローとして不適切であることは重々承知です。でも考えを変えることは出来ません。現に俺はそうする必要があるからです」

「確かに君の環境を考えれば仕方がないことさ。しかし、後ろばかりを見てはいけない。君にはもつと前を向いてもらつて、健全な未来を歩んでもらいたいし「やめてください」!？」

俺は校長の言葉を止める

「俺に同情しないでください。・・・俺の最も嫌いなことの一つです」
「・・・」

”同情”。

相手側からすれば思いやりなのかもしれないが、受ける側からすれば、それは単なる哀れみに過ぎない。

ヒーロー、警察、一般人。

今まで関わってきた人達は、その誰もが必ずと言っていい程、俺に對して同情をしてきた。

それで救われることは無いと分かっているにも関わらずにだ。

特にヒーローに同情されることだけには我慢ならない。

ヒーローは”救助”はしてくれても”救済”はしてくれない。

その場限りの優しさと同情を振りまいて、後は関与しない……これが今のヒーローの現実だ。

他者に救いを求めることはおこがましいのかもしれないが、幼い頃の俺は少なからずそれに期待していた。

——だが現実には、誰も救ってはくれなかった。

自分を助けてくれるのは自分だけだと理解してしまった。

「俺は自分の力だけを信じて生きてきました。俺にヒーローの志が無いのは承知してますが、それでも俺はヒーローになる必要があるんですよ。敵はヴィランだけではありませんからね」

俺は校長先生の目を見つめる。

「俺はヒーローに夢を見ていません。たとえば雄英の合格が取り消されても、別のヒーロー学校に行き、ヒーローに成ります……必ず」

「造理 君……」

俺は自分の考えをハッキリと告げた。

校長先生は、真剣な眼差しで俺を見つめ沈黙する。

——その時

「一つ聞かせろ」

「!？」

今まで校長先生の隣で沈黙を貫いていた男、相澤が口を開く。

「お前……何故ヴィランに成らなかつたんだ？」

「相澤君！」

相澤先生の言葉に校長先生が声を挙げる。

「お前は素性や成り立ちが警察から聞いていたが、一つだけどうしても解らないことが合った。……お前がヴィランに成ることを選ばな

かった理由だ」

「……」

相澤の言葉に俺は言葉を詰まらせる

「お前は頭がいい上に賢い。物事を合理的に判断出来る。……お前ならヒーローに成らなくても、ヴィランを利用して楽に生きることぐらい考えついたんじゃないか？」

——確かにそれは何度も思ったことだ。

組織的ヴィランならば裏の世界にもコネがあり、その中には権力を持っている者いるはずだ。

俺の個性であれば、そう言う奴らに取り入ることも出来るし、後ろ盾が有ればヴィランから身を守ることが出来るかもしれない。素性がバレなければヒーローに目を付けられることもない。

——でも、それをする気にはなれなかった。

「……意地ですね」

「意地？」

相澤先生は首を傾げる。

「そう思うことは確かにありました。……ですが、そう思う度に”親”のことを思い出すんです」

「親？」

「俺を捨てた”両親”ですよ」

両親。

俺を利用するだけ利用して、我が身可愛さに逃亡していった最低な親。

ヴィランではないが、やった行いに関してはヴィランよりも質が悪い。

悪い方向に考えが赴くと、必ずあいつらを思い浮かべ、こう考えてしまう。

——あんな低俗な人間にだけは成りたくない

「逃げた親が良い反面教師になったんですかね？ あの最低な親達が俺を踏み留ませるいいブレーキになってくれている」

「……皮肉な話だな」

「皮肉なんて思ってませんよ。むしろ、善良な人間のほうが少ないと思ってるくらいですから……」

「造理君……」

相澤先生は目を瞑り、校長先生は悲しげな表情で俺を見つめる。

「たとえ非道であつたとしても、最低に成つたらお終いです。俺にだってプライドの一つくらいあるんですから死んでもヴィランに成るつもりは有りませんよ。改めて言います……俺はヒーローに成ります。最低な人間に成らない為にも」

「……」

俺は真剣は趣きで二人に告げる。

——そして

「分かった。俺もお前を推薦する」

「相澤君!」

相澤の言葉に驚く校長先生。

聞いた所、相澤先生は俺のヒーロー科入りを最後まで反対していたらしい。

「ハッキリ言うと俺はまだ、お前はヒーローにふさわしくないと思っている」

「相澤君!」

「……」

声を挙げる校長、沈黙する俺。

「だが、志だけでヒーローが務まるとも思っていない。幸いお前にはヒーローに至るだけの力量があることだし」

「何ごとも征するのは力ですよ」

「口を挟むな、信念を持ってヒーローを目指す者はまだ見込みがある……俺はそう判断した」

「相澤君……」

俺と相澤先生は、互の瞳を見つめ合う。

「……あなたのヒーロー名を教えてください」

「……レイザー・ヘッドだ」

——”抹消ヒーロー”レイザー・ヘッド。

その眼で視た者の個性を抹消するプロヒーロー。

知名度は低い、相手の個性を一時的に使用不能にしてしまう個性は、個性社会に置いて強力無比。

戦闘力は身体能力に依存しているため、単体では若干不利な所もあるが、チームを組めばこれほど頼もしい存在も居ない。

——間違いなく一級品のヒーローだ。

「入学すればお前の担任になる。……俺は甘やかすことは一切しない、見込みの無い者は容赦なく切り捨てる。……例えばスカウト生であろうとも」

「俺に同情しなかったヒーローは、あなたが二人目です。……あなたには信用できそうだな」

「その一人目が気になる所だな」

「それは言わないでおきます」

俺は、珍しく笑みを浮かべる。

「……引き受けましょう」

「造理君！　じゃあ？」

「ええ……特待生へのお話し、お引き受けします」

「ありがとう！　我々は君を歓迎するさ！」

俺は校長先生と握手を交わした。

「特待生で入学するに応って、君の一般入試の結果は無かったことになるけど、悪く思わないでくれたまえ」

「試験の結果なんて、この先何の役にも立ちません。合格することはゴールではないのだから」

「立派な考えだね。……じゃあ、君の入学を楽しみにしているよ」

「ありがとうございます」

こうして俺の雄英高校ヒーロー科の入学が決まった。

——ヒーローに成るための、スタートである。

◇

——その頃とある場所で

『おめでとう！ 蛙吹 梅雨 君。敵Pが27で救助Pが32。計59Pで8位で合格だ!! 我々は君を歓迎する!!』

「彼の言う通りだったわね。ケロロ・・・」

合格通知に喜ぶ、蛙の少女。

◇

——さらに

『おめでとう！ 葉隠 透 君。敵Pは19と少ないが、救助Pで31。計50Pで15位で合格だ!! 我々は君を歓迎する!!』

「やったー！ 合格だあ！ あの人の言った通りだ！」

同じく合格通知に喜ぶ、透明の少女。

◇

——そして最後は

『おめでとう爆豪 勝己 君！ 救助Pは0だったけど、敵P77で見事1位で合格だ!! 君のようなタフネスを我々は歓迎するよ!』

「.....」

ナンバー1ヒーロー”オールマイト”が投影された通知で、自分が1位合格を果たしたことを知らされる爆破の個性を持った金髪の少年。

だが、1位で合格したにも関わらず、その表情からはあまり喜びが感じられない。

——何故なら

「あの野郎は何位だったんだ?」……」

入試試験の時、自分の背後に迫ってきていた仮想敵を撃退し、自分より多くの仮想敵を破壊していたメガネの受験生のことから頭から離れなかった。

第7話

「……ドアがデカイな」

入学式当日、現在俺は雄英高校の校舎内にて大きなドアを目の前にしている。

毎年300の倍率を超える、雄英高校ヒーロー科。

一般入試の定員36名、2クラスで分けられる狭き門。

俺は特待生で入ったから関係ないが、そのヒーロー科の1-Aと書かれた俺の3倍はデカイであろうドアの前に立っている。

——そしてドアを開けると

「誰もいないな……」

始業まで、まだ後40分。

流石にこんな早くに登校する者は居なかったのか、教室内には誰もいない。

実は俺は始業1時間前には雄英の門を潜っており、先日訪ねて来た雄英校長から渡されたパンフレットを頼りに、校舎内を探索していた。

受付、職員室、普通科、サポート科、経営科……後、食堂にトイレ。

生徒が行ける場所を、出来るだけ探索する。

何事にも警戒してしまう為、自分が生活する環境は出来る限り知っておきたいだ。

ある程度校舎内の構造を理解した後、俺は自分のクラスに成る1-Aの教室をやって来た。

「席に座るか……」

席は全部で21席、俺は指定された席に座る。

本来、推薦入学者も含めて1クラス20人なのだが、俺が特例になってしまった為、今年は21人になっている。

俺以外の20人……一番に登校したおかげで全員を1人ずつ観察出来るな。

俺は指定された席に座り、バックから本を取り出す。

——しばらくして

「ここがヒーロー科のクラスだな!!」

始業30前、2番目の登校者がやってきた。

声が大きく、メガネを掛けた真面目な顔をしたインテリ系。

——こいつは入試説明会の時、俺に言いがかりを付けて来た男だ。

「おや? 君はあの時の!」

俺の存在に気がついて声を挙げる。

俺をしばらく見た後、近づいてきて俺の席の前に立つ。

——そして

「あの時は、失礼をした!」

俺に頭を下げてきた。

「入試試験が終わった後、色々考えたのだけれど、あの時の僕はどうかしていた。自分が言ったことを翌々思い出してみたら、言い掛かりもいいところだった!」

自分の不適切な言動を反省して謝罪するメガネの男。

どうやらこいつは、ただ律儀なだけの人間だったようだな。

少し潔癖な所も見えるが、十分、善人の部類に入る人間だろう…。

「僕は飯田 天哉だ! よろしく!」

「・・・造理 錬だ」

「ありがとう造理君! これから同じヒーロー科としてよろしく頼む!」

握手を求め、手を差し出して来たので、その手を握り握手を交わす。

——社交辞令はしておかないとな。

握手を交わした後、飯田は自分の指定された席に行き、俺は再び本を開く。

——すると

「ハハ!! ここがヒーロー科かあ!!」

乱暴にドアが開けられ、口うるさい声が鳴り響く。

入ってきたのは、人相の悪いイガグリのような金髪の男。

——こいつは実技試験で同じ会場だった失礼な男だな。

「ハハ!・・・!!?」

笑い声を上げていたが、おれの存在に気づいて黙り込む。
そしてズカズカと俺に近づき

「……………」

無言で俺を睨みつけて来た。

俺に助けられたのが気に入らなかつたのか、唯々俺に口答えされたのが気に入らないのか……

「……………フンッ!!」

しばらく睨みつけた後、鼻息を荒らげ自分の席に向かっていく。

あれは気に入らないことは起きればとことん文句を言ってきたそうだな。

まあ、突つかかってくるようなら、適当にあしらうだけだが……。
俺は再び本を開く。

——始業20前。

この時間になると人がちよくちよく来はじめた。

まず来たのは、長身でポニーテールの女子。

ついこの前はで中学生だったとは思えないほど大人びている。

歩き方に気品があり、おそらく上流社会の人間だろう。

次に来たのは髪の色が二色に分かれている男。

その顔には焼け跡があり、表情から感情が見えない上、何よりこい

つは只者ではない。

歩き方で分かるが、こいつはかなりの訓練を、それも実戦式の訓練を積んでいる者だ。

何よりこいつの雰囲気は少し俺と似ている。

その後になると人がゾロゾロ来た。

耳がプラグになっているスレンダーな女子に、金髪のチャライ男。

逆だった赤髪の硬派な男子に、タラコ唇の大柄な男。

ナルシストを気取ったマヌケそうな男に、肌がピンクの女子。

腕が触手にマスクの大男に、ブドウ頭の小柄な男。

鳥顔の男

しっぱの男

醤油顔の男

岩みたいな男

そして実技試験の時に助けた”蛙”の女子に”透明”の女子も登校してきて、俺に軽く手を振ってきた。

——始業5分前。

「机に足をかけるな！ 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか!?!」

「思わねーよ！ てめーどこ中だよ!?! 端役が!?!」
律儀なメガネの男”飯田”と、失礼な金髪イガグリ男が言い争っていた。

お互い一步も下がらない・・・と言ってもほとんど子供の言い争いに等しい。

まあ所詮、この前まで尻が青かった中学生・・・言動も行動もまだまだ若い所がある。

——そして言い争っている二人の奥・・・ドアの入口でヒョンと顔を出す、何故か目をつむりガツカリそうな顔をする縮れ毛でソバカスの男。

こいつは確か、入試説明会で飯田に言い掛かりを付けられていた男だな。

——よく見たらこいつ、試験当日の朝に海浜公園で上半身裸で叫んでいた男じゃないか？

試験当日にあんなことをやっているなんて、よく分らない男だ。

その男に気づいた飯田が近づいて行き話しかけ、金髪いが栗は何故かそいつを睨みつけている・・・因縁でもあるのか？

その後すぐ、地味で茶髪の女子が登校し、ソバカスの男と話し込む。ソバカス男は照れているのか、両手で顔を覆いタジタジの状態で合った。

ともかく、これで21人全員揃ったようだな。

全員一目見ただけが、大体理解した。

——ほぼ全員、浮かれているな。

何よりここにいる奴ら全員、自惚れ感が見える。

雄英ヒーロー科に入っただけ、有頂天になっている奴もいる。

おそらく自分がヒーローに成れることを信じて疑ってないんだらう。

——ナンセンスだ。

そんな簡単にヒーローに成れるはずないだろうに……。

そして始業開始時間になった瞬間

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け、ここはヒーロー科だぞ」
担任がやって来た。

「担任の相澤 消太だ、よろしくね」

相澤 消太。

ヒーロー名”イレイザーヘッド”。

寝袋を身につけた状態で登場とは随分と斬新だな。

先日、家に訪ねてきた時よりもくたびれた姿をしているが、動きに隙が無い。

どんな状態でも警戒を怠らない姿は、まさにプロヒーローだな。

まあそれはそれとして、この後は入学式やガイダンスがあるのだから、生徒を先に教室に呼ぶのは少し気がかり……

「早速だが、体操着^レを着てグラウンドに出ろ」

寝袋から体操着を取り出し、そう告げて来た。

——いきなり波乱が起きそうだな。

第8話

「個性把握テスト!!?」

雄英のグラウンドまで連れてこられたクラス一同。

突然のことに全員が戸惑っているが、担任である相澤先生はそれを気にせず説明を続ける。

説明を聞くと、中学でも行った体力テストを”個性”を用いて行うそう。

「爆豪、”個性”を使って投げてみる。・・・思いつ切りな」

金髪のイガグリ頭の男・・・爆豪が呼ばれ、相澤先生にソフトボールを手渡さる。

ソフトボール投げか・・・

爆豪が言うは、本人が持つ記録は67メートルとのこと。

個性を用いればどれだけ飛ぶか・・・

「死ねえ!!」

乱暴な掛け声と共にボールが彼方へと飛んでいき、記録は・・・

『705.2m』

相澤先生が手にするタブレットに記録が表示される

「自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段・・・」

「なんだこれ!! すげー面白そう!」

”個性” 思いつきり使えるんだ!! さすがヒーロー科!!」

以上、体力テスト8種目を個性を用いて行う。

個性を自由に使えることにクラス一同は喜び騒いで楽しんでいるが

「ヒーローになる為の3年間、そんな腹づもりで過ごしているのかい?」

「!?!」

当然、相澤先生はそんなクラス全員の状態をよしとしない。

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分しよう」

「!!?」

理不尽な言葉を突きつけてきた。

あまりの理不尽な言葉にクラス一同は当然騒ぐが、相澤先生は”理不尽（ピンチ）を乗り越える”と言い、みんなの言葉をバツサリ切り捨てる。

”Plus プラス Ultra” ウルトラ”さ、全力で乗り越えて来い”

入学初日でいきなりのふるい落としだな。

——だが、最下位1人だけを除籍するのは妙だ。

先日、おれの家を訪ねてきた時、見込み無しは容赦なく切り捨てる
と言いついていたし、1人だけでを限定しての除籍はおかしい・・・
脅しか何かか？

——まあ、深く考えても仕方ないな。
とりあえず全力で挑むだけだ。

◇

第1種目：50m走。

『3秒04!』

最初の種目、50m走で大記録が出る。

走っているのは”エンジン”の個性を持つ飯田で、足のエンジンが
有り、後ろ側に排気筒がついている。

走ることに置いてはとても強力な個性だな。

「次、瀬呂と造理」

俺の番が回ってくる。

さて、どうする？ 普通に走るか、走らない形で行くか・・・

「位置に付け、よーい・・・」

——走らない方で行くか。

俺はしやがみ、後ろ側の地面に手を付ける。

「スタート」

「《錬成》！」

「?!?!」

グラウンドの土を自身を押し出す形で常時生成。

俺はしゃがむ体制を維持し、ラインに添って突き進んでいきゴールを切る。

——そして

『3秒38!』

「うわ! 土が盛り上がった!!」

「すげえ個性だな!」

「これじゃ次の人、走れないよ!?!」

タイムは3秒38、・・・飯田には及ばなかったか。

一緒にスタートした奴も驚いていたが、まあ気にする必要ない。

「造理、・・・ちゃんと戻しておけよ?」

「分かりました」

俺はコースを元の形に戻し、クラスメイトのいる場所に戻っている。

「さすがね、あなた」

「?」

「蛙水 梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

戻ると、蛙の少女・・・蛙水 梅雨が声を掛けてきた。

「入試試験の時にも思ったけど、あなたの個性すごいわ」

「鍛錬の賜物だ。まあ所詮、小細工だから大したことじゃない」

「2位のタイムで大したことないの?」

実際タイムで飯田に負けている。

あいつは足でブーストしているため、歩幅と距離が噛み合っていないし、トップスピードはもっと早いだろう。

スピードでは完全に負けている。

「お互い頑張りましょうね、造理ちゃん」

「・・・ああ」

ちゃん付けで呼ばれるのは初めてだ・・・。違和感だらけだな。

彼女と話した後、全員走り終えたが、3秒台を出したのは俺と飯田だけ。

俺は50m走を2位で終えた。

◇
第二種目：握力

「540キロて!! あんたゴリラか!? タコか!!」

「タコって、エロいよね・・・」

「・・・・・・・・・・」

触手の大男、”障子”が握力テストで大記録を出した。

見たところ個性で腕を無数に作りその腕全部で握力計を握ったみたいだ。

他にもポニーテールの女、”八百万”が小型の電動式機械アームを作り、300キロを叩き出す。

どうやら彼女の個性は俺の上位種のような。

しかも自分の体から元素に関係なく物を造る・・・いや、生み出し
ていると言った方が正しい。

俺の場合はあくまで製造だが、彼女の場合は創造か? ……と
ても強力な個性だ。

——そして俺の記録は

『151キロ』

俺は工作代用のクランプを造り、記録を伸ばした。

残念ながら俺には、精密な電動式機械を造ることはできないため、
手動の動かす工作代用のクランプ（強化版）で記録を伸ばした。

結果は3位で終わった。

まあ、普通にやってもりんごを握り潰すぐらいの握力はあるんだ
が・・・・・・・・。

◇
その後色々、種目は続いた。

”立ち幅跳び”

これは意外と接戦であり、俺と爆豪、それとナルシストの男”青山”
で上位を争った。

青山は腹から出るレーザーを利用して後ろ向きに跳び、爆豪は爆風を利用して飛び、俺はスタートラインで柱を斜めに向かうように造り、その柱の先に乗り、大幅に記録を伸ばす。

他にも蛙水が蛙の脚力を利用して距離を伸ばし、八百万は手の平から棒を創造し棒高跳びの要領で距離を伸ばしたが、俺を含めた3人には及ばず。

俺は上位に入ることが出来た。

” 反復横跳び”

これは個性を使う必要は無い……と言うよりも、使いようが無かったと言ったほうが正しいな。

ブドウ頭の男” 峰田” が頭に付いた玉をもぎ取り、それを左右に置いて弾みを利用して大記録を出していた。

他の奴らも個性を使っていない奴がほとんどで、唯一、爆豪が両手を左右に向け爆破を利用して挑んでいたが、疲れが見えたのか途中で失速。

俺も普通にやったが、それでも上位に入ることが出来た。

そして次は” ソフトボール投げ”。

ここで物凄い記録が生まれる。

『記録∞』……。』

” 麗日 お茶子”、彼女は触れたものを浮かすことが出来るみたいで、投げたボールは落ちること無く、天高く舞い上がって行き、結果∞と成った。

——この記録は誰も抜くことはできないな。

「次、造理」

「ハイ」

俺の番……。

「彼の番か？ 次はどんなことをするんだ？」

「造理ちゃんはこれまで種目全部、上位にはいつてるわ」

「50m走の時、すげーことやってたからなあ」

「同じ、物を造り出す個性をお持ちの為、興味がありますわ」

「何やるのか楽しみ！」

「……ケツ!!」

「……」

いつの間にか興味の対象になってしまったが、まあ、気にする必要はない。

さて、どうやって記録を延ばすか？

——あれをやってみるか。

「先生、準備のため5分程ください」

「……早く済ませろ」

先生の了承は得た……では

《錬成》

地面に手を付け、生成を始める。

さらに……。

《錬成》、《錬成》、《錬成》

次々生成し、ある物が造られていく。

——それは

「大砲だ」

「大砲だな」

「大砲だね」

「大砲だわ」

「大砲ですわ」

「うわ！ 大砲だ！」

「……」

出来上がったのは大砲。

それも只の大砲ではなく、長距離砲……アームストロング砲（改良版）である。

この大砲は従来の物とは違い一体型ではなく、いくつものパーツに分かれている為、造るのにどうしても時間が掛かってしまう。

俺は砲弾となるボールを詰め、発射準備に取り掛かる。

「……お前たち」

「……？」

俺はクラス一同に声を掛ける。

「……耳を塞いだ方が利口だぞ」

「!!?」

俺は涼しい顔でそう言い放ち、クラス一同全員、耳を塞いだ。

——それでは

「発射」

発射と同時に耳を塞ぎ、ボールは遙か彼方へと飛んでいく。

記録は……。

『2507・3m』

『「おおおっ!!」』

大記録に驚く一同。

3000mを越えることが出来なかったが、まあ、砲弾がボールだったから仕方がないか。

戻るとクラスメイト達がすごいだのなんだの言い寄ってきたが、俺はそれを適当にあしらう。

そして、次に投げたのがソバカスの男子”緑谷 出久”だったが、こいつがどうもおかしい……。

『46m』

緑谷がボールを投げた瞬間、相澤先生が個性を発動し、緑谷の個性を打ち消した。

相澤先生が緑谷を詰め寄せ何か指導のようなことをしているが、よく聞き取れない。

相澤先生が個性を使つてまで打ち消したという事は、緑谷の個性は発動したら何か問題が起こるのだろうか？。

しかし、クラスメイトの反応もおかしいものがある。

飯田や麗日は緑谷の個性は凄いと言っているが、爆豪は緑谷は”無個性”と言いう。

——情報が滅茶苦茶だ。

これまでの成績を見ても身体能力は平凡の少し上ぐらい……よく解らない奴だ。

相澤先生の指導が終わり、再びボールを投げようとする緑谷。すると……。

「SMASH!!」

ボールが遙か彼方に飛んでいく。

『705・3』

「まだ・・・動けます」

大記録を叩き出す。

よく見るとあいつの人差し指が紫色に変色しているのが分かる。

あれは確実に骨が折れているな・・・しかも涙目になっているし。

個性の副作用か？・・・いや、骨が折れてしまうほどの大パワー

を出す個性か？もしそうなら凄まじい個性だな。

指一本であれだけのパワーを出せるなら、本気のパワーは一体どれほどのものなのか・・・。

まるで、”オールマイト”みたいだな。

その後、何故か爆豪が怒号を挙げ緑谷に向かって行ったが、相澤先生によって捕縛される。

一体、何なんだこいつら？

トラブルが多々起きたが、その後もソフトボール投げは続き、八百万が俺と同じような大砲を創り出したが、サイズが小さめで飛距離はあまり伸びずに、記録は1701.7mで終わり、俺は2位で終わった。

その後の競技は続く。

”上体起こし”に”長座体前屈”、そして”持久走”

上体起こしと長座体前屈は、個性を無使用で挑戦。

これは無理に個性を使用すれば体を壊しかねない為、仕方がない。

女子には敵わなかったが、男子の中ではトップを取ることが出来た。

——最後に行われたのは”持久走”

これは、八百万の独走であった。

八百万は中型の単車を創り、時速80キロ程で独走し、それに続いたのは飯田と俺で、飯田は足のエンジンを吹かし、俺はスピード用のインラインスケートを造って走る。

こんなものしか造れなかったが、インラインスケートも性能とテク

ニツクが有れば、最高時速60キロは出すことが出来る。

飯田とデッドヒートを繰り広げていたが、最後に飯田が意地を見せ
2位でゴール。

俺は3位で終わった。

これで全種目が終了……。

「んじゃ、パパッと結果発表」

相澤先生が持つ端末に結果が表示された。

1位：八百万 百

2位：造理 鍊

3位：轟 焦凍

4位：爆豪 勝己

5位：飯田 天哉

6位：常闇 踏陰

7位：障子 目蔵

8位：尾白 猿夫

9位：切島 鋭児郎

10位：芦戸 三奈

11位：麗日 お茶子

12位：口田 甲司

13位：砂藤 力道

14位：蛙吹 梅雨

15位：青山 優雅

16位：瀬呂 範太

17位：上鳴 電気

18位：耳郎 響香

19位：葉隠 透

20位：峰田 実

21位：緑谷 出久

俺は2位。

1位の八百万とは僅差だったが、どの種目も1位は取れなかったか
ら、仕方がないか……。

——そして最下位になったのは緑谷。

あいつは怪我が影響して、ソフトボール投げ以降の種目は散々であつたから仕方がない。

最下位は除籍との話しだったが……。

「ちなみに除籍はウソな」

「「!」」

「君らの最大限を引き出す、合理的虚偽」

「「は——!!!」」

とのことだつた。

八百万は、それがウソであつたと初めから思っていたようだが、俺はウソではないと思つた。

これは結果が悪い者を除籍するものではなく、見込みがない者を選別し除籍するものだと言は感じた。

実際、緑谷はかなり危なかつただろう。

もし、怪我が原因でその後の行動が不能になっていれば間違いなく除籍されたはずだ。

実際、一つの行動でダウンするような奴はヒーローの現場に置いて、何の役にも立たない。

——つまり、執行猶予が付いただけ。

おそらく緑谷だけじゃなく、見込みの無い奴は全員、除籍されただろう。

先日、俺に言い放つた言葉に嘘は無かつたと言うことか……。

「これにて終わりだ。教室にカリキュラム等の書類があるから、目え通しとけ」

相澤先生はそう言い、去っていった。

最初の一難は、クラス全員、無事にクリアした。

◇◇◇◇

夕方5時、全てのカリキュラムが終了し、俺は帰宅の準備をする。

校舎を出て、校門に向かうが

「デクですー!」

「？」

緑谷、飯田、麗日の3人が校門前で話していた。

——どうやら入学初日で仲良くなったようだ。

緑谷が、何故か顔を赤くし手で顔を隠していた。

「ん？・・・造理君!？」

飯田が俺の存在に気づき、2人も振り向く。

無視しようと思っていたが、3人共こちらに近づいてくる。

「君も駅までかい？ ならば一緒に「断る」・・・!？」

「!？」

飯田は俺と一緒に帰宅することを提案してきたが、俺はそれを拒否した。

迷いのない拒否に3人は驚きの顔を見せる。

「プライベートまでクラスメイトと関わる気はないんだ。・・・悪いな」

俺はそう言い残し校門を潜っていった。

3人は棒立ちの状態で俺の姿を見送っていたが、校外で俺といるのは危険な為、こればかりは仕方がない・・・何より

志を持ってヒーローを目指している者と仲良くなることは気が引けてしまう。

俺は1人、帰り道を進んで行った・・・。

第9話

「わーたーしーがー!! 普通にドアから来た!!」

オールマイトが1-A組の教室にやって来た。

「オールマイトだ!! すぎえや、本当に先生やってるんだな!!」

「画風が違いすぎて鳥肌が・・・」

「あれ・・・シルバエイジ銀時代のコスチュームね」

オールマイトの登場に興奮するクラス一同。

現在の時刻は午後、午前中は必修科目の普通の授業を行い、午後からはヒーロー科特有の授業、”ヒーロー基礎学”が執り行われることになっている。

ヒーローの素地をつくる為に様々な訓練を行う科目、単位数は最も多いらしい。

そして今日のヒーロー基礎学の内容は・・・

「今日はこれ!! 戦闘訓練!!」

戦闘訓練とのこと。

ヒーローにとって必須の戦闘力、戦闘知識を学び高める内容。

まずは基礎体力作りから始めると思っていたが、初授業でいきなり戦闘を行うとは、やはり雄英は進んでいるな。

「そしてみんなにはこちらを・・・」

オールマイトがリモコンを取り出しボタンを押すと・・・

「コスチューム!!」

クラス全員分のコスチュームが出てきた。

”被服控除”によって雄英専属のサポート会社から要望に応じて用意された最新のコスチューム。

「これに着替えたら順次、グラウンドβに集まるんだ!!」

オールマイトはそう言い残し、一足先にグラウンドに向かった。

クラス一同はコスチュームを手にし、更衣室に向かう。

コスチューム・・・可能な限り要望を出したが、ちゃんとあつらえてもらえただろうか・・・。

◇◇

場所はグラウンドβ。

「恰好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!! 自覚するんだ!! 今日から自分はヒーローなんだと!!」

クラス全員がコスチュームに着替え、グラウンドβのゲートを潜る。

「さあ!! 始めようか、有精卵共!! 戦闘訓練の時間だ!!!」

全員にそう言い放つオールマイト……しかし緑谷を見たら顔を押しさえて震えている。

緑谷のコスチューム……オールマイトを意識して作られているのがよく分かる。

オールマイトはおそらく笑っているんだろうな……。

他の奴らも自分の個性に合わせたコスチュームを着用している。

若干無駄が多いようにも見えるが、恰好を重視したんだろう。

俺も要望通りのコスチュームを身につけた。

刃物も寄せ付けない炭素繊維を編み込んだノースリーブの首から膝までのスーツに、収納ポケット多い炭素繊維を編み込んだズボン。

膝には特殊合金で出来たプロテクター、同じく特殊合金の芯が入ったブーツを履く。

さらに両腕には特殊合金で作られた手の甲から肘までである手ガントレット甲を装着する。

そして最後は炭素繊維を編み込んだ紅い全身マントを上から羽織る。

この紅いマントは耐熱、耐電、凍結対策を施し、スーツよりも厚く作られている。

俺の個性を最大限に引き出す為のコスチューム……概ね要望通りだ。

「先生……ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしゅうか!?!」

「いいや! もう二歩先に踏み込む! 屋内での対人戦闘訓練さ!!」

「推薦入学2人と一般入学18で、20人のクラスと聞いてましたわ・・・」

「どういう事?」

クラスの人数が1人多いことに疑問を抱く一同・・・生徒には知らされていなかったのか?

「今年は特別だね。雄英では希なスカウト生が出たのさ!」

「スカウト!? 誰ですか!」

「そこに居る造理少年だ!!」

「!!?」

全員が俺を見る・・・あまり目立たせるような事はしないで欲しいな

「でも造理ちゃん一般入試を受けてたわよ?」

「その一般入試で彼は歴代でもトップクラスの成績を叩き出したんだ!! 他の追隨を許さないほどにね! その結果が認められ、校長を含めた教師全員の推薦を受けた彼は、雄英歴史上、片手に数えるほどしか例がない、スカウト制度が適応されたのさ!!」

蛙水の疑問にオールマイトが答える。

「本当かよ、それ!」

「スゲー! スカウトだってよ!」

「凄いわね造理ちゃん」

「本物の才能マンだ才能マン」

「くっ!!」

「・・・」

驚きの顔を見せるクラス一同。

特に推薦入学者である八百万と轟は俺を観察するかのようじつと見つめ、爆豪は何故か親の敵を見るような目で俺を睨みつけてくる。

意味も無くすつかり目立ってしまったな・・・あまり余計なことはいしないでくれオールマイト。

「十分説明したし!! そろそろやる!!」

オールマイトが腕を上げ叫ぶ。

そしてクジの結果・・・

A： 緑谷・麗日

B： 轟・障子

C： 八百万・峰田

D： 飯田・爆豪

E： 芦戸・青山

F： 砂糖・口田

G： 耳郎・上鳴

H： 蛙水・常闇

I： 造理・葉隠

J： 切島・瀬呂・尾白

俺はIグループで葉隠と組むことになった。

次に対戦クジを引き、初戦の対戦ペアはヒーローがA、敵がD、緑谷ペアと爆豪ペアとなった。

他のメンバーはモニターで観察する為オールマイトと共に同ビルの地下モニタールームに向かった。

◇◇

『屋内対人戦闘訓練 開始』

訓練が開始され、モニタールームでそれを観察する。

開始早々、敵側である爆豪が単騎で奇襲を掛けるが緑谷はそれをスレスレで回避する。

どうも爆豪は苛立っているのか、やたらと怒号を上げてるようだ。

その後緑谷は麗日を1人行かせ、爆豪の相手を1人で務めたが中々いい勝負をしている。

とっさの判断に優れているのか、緑谷は爆豪の攻撃を紙一重で回避する。

一方、麗日は飯田の居る核部屋に到着し飯田と対峙しているが、そこで爆豪が大規模な爆破を起こし、ビルを半壊させてしまった。

屋内戦闘であることを理解してないのか、ほとんど暴走しているようにも見える。

さすがにオールマイトが注意を入れたが、これはもう中断すべきではないかと思った。

その後も緑谷と爆豪が攻防を続け一時爆豪の一方的なりんちになつていたが緑谷は再び対峙し、お互い向かい合つて双方攻撃を繰り出す。

そして緑谷は爆豪の攻撃を左腕で防ぎ攻撃で繰り出した右腕を爆豪には向けず天井に向かって放ち、そのまま最上階までの天井を吹き飛ばした。

タイミングを見計らつていたのか麗日は緑谷の攻撃で崩れた柱を個性で浮かし柱と一緒に吹き飛んで出来た瓦礫を柱で飯田に向かつてかつ飛ばす。

飯田が飛んできた瓦礫に目を奪われてる隙に麗日が飯田の頭上を飛び越え見事、核兵器にタツチ。

ヒーローチームが勝利した。

勝つた方が重傷を負い、負けた方はほぼ無傷……何ともおかしな戦闘訓練であつた。

◇◇

場所はモニタールーム。

緑谷は重傷を負っている為搬送用ロボットによつてそのまま保健室に直行。

麗日、飯田、爆豪の3人がオールマイトに連れられモニタールームにて先の戦いの評価が始まる。

「まあつつても、今戦のベストは飯田少年だけだな!!!」

「なな!!?」

「勝つたお茶子ちゃんか緑谷ちゃんじゃないの?」

オールマイトは飯田がベストだと評価する。

その後クラス全員に何故そうなつたかわかるか?と聞いたが八百

万が手を挙げ、飯田以外の3人のダメだった所を極め細かく説明して見せた。

「(思ってたより言われた!!) まあ・・・正解だよ、くう・・・!」
「常に下学上達! 一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんで!」

八百万は手を腰に当て胸を張り宣言し、オールマイトは親指を上げgoodを見せる。

飯田も手を胸に当て感動している様子を見せる・・・。

だが、俺の考えは違っていた。

「違うな。飯田もぜんぜんダメだった。」

「!?!?!」

突然の俺の言葉に全員が驚く。

まず爆豪が単騎で奇襲をかけた時・・・あれは飯田も直ぐに爆豪を追いかけるべきだった。

チームの総合的な戦闘力は飯田達の方が高かったのだから、2人で挑んでいれば直ぐに決着が付いたはず。

爆豪は暴走状態に有ったが飯田のスピードなら十分カバー出来、相手の隙を付くことも出来た。

あと麗日と対峙した時・・・これはもつとダメだな。

そもそも麗日より圧倒的にスピードが優っていたのだから、さつさと一撃を喰らわせて気絶させるなり何なりすればこんな結果には成らなかったはず・・・。

女に手を上げることが躊躇ったんだろうが、本物のヴィランはそんなことはしない。

「飯田が全然ヴィランに徹し切れていないし、爆轟の方がヴィランらしさを出していた。ヒーロー志望がヴィランに徹することなんて無理な話かもしれないが、飯田の行動次第で勝敗がいくらでも傾けられた。・・・勝率の高い勝負を見すみす取り逃したとさえ言える!」

「!?!?!?!?!?!?!?!」

「むしろこれは、訓練にすらなっていないな。これじゃあヒーローごっこことヴィランごっこの延長だ。・・・あまく採点したなら、飯田が

ギリギリ落第点を逃れた程度にすぎない」

俺の言葉に全員が押し黙る。

言われた本人である飯田は悔いるような顔をし、オールマイトは何故かプルプルと震えていた。

「想像してなかったことを言われた!!!）・・・まあ、確かに飯田少年は固すぎる所があったな！ ヴィランを演じてはいたけど、成りきることが出来なかった」

オールマイトは震えながら親指を上げ、再びgoodを見せる。

「仰つしやるとおりです！ 訓練とは言え、この結果は自分が未熟ゆえのこと！ これからはより一層誠心致します!!」

飯田は右腕を上げ決意表明のように宣言する。

・・・こいつはブレないな。

「いいよいよ！ じゃ第2戦を始めよう！ ビルが半壊しちゃったから場所を変えるぞ!!」

「「ハ——イ!!」」

クラス全員、移動を始める。

◇◇

「次の対戦は” Bグループ” VS ” Iグループ”!!」

ヒーロー側がBグループ、そして俺が入るIグループが敵側となった。

敵側である俺と葉隠は一足先にビルに入り準備を始める。

「核兵器どこに設置しようか?」

「ん? ……ああ、四階あたりになしよう。最上階よりも部屋数が多いし、出来るだけ相手から遠ざけた方がいい」

葉隠の問いに答える俺。

対戦相手のBグループは轟と障子であり、轟の個性は氷、障子の個性は触手・・・二人共、個性の威力が未知数だ。

「造理くん、私ちよつと本気出すわ！ 手袋もブーツも脱ぐわ！」
そう言ってせつせと脱ぎ始める葉隠。

耳に付けた小型無線だけが見える……。

翌々考えたら彼女コスチュームが無いに等しい、手袋とブーツを脱いだら完全に全裸だ。

透明人間としては正しい選択かもしれないが女子としては倫理的に危ない所がある。

——と言うより何故、専用のコスチュームを要望しなかったんだ？今の技術なら髪の毛なんかの細胞を培養してコスチューム衣装の一つぐらい作れるはずだ。

全裸じゃ防御力も限りなく低下するし？ 気温の対応も出来ない……。

『屋内対人戦闘訓練 開始』

などと思ってる内に、スタートの合図が鳴り響く。

まずは相手の出方を見るか、一つの動作を見るだけでも情報は得られる。

◇

一方、Bグループ

「四階の北側の広間に1人、もう1人は同階のどこか……素足だな」

障子 目蔵、個性は”複製腕”。

彼は触手の先端に自身の身体の複製する事ができ触手の先に耳を大量に複製して相手の情報を掴む。

「透明の奴が伏兵として捕える係かもしれん」

「向こうは防衛戦のつもりか……外に出てろ危ねえから」

轟がそう言い、障子はそれに従い外に出る。

——そして

「防衛戦なんて俺には関係ない」

その言葉と共にビル全体が一瞬にして凍結した。

轟は凍結したビル上がり1人で四階を目指す。



「ほう、これは中々・・・」

現在、俺の両足の先が凍り付いている。

周りを見渡すと床どころか壁や天井までギッシリ凍り付き、核兵器配置部屋は冷凍庫のようになっていた。

この規模の凍結・・・ビル全体凍らせたのだろうか？ だとしたら凄まじい威力だな・・・

——だが、それよりも気になるのは

「葉隠、無事か？」

「痛タタタタ！ 足が凍った！ 寒いし痛い!!」

無線で葉隠の状況を確認したがやはり足が凍りついているらしくかなり辛そうな声を上げていた・・・当然だな。

現在彼女は裸足どころか全裸であり、素足の状態で足が凍りついていると言うことだ。

彼女が入る部屋も凍りついているなら、早く解放しないと凍え死んでしまうかもしれない・・・相性が最悪だな彼女は・・・。

俺は足に纏わり付いた氷を分解するため個性を発動しようする。

——するとその時

「透明の奴はいないみたいだな？」

轟がドアを開け核部屋に入ってきた。

・・・随分と早い到着だな？ この部屋に核兵器があることが解っていたのか？ 障子の姿が確認できないが・・・なるほど、障子の個性か。

あいつは個性把握テストの時に触手で腕をたくさん複製していたから耳をたくさん複製して遠くの物音を聴くことも可能か・・・。

ここに居ないという事は、おそらく凍結に巻き込まれないように外で待機しているのだろう。

この状況じゃ安易に個性が使えないな・・・

「これほどの威力の凍結……大したものだな。脚がすっかり凍りついてしまった」

「スカウト生と言ったわりには大したことがないな」

俺の言葉に対し、皮肉にも似た言葉を返してくる轟。

「動いてもいいけど、足の皮剥がれちゃ満足に戦えねえぞ?」

忠告にも思えた言葉を放ち俺の隣を通り過ぎていき、そのまま核兵器に向かって歩みを進めて行く。

核兵器を含めて全てを凍らせ、核にダメージを与えず敵である俺達を弱体化させる……理想的な手段だ。

仲間もちゃんと避難させ、最小限の動作で自分達に優勢な状況を作り出した。

こいつおそろく相当な量の訓練を積んでいたのだろう。それも戦闘のプロから戦い方を学んでいる可能性が高い。

同世代にこれだけの力量を持つ奴が居たとは、素直に驚きだ。

——それだけに、残念だがな。

「悪いな、レベルが違いすぎ……グアツ!!」

油断と慢心に満ち溢れてしまっている。!!」

「グ!?!……グ……ア……」

後頭部に攻撃を入れた為、倒れ込み意識を朦朧とさせる轟。

「お……おま……え……足の……皮……を……」

俺の足からは血が流れていた。

俺は凍ったブーツを無理やり脱ぎ捨て、攻撃を繰り出したのである……足の皮を剥がして……。

「敵に背を向けるなんて間抜けもいいところだ。そもそも、この程度は拘束とは言わないし、ヴィランの中には怪我の一つや二つ負っても怯まない奴がいくらでもいる……」

「く……まだ……だ「ふん!」ガツ!!」

隙なんて与えない。

起き上がろうとした轟の顔面を殴りつける。

その後は高速連打だ。

持ち前の身体能力と戦闘技術を駆使して、喉、首筋、すね、足首、腹

部、脇腹、強打を食らわして、轟は意識をかきとっていった……
「ぐあ、……く、くそ、がっ!!!」

最後の一撃を心臓部分に食らわす。

この一撃がトドメとなり轟の意識が途絶えるのだった。

「……ふう、足がヒリヒリするな」

俺は剥がれた足の皮を個性で再構築する。

筋肉までは損傷してなかった為この程度なら直ぐに治せる。

相手に攻撃を悟られないようにあえて個性は使わなかったが……
やはり痛いな。

凍ったブーツの氷も分解して履き直し、そして確保証明のテープを
取り出した。

「悪いな、確かにレベルが違ったよ。……戦士としてのレベルが」
轟にテープを巻きつける。

『ヒーローチーム：轟！ 敵チームに確保されリタイヤ！』
轟がりタイヤ。

「これ後は障子だけだ。……その前に葉隠を助けに行くか」
俺は葉隠が居る部屋に急いで向かった。

第10話

『ヒーローチーム：轟！ 敵チームに確保されリタイヤ！』

「轟やられちまったぜ!？」

「あいつ凍った足、無理やり引つpegがしたぞ！」

「痛そう!!」

「あんなこと真顔で出来るのか!？」

「痛くないのかしら？ 造理ちゃん」

「ていうか、轟のほうが痛そうだったぞ！」

「あれ生きてるのか？」

場所はモニタールーム。

戦闘が開始した直後、クラス一同は轟のビルの凍結に驚いていたが、その後の錬の行動に全員が驚きを見せている。

見ているだけで痛む光景に顔を歪める者までいる。

——そしてオールマイトは

「わざと無抵抗を装い、相手の油断を誘うとは。……実戦経験のない轟少年では、あのような行動を予測することはできないだろう」

錬の驚きの行動を頭の中で分析、審査をしていた。

「あまり褒められた行いとは言えないが、あのような行いは相当な度胸と覚悟が無ければ出来ないこと。戦闘技術もプロと差し支えがないほどだし……彼は予想以上に過酷な人生を歩んでいたんだな……？」

心の中で錬の心情を察するオールマイト。

「(ヒーローチームが一人リタイヤしたことで敵チームが優勢となったけど、まだまだ終わらないぞ造理少年……)」

オールマイトは再び審査を始める。



「これで大丈夫だ」

「ありがと造理くん！」

轟を確保した後すぐに葉隠と合流した俺。

やはり思っていたとおり葉隠は素足で凍りつき全裸で凍えていた。

葉隠をすぐに解放し、俺のコスチュームのマントを葉隠に羽織らせる。

「轟くん一人でやつつけちゃったんだ！ スゴイ！」

「相手が油断してたからに過ぎない。．．．それよりも次だ」

褒め称えてくる葉隠の言葉を途中で切り、次の行動に移ろうとする。

轟がリタイヤしたことで障子も屋内に侵入していると思うが問題は障子の個性だ。

個性把握テストの時あいつは触手で腕を複製していたがもしかしたら腕以外の身体の一部を複製できるかもしれない。

耳などを多く複製できるのだとしたら足音はもちろん会話まで聞かれる恐れがある。

——かなり厄介な個性だ。

この戦闘訓練に置いてはかなり強い。

チーム戦に置いてはとても大きなアドバンテージになるし、入り組んだ屋内では相手の動きを察知しながら動くことができ俺達に遭遇することなく核兵器配置部屋にたどり着くことができるかも知れない。

——急いだほうがいいな

「葉隠、お前に活躍の場をくれてやるよ．．．」

「？」

俺は相手に聞かれないように耳打ちで葉隠に作戦を伝え、行動を起こした。

◇

「轟がやられたか．．．」

アナウンスで轟が確保されたことを知った障子はビル内に侵入する。

現在、障子は一階を移動中。

「造理は二階に移動している。葉隠は足音が聞き取れないから四階から移動してないと言うことだ。．．．ならば葉隠がいる場所に核があるはず！」

葉隠が核兵器の防衛に応っていると予想した障子は慎重に歩みを進める。

「(轟と造理は同じ部屋で対峙していた。つまり造理一人で轟を確保したことになる．．．．直接対峙するのは危険だな)」

鍊と遭遇しないように自身の個性で耳をたくさん複製し、常に鍊の動きを確認する。

「上にかかる手段は階段とエレベーター．．．。エレベーターだと相手に動きを察知されるかもしれない．．．。階段で行くか」

エレベーターは危険と判断し階段に向かう障子。

「(造理は二階に降りているがそのまま一階に降りず二階をいる．．．。俺を捜索しているようだな．．．)」

相手が自分の動きを察知出来ないことを悟った障子は急いで階段に向かった。

「(造理は階段から離れた場所に居る。．．．ならば今すぐ階段で四階まで上がれば造理と遭遇しなくて済むはず．．．)」

障子は階段へと続く一本道を進み階段へとたどり着く。

そして階段を上り二階に差し掛かろうとした。

——だが、

「なっ!? 壁!?!」

二階に差し掛かる場所に壁で塞がれていた。

「(造理の個性か!?)」

この壁の原因が鍊の仕業であることを悟った障子は急いで一階に降りる。

「(他に上に上がる手段はエレベーターと外にある非常階段。エレ

ベーターのスイッチだけ押しして非常階段で行くか！」

障子はエレベーターを囿に上に上がろうと考え階段から降りてすぐの一本道を進む。

——その時

「!!?」

突然、数メートル先・・・曲がり角に差し掛かる一歩手前の天井に穴が空き、何かが落ちてきた。

——そこには

「・・・・・・は通さない」

錬の姿があつた。

◇

「(狙い通りだな)」

頭の中でそう語る俺。

相手がこちらの動きを察知できるとふんでいた為、こちらとの戦闘は避けると考えていた。

階段に続く道が一本道になっていることは見取り図で解つていたから一階の一本道の真上・・・二階で床下の一部に小さな穴を開け一階の一本道を覗けるようにしていた。

そして障子が通り過ぎる姿を確認でき、二階階段に生成した壁を見て戻ってきたところで床を分解して下に降りる。

後ろにはある階段は塞がり、前には俺・・・追い詰めることができた。

「戦うしかないな・・・」

障子は触手を広げ戦闘態勢に入った。

両腕の耳にしていた触手が全て腕に変わり全部で六本の腕が出来ている。

障子はそのまま突っ込んでくるが

「《錬成》！」

「ぐあっ!？」

俺は拳の形をした岩を錬成し障子に当てて。

突然目の前に出現した拳岩を障子は全ての腕でガードしたが衝撃で後ろに吹き飛ぶ。

俺は追撃を掛けるため全身を覆ったマントをかき上げ腕に装備したガントレットを錬成し武器を造る。

「武器はこれでいいな」

造ったのはトンファア。

このガントレットは合金部分が厚く作られていて、俺の個性で質量に合った武器を作れるようになってる。

壁や床から武器を造ることもできるが強度はそれ程高くない、別の資材に造り変えてるために、完成までのタイムラグが生じてしまうのだ。

だが素材を変えずに形だけを変えての錬成ならタイムラグはほとんどない為、コスチュームに軽くて強度の高い特殊合金のガントレットを要望したのだ。

トンファアは拳よりもリーチがあり防御にも使えるため重宝している武器でもある。

両腕にトンファアを持ち、障子を追撃する。

「ぐっ!!」

「ガードしてもダメージは受けるぞ?」

トンファアによる何発もの攻撃を全ての腕でガードする障子。

だが特殊合金で出来た武器の攻撃を素手でガードするのは至難でありダメージは確実に蓄積する。

障子は痛みを耐え防戦一方である。

「ダアッ!!」

「!？」

障子は渾身の力を振り絞り絞りトンファアを跳ね除ける。

俺のその衝撃で後ずさり、障子がかさず俺に向かって突進を仕掛

けて来た。

「あまい」

「!?」

俺は障子の肩を掴み頭上を宙返りして回避した。

「チャンスだ!」

障子は振り返らず走って行く。

俺が障子を飛び越えた為、前に進む道が開き障子はそのまま走り去っていく……

——だが、その時

「てりやー!!」

「グウアツ!!」

曲がり角に差し掛かった瞬間、障子が勢い良く仰向けに倒れる。

「やったー! ホームラン!!」

「ぐ……が……ま……まさか……葉隠!」

「エツヘン!」

曲がり角から現れたのは野球バットを持った葉隠であった。

見た感じはバットが宙に浮いてるようにしか見えないんだが俺が用意したバットを手にし、障子に一撃を加えたのである。

女の子の力では大した威力にはならないが流石に顔面にくらえばダメージ大きい……

「う……うぐっ……く」

障子はふらつきながらも立とうとするが

「グハツ!!」

俺はすかさず背後から障子の首筋に一撃をくらわし、障子を気絶させた。

「葉隠、テープを……」

「ホイきた!」

気絶した障子に葉隠が確保証明テープを巻きつける。

——そして

『ヒーローチーム：障子！ 敵チームに確保されリタイヤ！』

障子がリタイヤし、これで

『敵チーム！ W^{ウイ}——N^ン!!』

戦闘訓練終了、俺達の勝利で幕を閉じた……。

◇◇◇

「さて講評の時間だ！」

訓練が終了した後モニタールームで去きの訓練の講評が始まる。

俺と葉隠、それと気絶していて目を覚ました轟と障子がクラス一同の前に並んで立っている。

「しかし講評の前に聞きたいことがあるのだが………葉隠少女」
「ハイ？」

オールマイトは葉隠に声を掛ける。

「君は一階の曲がり角に隠れていたが、どうやってあそこまで移動したんだい？」

「俺もそれが聞きたい」

オールマイトに続き、障子も語る。

「四階で造理と別れた後、葉隠に動きは無かったから四階で核兵器の防衛に応っていると思っていた。……だが、お前はいつの間にか一階に居た……何故だ？」

「私、造理さんと別れてないよ？」

「「えっ!!」」

葉隠の言葉にオールマイトも含めたクラス全員が疑問の言葉を口に出した。

「葉隠少女！ それどういうことだい!？」

「俺が説明します」

「造理少年……?」

葉隠に変わって俺が説明する。

簡単に言うと葉隠は俺のマントの中で俺の胴体にしがみついて移

動していたのだ。

障子が俺達の足音を察知できると踏んでいた為、移動しても位置がばれると思い、位置がバレていると遭遇することはなく挟み撃ちにすることも出来ない。

遭遇しても逃げの一手を使われたら追いかけるのは難しいため障子にバレないように不意打ちをする必要があった。

だから俺は葉隠を抱えながら障子を階段まで誘導するように移動し、障子が壁で塞がれた階段から戻ってきたところで二階の床を分解し障子の前に現れた・・・俺にしがみついている葉隠と共に。

案の定、障子は触手を耳にしていたため障子が触手を腕に変え戦闘態勢に入った瞬間しがみついていた葉隠が俺から離れ、あらかじめ個性で造っておいたバットを持ち俺の影に隠れながら曲がり角に移動した・・・。

「後はみんなが見ていたとおり、俺を払い除けた障子が曲がり角に差し掛かった時に葉隠が不意打ちをかました。・・・これが全容です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の説明に全員が黙る。

「造理少年・・・君はあの状況化でそこまで考えていたのかい？」

「とっさの考えでしたが上手くいきました」

オールマイトの言葉にそう答える俺・・・。

「お前すげーこと考えるな！」

「最初はイカれてると思ってたけど頭すごくいいんだなお前！」

「すごいわね造理ちゃん」

「侮れないな」

「スゴイ！ スゴイ！」

「てかっ!? お前ずっと裸の女の子にしがみつかれてたってことか!?!」

「羨ましいぞ！ テメエ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を投げ掛けてくるクラス一同。

感心する奴、押し黙る奴、何故か嫉妬をぶつけてくる奴と、様々で

あった。

「みんな静かに静かに！ 話しは理解したぞ造理少年!! では今戦のベストは……もちろん造理少年だ!!」

オールマイトの言葉に皆が耳を傾ける。

「最初の行いはあまり褒められたことではないが、相手の油断を誘い一人を確保！ 更に相手を誘導し見事に罠にハマ不意打ちを喰らわせ確保! ……見事な作戦だった!!」

「恐縮です」

「葉隠少女は見事な不意打ちをかましたが、ちよつと造理少年に頼りすぎた所があったな！ もっと自分の意見や考えを主張できるようにならないとな!!」

評価を受ける俺と葉隠。

時間が限られていたから俺の考えを押し通したがもつと葉隠の考えを聞いてもよかったな。

「そして敗北したヒーローチームだけど、轟少年はビルの凍結させて仲間と核兵器にダメージを与えず敵を弱体化させる所までは見事だったが、意識のある相手に背中を見せてしまったことが減点だね！

あの程度の拘束は相手によっては簡単に払い除けてしまうからもつと注意するべきだった!!」

「……」

「そして障子少年は轟少年を一人で行かせてしまったのがいけなかった。轟少年がビルを凍結させた後すぐに合流し共に行動していれば結果は違っていたかもしれない！」

「返す言葉がありません……」

オールマイトのダメ出しに轟は黙り込み、障子は深く反省する。

「ヒーローチームは訓練ならではの油断が出てしまったな！ 戦闘に置いては何事も油断してはならないぞ!」

「はっ」

「……はい」

「では！ 次いつてみよう!!」

講評が終わり、次の対戦に移って行った。

◇◇◇◇◇

「お疲れさん!! 緑谷少年以外は大きな怪我もなし! 初めての訓練にしちゃ皆 上出来だったぜ!」

あの後も訓練が続き、戦闘訓練は無事終了した。

「それじゃ私は緑谷少年に講評を聞かせねば! 皆 着替えて教室にお戻り!!」

オールマイトはそう言い残しものすごいスピードで走り去っていった。

戦闘訓練が終了したことでクラス一同は各自 苦労を労っているが爆豪は負けたのが余程ショックだったのか、ずっと下を向いて黙り込んでいた。

自尊心がやたら強かったのは言葉や行動で解っていたが膨れ上がった心ほど脆いものは無い。

放っておくと再起不能になってしまうかもしれない……。

——まあ、それは俺の関知するところではないか。

そもそも誰かに背中を押してもらわないと前に進めない奴は直ぐに立ち止まってしまう。

何よりここは雄英……前に進めば進むほど道は険しくなっていくはずだ。

自分のメンテナンスを自分で出来ない奴はこの先 生き残れない……。

各自、教室に戻っていくが俺はさつきから気になることがあった……。

——それは

「何か用か?……轟?」

「……」

対戦の後 他の連中が対戦している中 しばしば俺を見ていた轟。

視線は感じていたが特に気にするものでも無かったのであえて無視していたが、皆が教室に戻っていく中でも俺を見ていた為さすがにうっとうしく感じ、声をかけてしまった。

「……次は負けない」

「……」

下克上か宣戦布告か……どうやら対抗意識を持たれてしまったようだな。

こいつも爆豪と同じく自分の腕に自信が有ったんだろうか？俺に負けてプライドに火が付いたのか？……それとも負け方に気に入らなかったのか？

ともかく変に意識されてしまってるようだ……

——だが

「そう言うのは遠慮する」

「!？」

俺は轟の気持ちには答えないようにした。

「俺に対抗意識を持ったみたいだが、俺はそう言うのに興味がないんだ。競争とか競い合いとかは、他の奴とやってくれ」

「くっ！」

轟にそう言い放ちその場を離れていく俺。

そもそも俺は誰かを目指しているわけでもなければ追い越したいわけでもなく単純にヒーローの資格だけを求めているだけだ。

だから誰かと無駄に競い合うことはしない……。

——ヒーローはスポーツではないからな

轟はまだ何かを言いたそうだったが、これ以上聞く必要がないと判断し教室に戻っていく。

◇

——放課後。

全ての授業が終わった後俺は帰り支度をして教室を後にする。

切島と一緒に反省会をやらさないか？と誘ってきたが俺はそれを断った。

人が多い時間帯に帰らないと帰り途中でヴィランに遭遇する可能性が高くなってしまうため早めに帰らないとまずい。

俺は靴を履き校舎に出ようとした……

——その時

「人から授かった”個性”なんだ」

「!？」

校門前に緑谷と爆豪がいた。

何やら緑谷が真剣な面持ちでしゃべっているみたいで爆豪はそれを黙って聞いている。

邪魔をしてはいけない雰囲気であった為、俺は校舎の入口の影に隠れる。

しばらく緑谷がしゃべっていると

「だからなんだ!？ 今日俺はてめエに負けた!! それだけだろうが

!!」

今度は爆豪が叫び出した。

しばらく喋ったあと『俺がここで一番になってやる!』と宣言し涙を流しながら去っていった。

——どうやらあいつにもヒーローの志が有ったようだな。

育ちが悪い失礼なだけの奴と思っていたが、少し見直した……

俺は爆豪に対しての認識を改めた……

その後、オールマイトが突然現れ緑谷と話し込んでいたが、これ以上立ち聞きするにのほくなくないと判断し見つかからないように校門を出たが、さっきの緑谷が発した言葉が気になっていた。

『人から授かった”個性”なんだ』

”人から授かった個性”……これはどういうことだ？ そのままの意味で解すなら緑谷の個性は誰かから譲渡された言うことになるが、そんなことがあり得るのか？

——ひよつとしたら俺は聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれないな。

俺は頭の中でそう思いながら帰路を後にしていった。

第11話

「オールマイトの授業はどんな感じですか？」

「え!!! あ……すみません僕 保健室に行かなきゃいけないくて……」
戦闘訓練の翌日、雄英に登校すると校門の前にはマスクミで溢れかえっていた。

オールマイトが目当てみたいで、登校した生徒、緑谷、麗日、飯田、爆豪など片っ端からインタビューし、根掘り葉掘り聞き出していた。

「オール……小汚っ!! なんですかあなた!？」

今度は相澤先生が標的となった。

にしてもカメラが回っているにも関わらず他人に対して堂々と失礼な言葉を吐くとは社会人としてどう何だ……?

「彼は今日 非番です。授業の妨げになるんでお引き取りください」

相澤先生は手を振りながらそう答えるが……このままだと俺も被害に遭いそうだな。

テレビに映るとヴィランに見られるかもしれないから俺はカバンから本を出し、顔を隠しながら校門を潜ろうとする。

——だが

「うわあああ!! 何だあ!!!? ……だっ!!？」

「なっ!？」

相澤先生を追って一人の女性アナウンサー校門に近づいてしまいセキユリティが作動し世間で言う“雄英バリアー”が閉まってしまった。

それに驚き、後ろに去がった女性アナウンサーと接触してしまい本が落ちてしまう。

「失礼!? 大丈夫? ……で、君! 雄英の生徒!!!？」

「(くっ! まずい、カメラに顔が映る……!)」

心の中で思わず舌打ちをする俺は落とした本を直ぐに拾い顔を隠す。

「ねえ君! オールマイトについて聞かせ……何で顔隠してるの?」

「ノーコメントで……では」

「あつ!? ちょっと!!」

アナウンサーの質問を無視した俺は、学生証を門に提示させ校門を開き急いで潜った。

テレビに・・・それも生中継のテレビに映ってしまったな。

顔は直ぐに隠したが顔が映ってしまったかもしれない。

何事も無ければいいが・・・。

俺は少し不安を抱えながら校舎に入っていた。

◇◇

「じゃ、ホームルームを始める」

始業時間になりホームルームが始まる。

昨日の戦闘訓練のことで相澤先生は労いの言葉を掛けてくれたが、緑谷と爆豪が注意を受けていた。

まあ爆豪は子供みたいに暴れていたし、緑谷は個性の制御が出来ずに大怪我を負っていたので注意されて当然ではあるな・・・。

そしてホームルームの本題に入ったが

「学級委員長を決めてもらう」

「「学校っぽいの来た——!!!」」

との事・・・。

全員また臨時テストでもやらされるのではないかと思っていたみたいで不安の顔をしていたが、相澤先生の言葉に、全員 驚きの声を挙げ、そしてほぼ全員が委員長に立候補した。

立候補をしていないのは俺以外では轟と麗日と飯田だけだったが飯田が立候補をしていないのは意外だった。

あの手の人間はこう言う事には真っ先に立候補をすると思っただが

「静粛にしまえ!!」

「「!」」

突然、飯田が声を挙げる。

飯田が言うには委員長は周囲からの信頼あってこ務まる責務との

ことで、民主主義に則り投票で決めるべきと発案し、多少 反対意見もでたが飯田は押し切り最終的に相澤先生が合意した為、結局 委員長は投票で決めることになった。

——その結果

緑谷出久 3票

八百万 百 2票

他は・・・

尾白、爆豪、切島、峰田、口田、障子、耳郎、蛙吹、上鳴、瀬呂、常闇、砂藤、芦戸、青山・・・そして飯田。

以上の者たちが1票ずつであった。

緑谷が3票も獲得するのは意外であったがこの短期間でそれだけの信頼を勝ち取ったと言うのはかなりすごい事と言えるな・・・。

——だが、気になるのは・・・

「さすがに聖職・・・て、何故 俺に票が入っているんだ!？」

飯田・・・お前は別の奴に票を入れたのか・・・。

そういう事で、委員長が緑谷に決まり八百万が副委員長と言うことになった。

◇◇◇

「混んでるな・・・」

午前のカリキュラムが終了し昼休みになり食事を取るため食堂にやってきたが、人で溢れかえっていた。

この食堂はヒーロー科だけではなくサポート科や経営科の生徒も一堂に会するため毎日混雑しているらしい。

俺は注文した食事を手に取り、席を探していたが・・・

「あ！ 造理 君！」

「？」

振り向くと其処には緑谷、麗日、飯田の3人が一緒に食事を摂っていた。

「席 探してるの!?! ここ空いてるよ！ 良かったら一緒に食べよう

よ！」

麗日が声を掛けてきて食事を誘ってきた……どうするか？

断ろうと考えたが周りを見渡すと他に席は空いてなく、学校の中でまでクラスメイトを敬遠する必要は無かった為、誘いの乗ることにした。

俺は緑谷の隣に座り食事を取る。

「造理君と一緒にご飯を食べるのは初めてだね」

「これを機にお近づきになりたいな」

「……」

緑谷と飯田の言葉に声を詰まらせてしまう俺。

以前この3人には冷たく突き放してしまっただが、3人はそれを忘れてしまっているかのように俺に接する。

この3人は本当に良いやつらなのかかもしれないな。

話が進むと緑谷が委員長をやることに不安を募らせているような発言をするが、飯田が緑谷を後押しする。

どうやら飯田は緑谷に投票したらしく、飯田も委員長をやりたいがっていたようだが自分が正しいと判断したことを実行したらしい。

更に話が進むと飯田の家は代々続くヒーロー一家らしく飯田はそのサラブレッドということが分かった。

飯田は兄に憧れてヒーローを志したようで規律を重んじ人を導けるヒーローを目指していたが、自分には人を導く立場はまだ早いと思っただがために緑屋を委員長に押ししてみたみたいだ。

——ヒーローの志に満ち溢れているな。

俺は心の中で飯田に感心をした……。

——その時。

『セキュリティ3が突破されました 生徒の皆さんはすみやかに屋外に避難して下さい』

「「?!」」

「警報!？」

突然の警報音。

セキュリティ3と言う事は誰か雄英敷地内に侵入したと言う事だ。

食堂に居た全員が迅速に避難をしようとしているが、どう見てもパニックになっておりこれでは避難どころではない。

俺はその場を動かさず状況を確認するために窓の外を見てみるが、ここにはマスコミ報道陣がいて先生達がその対応に負われていた。

「造理君、どうし・・・て！ あれは報道陣!?!」

3人も窓の外にいる報道陣に気づき、そしてみんなを落ち着かせようとするが

「どわーしまった——!!」

緑谷が人の波に攫われ遠ざかっていく・・・。

個性を使って事態を収めようと思ったが、俺の個性では負傷者が出てしまうかもしれない・・・ならば

「飯田、麗日、頼みがある!」

「!?!」

飯田と麗日に任せる事にした。

麗日の個性で飯田を浮かし、飯田がエンジンの噴射を利用して食堂出入り口まで移動し、そこで目立つように大声を上げて事態を收拾する・・・。

「しかし僕では「お前に票を入れたのは俺だ」!?! 造理君!?!」

飯田の言葉を遮り俺はそう言い放った。

あの時、クラスのほぼ全員が立候補しその他の者は静止していたが飯田だけが違う意見を言い出した。

その場に置いてもっとも効率よく円満に解決する手段を提示しそれを成立させてみせた。

「飯田なら大勢が間違った選択をしたときも真っ先にそれを止めることができる・・・あのホームルームのやり取りで俺は飯田が適任だと判断した」

「造理君・・・分かった!! 麗日くん! 俺を浮かせる!!」

「うん! 分かったよ!!」

俺の言葉に賛同し二人は行動を起こす。

そして作戦通り飯田は宙に浮きエンジンを吹かして出入り口まで飛んでいくが

「又オオ!!?・・・ふっ!!」

足で噴射しているため空中でクルクル回りながら飛んでいき出入口の上の壁に激突・・・そして

「皆さん!! 大丈——夫です!!!」

大声で叫んだ・・・非常口のポーズを取りながら・・・確かに大胆ではあるな。

飯田の行動によってパニックは無事に収まった。

それにしてもあの報道陣はどうやって侵入したんだ? 個性によつては柵を飛び越えることも雄英バリアーを破ることもできなくはないが、マスコミがそんな重罪になる法律違反を進んでは考えにくい。

という事は何かに乗じて入ってきたという事になる・・・つまり

——何者かがマスコミをそそのかしたと言うこと。

マスコミの中に良からぬ者が混じっていたかもしれない・・・。

しばらくした後、警察が到着しマスコミ報道陣は撤退し、事態は終結した。

マスコミ侵入事件の後、教室にて委員長以外の委員決めを執り行おうとしていたが、緑谷が委員長を飯田に譲ると発言し出した。

食堂での行動に感心したみたいで飯田こそが委員長に相応しいと判断したらしく、他にも食堂に居合わせた連中も緑谷の提案に賛同し、飯田はそれを了承。

委員長は飯田と成った・・・。

——副委員長の八百万の立場が無いな。

◇◇

「造理君!」

「?」

振り向くと緑谷、麗日、飯田の3人がいた。

授業が終わった放課後、帰り支度を済ませてさっさと帰宅するため

校門を出ようとしたが、突然3人に呼び止められる。

飯田が昼休みの時の礼を言ってきたが、「行動を起こしたのは飯田と麗日のため俺が礼を言われることない」と伝えた。

「ねえ一緒に帰ろうよ！」

「うむ！ 造理君とも親睦を深めたい！」

「どうかな・・・？」

3人はこの前のように一緒に帰宅しようとしてきたが

「悪いが、それは出来ないんだ」

「え!?! どうして・・・!?!」

麗日が声を挙げる。

まあ当然の反応だな・・・だが、こればかりは了承出来ない。

こいつらは普通いい奴らだ・・・だから

「お前たちを危険に晒したくない」

「!?!」

「じゃあな・・・」

そう言い残し俺は学校を後にする。

あいつらにはまた悪いことをしてしまったが、校外で俺と一緒にいたらヴィランに襲われる可能性があるし、あいつらが俺の境遇を知ると同情してくるのは目に見えているし、何より今日は良くない。

——何故なら

「・・・つげられているな」

校門から出てしばらくたった後に気づいたが、複数の視線を感じる。

本で顔を隠しながら周りに確認するが物珍しさでの視線ではなく明らかに俺を狙つての視線だ。

となると考えられることは一つ・・・。

——ヴィランだな。

やはり今朝の報道陣のカメラに顔が映っていたのか、俺が雄英にいたことがバレてしまったかもしれないな。

オールマイトがこの街に来たことでヴィランの発生率は低下していたから、少し安心していたが、そう上手くはいかないか・・・。

このまま帰ると家の場所を嗅ぎつけられるな・・・面倒だ。
俺は帰り道と違う方向に進みヴィラン達を誘導しようと考え、人気が
無い場所に向かった。

もちろん相手にバレないように警察に通報もして・・・。

第12話

「……複数いるな」

学校から帰宅途中に何者かに尾行されている事を悟った俺は駅とは違う方向に向かい歩いている。

本で顔を隠し周囲に視線をやるが、俺が移動速度を上げると、少し離れたところで複数の人間が移動速度を上げているのが分かる……。

——これはもう確実だな。

相手を誘導し人気の無い場所に向かおうとしているが都心は人で満ち溢れ、何より今は帰宅ラッシュの時間帯、……中々いい場所が見つからない。

広い場所が理想的だがそれは難しい、路地裏に誘い込むか？……いやダメだな、狭い上に挟み撃ちにされる可能性がある……それは避けたい。

大きめの倉庫やガレージが無難か。

「あそこが良いな……」

しばらく歩くと自動車整備工場のガレージを見つけた。

看板を見ると既にここは閉鎖されているみたいで人は居ず、ガレージの中には車の廃品が多数 放置されているため個性の材料には困らない。

——好都合だ。

俺は中に入り相手を待ち構える……。

「いたぞ!! こっちだ!!」

相手が現れガレージに入ってきた。

「こいつで間違いないな?」

「ああ……」

人数は4人……少ないな?

もつと多くの視線を感じていたが伏兵がいるのか?……警戒しなければな。

とりあえず、まずはこいつらだ。

「あんた達、俺の事を知ってて追いかけて来たのか?」

俺はヴィラン達に問いかける。

「当然だ！ おめえが造理 錬だろ？」

「聞いた話だと”金塊”を造れるそうじゃねえか!? お前が居りや大儲けだ！」

「おとなしくしてもらおうか!!」

やっぱり狙いは金か、………迷惑極まりないな。

俺は何時でも迎え撃てるよう戦闘態勢をとるが

「やあ、造理くん」

「？」

突然、一番後ろに居た男が俺の名前を呼び前に出てきた。

メガネを掛けた、やせ型の中年……見覚えがある顔だ。

「久しぶりだね……7年ぶりかな？」

「……ああ、あなたですか先生」

どこかで見た顔だと思ったが、こいつは俺の小学校の時の担任だった。

「確かにお久しぶりですね。……お元気でしたか？」

俺は久しぶりに再会した担任に挨拶をしたが

「元気?……よくもそんな口が聞けたな!!」

俺の言葉が気に食わなかったのか声を荒らげてきた。

「君への恨みは一度も忘れなかった!!」

この男は俺に恨みを抱いていたようだ……まあ当然だな。

こいつはかつて、『授業の一環』などと偽って、俺を拉致誘拐。オレの個性を使わせて金儲けをしようとし、営利誘拐と強要罪で警察に逮捕された教師だ。

俺についての情報は警察の情報規制によって一般人にはあまり知られないようになっていたが、通っていた学校の教師には知らされていた。

事情が事情なだけに聖職である教師にはある程度の情報が提示されたのだが、……中には当然、良からぬ事を考える者が居る。……この男もその一人だ。

「君のせいで私の人生は台無しになったよ！ おかげで職を追われて

ヴィランにまで成って散々だった!!」

——何て身勝手な理屈だ。当時8歳だった俺を利用して金儲けをしようとしたくせに逆恨みもいいところだ。

確か借金を抱えていたと聞いていたが、それで犯罪を犯してしまつたら救いようがない。

「仕返しをする為にずっと居場所を捜してたが、今朝のテレビを見てようやく突き止めた!! まさか雄英の生徒になっているとは順風満帆だなあ!!」

やっぱり今朝の報道陣のカメラに映っていたか……。

「君がちよつと気を効かせてくれるだけで私は幸せになれたのに!! それを君はそのくらいのことと警察に通報しやがって!! 私の人生を返せ!!」

——聞くのが馬鹿らしくなってきたなあ。と言うか、ヴィランに成ってまで俺に復讐したかったのか? 仲間を引き連れてまで……。

「今度は7年前のようには行かない! おとなしく言う通りにし『錬成』グワアツ!!……」

「!!」

これ以上、付き合ってられるか! 俺は拳岩を錬成し、愚かな元教師を倒す。

「やりやがったな! クソガキ!!」

「やっちまえ!!」

残りの3人が襲って来る。まずナイフを持ったヴィランが向かって来たが、そのヴィランの腕を掴み後ろに回し……。

「ガアツ!!」

肩の骨を外す。

「このガキヤー!!」

メリケンのような拳をしたヴィランが向かってきた。あの手が個性か? そのヴィランはメリケン拳を繰り出してきたが俺は……。

「ブホオツ!!」

「なっ!」

ナイフを持ったヴィランを盾にし、その拳を防ぐ。

ナイフを持ったヴィランは倒れこみ、その手に持っていたナイフを掴んで怯んでいたメリケンを着けたヴィランの肩に突き刺す。

「ギャアア!!!」

「てめえー!!! 締め殺してやる!!!」

残りの一人、腕が四本ある異形型のヴィランが向かってきて俺を捕まえようとしたが俺はそれをしゃがんで回避し、そして

「《錬成》」

「ギャツ!!?!?・・・ガ・・・ガ・・・」

しゃがんだ瞬間、手を床に付け拳岩を生成し、それを見事に異形型ヴィランの股間に命中させる。

異形型ヴィランはそのまま股間を押さえ倒れこむ・・・痛そうだ。

全員動きの動きは止まった・・・後は

「はっ!・・・ふっ!はっ!」

「ギャツ!!」

「グオツ!!」

「グハツ!!」

俺は床に手を付けトンファーを生成し3人のヴィランの首筋を攻撃、全員の意識を奪う。

——大したことは無かったな、こいつら全員ヴィランと呼べるレベルの奴らじゃない。

動きは遅いし攻撃も無駄だらけ、・・・これじゃ、その辺に屯っているチンピラと変わらない。

後は事前に連絡しておいた警察の到着を待つだけ・・・。

パンツ!!

「動くな!!」

「!?!」

振り向くと其処にはメガネが壊れ鼻から血を流していた元担任がいた。・・・その手に拳銃を持って・・・。

「動くんじゃない!! 動くと撃つぞ!!」

もう撃つてるだろうに・・・気を引くか。

「分かりました。．．．降参です」

手に持っていたトンファーを捨て、両手を上げるが

「ハハッ!! その手に乗るか!! 君は7年前もそうやって私を油断させて警察を呼んだからな!!」

——そう言えばそうだったな。

元教師だけあって頭は回るほうか．．．厄介だ。

すでに警察には通報してるが到着までは数分は掛かる．．．ならば「取引をしませんか?」

「?」

言葉で相手を行動を誘導する．．．。

「取引だと!? どう言うつもりだ!?!」

「簡単な話ですよ。今ここで金塊を造りあなたに差し上げます。．．．だから俺を見逃してください」

「ふざけるな! 君を攫ってから金塊を造らせた方が儲か「もう警察を呼んでいます」る．．何っ!?!」

ここに来る前にすでに警察には通報しているから俺のスマホのGPSを頼りにこちらに向かっているはずだ。

「恐らく10分もしない内に到着するでしょう。．．今この場で金塊を手にして逃げれば捕まらずに済みますよ?」

「くっ!．．．．．」

食いついたな、悩んでいる．．．。

見たところ、こいつはこのヴィラングループの中ではブレイン的な立場にいたんだろう。

なら警察が近づいて来ているこの状況でどれが最良の選択なのかを考えるはずだ。

「よく考えてみてください。あなたは好きでヴィランになったわけでは無いはずだ。たしかあなた逮捕され職を失った後、借金取りから逃げる生活を送ることになったと聞きます。．．それでやむを得ずヴィランになってしまったに過ぎない。．．．違いますか?」

「．．．．．」

「それに、そこで倒れてる連中は、あなたが人生を賭けてまで守りたい

仲間では無いんじゃないですか？ こいつらを回収して俺を連れて行くには時間が有りません。．．．ならこいつらを見捨て、自分だけ金塊を手にして逃げた方が賢明ではないですか？」

「．．．．．」

かなり悩んでいるな．．．もう一押しだ。

「《錬成》」

「!? 動くな!!．．．なっ!!?」

俺は床に手を付け個性を発動しある物を生成した．．．．．金塊を。

「3億円相当に成りますかねえ．．．．金塊です」

「な!?!．．．な!?!．．．」

目の前にある金塊を見て言葉を詰まらせる元担任。

俺が金塊を造れることは知っていたみたいだが、実際に金塊を造り出す所を見たことはない。

お金が目的なのだから目の前の金塊に目が眩まないはずがない。

「どうです？ 今すぐこれを持って逃げればこの金塊は全てあなたの物だ。」

「う．．．．う．．．」

「そこでおネンネしてる奴らの報復なら心配ありませんよ？ 直ぐに警察が来るんですからこいつらは全員逮捕され刑務所行きです。．．．何の心配もない」

「!?」

「これをお金に変えて海外にでも逃亡すれば、残りの人生は安心してしょ？ 頭はいいんですから海外に行っても仕事は出来ます。」

「はああ、はああ」

息が荒くなってきたな．．．仕上げだ、俺は後ろに下がる。

「さあ、お選び下さい。俺を攫って警察に捕まってしまう愚策か、金塊を持ち逃走する得策か．．．？」

「あ．．．．あ．．．」

相手は拳銃を持った手を下ろしゆっくり金塊に近づいていく。

——金塊を手にとろうとした瞬間がチャンスだ。

俺が造った金塊の量は片手で持てる量ではないから手に取るには両手を使わなければならぬ。

つまり手に持った拳銃が邪魔になる。

例え手放さなくても思うようには使えないはずだ……。

「はああ、はああ、はああ……」

どんどん金塊に近づいてくる。もう少し……もう少し……

「造理くん!!」

「!!?」

「なっ!!?」

突然、名前を呼ばれガレージの入口に目を向けるとそこのは思いもしなかつた人物の姿が有った。

——緑谷、麗日、飯田の姿が……。

第13話

「確かこつちの方角に向かったはずだけど……」

「しかし緑谷くん、本当なのかい？ さっきの言葉は……」

「断言は出来ないけど、可能性は高いと思うんだ。……造理くんはヴィランに追われている」

飯田の問いにそう答える緑谷。

現在、緑谷・麗日・飯田の三人は鍊を探している。

三人は帰宅するため駅まで一緒に向かっていたが、その途中で先に帰ったはずの鍊を発見した。

再び声を掛けようとしたが、鍊の後を着けている不審な男達に気がついてしまい、鍊が移動速度を上げると男達も速度を上げ、何より鍊が周囲をやたらと警戒しているようにも見えてしまい、ヴィランが絡んだ事件である可能性を頭に過ぎらせてしまった緑谷が鍊の後を追ったのである。

その緑谷に続いて麗日・飯田も後を追った。

「でも本当にヴィランに追いかけられてるなら、交番かヒーロー事務所に駆け込めばいいんじゃない？」

「彼はとても賢い人間だ。それで解決出来るならそうしているはずだ」

「……」

鍊の気がかりな行動に3人は頭を悩まし、緑谷に至っては沈黙している。

むしろ緑谷は学校から別れた時に言い放った鍊の言葉が気になっていた。

” お前たちを危険に晒したくない” ……と言った鍊の言葉を……。「危険に晒したくないって言うていたけど、それじゃまるで自分は常に危険に晒されているような口ぶりだった。なぜ危険なんだ？ 確かに世の中全く危険が無いと言えば嘘になるけど、オールマイトがこの街に来たことでヴィランの発生率は低下しているし、何よりそういう理由なら僕たちの誘いを断るまでにはならないはずだ。造理くん

の口ぶりからするとまるで彼が狙われているかのような感じだ。では一体誰に？ 誰が彼を狙っているんだ？ まだ高校生である造理くん一人を限定して狙うなんておかしいし、彼にはそれだけの価値があるのか？ 彼はいったい何なんブツブツブツブツ………」

「デクくん デクくん、途中から声に出てるし、怖いよ……」

緑谷の長々しい言葉に麗日が苦言を入れる。

「しかし本当にどこに行ってしまったんだろうな？」

「確かに急に見失っちゃったしね……」

「どっかの建物に入ったのかな？」

3人は鍊の姿を探すも中々見つけられず、困り果てていた……。

——その時

『パンツ！』

「!!?」

突然の音に驚く3人。

「何？ 今の音？」

「パンツ！ て音がしたよ？」

「……この音は！」

「飯田くん？」

緑谷と麗日は音の正体には気付かなかったが、飯田が何かに気づく。

「……銃声音！」

「えっ!？」

飯田の言葉に驚く緑谷と麗日……それもその筈、そもそもこの日本に置いて銃声音なんてものを聴くことはまず無いし、その考えに至った飯田に対し疑問を抱くのは致し方ないと言うものである。

「昔、兄さん……ターボヒーロー・インゲニウムが警察と合同訓練をしたことが有ってそれを見学したことがあったんだ……その時、警察の射撃訓練も一緒に見学して、その時に聴いた銃声音に似てるような気がする……」

「で、でも、何でそんな音が？」

「……!？」

飯田の話しを聞いて、緑谷はしばらく考え込んだが、何かに気づいて銃声が鳴った方角に向かって走り出す。

「あ!? デクくん!」

「緑谷くん!」

突然走り出した緑谷に驚き、麗日と飯田も後を追いかけていった……。

◇◇

「造理くん!!」

「!!?」

緑谷! それに麗日に飯田……! 何故ここに!?!……まさか複数有った残りの視線の正体はこいつらか? 俺を追いかけてきたのか? 何故?……何故俺を追いかけてきた?

「何だ!? お前ら!!」

——いや、それどころじゃない! このタイミングで現れるのはマズイ!!

「ひっ!!」

「麗日さん」

「麗日くん!」

元担任が緑谷達に拳銃を向け、緑谷と飯田が麗日を庇う様に前に出る。

くっ! 仕方ない!!

「《錬成・大分解!!》」

「なあっ!!?」

「!!?」

俺はガレージ床を分解し、元担任の足場を崩す。

広範囲に分解した為、ガレージの中は地震のように大きく揺れ、元担任は体勢を崩し、膝を付く……今だ!

「造理く「動くな緑谷!!」……!!」

俺は元担任に向かって走り出す!

「く、来るな!!」

「くっ!!」

相手は俺に向かって発泡し、その銃弾は俺の頬を掠めるが、俺はそのまま突っ込んで行き、

ズバツ!

「がっ!? あ、ああああああああああああああっ!!!」

事前に拾ったトンファーで瞬時に錬成した小太刀を用いて、銃を持った手を切り落とした。

さらに相手の顔を掴み、

《錬成・分解!》

「うがああああああああああっ!!!!!!」

「!!?!」

元担任の顔の表面を分解する。

「グアツ!! アアツ!!」

顔を分解された元担任は血を流しながら顔を抑え床を這いつくばり、それを見ていた緑谷、麗日、飯田の3人はあまりの光景に声が出ないでいた。

「こいつらに手を出すな!!」

「ガアハツ!!? ガ」

俺は投げ捨てたトンファーを拾い元担任を気絶させ、意識を奪う。

その後、元担任の分解した顔は再構築し止血も済ませるが かなり危なかったな、まさかここで緑谷達が現れるとは

「造理くん この人たちは?」

「ヴィランだ」

「ヴィラン!? やはり君は狙われて「話しは後だ」!?」

飯田の言葉を途中で止める。

「もうすぐ警察が来るからこいつと中に居る連中を拘束するのを手伝ってくれ」

「あっ!? う、うん」

俺はワイヤーを造り3人と一緒にヴィラン達を拘束。主犯を止血まで済ませた後に、警察の到着を待つのだった。

ついでに造った金塊も分解して……。

◆◆◆◆

「……以上が事の全容です」

あの後すぐに警察が到着し、ヴィラン達は拘束され、俺と緑谷達は事情聴取のため、現在は警察署にいる。

緑谷達は後からその場に来て何も知らない為、家に帰らせるようと思っただが、全員から事情を聞きたいと警察から言われてしまった為、結局3人も同行した。

「事情が事情なだけに仕方がないけど、今回はやり過ぎだよ？ 造理くん」

「出来れば穏便に済ましたかったんですが、クラスメイトが現れる事は想定外でした。……もちろん罰を受ける覚悟はありますよ？ 塚内警部」

「造理くん！」

隣に座っていた緑谷が声を挙げる。

個性の無断使用だけなら嚴重注意で済むが、今回は建物に被害を出しすぎてしまった。

何より俺はもう高校生であり、義務教育期間である中学生ではないため、何のお咎めなしというわけにはいかない。

「その心配はないよ。確かに建物に被害を出してしまったけど、相手は拳銃を持ち、さらに発砲までしたから、これは正当防衛が成り立つ。まあ相手は重傷だったけど……」

「二度も重罪を起こす輩に慈悲なんて与えませんよ。ぐじやぐじやになった顔に無くなった片腕は、戒めということ……」

「それだと、相手の恨みを買うことになりかねないのは、理解してるかな？」

などと説教に近い発言をしてくる 内警部。

オレはそれはあえて皮肉ってみせた。

「もう片方の腕も切つていたほうが良かったでしょうか？」

「はあ、ここまでにしよう。こう言った議題に答なんてないだろうし。それに、軽傷とは言えど、ケガを負っている君を責め立てたくはないからね……」

「……」

俺は絆創膏を張った傷を撫でる。

「ヴィランは全員逮捕したし今回はこれで解決だ。後、雄英には既に連絡を入れて事情を話しといたよ……事情は察してくれ」

——当然だな。

雄英の生徒がヴィランに襲われた以上、何も知らせないと言うのはありえない。

先生方も俺の事情を知っているから特に何かを言われる事はないが……」

「あの……」

「ん？ 何だい？」

「造理くん……何でヴィランに追われてたんですか？」

突然、麗日が声を挙げ塚内警部に質問し出した。

「悪いけど彼についての事は、一般人にはあまり話せないんだ」

「何故ですか？」

「守秘義務さ……察してくれ」

「……はい」

麗日は押し黙る……。

「さて、もう夜になるし、部下に家まで送らせるよ」

「ありがとうございます」

「三茶……送りの手配を」

「ハッ！」

俺達四人は挨拶を帰り、猫の警察官と一緒に部屋を出る。

今回は予期せぬ事が起きたけど、他者に怪我人が出なくて良かった。

緑谷達にも怪我は無かったし、一件落着でいいだろう。

「造理くん」

「？」

隣を歩いていった緑谷が声を掛けてきた。

一体何の用かと思つたが、顔を見れば聞くまでもなかった。

「警察も言っていたが何も話すことはできないぞ?」

「だが、巻き込まれてしまった以上、ある程度は知る資格があるぞ? 造理くん!」

「うん! ウチもそう思う!」

飯田と麗日まで言ってくる。

ヒーロー志望だけあつて、お節介だなあ……だが、こう言うタイプの奴らは適当にはぐらかすと後が面倒なるし、ある程度は仕方がないか……。

「簡単に言うと、俺とはある事情で幼い頃からヴィランに狙われているんだ」

「!!」

俺の言葉に3人が驚く。

「幼い頃から!? 何故!」

「悪いがそれ以上は言えない」

「な、何で!」

「理由は三つある」

俺は指を二本立てる。

「まず一つ、お前たちに話す義務も義理も無いからだ」

「ぎ、義理が無いって「二つ」・「!?」」

麗日の言葉を止め話しを続ける。

「お前達に話しても何の解決にもならない」

「だ、だが何か協力ぐらいは「三つ!」・「!?」」

飯田の言葉を止め、更に続ける。

「夕方にも言った言葉だが……」お前たちを危険に晒したくない

“……だ”

「!!」

三人の顔を見ながら俺はそう言い放った。

今回は巻き込んでしまったが、また同じ事が起きてしまったら堪らない。

俺と違ってこいつらは攫う理由は無いし最悪の場合、命を失いかねないからな……。

「悪いことは言わないから俺には関わるな。今回は運が良かったが、次もそうとは限らないし、最悪、命にだってかかわる」

「でも何か出来ることはあるはず」「それはお前たちがすることじゃない」……!?!」

「!?!」」

「相澤先生!?!」

緑谷が喋っている途中で突然、前から声がし全員が顔を向けると、其処には相澤先生が居た

「相澤先生！ 何故ここに!?!」

「ここは学外だ、イレイザーヘッドと呼べ……」

公私混同を許さない相澤先生。

話を聞くと警察から連絡が来た後、より詳しい事情を聞くために俺達の担任である相澤先生が代表してやって来たと言う……。

「造理の事情については雄英がちゃんと把握している。お前たち生徒が介入していいことではない」

「でも僕達にも手助け位は「立場を弁えろ」……!?!」

「忘れるな、お前らはまだヒーローでは無いと言うことを?」

「!?!」」

相澤先生の厳しい言葉に3人は押し黙る。

「造理の手助けは俺達ヒーローと警察で行う事だ。……生徒がすることじゃない」

「!?!」」

「分かったら遅くなる前に家に帰れ。明日も授業があるから遅刻するなよ?」

そう言い残し相澤先生は去っていった。

相澤先生の厳しい言葉に緑谷、麗日、飯田の3人は何も言えないでいるが、相澤先生の言う事は事実で有るため仕方がない……。

「相澤先生の言った通りだ。納得出来ないかも知れないが、逆の立場に立って考えてみる」

「逆の立場？」

「もしお前たちが俺の立場に立ったら、どう思うか？」

「!!?!」

三人とも驚いたような顔をする・・・察してくれたようだな。

「そう言う事だ、学校以外で下手に俺に関わるとロクなことにならない。分かってくれ・・・じゃあな」

「造理くん・・・」

そう言い残し、3人より先に警察署を後にする。

明日からしばらくはギクシャクするだろうが、時期に収まるだろう・・・今まででもそうだった。

俺は警察に送られて家まで帰宅した・・・。

第14話

「今日のヒーロー基礎学は人命救助訓練だ！」

相澤先生が手にカードを持ちながら言う……。

ヴィランに襲われた次の日、俺はいつもと変わらない授業を受けていた。

昨日の一件で緑谷、麗日、飯田の3人は、時折こちらに目線向け
るが、特に会話をする事は無く、少しギクシヤクしてしまっている。

——まあ、これは仕方がない。

立場を弁えない行動は時にして重大な事態を招きかねないし、昨日の件もあいつらは巻き込まれたと言うより、自ら首を突っ込んで行ったようなものだったからな……。

……相澤先生の厳しい言葉と俺の言った言葉にかなり堪えているようだ。

「尚、今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト、そしてもう一人の3人体制で見る事になった」

3人? ……ああ、警戒を兼ねてか……。

昨日、マスコミが雄英に侵入してきた上に、生徒には口外されてないが俺がヴィランに襲われる事件まで起きたからな、プロヒーロー数人で生徒の安全を守るつもり何だろう……。

「訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく。……以上、準備開始」

クラス一同、コスチュームを手に取り準備を始め、準備が出来た者からバスに乗り込んでいく。

「隣に座るぞ?」

「あつ!」

俺は緑谷の右側隣に座る事になった。

昨日の件も有って緑谷が思わず声を上げたが、すぐに黙り込んでしまった。

「学内であまりよそよそしい態度は取らないでくれると助かる」

「造理くん?」

俺と接する事が気まづくなっているようだが、学内でこの状態はあまり良くない。

このクラスの連中はヒーローを目指しているだけ有って正義感が強い奴が多いから、こういう状態が続くと他のクラスメイト達まで影響が出かねないからな。

「人にはそれぞれ事情が有り、言えないことの一つや二つは存在する。……お前もそうだろ？」

「!?……」

俺の言葉に緑谷は目を見開く……この反応を見るとよほどの秘密を抱えているんだろうな、先日の“人から授かった個性”ってやつが関係してるのだろうか……？

——まあ、それはいいとして、こいつは洞察力が高いみたいだから俺の事情も何となくは気づいてしまうかもしれない……恐らく昨日現場で造った金塊も見てるだろうし……。

「だから学内では普通に接してくれ……嫌なら別に構わないが？」

「べ、別に嫌って訳じゃ……」

「なら頼む」

「う、うん……」

「何の話しをしてるの？」

「……」

俺と緑谷との会話が気になったのか、緑谷の左側に座っていた蛙吹が話しに割り込んできた。

「い、いや、あの……」

「男同士の会話だ。女の子が気にすることではない」

突然の事に緑谷はドギマギしていたが、俺がすかさずフォローする。

その後、話しは変わりクラス一同は個性に付いて語り始めたが、爆豪が蛙吹の言葉にキレだし、それが面白かったのか他の奴らも爆豪をイジリ始めた。

中にはその会話を低俗と罵る奴も居たが、楽しんでいる奴が殆どで合った。

「もう着くぞ、いい加減にしとけよ・・・」

「「ハイ!!」」

相澤先生の言葉に全員ビシツと返事を返す・・・相澤先生は生徒の手綱をちゃんと握ってるようだな・・・。

◇◇

「すっげー——!! USJかよ!!?」

「あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくった演習場です。その名も、ウソの災害や事故ルーム!!」

「「(USJだった!!)」」

——とまあ、コントみたいなやり取りをしているクラス一同、そして俺達の目の前に居るのはスペースヒーロー“13号”である。

“ブラックホール”と言う他に類を見ない強力な個性を持っていて、災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なヒーローであり、あまり戦闘は得意ではないらしいがそれでも間違いなく一流のヒーローだ・・・。

「えー始める前にお小言を一つ二つ・・・三つ・・・四つ・・・」

「「(増える・・・)」」

13号は授業を始める前に個性の在り方、扱い方に対して語り始めた。

超人社会では人類の大半が行き過ぎた力を持っているため、それの人に向ける危うさを知らない者がほとんどであり、13号は俺達に個性は人を助ける為にあるのだと心得て欲しいとのことだ。

クラス一同は13号の言葉に感動してるようだが、俺はその言葉で“親”のことを思い出してしまった為、あまり感動は出来なかった。

人助けが必ずしも良い結果を生むわけではないと言うことを幼い頃に知ってしまった俺は、人助けと言う言葉はどうしても薄っぺらく聞こえてしまうの・・・。

「そんじゃあ始めるぞ。まずは・・・?」

「?」

相澤先生が突然言葉を詰まらせ演習場に目を向け、俺も目を向けると噴水近くの場所に何か黒ずんだモヤが現れる。

——嫌な予感がしてきた。

「一かたまりになつて動くな!! 13号、生徒を守れ!!」
「え?」

クラス一同、突然のことに理解が追いついてない。

黒いモヤはものすごいスピードで広がって行き、中から怪しげな連中が現れだした。

「何だアリア?!」 また入試ん時みたいなもう始まったパター「違う!・・・造理?!」

切島の言葉を不定する俺・・・。

何度も見てきたから、あれがどう言うモノなのかは直ぐに理解出来た。

肌で感じられる、途方もない悪意・・・あれは

「あれは本物のヴィランだ!!」

「ヴィ、ヴィラン!!」

「!!!」

その言葉にクラス全員が驚く。

「バカだろ!!」 ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホ過ぎるぞ!!

——いや、あいつらはアホじゃない。

この雄英は最先端の技術が満載の要塞であり侵入者用センサーがそこらじゅうに存在するはず。

それが全く反応してないなら、それを妨害できる個性を持つてる奴がいると言うこと・・・。

「校舎と離れた隔離空間、そこに少人数が入る時間割、これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ」

轟がそう語る。

恐らく先日のマスコミ騒動も奴らの仕業だろうが、妙だ。

もしそれが本当なら、奴らは学校のカリキュラムを・・・それも教

師側のカリキュラムを知っているとということになる。

いくらマスコミの対応に負われていたとは言え学校の機密とも言える情報を簡単に盗めるものなのか？ それもプロのヒーロー相手に……。

——まさか、内通者!?

「13号避難開始！ 任せたぞ！」

俺がそう思っている間に相澤先生は戦闘態勢に入っていた。

「1人で戦うんですか!? あの数じゃいくら」個性を消す”っっていうても!!」

「一芸だけじゃヒーローは務まらない」

緑谷にそう言い残し飛び出して行く相澤先生。

だが緑谷の言うことも確かだ、イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消しての奇襲……短期決戦だ。

あの数では長期戦は免れない……。

「生徒の皆！ 早く避難を！」

13号の言葉で全員我に返り、避難を始める。

今俺達がするべきことは一刻も早くここを抜け出し、学校にこの事態を伝えることだ。

——だが

「させませんよ」

「!!?」

ヴィランはそれを許してはくれなかった。

「初めまして、我々は敵連合。せんえつながら、この度ヒーローの巣窟……雄英高校に入らせて頂いたのは……」

俺達の前に黒いモヤを纏ったヴィランが現れる。

こいつは噴水のすぐ側いたはずだ、それが一瞬でこの場に現れたという事は……こいつは長距離移動……“ワープ”の個性を持っていると言うことか!

「平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

「《錬成!!》」

「なっ!?!」

「!!?!」

俺は大量の拳岩を生成しヴィランに向けて放った。

「造理くん!?!」

「13号!! 直ぐにブラックホールを!! こいつの個性は“ワープ”だ!!」

「!? よし!!」

こいつに何もさせてはいけない! ヘタをすればクラス全員、散り散りされる!

13号は個性を使用する為に前が出るが

「俺達もやるぜ!」

「死ね! クソがあ!!」

「!? やめろ!!」

爆豪と切島が飛び出してしまった。

くっ! これじゃ13号の個性が使えない!

「ダメだ! どきなさい二人とも!」

「スキ有ります」

「!!?!」

黒いモヤがクラス全員を襲う。

まずい! このままじゃ全員が散らされてしまう。

《錬せ「させません」何っ!?!》

黒いモヤを放ちながらヴィランが俺に近づいてきた。

「さつきは危なかったですよ、君は生徒の中で特に優秀みたいですね?」

「くっ!」

黒いモヤが集中して俺を包み込む。

「そんなあなたには相応しい場をお届けします・・・」

「くそ!!」

俺はそのまま黒いモヤに巻き込まれてしまった・・・。

——そして現れた場所は

「造理!？」

「!?・・・相澤先生!？」

目の前には相澤先生、そして周りは大量のヴィランに囲まれていた。

見渡すと、ここは中央広場であることが解った・・・。

——どうやら一番の危険地帯に送り込まれてしまったみたいだ。

第15話

「皆は!? いるか!? 確認出来るか!?!」

「散り散りにはなっているが、この室内にいる」

場所は出入り口ゲート付近、其処には飯田、麗日、障子、芦戸、瀬呂、砂藤・・・そして13号が残されて居た。

彼らの目の前には黒いモヤのヴィランが居る。

13号は委員長である飯田に学校まで駆けこの事態を伝えるように指示を出す。飯田はそれに反論する。

だが、クラスの皆が飯田に行くことを進める。

「食堂の時みたたくサポートなら私超出来るから! するから!!.....
お願いね委員長!!」

「!?!? ああ!!」

「手段がないとはいえ、敵前で策を語る阿呆がいますか?」

「バレても問題ないから、語ったんでしようが!!」

飯田は行く決意を固めたが、敵はそれを許してはくれない。

13号はヴィランと対峙するのであった.....



「造理! お前は直ぐに避難しろ!」

「避難するにはヴィランが多すぎます!」

出入り口付近である黒いモヤのヴィランの個性に巻き込まれ、視界が見えた瞬間そこは中央広場の噴水近くであった。

相澤先生は俺に隙を見計らって避難するように言うが、周りは数十人のヴィランに囲まれているため、それが出来ずにいる。

——何より

「こいつを生け捕りにしろ!」

「こんな所に造理 錬 がいるとはなあ!?!」

「こいつが居りや大儲けだあ!?!」

どうやらヴィランの中に俺を知っている奴が居たみたいで、すつか

りターゲットにされてしまっている。

これでは避難しても追いかけてしまう……本当に迷惑だ！

「ギャア！ 切られた!!」

「痛えっ!!」

俺は腕に付けたガントレットを錬成して、先端半分が刃に成っている“ブレードトンファー”に生成しヴィランに切りつける。

打撃よりも斬撃の方が確実にダメージを与える事が出来るし、何よりヴィランが相手なら遠慮はしない。

「お前どこでそんな体術を覚えたんだ？」

「独学ですよ、独学！」

「殺すなよ？」

「解つてます！」

致命傷を与えないように相手の肩や足の一部を切り裂き、行動不能にさせて行く。

今まで何度もヴィランに襲われ続けたのだからこの程度は技術、体術は造作もないこと……。

「相澤先生、今日のヒーロー基礎学はオールマイトもいるはずですが、来れないんですか？」

「トラブルがあつて授業が終わる頃なら来れるそうだが」

授業が終わるまで、まだ二時間はある……ダメだな、時間が掛かりすぎる。

防犯センサーが作動していないなら、恐らく電子機器による通信手段は全て妨害されているはずだ。

妨害出来る個性を持つているヴィランを探すのは至難……授業が終わる頃まで持たない。

出入り口に目をやると、複数のクラスメイトの姿が確認でき、飯田、麗日の姿もある。

——飯田を脱出させることが出来れば何とか……

「もらった!!」

「もらってない！」

「ウギャアアア!!」

背後から異形型のヴィランが攻撃を仕掛けてきたが、それをかわし相手の腕を切りつける。

だが、このままじゃ消耗戦だ……あれをやるか？

「相澤先生、合図したら高く飛び上がって下さい」

「何する気だ？」

「ヴィランの動きを止めます。……飛び上がらなかつたら痛いですよ？」

「……やりすぎるなよー」

俺は笑みを浮かべながらそう語る。

この場にいるヴィランの数は軽く見積もっても70人、可能な限り引き寄せる。

———今だ！

「先生!!」

「ああ!!」

相澤先生が高く飛び上がった。

「《錬成・連鎖分解!!》」

俺の位置から全方位に向かって個性を発動、地面はひび割れて行く。

「ギアアアア!!」

「ガアアアア!!」

「イテエエエエエ!!」

周囲に居たヴィランの脚が分解されていき倒れこんでいく。

「連鎖分解」……分解エネルギーを地面を伝って放出させて行く個性の応用である。

脚を分解と言っても、脚を丸ごと分解している訳ではなく、出力を調整して足の裏側の真皮までを分解し、相手を立てなくするもの。

相手の命を奪わず、身動きだけを奪う為に開発した戦術である。

「大したものだな」

「使い所は限られますけどね」

飛び上がったいた相澤先生が降りて来てそう語る。

この技は約半径15メートル以内に居る自分以外の者全てに影響

してしまう為、市街地などでは使用することが難しく、最悪仲間まで巻き込んでしまうかも知れないもの。

唯一の回避方法は高くジャンプするか、宙に浮くぐらいである。「敵の数は大分減った、今の内に避難しろ」

相澤先生は避難を促すが、それは無理だろう・・・何故なら「最近の学生は凄いなあ・・・」

顔と体中に人の手を付けたヴィランが向かって来ていた。

《錬成》

「遅いよ！」

「くっ!？」

素早い！ こいつが本命か!？」

生成した拳岩を軽々と回避するヴィランのリーダーらしき人物。

俺はブレードトンファーで切りつけるが、それも回避され右腕を掴まれる。

——そして

「この腕を粉々にしてやる・・・」

「何!？」

腕に装着してあるガントレットが粉々になっていく・・・これはマズイ!

「造理!」

「おっと!? 危ない危ない」

相澤先生が抹消でヴィランの個性を消し、捕縛武器で攻撃を放つが、相手はそれも難なく回避する。

だが、拘束は解除出来た。

「造理! 大丈夫か!？」

「大丈夫です、腕は無事です!」

「触れたものを粉々にする個性だと！ こいつが本命か!？」

相澤先生のおかげで大事には至らなかつたが、これはかなり危険だ!

触れたものを粉々にする、それはつまり防御が不可能な攻撃と言うことであり、触れる部分によっては簡単に命を奪われてしまう!

「かつこいいいなあ、イレイザーヘッド？ 生徒を守るために真正面から突っ込んでくるなんて。．．．でもあまり無理するなよ？ お前の個性じゃ集団との長期戦は向いてくないか？」

相澤先生の弱点を見抜いているかのような発言をするヴィランのリーダー。

確かにこのままではマズいな、相澤先生はドライアイだと言っていたし、1アクション終えるごとに個性の発動時間がだんだん短くなっている。

「生徒に安心を与えるために無理してるのか？ かつこいいいなあ、かつこいいいよう．．．でも残念、本命は俺じゃない．．．脳無！」
「!!？」

ヴィランのリーダーの後ろで待機していた脳がむき出しのヴィランが瞬きする間も無く接近してきた。

相澤先生が俺を庇う様に出るが

「ぐあつ！」

「相澤先生!! その手を離せ!!」

「やれ、脳無」

「ぐわあつ!!」

脳ヴィランは相澤先生の右腕を掴み、俺はそれを止めようとするが、脳ヴィランにはらうように拳を振り、俺はその攻撃をガントレット越しにガードしたが殆ど意味が無く、そのまま地面をバウンドしながら吹き飛ばされて行く。

「がはつ！ ぐつ．．．!？」

何とか体勢を立て直し立ち上がるが、腕が逝きそうだ、あんな虫でも払うかのような攻撃で此処までダメージを受けるなんて．．．パワーだけならオールマイイト級か？

「ぐあつ!!」

「相澤先生!？」

脳ヴィランが相澤先生の右腕をへし折った。

——このままじゃ先生が危ない!!

「《錬成》．．．発射!!」

「!?」

俺はロープが付いてない銛大砲を生成し、脳ヴィランに向けて発射する。

銛は脳ヴィランの肩に突き刺さり、その勢いで脳ヴィランは吹き飛び、俺はその隙に相澤先生に駆け寄り、その場を離れる。

「先生！腕が！」

「右腕が折られたただけだ！気にするな！」

十分、重症だ！それに頭から血も流れている！生徒である俺の前で弱みを見せないために、あえて虚勢を張っているようだが、これ以上戦闘を続けるのは困難だ……！

「全く、いいところだったのに、ちよつとムカつくなあ……脳無……来い！」

そう言うと、吹き飛んでいた脳無と呼ばれた脳ヴィランが一瞬でヴィランリーダーの隣に立つ。

鯨を仕留めることも出来る銛大砲の銛を受けても動けるなんて、とんでもない化物だ！

「こんな物を突き刺しやがって……さっさと引っこ抜け、脳無」
「!!」

脳無が肩に刺さった銛を引き抜くと驚きの光景を目の辺りにした。
「……再生している!」

銛が突き刺さって空いた脳ヴィランの肩の穴が再生していき、穴が塞がってしまった。

「残念だったな？この脳無は“超再生”の個性を持つてるから、どんな傷を負っても元通りに戻るんだよ……」

「超再生だと!」

脳無の個性はあのパワーじゃないのか!? ならあの脳無は素の力がオールマイト級と言うこと?……ありえない!

「さてさて……舐めた真似をしてくれたお前から始末しようか?……脳無!」

「!? 《錬成!!》」

あの脳無が弾丸のような速さで俺に向かってくる。

俺はヴィランリーダーの言葉を聞いて直ぐに前方に分厚い壁を生
成する。

——だが

「何っ!!? ぐうあっ!!」

「造理!!」

脳無は分厚い壁を突き破って来た。

あまりの光景に驚いてしまった俺はガードが間に合わず、脳無の攻
撃をモロに受けてしまい、そのまま吹き飛んで行った……。

◇

「今朝 快便だったし、奴ら一日はくつついたままだぜ」

「あれで全員だったのは運が良かった……すごいバクチをしてしまっ
た……普通なら念のため何人かは水中に伏せとくべきだもの、冷静
に努めようとしていたけど冷静じゃなかった……危ないぞ、もつと
慎重にブツブツブツブツ……」

「緑谷ちゃんやめて、怖い」

場所は水難ゾーン、そこには緑谷、蛙吹、峰田の3人が飛ばされて
おり、3人は策を講じて水難ゾーンに潜んでいたヴィランの撃退に成
功した。

3人は次の行動に移ろうとするが緑谷は広間に目を向ける。

「え……? まさか緑谷、バカバカバカ……」

「ケロ……」

「邪魔になるようなことは考えてないよ!」

蛙吹と峰田は不安そうに緑谷を見つめる。

「ただ隙を見て、少しでも先生の負担を減らせれば……」

初戦闘を勝利で飾ってしまったため自分の力がヴィランに通用す
ると錯覚してしまった緑谷は相澤先生が戦っている中央広場に向か
おうと提案する……。

——だが、その時

バシャーリーン!!

「ぐア!!」

「!!?」

突然、三人の目の前で水しぶきが上がる……そこには
「がっ……う……うあっ!!」

「造理(くん)(ちゃん)!!」

「!? …お前たち……無事だったの……か……」
造理 錬の姿があった……。

第16話

「13号……やはり災害救助で活躍するヒーローは戦闘経験が一般のヒーローに比べ半歩劣る」

「(ワープゲート！ やられた……!!)」

「飯田ア走れって!!」

「くそう!!」

「外には出させない!」

場所は出入り口ゲート付近、ここでは13号がワープヴィランと対峙していた。

13号は自身の個性であるブラックホールでワープヴィランを吸い込んでいたが、ヴィランは13号の背後にワープゲートを出現させ13号は自身のブラックホールによって自身をチリにしまった。

学校まで応援を呼びに行くように頼まれた飯田がクラスメイトの言葉に反応して駆け出すが、ヴィランがそれを邪魔する。

「なまいきだぞメガネ！ 消え……何!?!……」

「!?!」

「理屈は知らへんけどこんなん着とるなら、実体あるってことじゃないかな!!」

「しまった！ 身体の方を!!」

飯田の目の前にワープゲートが出現し飯田を飲み込もうとしたが、麗日がワープヴィランの体に触れ個性を発動、ヴィランは浮かされ宙を舞う。

「行けええ!! 飯田くーん!!!」

「「行けええ!!」」

「……応援を呼ばれる……ゲームオーバーだ」

さらに他の生徒の助力もあってワープヴィランは遠くに投げ飛ばされ、飯田はゲートを潜り、見事脱出に成功した。



「造理くん！ 大丈夫!?!」

「肋骨が何本か逝ってるが大丈夫だ」

「それ大丈夫なのかよ!?!」

「無理してるわね？ 造理ちゃん」

黒いヴィランの攻撃で水難エリアまで吹き飛ばされた俺は緑谷、蛙吹、峰田の三人と合流した。

この三人はワープヴィランによって水難エリアに飛ばされていたようで、そこでヴィランに遭遇したが、策を講じてヴィランを一網打尽にすることに成功したらしい。

「造理ちゃん、どこに飛ばされてたの？」

「中央広場だ」

「中央!?! じゃ、相澤先生の所に!?!」

「ああ、さつきまで相澤先生と一緒に戦っていた……このままじゃ先生が危ない」

「じゃ、じゃあ僕らで助けに「駄目だ!!」!?!……造理くん!?!」

緑谷が相澤先生の救援に向かおうとしたが、俺はそれを制止する。

「広間には恐ろしく強いヴィランが居る……お前たちが行ったら一瞬で殺されるぞー!」

「で、でも何かできることは……」

「相手はオールマイト級の強さだ!」

「!?!?!」

俺の言葉に三人は驚愕の顔を見せ言葉を詰まらせる……当然だな、相手がオールマイト級だと聞いて驚かない人間なんか居ない。

「つ、造理! 嘘……だよな……なあ!」

信じたくないのか峰田がそれが嘘であることを祈っているかのよう聞いてくるが、残念ながら本当だ。

さらにそのヴィランは超再生の個性を持っているため外傷を与えても直ぐに元に戻ってしまう、まさに化物だ。

恐らくあの脳無と呼ばれたヴィランが対オールマイト用の切り札何だろう……。

俺の話しを聞いて3人は絶望にも似た表情を見せる……。

「お前たちは敵に見つからないように入り口ゲートに向かえ、俺は相澤先生の救援に向かう」

「ば、バカ言ってるじゃねえよ!? そんな化物が居る所なんかに行ったら殺されるぞ!!」

「危険よ、造理ちゃん?」

峰田と蛙吹が必死に俺を止めようとする。

確かに二人の言うことは正しい・・・本来なら俺達生徒は身の安全のこと重視して行動しなければならず、自ら危険に飛び込もうとしている俺の行動は愚かとしか言い様がない。

相澤先生も生徒である俺たちを守るために自ら危険に飛び込んでいった行為を無駄にしてしまう。

だが、相澤先生だけであの脳無を押さえ込むのは不可能だ。

学校からの救援が望めない今の状況で、あの脳無を野放しにしてしまったらクラスメイト全員が殺されてしまう。

誰かが足止めをしなければ・・・

「ぐあっ!!」

「!!?!」

「相澤先生!!」

悲鳴のような叫び声が聞こえ、中央広場に目をやると相澤先生があの脳無に地面に抑え込まれ拘束されていた。

このままじゃマズイ!!

「造理くん!?!」

「お前たちはここを動くな!」

俺は一目散に駆けつける。

「先生!」

「!? 来るな造理!!」

「またお前かあ・・・脳無、殺れ」

相澤先生を拘束していた脳無が凄まじいスピードで迫ってくる。

「同じドジは踏まない! 《錬成!!》」

「!?」

俺は前方の地面に大量のニードルを生成し、真正面から迫って来た

脳無は体中にニードルが突き刺さり串刺し状態になった。

串刺しになった脳無はジタバタしているが、動きを封じることには成功する。

「脳無!? このガキ『錬成・分解!』があ!!」

俺は地面を分解してヴィランリーダーの足場を破壊し、ヴィランリーダーは体勢を崩した。

「錬成!』発射!!」

「なっ!!?」

「しばらく大人しくしている!」

更に俺はネットランチャー生成して発射し、ヴィランリーダーの動きを封じた。

粘着性のネットだから、簡単には抜けられない。

「相澤先生!」

「ぐ、造理!...来るなど言っただは!」

「お叱りなら後で受けます!」

俺を叱りつける相澤先生だが、今はそれどころではない! 先生は両腕を折られている上に顔面もかなりの重症を負っていて目の焦点がロクに合っていない。

もうロクに立つことも出来ずにいる...とても戦える状態ではない!

「先生、とりあえず個性で止血だけはしますから、あの脳無とか言うヴィランの個性を消しといてください」

「何をする気だ?」

「止めを刺します」

「!? 殺す気か!」

「このままだと、こちら側に死者がでますからやむ得ません...頼みます!」

「造理!!」

制止する相澤先生を振り切り、俺は脳無に向かっていく。

あの脳無は超再生を持っていると言うが、頭部...脳を破壊すれば流石に止まるはずだ。

例え相手が凶悪ヴィランで合っても命を奪うことはヒーローとして言語道断であり許されないこと……。

だがそれでも、助けが来ないこの状況である脳無を野放しにしてしまえば全員皆殺しにされてしまう、例え罪を犯すことになってもあいつは今ここで倒さなければ成らない！

「悪く思うなよヴィラン!! 《錬成・分解!!》」

俺は串刺しに成って動けないで居る脳無の背後に迫り、脳無の後頭部に目掛けて手をかざした。

——だが

「これで終わり「させません」何!!?」

俺が手を突き出したら突然、脳無の後頭部付近に黒いモヤが出現し、突き出した腕が飲み込まれてしまった。

「まさかワープゲート!? ……ぐわあああああ!!!?」

「己の個性で自滅してください……」

「ぐはっ!! がは!」

突然、腹部に物凄い激痛が走った。

何が起こった!?

「危ない危ない、貴方はとても良い個性をお持ちのようですね？ 如何に超再生を兼ね備えている脳無でも脳を破壊されてしまえば機能が停止してしまいますから、ワープゲートの出口をあなたの腹部付近に出現させて、自滅するよう仕向けました……」

自滅? ……なるほど、俺の攻撃を利用されたか？ 自分の腹を分解してしまったようだな……。

「造理!!」

「黙ってるよ、先生!」

「ぐあっ!!?」

捕縛ネットで拘束されていたヴィランリーダーが地面に這いつくばっていた相澤先生の顔面を蹴り飛ばす。

どうやら相澤先生が俺に気を取られた一瞬の隙を見て、自身の個性で捕縛ネットを粉々にし、脱出したみたいだ。

「ムカつくなあ、このガキは・・・」

ヴィランリーダーは首を掻きむしりながらこちらに近づいてきた。

「脳無・・・て、動けねえか？ 全く・・・」

ヴィランリーダーは串刺し状態に成っている脳無に近づき脳無に突き刺さっているニードルを個性で粉々にしていく。

脳無は解放されて、ヴィランリーダーは倒れ込んでいる俺に向かってくる。

「舐めた真似をしてくれるよな、お前？」

「があああああ!!!」

分解して負傷している俺の腹を蹴りつけてくるヴィランリーダー。

俺はあまりの激痛に思わず叫んでしまう。

「死柄木 弔」

「？ 黒霧か・・・13号はやったのか？」

「行動不能には出来たものの散らし損ねた生徒がおりまして・・・メガネを掛けた生徒一名に逃げられました」

「・・・は？」

ワープの個性を持つヴィラン“黒霧”がそう言うと、“死柄木 弔”と呼ばれたヴィランリーダーは首を掻きむしり苛立ちを見せる。

一名に逃げられた？・・・誰かが脱出に成功に成功したというところか？ メガネを掛けた生徒・・・飯田か！ あいつが脱出に成功したのなら直ぐに助けを呼ぶことができる！

「黒霧・・・お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ・・・」

「申し訳ありません」

「さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない・・・今回はゲームオーバーだ・・・帰ろっか？」

帰るだど？・・・どう言うことだ？ こいつらの目的はオールマイト殺すことじゃないのか？ 何を考えているんだ？ こいつらは・・・

「けどもその前に平和の象徴としての矜持を少しでもへし折って帰ろうか・・・」

ヴィランのリーダー死柄木は俺を持ち上げる。

「お前を粉々にしてやる・・・」

「!?」

「マズイ! ダメージが大きくて身動きが取れない! 死柄木が俺の顔を掴む・・・ここで死ぬか・・・」

「?・・・本っ当かつこいいぜ・・・イレイザーヘッド」

「!? 相澤先生!」

少し離れたところで身動きがとれないでいる相澤先生が抹消を発動して死柄木を見つめていた。

「・・・脳無」

「ぐあっ!!」

「先生・・・!!」

脳無が倒れている相澤先生の顔面を蹴り上げ、相澤先生は宙高くに舞い上がり、そして地面に落ちた。

——死なないでくれ、相澤先生・・・。

「さて、これで心置きなく粉々にできる・・・」

「お待ちください、死柄木」

「・・・あ?」

俺に止めを刺そうとする死柄木を黒霧が制止する。

「その生徒は連れて帰りましょう」

「・・・は? 何で?」

「その生徒・・・名前を聞いて思い出したんですが、”造理 錬”ですよ」

「造理 錬?・・・誰だよ」

黒霧が俺と一緒に連れて帰ろうと死柄木に提案してきた。

「ヴィランの間では有名な人物ですよ・・・”錬金術”の個性を持っていて、黄金・・・金塊を造り出す事が出来ると言う」

「金塊?・・・こいつそんなこと出来るのか?」

「ええ・・・彼の個性を手に入れば、我々の活動資金も充実しますし、”先生”も喜ぶかも知れません・・・」

「・・・そうか・・・それも良いな」

死柄木は俺の顔から手を放した。

こいつらも結局そのへんのヴィランと同じか……反吐が出そうだ。
……だけど、もうこいつらに抵抗出来るだけの力は残っていない。
「脳無……このガキを捕まえておけ」

死柄木の命令で脳無が俺の首根っこを掴む。

——はあ、遂にヴィランの手に落ちる時が来てしまったか……。
雄英なら安全だと安心をしてしまったが、飛んだ誤算だった。
……いや、雄英を責めるのは筋違いだな。

まさか此処まで大規模なヴィラン襲撃が起こるとは思いもしな
かったし、相澤先生も13号先生も命を掛けて戦っていた。

ただ相手が悪かっただけだ。

ヒーローは決して無敵と言うわけではないし、まだ誰も死んでいな
い。

——俺一人が連れ攫われるだけで済むなら、まだマシな方だ……。

「黒霧、ゲートを開け……」

「承知しました」

黒霧が個性を発動してゲートを出す。

今にして思えばロクな人生じゃなかったな。

良かれと思った行動が全てを変えてしまい、親にも捨てられて親戚
にも目を背けられて、常に危険に晒されて……。

こんなことなら、もっとクラスの皆と仲良くしておくべきだつ
た……。

特に緑谷達には冷たく接してしまっただが、あいつらとなら仲良くな
ることは出来たはずだ。

他人を遠ざけて生きてきたせいで無意識に人の手を振り払うよう
に成ってしまったようだ。

——でも今更それを後悔しても仕方がない。

緑谷達は無事に逃げただろうか？ こいつらが撤退するなら生存
率は格段に上がるはずだ。

心配はないだろうが、俺は緑谷達が居る方向に目を向ける。

——緑谷の姿が見える。

「……無事で良かった……」

小声ではあるが思わず声に出てしまい俺は安心の笑みを浮かべてしまった。

仲間どころか友達にすらなっていない者にこんな考えが浮かんでしまうなんて、俺もヤキが回ってしまったのか? . . . それとも諦めから来た感情なのかな . . . ?

まあいいか、俺は覚悟を決め、目を瞑った . . . 。

「造理くん!!!」

「 . . . あ? 」

「!?! . . . 緑谷!!」

突然の掛け声に驚いた俺が目を開けると緑谷が必死の顔をして、こちらに向かって来ていた . . . 。

◇

— 緑谷 視点 —

僕らは何も解っていないかった . . . 。

ヴィランとの初の戦闘を勝利で飾ってしまった為、僕らの力が敵に通用するんだと思ってしまうたがこれは大きな勘違いだった。

今僕たちの前には恐ろしい光景が広がっている . . . 。

「舐めた真似をしてくれるよな、お前? 」

「があああああ!!!」

相澤先生を救出するべく向かっていった造理くんが、ヴィランに重症を負わされて苦しめられている。

プロのヒーローである相澤先生がいつも簡単にやられ、あれだけ強かった造理くんもあの有様 . . . 。

「緑谷ダメだ . . . さすがに考え改めただろ . . . ? 」

「ケロ . . . 」

峰田くんは手を口に当てながら震えた声を上げ、蛙吹さんは顔の半分を水に沈めながら後ずさっている。

造理くんが僕らに逃げるように言った理由がようやく解ったような気がした。

前に警察署で造理くんは幼い頃からヴィランに狙われていると

言っていたから、ヴィランの恐ろしさをちゃんと理解していたんだ。だから僕らに逃げろって言ったんだ……。

——ヴィラン、ヒーローの世界……僕らはまだ、理解しちやいなかったんだ。

助けなきや！ 造理くんを助けに行かなきゃ!! ……でも動けない、恐怖のあまり脚が竦んで動けない……。

「今回はゲームオーバーだ……帰ろっか？」

——帰る？

「帰る?……カエルつつたのか今??」

「そう聞こえたわ」

帰るだつて!!? これだけのことをしといてあっさり引き下がるなんて、これで帰ったら英雄の危機意識が上がるだけだぞ!! ゲームオーバー? 何だ……何を考えてるんだ。

「その生徒は連れて帰りましょう」

「……は? 何で?」

連れて帰る?……!?!あいつら造理くんを連れ去るつもりなのか!? でも何で!?

「ヴィランの間では有名な人物ですよ……“錬金術”の個性を持っていて、黄金……金塊を造り出す事が出来ると言う」

金塊? 金塊つてあの黄金のこと?……そう言えば昨日の現場の現場に金色に輝いていた物が散らばっていたけど……まさか、あれは造理くんが造り出した物なのか!? じゃあ彼が幼い頃からヴィランに狙われている理由って……

「彼の個性を手に入れれば、我々の活動資金も充実しますし……」
資金! やっぱりそうか! だから造理くんはヴィランに狙われてたんだ。

金塊なんて物を造り出せてしまうなら、ヴィラン問わずにお金目的の人達がいくらでも群がってくる……一般人も含めてだ。

警察が造理くんのことを話してくれなかったのも造理くんの身の安全のためだったんだ。

そして造理くんが僕や麗日さん、飯田くんに話さなかったのも本当

に僕らが巻き込まれないようにするための、造理くんからの気遣いだったんだ……。

「黒霧、ゲートを開け……」

「承知しました」

黒霧と呼ばれたヴィランがワープゲートを開く。

やばい！ このままじゃ造理くんが連れ去られてしまう！ でも僕の手じゃあいつらには敵わない！……どうする!?……どうするか考えるんだ!!

いくら頭を悩ませてもいい考えが浮かばない、僕は造理くんに向かって……

「……何で笑ってるんだ?」

彼は笑っていた、助けを求める顔をしてるわけでも無く、絶望してる顔さえしてない……。

なぜ笑っていられるんだ!?……君はこれから地獄に向かおうとしてるんだぞ!? なぜ笑った顔が出来るんだ！ 理解出来ない! どうしても理解出来ない……!!

僕は頭を悩ませていたが、次に造理くんの顔を見て理解してしまった。

「……無事で良かった?……!!」

距離が遠くて口パクでしか見えなかったけど口の動きで何となく理解してしまった。

彼は確かにそう言った……それはつまり僕らの身を安じていたと言うことだ。

あんな状態で自分ではなく僕らの心配ができるなんて、なんて人だ! 本物のヒーローみたいだ! オールマイト見たいな…….
オールマイト?

オールマイトの名を口にした瞬間、僕は入学前の合格発表を思い出した。

《きれい事!? 上等さ!! 命を賭してきれい事を実践するのがヒーローだ!!》

オールマイトはそう言っていた……そうだ……そうだよ!!
ヒーローは命を賭けなきゃ出来ないんだよ! 何を怖気づいてる
んだよ! 目の前に助けなきゃならない人がいるじゃないか!? 助
けが来ないこの状況で何もせずにはコソコソと隠れていて、胸を張って
ヒーローになれるのかよ!

——助けなきゃ! 造理くんを助けなきゃ!!

「ヒーローはいつだって命懸けだあ!!」

「ケロツ!!」

「緑谷っ!!」

僕は思わず叫び上げ、そして走り出す。

「造理くん!!!」

彼の元に駆けて行った……。

◇

「造理くん!!!」

「……あ?」

「!?……緑谷!!」

緑谷が必死な顔をして、こちらに向かって来ていた……何故
来た!!?

「今助ける!! SMASH!!!」

緑谷が俺を捕まえているヴィラン“脳無”に拳を繰り出し、物凄い
音と衝撃が発生した……。

——だが

「……え?」

「いい動きをするなあ……スマッシュってオールマイトのフォロー
かい?」

脳無は全くダメージを受けていなかった……。

「脳無は“ショック吸収”の個性も持つてるから、そんなの効かない
よ?」

ショック吸収だと!? 馬鹿な!! こいつの個性は超再生じやなかったのか!? こいつは個性を複数持っていると言うのか!?

「まあいいや君……」

「!!?」

マズイ!! 緑谷が殺される!!

「《分解!!……錬成!!》」

「!!?」

俺は俺の首を絞めている脳無の手を分解して拘束を解き、更に拳岩を大量に生成してヴィラン達を退け、緑谷と共に距離を取った。

「造理くん!」

「何故来た!? もう逃げられないぞ!!」

「解つてるよそんなこと!!」

「!？」

緑谷が声を上げて叫んだ。

「それでも君が連れ去られていく姿を黙って見てるなんて出来なかったんだ。ここで動かなかつたら僕は胸を張ってヒーローになることなんて出来ないって思っちゃったんだ……」

俺は緑谷の言葉を聞いて目を見開いてしまった。

何を言っているんだこいつは? 家族でもなければ友達でもない俺の為に何故そんなことが出来るんだ?……お前は一体何なんだ!?

「それに……オールマイトが言っていた!」

緑谷が俺の前に立ち、ヴィラン達の方に体を向けた。

「ヒーローはいつだって命懸けだあ!!」

緑谷がそう叫んだ……。

——そうか、そう言うことか、……ようやく解つたよ、緑谷と言う人物が……。

唯のお節介でちよつと正義感が強いだけの人間だと思ってたけど、こいつはそんな低レベルな人間じゃなかった……。

——こいつは、根っからの”ヒーロー”だったんだ。

「全く、……ほんと面倒だなあ……」

死柄木はそう言いながら首を掻きむしる。

「……やっぱいいや、黒霧……こいつも殺そう」

「死柄木？」

「面倒になってきたし、ムカついたから殺すよ」

「……仕方がありませんね」

奴らは俺を連れ去ることをやめてしまったようだ。

脳無も分解した腕を再生させていく……ここが人生の終着点か……。

「緑谷……言っておくが、楽には死ねないぞ？」

「解ってるよ、そんなこと……」

震えた声をしているが、ちゃんと理解しているようだ。俺は重症を負った腹部を無理やり錬成して傷を塞ぎ、体にムチを打って立ち上がる……。

「こうなったら、やぶれかぶれだ。一人ぐらいは道連れにするぞ」

「僕は殺しなんてしないよ、先生たちが来るまでの時間稼ぎだ！」

震えら声で緑谷が言う。

まったく、怯えてるくせに、どこまでも甘い考えな奴だ。こういう奴は、幸せに死ぬことなんてできないだろうな。

せめて悔いを残さずに死ねるように祈ってやるよ——。

そんな呆れつつも、感心を胸に抱いた俺は、緑谷と共にヴィランと対峙した……。

その時だった。

「もう大丈夫!!」

「!!」

突然、出入り口付近で物凄く大きな音が鳴り響いた。

俺と緑谷……更にヴィラン達まで出入り口に顔を向けると、まるで爆発でも起こったかのように砂煙が舞い上がっていた……。そして

「待たせてしまったね……でも、もう大丈夫……」

「!!」

砂煙の中から声が聞こえた。

その声はこの場に居る誰もが知っていた、世の人たちの誰もが憧れ、世のヴィラン達の誰もが恐れるその声の持ち主を……

「私が来た」

オールマイト。

この場に居る全員が、待ち望んでいたヒーローだ……。

第17話

◇
—オールマイト視点—

「嫌な予感がしてね・・・校長のお話を振り切りやってきたよ」
来る途中で飯田少年とすれ違って何が起きているか、あらまし聞いた・・・。

——まったく己に腹が立つ!!

子供らがどれだけ恐怖に怯えていたか・・・後輩らがどれだけ頑張ったか・・・。

しかし、だからこそ胸を張って言わなければならぬのだ!!

「もう大丈夫」

この場に居る全ての者たちに伝えよう・・・!!

「私が来た!!」

◇

「オールマイトオオ!!」

水辺に居る峰田が泣き叫んでいた・・・まあ無理もない、命の危機に晒されているこの状況で希望とも言える存在が現れたのだから・・・。

「あ——・・・コンティニューだ。待ってたよヒーロー、社会のごみめ・・・」

俺と緑谷の目の前に居る死柄木が待ち望んでいたかのように笑顔を見せている。

気色の悪い奴だ、オールマイトに恨みがあるのか・・・?

——だが、スキを見せたなヴィラン!

「《錬成・射出分解!!》」

「!? 脳無!」

地面を伝って分解エネルギーを一定の方向に射出し、死柄木に向かって放ったが、脳無が邪魔をする。

だが、これをくぐらえば超再生を持つ脳無でもしばらく身動きはとれず案の定、脳無は脚を破壊され膝をついていた。

「緑谷！ 一時離脱だ！」

「!? うん！」

「させませんよ！」

俺と緑谷はその場を離れようとするが、黒霧がそれを阻む……。

——だが、

「生徒に手を出すな!!」

「!!?」

出入り口付近に居たはずのオールマイルトがいつの間にか中央広場……相澤先生を担ぎながら現れた。

「皆は入口へ、相澤くんを頼んだ。意識がない！ 早く!!」

「!!!?」

「え!? え!? あれ!? 速え……!!」

オールマイルトは一瞬の内に俺と緑谷、水辺に居た蛙吹と峰田を回収し、ヴィラン達と距離を取った。

——全く見えなかった！ 凄まじい速さだ！

「早い早い、殆ど見えなかったよ……けれど思った程早くなかったな……やはり本当だったのかな……弱ってるって話……」

死柄木は不気味な笑みをこちらに向けてくる。

「オールマイルトだめです!! あの脳みそヴィラン、ワン……っ僕の腕が折れないくらいの力だけどビクともしなかった!! きつとあいつ……」

「緑谷少年、大丈夫！」

オールマイルトは指でVサインをしながら余裕の笑みを浮かべる。

——だが、伝えなければいけないことはある。

「オールマイルト、あの脳みそヴィラン……脳無をよく見てください！」

「? 造理少年どうし……む!!」

俺の言葉に疑問を浮かべたが、脳無の方に目を向けると言葉を詰まらせた。

「脚が再生している!？」

「あの脳無とか言うヴィランは“ショック吸収”と“超再生”の二つの個性を持っています。唯の攻撃は通用しません！」

「個性が二つだと!?!・・・なるほど」

「それとあの黒いモヤのヴィランに気を付けてください。“ワープ”の個性を持ち、自分が繰り出した攻撃が利用されます・・・」

「貴重な情報をありがとう！ 造理少年!・・・後は任せたまえ！」

オールマイトは再びVサインをし、ヴィランに向かって行った。

俺は緑谷、蛙水、峰田と共に意識の無い相澤先生を連れ避難を開始する。

「すげえ強いぜオールマイト！ やっぱだんちだぜ！」

「授業はカンペ見ながらの新人さんなのに・・・」

「・・・」

俺を含めた全員がひっきりなしにオールマイトとヴィランの戦闘を見つめている・・・確かに凄まじい戦闘だ。

相澤先生をいとも簡単に倒してしまったあの脳無を見事にあしらっていて、更に他の二人のヴィランに対しても隙を見せていない。

蛙水も峰田も安心の笑みを浮かべているが、緑谷だけが心配そうな顔をし、オールマイトを見つめていた。

「緑谷、どうした？」

「!? つ、造理くん!・・・何でもないよ」

明らかに動揺しているな。

何か心配事でもあるのか？ 確かにあのヴィラン達は強敵だが、伝えられる限りのヴィランの情報は伝えたから心配は無いはずだ。

現にオールマイとは優勢に戦っているし、仮に時間が掛かっても一足先に脱出した飯田が学校側にヴィラン襲撃を伝えに行っているはずだから、時期に先生方達が到着するはず・・・。

「おい黒霧・・・あれを出せ」

「!? あれを使うのですか？」

「オールマイトは俺達に対して全く隙を見せない。このままだとプロヒーロー達が到着しちゃう」

「・・・かしこまりました」

黒霧が個性を発動し、ワープゲートを開いた。

——すると

「!!?!」

「な、何だありや!?!」

「甲冑!?!」

ワープゲートから甲冑を身につけた人間が現れだした。

「行け、ガラクタ共」

死柄木の号令でガラクタと言われた奴らが一斉に動き出した。

「何だこいつらは!?!・・・はあっ!!」

甲冑達はオールマイトに襲いかかるが、オールマイトはそれをものともせずになぎ倒していく。

「姿は不気味だが、動きが遅い上に戦術もなっていない! こんな連中に遅れはとらんどぞ!?!」

「狙いはあんただけじゃないよ? オールマイト・・・」

「何?・・・!?! しまった!」

甲冑ヴィラン達の大半がこちらに・・・俺達に向かってきた。

ヴィランの狙いは俺達生徒か!?

「ぎゃあああ!! こっちに来るぞ!!」

峰田が思わず悲鳴を挙げ、緑谷、蛙吹も慌てた様子を見せる・・・このままではマズいな。

「お前達、先に行け! 俺が食い止める!」

「造理くん!」

「造理ちゃん!」

「造理!!」

俺は甲冑ヴィラン達に向かい個性で拳岩を大量生成し相手を吹き飛ばしてく・・・だが

「何!?! くっ! 《錬成!!》」

吹き飛ばされた甲冑ヴィランは直ぐに起き上がり向かってきた。

再び個性を発動し何度も攻撃を繰り返すが、甲冑共はそれをものともせずに向かってくる。

こいつらダメージを受けていないのか!? 動きも全く鈍らないぞ!

「造理少年!! 今助けるぞ!」

「させないよ? オールマイト!」

「生徒を気にしながら戦えるかな? 平和の象徴?」

「くっ!」

オールマイトは脳無と死柄木、黒霧に邪魔をされ身動きが取れずにいる。

こいつら力は全然大したことはないが、数が多い上に恐れが全くない!

腹に受けたダメージも大きい為、思うように戦えない・・・このままじゃキリが無い。

「造理くん!! SMASH!!」

「!? 緑谷!」

緑谷がやって来て甲冑達に攻撃を繰り返した・・・やっぱり来てしまったか、緑谷。

だが二人になったところで、ピンチであることには変わらない。

——せめて後2〜3人味方がいてくれたら・・・

「デク! 邪魔だ! どけっ!!」

「!? かつちゃん!!」

緑谷に迫って来ていた甲冑ヴィランが爆破で吹き飛ばされていった。

爆豪!? 避難せずに中央広場にやって来たのか!

——さらに

「気色の悪い奴らだな・・・」

甲冑ヴィラン達が氷漬けにされていく。

・・・轟、お前もやって来たのか・・・。

「造理! 緑谷! 無事か!」

「切島くん!」

切島までやって来た。

「お前たち、逃げなかったのか？」

「あつ!? ふざけんな！ 何で俺が逃げなきゃいけないんだ!!」

「爆豪！ 喧嘩腰に成るなって・・・」

「ヴィラン共からオールマイト殺しを実行する奴らを聞いてきた」

「どうやらこいつらは遭遇したヴィラン共を一掃してきたようだな、

爆豪と轟は実力派だからそれが出来てもおかしくないか・・・」

「おい！ こいつら氷漬けになってるのに向かってくるぞ!?」

「!? 何だこいつら!?」

切島と轟が驚く。

氷漬けにされているにも関わらずに向かってくるだと？

「死ね！ 糞が!!」

爆豪は何度も爆破で吹き飛ばしていくが、吹き飛ばされた甲冑ヴィランはまるでダメージが無いかのように起き上がり向かってくる・・・。

——おかしい、いくらなんでも異常だ、爆破ならともかく氷漬けにされたら生物ならかならず動きを止めるはず・・・？ 生物なら・・・まさか！

「試すしかないか、《錬成》」

俺は甲冑ヴィランの一人に向かってニードルを生成した・・・顔に刺さるように

「!? な、何やってんだよ造理!! いくらヴィランだからって殺しちまったら・・・え!?」

「!!」

甲冑ヴィランの顔を吹き飛ばしたがそこに中身・・・顔がなかった。

——やはりそうか！

「こいつら人間じゃ無い！ 恐らく個性で操作されている人形だ!!」

「人形!? マジかよ!」

「ダメージを受けない訳だ!」

個性で操られている無人の鎧兵团・・・それがこいつらの正体だ！
生物では無いから痛みを感じなければ体力を消耗することも無い、

場合によってはそのへんにたむろしているヴィランなんかよりよっぽど厄介だ。

オールマイトも俺達生徒の事が気になっていて、手をこまねいてしまっている……。

——ならば時間はかけられないな！

「全員聞いてくれ、こいつらを一掃出来る作戦を思いついた」

「!? 造理くん、本当に!」

「ああ、その為には全員の協力が必要だ」

「何するんだ!?!」

緑谷と切島が素直に聞いてくれるが

「あ!?! ふざけんなー! こんな弱い奴らオレ1人で十分だあ!!」

「動きが遅い上に戦術も成ってねえ、こんな奴らに遅れは取らねえ……」

爆豪と轟は聞く耳を持たない。

こいつら実力は高いが、状況把握が出来てないな……。

「俺に協力してくれ、あまり時間は掛けられないんだ」

「うるせえ! 必要ねえって言ってるんだよ!」

「自信が無いなら下がってろ、戦えない奴は邪魔だ」

——こいつら、完全に自惚れていやがるな。

これじゃあダメだ……挑発するか。

「お前ら揃いも揃って阿呆か!?!」

「!?!」

「オールマイトが俺達生徒の事が気になって思うように戦えないでいるんだ! 少しは視野を広げて状況を理解しやがれ! 大馬鹿野郎

共!!」

「!?!」

爆豪と轟、そして緑谷と切島もオールマイトに方に目をやると、そこには苦戦を強いられているオールマイトの姿があった。

あの脳無は確かに強く、死柄木と黒霧は厄介だが、オールマイトが全力を出せば倒せない相手では無いはずだ。

それが出来ないで居ると言うことは、襲われている俺達の事が気に

なって攻め辛く成っているに違いない。

「俺達が協力してさっさとこいつらを片付ければオールマイトは思いつきり戦えるんだ！ だから大人しく協力しろ!!」

「くっ!.....」

「.....」

爆豪も轟も押し黙る・・・そして

「.....作戦は何だ?」

「さっさと言いやがれえ!」

二人とも大人しく聞き入れてくれた。

流石に自分達が原因でオールマイトが困っていると言うことが解ければ、少しは自分達が置かれている状況を理解出来るはずだ。

「全員でこいつらを可能な限り一箇所に集まるように引き付けるんだ。その後、轟の凍結で相手の動きを止めて、俺の個性で止めを刺す!」

「出来るのか?」

「可能だ、むしろ相手が無人なら、やりやすい」

「分かったよ造理くん! 君を信じる!」

「いよっしゃあ! 行くぜえ!!」

「速攻で片付けてやらあ!!」

全員が行動を開始する。

さっさと片付けてオールマイトの不安要素を取り除かなければな

!

第18話

「どうした平和の象徴？ さっきまでの勢いが無いよ？」
「くっ！・・・」

脳無に苦戦を強いられているオールマイト、パワーもスピードもオールマイトに引けを取らない相手に手を拱いている。

脳無一人だけならば戦いようはいくらでも合ったが、ワープゲートの個性を持つ黒霧の存在が厄介であった。

脳無の動きを止めようとする黒霧がワープゲートを出し、妨害してくる。

しかし、何よりもオールマイトを困らせているのは・・・

「どうやら生徒の事が相当気になっているようですね？ オールマイト・・・」

オールマイトは生徒達の事が気になっていて、それをヴィラン達に見透かされている・・・。

後から現れた甲冑のヴィランの大半が生徒の方に向かってしまい、このままでは生徒たちが危ない。

一刻も早く救出に向かわなければならぬが・・・

「させませんよ？ 貴方はここに留まって貰います」

「むっ!？」

相手はそれを許してくれない。

さらに周りには甲冑のヴィラン達がオールマイトを逃がさないように円陣を組んでいる。

「いいがまだなオールマイト？、そんなに生徒達が気になるのか？」

言っとくけど助けに何て行かせないよ・・・？」

「くっ・・・！」

「オールマイトが居るにも関わらず生徒に死人が出れば、あんたが平和の象徴で無くなるも同義。そしてオールマイト・・・おまえを殺せばこのヒーロー社会は崩壊する。おまえは所詮、抑圧の為の暴力装置なんだよ。・・・暴力は暴力しか生まないのだと世に知らしめるのさ！」

めちやくちやな思想論を愉快そうな眼で言い放つ死柄木……。
「そういう思想犯の眼は静かに燃るもの……自分が楽しみたいだけだ
ろう嘘吐きめ」

「……バレルの早……」

オールマイトは相手が唯の愉快犯であることを見透かす。

しかしこのままではマズイのは確か、一刻も早くこの状況を打開し
なければ生徒達の身が危ない……。

「(どうするか?……)」

オールマイトはこの状況を打破する為に必死に思考する……。

——その時

「オールマイト!」

「!!」

突然、誰かに呼ばれ振り向くとそこには……。

「何だあれは?」

「巨人……ですか?」

とてつもなく大きな巨人の姿が合った……。

◇

「SMASH!!」

「オラァー!!」

「だあー!!」

「ふん!!」

緑谷、爆豪、切島、轟が順調に甲冑ヴィランを誘導している。

緑谷は打撃と背負投げを駆使し、爆豪は爆破の衝撃で相手を吹き飛
ばし、切島は自身の体を硬質化してタックルを繰り出し、轟は氷を利
用して相手を押し返す。

「《錬成》」

俺もヴィランを押し返し誘導する。

ここまでは順調だ、甲冑ヴィラン共は動きは単純だから誘導がしや
すい。

もう少しだ、……もう少し……もう少し……。

「轟！ 今だ!!」

「ああー!」

轟が個性を発動し、一固まりに成っていた甲冑ヴィラン共が次々と氷漬けに成って行き動きを止める。

一体一体を凍結させても無人である甲冑ヴィランは動いてしまうから、密集したところで一固まりに氷結してしまえば身動きはとれない……。

——条件は揃った!

「全員、離れている! 今から巨大なものをぶちかます!」

「何やるんだよ!?!」

「見ていれば解る!」

切島が質問してくるが、説明している時間が無いため受け流す……。

「《錬成!!》」

個性を発動し、俺立っている地面が山のように盛り上がっていく。

——そして

「なっ!?!」

「で、で、でけえっ!!」

「きよ、巨人!?!」

「!?!」

岩で出来た巨人……巨岩兵（ジャイアント・ストーン・ゴーレム）が完成した……ちなみに名前は適当である。

俺は個性で生成した物を操る事もでき、ゴーレムを造り操ることは造作もないこと、ただゴーレムの場合、常に触れ個性を発動し続けなければならなかったため、燃費はあまり良く無く動きも遅いため、戦いにはあまり向かないが、単純な破壊活動ならもってこいだ。

そして相手、甲冑ヴィランは轟の氷結で動きを封じられていて、何より無人である……。

——後は簡単だ!

「二体も残さずに潰してやる!」

俺は巨大ゴーレム……巨岩兵の頭の上に乗る、巨岩兵の腕を大き

く振りかざし・・・

ドガ！ドゴ！ドゴ！ドガ！ドガ！

氷漬けになっっている甲冑ヴィランを潰していく。

いくら相手が金属の甲冑で合っても、巨岩兵の腕の重さはザツと50トン・・・戦車よりも重い攻撃だ！ この攻撃を喰らえば、一たまりもない！

「止めだ!!」

ドガアアーン!!

止めの一撃！ 巨大な衝撃音が鳴り響き土煙が舞い上がった。

「すげえ！ すげえ！ 全部ペチャンコになってやがる!!」

「すごいよ造理くん！」

「・・・チツ！」

「・・・」

切島と緑谷は歓声を挙げ、爆豪は何故か舌打ちをし、轟は沈黙をしていた。

これでこちらに向かって来た甲冑ヴィランは全て片付き俺達の危機は去った・・・。

オールマイトが居る方に眼を向けると、オールマイトだけではなくヴィラン達までこちらを向き驚きの顔を見せていた・・・。

——そんなに驚くことか？・・・まあ、それはいいとして、これでオールマイトの不安要素は取り除けたはずだ！

「オールマイト!!」

「むっ!？」

声を掛けたオールマイトは驚きの表情を見せていた。

何故かヴィラン達も驚き手を止めていたがそれはそれで好都合だ。

「こっちは片付きました！・・・心置きなく、ヴィランをぶっ倒してください!!」

俺はゴーレムから降りてそう伝える。

「オールマイト！ こっちはもう大丈夫です!!」

「ヴィラン共をぶっ殺せえ!!」

「殺しちやダメだろ!？」

緑谷も爆豪も声援を送る。

——さあ、オールマイト……心置きなく戦ってくれ!!

◇

——オールマイト視点——

「全く君達と言うやつは……」

あれだけの数のヴィランを倒してしまうなんて……何て頼もしい生徒達だ……!

そして何より自分が情けない! 本来、生徒である彼らを戦わせる何て事は言語道断! 彼らに無茶をさせてヴィランと対峙させてしまったのは私の落度だ! 私をもっとしっかりしていれば……。——いや よそう、誠に遺憾だが、これで心配要素が減ったのは確かだ。

恐らく彼ら……造理少年、爆豪少年、切島少年、轟少年……そして緑谷少年、今の私の心境を悟っていたからこそあのような無茶をしたのだろう……。

生徒達に心配をかけさせてしまうなんて……私はいつの間にか、心まで無抜けさせてしまっていたようだな……?

ならばこそ、彼らに見せてやらねばならない……プロの本気と言うやつを!!

「脳無、黒霧、オールマイトをさっさと殺れ……俺は子供をあしらつてくる」

生徒達の方に向かうつもりか?……やらせはしない! 何故なら私は……

平和の象徴なのだから!!

「!!?」

「ヴィラン!! 覚悟!!」

◇

「「!!?」」

うっ・・・何だ今のは!? オールマイトを見ていたら一瞬だがゾツとしてしまった!

他の皆も俺と同じような素振りを見せている・・・まさか威圧だけで周囲に此処までの影響を与えるのか!?

オールマイトが脳無に向かって拳を振りかざし、対する脳無も拳を振りかざす・・・すると

「のあつ!!」

「がつ!」

「くっ!」

「うあつ!!」

オールマイトと脳無の拳が交わった瞬間、凄まじい音と衝撃波が発生して全員が思わず後ずさっていた。

二人は物凄いスピードとパワーを用い、真正面からの殴り合いを繰り広げている。

「死柄木! これでは近づけません!」

「くっ! だが脳無にはショック吸収があるんだ! いくら攻撃したところで「それはどうか?」・・・!?!」

「無効」ではなく「吸収」ならば限度があるんじゃないか!? 私の100%を耐えるならば・・・さらに上からねじ伏せよう!!」

「!!?!」

オールマイトの攻撃が更に早くなり、脳無はその攻撃に追いつけずにいる。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの!!」

まるで俺達生徒に投げ掛けているようだ・・・。

もう脳無は完全にオールマイトに抵抗出来ないでいる。

「ヴィランよ!! こんな言葉を知っているか!!?」

オールマイトが大きく振りかぶった。

「Plus Ultra!!」

「!!!?」

オールマイトの拳をくらった脳無はそのまま吹き飛び天井に衝突、

更にその天井を突き抜けて遙か彼方に吹き飛んでいった……。

シヨック吸収が出来ない程のパワーと超再生が追いつかないほどのスピードを持って相手を粉碎し吹き飛ばす……正面から完全無欠に相手を倒してしまった。

これが平和の象徴、オールマイトの実力か……！

「さてとヴィラン、お互い早めに決着をつけたいね……」

「よくも俺の脳無を……このチートがあ！」

対オールマイト用の戦力が攻略されたことで、死柄木は焦りを見せていた。

まあ当然だな、これほど圧倒的な力を見せつけられてはどうにもならないだろう。

オールマイトを攻略する術を失ったも同義だ、……後はオールマイトがさっさと二人を無力化すれば……

「……どうした？ 来ないのかな!? クリアとかなんとか言っていたが……」

オールマイトが死柄木達を挑発している。

——？ 何か妙だ……？

「出来るものならしてみろよ!!」

——おかしい、やっぱりおかしいぞ？ 何故さっさと相手を無力化しなんだ？ オールマイト！ 脳無が居なくなっただから、あんたの実力なら簡単にねじ伏せられるはずだ！ 何故動かない、オールマイト!?

——まさか、もう戦う力が残されていないのか!? だとしたらマズイ!!

「ガラクタ達！ オールマイトを取り押さえなさい！」

「むっ!?」

「!!?!」

黒霧が出した命令でオールマイトの周りを囲んでいた甲冑ヴィラン達が動き出した。

「死柄木 弔！ 慌てている場合ではありません！ まだこちらには戦力があるんです……まだやれるチャンスがあります！」

「・・・うん・・・そうだな、目の前にラスボスがいるんだ・・・やるっきゃないぜ!」

ヴィランが動き出してしまった! それなのにオールマイトは動きを見せていない!

やっぱりオールマイトはもう戦う力を残していないんだ!

「死んでくれ! オールマイト!!」

「その命、貰い受けます!!」

まずい! ここからでは間に合わな・・・

「オールマイト!!」

「!!」

「なっ!・・・緑谷!!」

緑谷が死柄木と黒霧の直ぐ側まで迫っていた。

いつの間にも!?!・・・あの一瞬であそこまで移動したのか!?

「オールマイトから離れる!!」

「させませんよ!」

黒霧がワープゲートを開き、そこから手が出てきた。

死柄木の手か!?! マズイ! 緑谷がやられ・・・

「ぐあっ!?!」

「!!」

死柄木の手から血が吹き出た・・・まさか

「来たか!!」

「ゴメンよ皆、遅れて!」

その場に居た全員が出入り口に目を向ける。

其処には・・・。

「1-A クラス委員長、飯田天哉!! ただいま戻りました!!!」

飯田と共に雄英の先生方、名だたるプロヒーロー達がいた・・・役目を無事果たした飯田!

先生方は速やかに動き出し、スナイプの銃撃、プレゼント・マイクのボイス、エクトプラズムの分身、・・・次々とヴィラン共が倒されていく。

「ぐっ!! ガラクタ共、盾になれ!! 黒霧! ゲートを・・・」

「直ちに・・・ぐっ! これは・・・!?!」

「僕だ・・・!!」

スナイプの銃弾の嵐を受けている死柄木と黒霧が撤退をしようとするが、重症を負い倒れ込んでいる13号が個性を使い、死柄木達を吸い込もうとしていた。

だが、流石に距離がありすぎた為、思うようには行かず、死柄木達は撤退を始めた。

「今回は失敗したけど、今度は殺すぞ・・・平和の象徴オールマイト!!」
死柄木はそう言い残し、去っていった・・・。

残ったヴィランは先生方が捕縛していき、各エリアに散らされていたクラスメイト達も無事に保護されていた。

危機は去ったか・・・。

緑谷とオールマイトは大丈夫だろうか? オールマイトは何故か煙が舞い上がっていてよく分からないが、緑谷は地面に倒れ込んでいた。

「緑谷あ!! 大丈夫か!?!・・・うわっ!!」

切島も心配なのか緑谷に向かって走っていくが、切島の目の前に突然壁が出現した。

「生徒の安否を確認したいからゲート前に集まってくれ、けが人はこちらで対処する」

セメントス?・・・なるほど、あの壁はセメントスの個性か・・・でも何で、壁を造る必要が?・・・まあいいか。

先生方が再びゲートに集まっていくところを見ると、どうやら危機は完全に去ったようだな。

これで一安心だ・・・これでようやく・・・。

「造理い! ゲートに移動・・・!?! つ、造理!! どうした!!」

「!?!」

倒れられる・・・。

個性で分解してしまった腹の傷を無理やり塞いでいたが、思いのほかダメージは大きく、戦いが終わったことで気が抜けてしまい、流石

に歩くことが出来なくなっていた。

「悪い、ちよつと休む・・・誰か運んでくれると助か・・・る・・・」
「造理!! 先生・・・方、大変・・・だ・・・!!」

声も聞き取りづらくなっていき、俺はそのまま意識を失っていった・・・。

第19話

「つてえ……」

都内にある繁華街のバー……そこには雄英から逃れ、負傷し倒れる死柄木の姿があった。

「両腕両足打たれた……脳無もやられて手下どもは瞬殺……子供も強かった……」

倒れ込みながら悔いる死柄木。

「平和の象徴は健在だった！……話が違どうぞ先生！」
『違うよ』

死柄木の目線の先にはモニターがあり、そのモニターから音声が流れる。

『ただ見通しが甘かったね』

『うむ……なめすぎだな』

モニターからもう一人別の人間の音声が流れる。

『ところでワシと先生の共作……脳無は回収してないのかい？』

「吹き飛ばされてしまい正確な位置座標が把握出来ないので。探す時間も取れなかった……」

黒霧がその問に答える。

『せっかくオールマイト並みのパワーにしたのに……まあ仕方がないか？……残念』

「パワー……そうだ、一人……オールマイト並みの速さを持つ子供がいたな……」

『……へえ』

死柄木の言葉にモニターの向こうにいる人物が興味を抱く。

「それにもう一人厄介な子供……」造理 錬 がいました
『造理？……あゝ、あの有名な……』

モニターの向こうのもう一人の人物が関心を抱く。

『“錬金術”の個性を持っていて、金塊やら何やら色々な物を造り出すことが出来る子供だな』

『彼の個性は前々から欲しいと思っていたよ。あれは使い方次第で

は、僕の体も治せそうだしね。」

「まさか英雄に居るとは・・・彼のおかげでガラクタ達も無力化されてしまいました」

『あのガラクタは捨て駒の為に用意したものだ。いくらやられても問題は無い』

「あのガキどもの邪魔がなければオールマイトを殺せたかもしれないのに・・・ガキがっ・・・ガキが!!」

倒れこみ血を流しながら死柄木は怒りをあらわにする。

『悔やんでも仕方がない・・・今回だって決して無駄ではなかったはずだ。じっくり精銳を集めよう。』

「・・・」

『我々は自由に動けない、だから君のような“シンボル”が必要なんだ・・・死柄木 弔、次こそ君という恐怖を世にしらしめろ!』

「・・・ああ」

モニターの向こうに居る人物に対し、死柄木は強い決意のようなものを見せていた・・・



「手術は無事に成功、容態も回復に向かっている・・・これでもう安心だよ」

「ありがとうございます」

場所は都内にある病院・・・現在、俺は病院のベッドの上で医師の診断を受けていた。

USJにてヴィラン共を追い返した後、俺は意識を失いそのまま病院に救急搬送されたと言う・・・。

医師の話では俺の容態は筋肉繊維の損傷だけでなく内臓器官までダメージを受けていたらしく、搬送されてすぐに緊急オペが施されたらしい。

目を覚ましたのが今朝であり、ヴィランの襲撃から一日が過ぎてい

た。

それからしばらくした後、警察がやって来て、ヴィラン襲撃の後のことを詳しく聞かせてもらった。

生徒は俺と緑谷以外は全員ケガ一つ無く無事だったようだが、先生達・・・特に相澤先生が酷い状態のようだ。

聞いたところ”両腕粉碎骨折”に加え”顔面骨折”、さらに”眼窩底骨”が粉々になっており、眼に何かしらの後遺症が残る可能性があるとのこと・・・。

他にも13号の方は背中から上腕にかけての裂傷が酷いが命に別状はなく、病院で治療をうければ問題は無いといい、オールマイトに關してはリカバリーガールの治療で処置可能が可能とのこととで学校の保健室に向かったという・・・。

緑谷は両足を骨折したらしいが、リカバリーガールの治療で充分とのこととオールマイトと共に保健室で治療を受けたみたいだ。

「問題ないようだな、造理・・・」
「!!?」

突然、誰かに話しかけられ振り向くと、そこには病人服を着た全身を包帯で巻かれた不審者の姿があった。

「何を驚いている?」

「・・・相澤先生・・・ですか?」

「見れば分かるだろう」

「無茶を言わないでください」

見れば分かると言うが、顔はすべて包帯で隠され辛うじて目だけ見える状態だし、服装も違うから声を聞かなければ誰だかさっぱりわからん。

「動いて平気なんですか?」

「先ほどリカバリーガールの治療を受けて、動ける程には回復した・・・今日中に退院するつもりだから・・・」

それほどの重傷を負いながらすぐに次の行動に移るとはさすがプロのヒーローだな。

聞いたところによると今日の雄英は臨時休校になっているらし

く、明日には通常勤務に復帰しなければならないから、リカバリー
ガールに無理を言って治療を受けたらしい。

「無理をなさらず休めばよろしいのに……」

「そんな悠長なことはしてられん……二週間後には雄英体育祭が控
えているからな」

——雄英体育祭。

日本のビッグイベントの一つで、形骸化してしまったオリンピック
の代わりとなっているスポーツの祭典である。

日本の全国民が熱狂し、プロヒーロー達もスカウト目的で注目す
る、ヒーローを志す者なら絶対に外せないイベントだ。

ヴィランに侵入されたにも関わらずに開催に踏み切るとはずいぶ
ん強気な姿勢だな？……いや、逆に中止をしたら雄英の危
機管理体制が疑われてしまうか……。

「問題なのはお前だな」

「俺ですか？」

「お前の容態だがリカバリーガールの力を借りても雄英体育祭当日ま
でに完治させるのは難しいとの「問題ありませんよ」……？」

俺の個性、”錬金術”は医療に関しても融通が効いて、大抵のケガ
なら治すことができる。

リカバリーガールの治療も加われば、2〜3日もすれば完治でき
るはずだ。

「便利な個性だな」

「何でも出来るように心がけていますからね」

「だが他にも問題があるだろ？お前の場合は……」

「……」

それは十分に分っている。

雄英体育祭は日本中が注目するイベントであり当然その様子もテ
レビ中継される……それも全国ネットでだ。

雄英体育祭で活躍すれば当然注目の的になり、ヴィランに狙われて
いる俺からすれば襲いに来て下さいと宣伝しているようなものだ。

「このことに関してはお前の入学当初から議論されていることだ。お

前を参加させないという意見も出てい「その必要はないですよ」……何？」

相澤先生の言葉を遮り口を挟ませてもらった。

確かに雄英からすれば生徒である俺を危機に陥れるような真似をするわけにはいかないだろうが、もうそんなことは言つてられないだろう……。

「正直、ここそそと隠れる意味はもうありません。……ヴィラン襲撃を受けた上に相手を取り逃がしてしまったのですから俺が雄英にすることは既にヴィラン達に知れ渡っていると考えるべきです」

「……………」

あのヴィラン連合と名乗る集団、あれだけ大規模な組織が出来上がっているということはヴィランの活性化は思ったよりもずっと早く進行していると言うことだ。

もしそうなら今までよりもヴィランに襲われる頻度が増えてしまうことは明白であり、雄英体育祭に出ようが出まいが差ほど状態は変わらない……。

鉄壁の要塞であるはずの雄英でさえも遅れをとってしまうのであれば監獄にでも入らない限り安全な場所などない……。

——ならば

「寧ろ積極的に参加して俺の実力を知らしめる方がいいでしょう……俺に手を出せば痛い目に合うぞ……と？」

俺はあえて強気的笑顔で相澤先生に言い放った。

「ずいぶん強気な考えだな」

「受け身の姿勢でいるより、攻める姿勢でいる方が安全なターンに入っただけです。逃げ隠れするのもにも限界がありますし、何より——」

俺は一呼吸をおく。

「……俺は他人なんかアテにするしてませんから」
「……………」

俺の言葉に相沢先生は返事を返さない。包帯の隙間から見え隠れする瞳がわずかに細ばっているのだけが、見て取れた。

「……上等だ。お前の参加に関しては俺が学校側に伝えておこう」

「ありがとうございます」

何色を示されるも、先生も理解してくれたようだった。

——その時

「ならさっさと治療を済ませなきゃね?」

「!?」

「リカバリーガール!」

雄英の保険医、リカバリーガールがいつの間にか相澤先生の隣に立っていた。

相澤先生の治療が終わった後、医師と相談をしていたらしく次は俺の治療を施すためにやってきたらしい。

「本来なら教師としては止めなきゃならないけど、そこまで覚悟をしているなら止めるのは野暮ってもんだね・・・なら後押しをするだけだよ」

「ありがとうございます。リカバリーガール」

「イレイザーヘッドも病室に戻りな、まだ安静にしてなきゃならないからね」

「分かってます。それじゃ造理、雄英体育祭の詳細は後日に詳しく伝える」

そう言い残し相澤先生は自分の病室に戻っていった。

「だけど本当にいいのかい?」

「?」

「あんたの言ってることはかなり無謀なことだよ? 人間てえのは欲深い生き物だから、無駄に敵を作ることにもなりかねない」

リカバリーガールは俺を心配してくれているようだが、遅かれ早かれこうなることはわかっていたことだ。

「覚悟ならとうの昔から出来てますよ。・・・一人で生きることになった時から」

「・・・そうさね」

どの道避けては通れない道・・・ならば、突き進むしかない。

「それじゃ治療を始めるよ」

「お願いします」

俺はリカバリーガールの治療を受け、再び眠りについた。

第20話

「うおおお・・・何ごとだあ!!?」

——と、麗日が叫ぶ。

場所は雄英学校の1―Aクラスの教室の前。

ヴィランの襲撃から二日目の放課後、1―Aの教室前に生徒がごつた返していた。

二週間後に雄英体育祭を控えているが為に他のクラスの生徒達が視察目的で訪れて来たようだ。

特に1―Aクラスはヴィランの襲撃に耐え抜いたこともあって余計に注目を浴びてしまっている。

「意味ねエからどけ、モブ共」

そんな彼らに対して爆豪は失礼な物言いをする。

クラスメイト達も思わず突っ込んでしまうが・・・

「どんなもんかと見に来たが、ずいぶん偉そうだなあ・・・」

それに反応する奴もいた。

「こういうの見ちゃうとちよつと幻滅するなあ・・・」

人込みの中から爆豪とはタイプが違った目つきの悪い生徒が前に出てくる。

「普通科とか他の科ってヒーロー科に落ちたから入ったって奴がけっこういるんだ・・・知ってた?」

ふてぶてしい態度でAクラスのメンバーにそう告げる普通科の生徒。

「敵情視察?・・・少なくとも俺は、調子のとつと足元ゴツソリ掬っちゃうぞって、宣戦布告しに来たつもり」

大胆不敵にそう告げる・・・さらに

「隣のBクラスのモンだけどう!! ヴィランと戦ったつっから話聞こうと思っただがよう!! エラく調子づいちゃってんなオイ!!!」

本番で恥ずかしい事なっぞ!!」

またしても不敵な奴が人込みを押しつけて現れる。

それに対して爆豪は涼しい顔をして無言を貫き、周りのクラスメイ

ト達は顔に汗をたらしながらじつと爆豪を見つめていた……。

——だが、その時

「邪魔だ通れないだろう！」

「なっ!？」

「のあっ!？」

「!!?」

突然、前に出てきた生徒達が押しつけられた。

そこには……

「ドアの前に群がるんじゃない、人の迷惑を考えろ！」

「造理くん!？」

”造理 錬”の姿が合った……。

◇◇

「何だあの人込みは？」

ヴィランの襲撃から二日目のお昼過ぎ、俺は無事に退院することが出来、現在は雄英高校1-Aクラスの教室の近くにいる。

本来なら退院してそのまま家に帰るつもりだったが、教材やら着替えなどを学校に置きっぱなしにしてしまった為、こうして学校まで足を運んだのだが、いざ来てみると教室の前に人込みが出来てしまっている。

「意味ねエからどけ、モブ共」

「どんなもんかと見に来たが、ずいぶん偉そうだなあ……」

何やら変なやり取りが聞こえてきた。

声からすると爆豪か？ 他は分からないが、どうやらこの人だけかりは雄英体育祭に向けての敵情視察のようだ。

Aクラスはヴィランの襲撃もあってBクラスからも注目を浴びてしまってるようだな。

——だが、教室に入ろうとする俺からしたら迷惑でしかない。

俺はさっさと人込みを掻き分けて・・・

「邪魔だ通れないだろう！」

「なっ!?!」

「のあっ!?!」

「!!?!」

「ドアの前に群がるんじゃない、人の迷惑を考えろ！」

「造理くん!?!」

教室に入った。

「造理くん! 入院してたんじゃないの!?!」

「今日の昼過ぎに退院したんだ。ここには荷物を取りに来ただけだ」

「造理! 無事だったんだな！」

「心配したよ！」

「・・・生きてやがったか」

クラスのみんなが寄ってくる・・・爆豪、最後の言葉は失礼だぞ？

俺は適当に話した後、荷物をまとめて教室を出ようとするが

「ヒーロー科に在籍する奴は皆こんなやつなのかい？ 本当幻滅するなあ」

俺の前に腐った眼をした生徒が現れる。

この声からすると爆豪と言いつ争っていた奴か？ 動きや体つきを

見たところ平凡以下のように思えるが・・・これで本気でヒーローを目指しているのか？ だとしたらかなりの愚か者だな。

「おうおう! よくも俺を押しつけてくれたなあオイ!! お前もヴィランと戦ったからって調子づいちゃってじゃないか!?!」

そしてまたうるさいのが現れた。

Bクラスの生徒のようだが言ってることが滅茶苦茶だ。

敵情視察なら別に気にはしないが、いちやもんをつけられるのは本当に迷惑だ。

俺はポケットからボールペンを取り出し・・・

「お前も調子のつってつと足元掬っちゃう「黙れ!」っ!?!」

「!!?!」

この目が腐った奴の眼にボールペンを突き付けた。
ボールペンは眼の数ミリの所で止まり、ボールペンを突き付けられた本人は尻餅をついた。

周りで見ていた連中はあまりの出来事に驚き押し黙ってしまい、尻餅をついてしまっているこいつも何も言えないでいる。

「つ、造理くん!...何を!?!」

緑谷が思わず声を掛けて来たが俺はそれを無視し、この尻餅をついてヘタレ混んでいる奴に声をかける。

「...そんなに怖かったか? ヒーロー志望?」

「!?」

「もしヒーローになったらこんな恐怖は日常茶飯事だろうなあ...」

「!!!?」

俺の言葉にその場にいた全員が驚きの顔を見せる。

「まったく、そろいもそろってめでたい奴らだな? ヒーローの大前提は殺し合いであって、A組の連中はそれを乗り切ったんだぞ。死の恐怖を乗り切った連中が、この程度で怯える奴に遅れをとると思ってるのか?」

「うっ!!!?」

「くっ!!!?」

俺の言葉にうるさかった二人... B組の奴もすっかり押し黙ってしまった。

他の連中も静まり返っているが、野次馬同然のこいつらにはいい刺激になるだろう。

「わざわざヒーロ科を偵察してるといふことは、ここにいるほぼ全員がヒーロ科試験に落ちたんだろうな? 個性の相性ゆえに落ちた奴もいるだろうが、その程度のハンデならクリアをしている奴らはザラにいる。...つまり、そんなハンデさえ乗り越えられないお前たちは、無能か間抜けというわけだ。...そんな間抜けになにができると言うんだ? ご機嫌とりか、腹芸か?」

「!!!...!!!」

その場に居た全員が俺の言葉に耳を傾けていた。

後ろで控えているクラスメイト達も、真剣な面持ちを見せる。

「力も知恵もないヒーローなんて、飾りにすらならないんだよ。ヒーローを目指すのは勝手だが、何事においても征するのは『力』だ。力無きものは何も得られないし、何も与えられない。弱さは悪ではないが、……『罪』だ」

「……………」

「もし、少しでも弱さに抗う気があるなら、せいぜい悪知恵でも働かせている。口先だけのスカタンなんかに死んでも遅れとつたりはしないし、なんなら、食事の毒でも持つて夜襲でもかけてこい。……以上だ。」

俺はそう言い残し、教室を後にした。

要らぬことをしたかもしれないが、これ以上教室の前に群がられても迷惑なだけだ。

体育祭まで後、二週間……理由はともあれ、勝ちに行く決めてはいる以上、しっかりと自身を練り上げなければならない。

俺は学校を後にし、家への帰路をたどった。

第21話

『群がれマスメディア！ 今年もお前らが大好きな高校生たちの青春
暴れ馬・・・雄英体育祭が始まディエビバディアアユレディ!?』
プレゼント・マイクの実況と共に大量の花火が打ち上がる。

ヴィランの襲撃から二週間・・・時間はあつという間に過ぎ去り、俺
たちA組は無事に雄英体育祭 本番当日を迎えた。

『1年ステージ！ 生徒の入場だ!! ヒーローの卵たちが我こそはと
シノギを削る年に一度の大バトル!!・・・どうせてめーらのお目当て
はこいつらだろ!? ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神
で乗り越えた奇跡の新星!! ヒーロー科!!・・・一年A組だろおお!!』
最初に入場したのは俺たちA組、会場に入ると何方にも観客であ
ふれ返っていた。

一般客からサポート会社の役員、そして何人ものプロヒーローがス
カウト目的でやって来ており、俺たちA組はヴィランの襲撃を乗り越
えたこともあつて大注目を受けている。

クラスの人々を見してみると緊張でソワソワしている者も居れば
冷静さを保っている者もあり、闘志を燃やす者などもいる。

続いて入場してきたのは同じヒーロー科のB組、それに続いて普通
科、サポート科、経営科と続々と入場を果たすが、A組の引き立て役
のような雰囲気になっており、何人かは気怠そうな顔をして愚痴を垂
れていた。

「選手宣誓!!」

1年の主審である18禁ヒーロー”ミッドナイト”が手に持った
鞭を鳴らしながらそう叫ぶ。

SM的なコスチュームを身に纏いグラマーなボディを見せつける
かのようなそのしぐさは男子生徒の注目を浴びていた。

——しかし、高校なのに18禁と言うのは有りなのか？ 俺と同
じような事を考えていた奴が思わず声に出しているが、ミッドナイト
が鞭を鳴らし黙らせていた。

「選手代表!! 1—A・・・爆豪 勝コ!!」

選手代表として爆豪の名が挙げられた。

何でも雄英体育祭の宣誓は入試試験で1位を取った者が行うことになっていくらしく、入試1位通過の爆豪が宣誓をすることになったらしい……。

名前を呼ばれた爆豪は歩き出しステージ台に立ち……。

『せんせー……』

マイクに向かって宣誓を始める……だが

『俺が一位になる』

「調子のんなよA組オラア!!」

「ヘドロヤロー」

大勢の生徒と観客の前で堂々と優勝宣言をする爆豪。

あまりの自意識過剰な言葉に生徒達からブーイングの嵐が飛び交うが、当の本人はまったく気にしていない様子……。

ステージ台から降りこちらに戻ってくる爆豪……途中、挑発するかのように緑谷に肩をぶつけるがそれでも顔は変わらない。

——そのまま元の位置に戻るかと思っただが……

「何かようか？」

「……」

俺の横で立ち止まり、俺を睨みつけてくる爆豪……そして

「てめーは俺がぶつ殺す!」

俺に向かって宣戦布告をしてきた。

そう言い残して爆豪は元の位置に戻っていったが、どうも目の敵にされているようだ……と言うよりも、今現在で俺に対するA組の反応は余り良くない。

何人かは俺に対してあまりいい顔をしておらず、特に轟は爆豪同様に俺を睨みつけている。

何故このようなことに成っているかには事情がある……。



く雄英体育祭・開始前く

「皆！ 準備はできているか!? もうじき入場だ!!」

大きな声で皆に言い渡す飯田……。

場所は1―A組の控室、クラスのみんなは雑談などを交わしリラックスをしていた。

何人かは本番前で緊張をしているが、精神統一なり何なりをして気持ちを整理している。

対する俺も眼を瞑り精神を集中させていた。

——その時

「お前には勝つぞ、緑谷」

「轟くん……」

轟が緑谷に対して宣戦布告をしていた。

話の内容からするとオールマイトに目を掛けられている緑谷が気に入らなかつたのか、少しケンカ腰のようにも思え、切島が止めようとするが……

「皆……他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ……」

緑谷が真剣な面持ちで言葉を発した。

「僕も本気で獲りに行くー!」

轟に向かってそう宣言する緑谷。

何が合ったのかは分からないが、あれは覚悟を決めた人間がする顔だ。

——本気のような緑谷。

緑谷の言葉を受けて轟も上等だと言わんばかりの顔をして返事をし、それを見ていた爆豪は二人を睨みつけていた。

他の皆もそのやり取りを静かに見守っていたが、俺は一人席を立ち控室から出ようとする。

——だが、

「さて造理」

「？」

控室から出ようとしたら轟が俺を呼び止める。

「何だ、轟？」

「お前にも言っておく……お前にも勝つぞ」

俺にも向かって宣戦布告をしてきた。

どうやら戦闘訓練やヴィラン襲撃の時のことで俺のことも気に入らなかったようだ……。

——この際、ハッキリ言っておくべきだな……。

「お前じゃ無理だ」

「何っ!？」

「ハッキリ言っただけのお前じゃ俺には勝てない」

「!!?」

轟に向かってそう言い放ち、俺はさらに言葉を続ける。

「正直、今このクラスで俺が注意すべき相手は緑谷と飯田、後は麗日くらいだな。……他は取るに足らない」

「!!?」

「……て、おい造理!」

「失礼だぞ造理くん!」

俺の言葉にクラス全員が驚きの顔を見せ、何人かは俺を睨みつけて来た。

まあ当然だな、言い方を変えればクラスのほぼ全員に”お前らは雑魚だ”と言っているようなものだからな。

だが、今回の雄英体育祭は俺も本気で獲りに行くと決めている以上、遠慮はしない。

俺は控室のドアを開き……

「優勝は俺がするよ。……負ける確率は一割未満だ」

「!!?」

去り際にそう言い渡し、控室を後にした。



〜現在〜

——と、言うことが合ったが為にクラス皆の俺に対する態度はあまり良くない。

かなり失礼なことをしたと言うことは理解しているが、これは俺の目的を達成する為の布石に過ぎない。

これだけ挑発すればあいつらは躍起になって俺に張り合つて来るはずだ、その中で実力を示し活躍すればテレビの向こうで野東っているヴィラン達に対していい牽制になる。

クラスの皆には悪いが、いい踏台に成ってもらおう……。

『さーて早速第一種目に行きましょう！ 最初の種目は……コレ!!』
”障害物競争”

会場の巨大モニターに映し出されたのは種目は”障害物競争”……。

ミッドナイトの説明によると計11クラスでの総当たりレースであり、コースはこのスタジアムの外周で約4キロとのことだ。

『我が校は自由さが売り文句！ ウフフフ……コースさえ守れば何をしたって構わないわ!』

話を聞く限りではこれはいわゆる予選であり、この第一種目で一気に振るい落としを掛けるのが目的のようだ……。

——ならばやる事は簡単だな。

『さあさあ位置につきまくりなさい……』

スタート地点の出入り口が開き、三つあるランプが徐々に点滅していき全員が身構える。

「「「……」」」

最初に仕掛けるのは……

『スタ————ト!!』

スタート開始直後!!

第22話

『第一種目は障害物競争!! この特設スタジアムの外周を一周してゴールだぜ!! ルールはコースアウトさえしなければ何でもアリの残虐チキンレースだ!! 各所に設置されたカメラロボが興奮をお届けするぜ!』

「おい・・・俺ここに居る必要ないだろ」

スタジアムの実況室でプレゼント・マイクと相澤先生のマイク越しにしゃべっていた。

障害物競争を熱烈に実況するプレゼント・マイクに対して相澤先生は思わず愚痴を垂れ流していた。

『それにしてもスタート開始直後からいきなり波乱だな! トップの1-Aの”造理 錬”が独走状態だ!!』

「あいつはこの障害物競争の本質をちゃんと理解していたな。だからこそ誰よりも素早く行動を起こせた・・・」

現在レースの状況は俺がトップであり、それに少し離れた位置に轟、さらに離れた位置に1-A組の各メンバー、そしてさらに離れた位置その他の生徒達が走っていた。

俺は二番手の轟と大きく差をつけていて他が第一関門に差し掛かろうとしていた。

何故に俺がこれほどまでに他の生徒と差を付けているのか・・・それはスタート開始直後に理由がある。



くスタート開始前く

『さあさあ位置につきまくりなさい・・・』

18禁ヒーロー、ミッドナイトの掛け声と共にスタート地点の出入り口が開く。

現在、俺はスタート地点から少し離れた位置、スタート地点と会場の中央のちょうど間くらいの位置に居る。

三つあるランプが徐々に点滅していき全員が身構える。

「「「・・・・・・・・」」」

静まり返る一同。

この場にいるほぼ全員がスタート地点の方に全神経を集中している。

——好都合だ！

『スタ——ト!!』

「《錬成・大分解》」

「「!!!」」

俺はスタートと共に地面に向かって個性を発動した。

「うあつ!!」

「な、何だ!!」

「じ、地震!!」

半径数十メートルに渡る地面を分解した。

かなり大規模な分解であった為に会場が一瞬だけ揺れ、スタートと共に動き出した選手達のほとんどが転倒していた。

あまりの出来事に全員が戸惑いを見せていたが、これこそが俺の狙いだ。

「ぐあつ!!」

「痛い!!」

「踏まれた!!」

俺は転倒して戸惑っている選手達を踏み越えてスタートの扉を潜っていった。

『ハイハイハイ!! 突然のハプニングの中で1—A組の造理がスタートして行ったぜ!!』

「これは造理の仕業だ。妨害が許されているこの競技で真つ先にそれを実行したようだな」

『こいつはデンジャラス!! 見た目はインテリ系だがやることがえげつねえぜ!!……にしても会場が滅茶苦茶になっちまったな』

「造理が戻ってきたら直させればいい」

『さあー、造理のスタートに気づいた奴らが起き上がって次々とスタートしていくぜ!!』

俺は周りや実況を突き進んで行った……。

◇◇

〜現在〜

……と言うわけで現在俺はトップを独走している。

スタートゲートでの妨害も考えていたが、あの狭いゲートでは人が入り組みすぎて、他の奴もゲートでの妨害を考えている奴が居ることは直ぐに予想がついたため取りやめた。

現に轟がゲートで妨害をしていたし……。

しかし作戦は十分に成功し俺はそのままトップで第一関門にたどり着く。

——そこには

「THOOM」

「……こいつはしばらくだな」

入試の実技試験に現れた仮想敵の姿があった。

『さあいきなり障害物だ!! まず手始め、第一関門口ボ・インフェルノ!!』

目の前に大量の仮想敵、しかも邪魔ギミックとして現れた超大型仮想敵も数多く存在しコースを完全に塞いでいた。

これだけの仮想敵をそろえるとは雄英はずいぶんお金を掛けているな？ だが、これだけ多くの仮想敵を相手には時間のロスは必死だ。

——ならば

「THOOM」

『おーっとロボ・インフェルノがトップの造理に向かって突進!! そのまま踏みつぶされたぞ造理!! 死んでないだろうな!!……あれ?』

「第一関門を突破したな、造理……」

相手にしなければいい、俺は仮想敵を退けて先に進んだ。

『オイオイどういうことだ!? 踏みつぶされたと思っていた造理がいつの間にか第一関門を突破して先に進んでるぞ!!』

「造理は踏みつぶされる直前に個性を使って地面を分解し穴を掘ったんだ。そしてそのままコースの地下を掘り進めてロボ・インフェルノの後方に出た・・・」

『戦わずにして関門を突破！ 何てスマートな野郎だ!?!』

無駄な戦いをすることは愚かな事、それにこうしておけば後続達を足止めすることも出来る・・・一石二鳥だ。

狙いは見事に的中し、後続の生徒達は大型仮想敵に足止めを受けていた。

——だが

「もつとすげえのを用意してもらっていいもんだな」

突然、大型仮想敵が氷漬けになった・・・轟の仕業だな。

「クソ親父が見てるんだ、思い通りにはならねえぞ、造理」

氷漬けになった大型仮想敵の間を通過して、轟が迫って来る。

『1—A 造理に続いて、同じく1—Aの轟が前に出て来たー!! お前らすげえな!! アレだな、もうなんか・・・ズリイな!!』

轟の実力ならあの程度の障害は苦にならないだろうが、すっかり目の敵にされてしまっているな。

他のAクラスの連中も他の科やBクラスよりも進んで前に飛び出している。

やはりヴィランとの交戦が良い経験になったみたいだな、立ち止まる時間が圧倒的に短い。

だが、遅れを取るつもりはない・・・。

背後から迫ってくる連中に注意を払いながら俺は第二関門に差し掛かるうとした。

——そこには

『オイオイ第一関門チョロイってよ!! んじゃ第二はどうさ!? 落ちればアウト!! それが嫌なら這いずりな!! ザ・フォ——ル!!』
そこにあつたのは谷、岩の柱がいくつも立っており、その間をロー

プで繋がれている。

谷のそこは深く、落ちた時点で失格になると言う……。

——俺には関係ない！

《錬成》

俺は岩で”橋”を造り、堂々と渡って見せた。

ロープを渡る必要なんてない。

『オイオイ!! トップの造理、ロープ使っていないぞ!! そんなのありか!』

「個性で道を作ってるんだから全然有りだろ」

『なんかもう、ズリイを通り超して羨ましいな』

ロープを使っってしまったえば時間ロスにもなる上に妨害もされやすい。

ならばより素早く安全に渡れる橋を造った方が賢明だ。

そして橋を渡り切ったらその橋を分解して後続が渡れないようにする。

後方を確認すると他の連中になんか差をつけることが出来、二番手に付いている轟だけが俺に食らいついていたが……

「くそがつ!!」

「ん?」

轟の後方から爆豪が迫ってきた。

爆豪は自身の爆破で空を飛び一直線に向かってきている。

……爆豪にとってこの障害は相性抜群のようだな? しかもスロースターターのようなだからペースがどんどん上がっているようだ。

だが、差はまだ充分にある……問題は無い。

俺は一早く第二関門を切り抜けた。

『先頭が一足抜けて早くも最終関門!! その実態は——……一面地雷原!! 怒りのアフガンだ!!』

俺の目の前に広がるのは地雷が埋められた平地であった。

よく見てみると所々に掘り上げられた跡があり、そこに地雷が埋められているのだろう。

『ちなみに地雷は威力は大したことねえが、音と見た目は派手だから失禁必死だぜ!』

「人によるだろ」

先頭ほど不利な障害だな、下手に道を造ってしまえば後続に追いつかれてしまうかもしれないし、空中移動ができる奴は圧倒的に有利な障害だ。

「待ちやがれ!! 錬金野郎!!」

「追いついたぞ造理!」

轟と爆豪が追い付いてきたか・・・戦略を変えるか!

「《錬成!!》」

「!!?」

最終関門に差し掛かる位置に壁を造り出し、コースを塞いだ。

『オイオイオイオイ!! 先頭に行くの造理! 壁でコースを塞いじまったぞ?!』

「上手い手だな、下手に個性を使って地雷原を渡ってしまえば結果的に後続の手助けをしようかもしれない。なら後続に対して障害を造ってしまう方が、時間稼ぎが出来て安心して進める」

『これでA組の轟と爆豪が遅れを取って造理が一気にリードを広げた!! これはもう一位は決まりか!』

まだ決まってるはいないが圧倒的に有利になったのは確かだ。

轟と爆豪が壁を乗り越え飛び出してきたが、差は十分に広がった。

他にも何人かは壁を突破してきたが、もはや俺に追いつくのは不可能に等しく、俺は既に地雷原の三分の二を超えている・・・この勝負はもらった!

俺は勝利を確信し、ひたすら突き進んだ。

——だが、その時

「かりるぞ、かつちゃん!」

「!!?」

『後方で大爆発!! 何だあの威力!! 偶然か故意か——!』

とてつもない爆発音が聞こえ、振り向くと後方は爆炎に包まれていた。

「何が起きた!?!」

プレゼント・マイクの実況が響き渡る中、爆炎の中から何かが飛び出してきた。

——それは

『A組 緑谷！ 猛追だ——！！！！』

緑谷が爆風を利用して物凄い勢いで迫ってきた。

「お前の仕業か緑谷!？」

◇◇

『一面地雷原!! 怒りのアフガンだ!! ちなみに地雷は威力は大したことねえが、音と見た目は派手だから失禁必死だぜ!』

「先頭はもうそんなところに・・・早く早く・・・!!!」

第二関門に苦戦していた緑谷はトップの錬に大きく差を付けられていた。

最終関門に差し掛かろうとするとそこには壁がそびえ立っておりコースが塞がれていた。

「この壁・・・造理君か!」

壁の前には選手達がごった返しており、轟と爆豪が一早く壁を突破し、緑谷も何とか壁を乗り越えてたが・・・

「遠い!!」

先頭に行く錬は遙か先を進んでおり、もはや追い越すことはほぼ不可能に近かった・・・だが

「でも、まだ追いつける!!」

緑谷は全く諦めていなかった。

「踏みつけて信管が作動するタイプの地雷だ! 威力は体が少し飛ぶくらい・・・でも)」

緑谷は壊れた仮想敵から拝借した鉄板を使い、地面を掘り上げて行く。

「(対地雷なんて深くても14〜15cmくらいだ、直ぐに掘り出せる!!)」

掘り出した大量の地雷を一か所に集める緑谷。

「(借りるぞかつちゃん!) 大爆速ターボ!!」

両手で持った鉄板を集めた地雷に向かって思いつきり叩きつけた
緑谷は所持していた鉄板の上にしがみ付き、大爆発によって発生した
爆風を利用してミサイルのごとく突き進んで行った……

◇◇

後方から物凄い勢いで迫って……いや、飛んでくる緑谷は轟と爆
豪を抜いた。

「デクあ!!! 俺の前を行くんじゃねえ!!!」

「他を気にしてる場合じゃ……!」

緑谷の行動に感化され轟と爆轟がスパートをかけて来たが、まだ俺
とは距離がある。

何より緑谷はあれでは着地で止まってしまおう。

予想もしなかったことを平気で行ってしまう緑谷の行動には驚か
されたが、まだ俺の勝機は揺るがない。

最終関門も残り僅か、俺もスパートをかけ突き進む。

——だが

「まだだ!!」

「何!!?」

再び大爆発、それもすぐ後ろで起きた。

先ほどの爆発ほどではないが、その爆発で轟と爆豪は横に吹き飛ば
され、緑谷は……

『A組 緑谷が対にトップの造理を抜いたああああ——!!!』

その爆発を利用して俺の頭上を飛び越えて行った……なんて奴だ
お前は!!

『緑谷 間髪入れず先頭を追い抜き、そのまま地雷原をクリア!! そ
して起き上がって突っ走る!!』

「抜いた! このままゴールに『錬成!!』!? 造理君!!」

「簡単には行かないぞ緑谷!!」

俺は個性を発動し柱を斜めになるように錬成しその上に乗っかり
地雷原を飛び越えて行った。

幸い地雷原が残り僅かだった故に見事に最終関門の突破に成功し、

無事に着地した俺は緑谷を追いかける。

『ここに来てまさかのデットヒート!! ゴールまで残り僅かあ!! 緑谷と造理!! どっちが先にゴールする!!?』

緑谷が僅かににリードしているが、足は俺の方が早い! 追い抜いて見せる!

「行かせてたまるかあ!!」

「負けるかあ!!」

ゴールまであと少し、もう少し、もう少しだ!!

そしてゴール前で俺は緑谷と並び・・・

『ゴ——ル!!!』

俺と緑谷はゴールを果たした。

『ゴール! ゴール! ゴール!! A組の緑谷と造理がほぼ同時にゴールしたぞ! どっちが勝ったんだこれは!?!』

「ビデオ判定だなこれは」

『モニターで確認だ! 早く映せ!!』

相澤先生とプレゼント・マイクの指示で会場の巨大モニターに俺と緑谷のゴール直前の映像がスローモーションにて映される。

「どっちだ!?!」

緑谷もモニターにかじりつくように見守る。

ゴールしたのはほぼ同時、俺もどっちが勝ったのかは分からない・・・どっちだ!

モニターにゴールの瞬間が映し出された。

勝ったのは・・・

『これは・・・緑谷だあ!! 緑谷のもじやもじやの髪が僅かに先にゴールに到達してるぞ!!』

勝者は緑谷であった。

『序盤の展開から誰が予想出来た!?! 圧倒的に優位に立っていた造理を追い抜き、一番にスタジアムへ帰ってきたこの男・・・緑谷出久を

!!』

!!』

半泣きをしながらガッツポーズをする緑谷、まさかこんな結果にな

るとはな。

俺は緑谷出久と予想外の存在を改めて思い知らされるのだった。

第23話

「予選通過は上位42名!! 残念ながら落ちちゃった人も安心しなさい! まだ見せ場は用意されているわ!!」

42名がゴールしたと同時に終了の合図が鳴り響き、第一種目が無事に終了した。

結果は緑谷が1位で俺が2位と成り、それに続いて轟が3位で爆豪が4位、他のA組のメンバーも全員、予選を通過している。

「そして次からいよいよ本選よ!! ここからは本選よ!! ここからは取材陣も白熱してくるよ! キバリなさい!!」

その言葉と同時にミッドナイトのバックにあるモニターが動き出す。

第一種目では緑谷に後れを取ってしまったが、次はそうは行くまいとモニターを凝視する……。

「第二種目は……コレよ!! 《 騎 馬 戦!! 》」

「騎馬戦……!」

「個人競技じゃないけどどうやるのかしら?」

周りの連中が疑問の声を上げる。

ミッドナイトの説明では、参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ると言うことであり、基本は普通の騎馬戦と同じルールであった。

ただ、一つだけ違う事があった……。

「ここにいる全員には先程の結果にしたがい各自にポイントが振りあてられること!」

……との事。

説明がさらに続き、振りあてられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、騎手となる者がそのポイント数が表示された”ハチマキ”を装着して、終了までにハチマキを奪い合い保持ポイントを競う……。

さらに騎馬が崩れたとしてもアウトにはならず、42名からなる10〜12組の騎馬がずっとフィールドに居続け、ハチマキを奪ったとしても競技が終了するまで安心できない仕様になっている。

”個性” 発動アリの残虐ファイト！．．．でも、あくまで騎馬戦！！
悪質な崩し目的での攻撃等はレッドカード！一発退場とします！”
予選上位になるほどポイントが多く振りあてられるらしいが、ここ
で全員が予想もしなかったことが起こった．．．。

——それは

「1位に与えられるポイントは．．．」1000万！！！！”

その言葉を聞いた全員が一斉にある方向を向く。

「予選通過1位の緑谷出久くん！！ 持ちポイント1000万！！ 上を
行く者には更なる受難を．．． 雄英に在籍する以上、何度でも聞かさ
れるよ．．．これぞ”Plus Ultra”！！」

その場にいる全員がまるで獲物を見つけた肉食獣のように緑谷を
凝視し、緑谷はまるで追い詰められた草食獣のように見えた。

当人も極度のプレッシャーで身を固めてしまっていたが．．．。

「くっ！！」

すぐに真面目な顔を見せ気持ちを持ち直して見せた。

流石は緑谷と言うべきか．．．いや、既にヴィランとの命を懸けた
戦いまで経験をしているのだから、この程度のプレッシャーなどは直
ぐに克服できるのも当然か．．．。

「それじゃ、これより15分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」
15分のシンキングタイムが与えられ全員が行動を起こすが、俺は
しばし考え込んでいた。

個性の特性を考えれば特定の人物に集中するのが当然だが、俺には
どうしても組んでおきたい人物がいた。

そいつは既に二人をメンバーに加えていたがもう一人を探してい
るようだ。

俺は右手の親指に細工をして、その人物の下に歩みを進める。

「俺と組んでくれないか？．．．．．心操」

「!!? お前は!!」

普通科の生徒．．．心操 人使の元に．．。

◇◇

「俺と組んでくれないか? 心操」

「!!? . . . お前は!!」

現在、心操 人使は混乱していた。

彼は自分の個性を使いA組の尾白とB組の生徒をチームに加え、もう一人を探していたが突然、後ろから声をかけられて振り向くとそこには二週間前に自分をひどい目に合した男 . . . 造理 錬が目の前に居たのだから . . . 。

「(何でこいつが俺の所に!?! . . . いや、それはいい。この前こいつには舐めたまねされたからな . . . こいつも”洗脳”してやる!) . . . ああ、かまわないぜ」

心操は個性を発動し、錬に返事を返した。

「感謝する、ありがとう」

「(答えた! チョロイな . . .)」

心操は思惑が上手くいったことに安堵の表情を浮かべた だが

「それじゃチームが四人揃った所で編成を決めたいんだが . . . 」

「!!? 何で . . . !!」

心操はとても慌てた様子であった。

彼の個性は”洗脳”であり、相手に話しかけその相手が返事を返してくれば相手を操ることができ操られた者はしゃべる事も出来ないのであった。

それなのに目の前の男 . . . 造理 錬は平然とし言葉を発してきたのである。

「そんなに驚いたか? ”洗脳”が効かなかったことに?」

「!!?」

錬は心操の個性を見破っていた . . . 。

◇◇

「そんなに驚いたか? ”洗脳”が効かなかったことに?」

「!!!?」

随分と驚いた表情を見せるな？ 自分の個性が効かなかったことそんなに意外だったか？ それとも俺がこいつの個性を知っていたことに対して驚いているのか？・・・仕方がない、種を明かしてやるか。

俺は心操に右手の親指を見せる。

「!!? お前その指!!」

「これがお前の”洗脳”が効かなかった理由だ・・・。」

俺の親指からは血が流れていた。

心操に会いに来る前にあらかじめ親指の皮を噛み切っておいたのである。

「二週間前に宣戦布告をしに来たのが仇になったな？ お前のことを調べ上げるのには充分な期間だったぞ？」

「!!!?」

こいつは自分に対してはノーガードのようだな。

こいつのことは一週間ほど観察していたが性格が少しひねくれていただけで特に変わった事は無かった。

大した訓練もしていなければ敵情視察に励んでいる訳でもない・・・それなのにこいつはA組に宣戦布告をした・・・なら答えは簡単だ。

こいつは個性に関して絶対の自信を持っているという事・・・だが、こいつは普通科に在籍している。

仕入れた情報によれば心操はヒーロー科の実技試験に落ちたと言うが、それなのに個性に自信を持っている。

あの実技試験で相性の悪い個性と言えば容易に想像が付き、対人、もしくは生物にしか効果がない精神干渉をする個性である。

現に心操の後ろで待機している尾白とB組の奴はまるで意識を奪われているかのように目が虚ろだ。

俺が返事を返したことに驚いていたところを見ると相手に話しかけて返事を返して来たら操る事が出来るんだろう・・・。

相手の精神に干渉する個性には共通する弱点があり、対象が強い衝撃を受けたりしたら個性が解除されてしまうことが多い。

また、外部からの刺激にも弱く、俺は常に負傷した親指を押し付け痛みを与え続け自分の身を刺激していることで心操の洗脳を防いでいる。

昔、俺を攫おうとしたヴィランの中にも似たような個性を持っている奴もいたし、皮肉にもその経験が大いに役立ってしまったっていた。

「種さえ分かればお前を出し抜くのは簡単だ。……言っただろ？ 間抜けなんかには死んでも遅れはとらないと」

「くっ!!」

悔しそうな表情を見せる心操……。

「で、俺と組んでくれるのか？ 心操……？」

「……何で俺と組もうとする？」

「この競技においてお前の個性が有用だと判断したからだ」

この騎馬戦はチーム戦であり多くのチームで競い合うバトルロイヤル方式、一対一ならともかくチーム戦においては相手を洗脳出来ることは大きなメリットだ。

何せ相手のチーム一人でも洗脳出来ればそれだけで相手チームを力を半減させることが出来てしまう。

故に俺はこいつとチームを組もう考えた……より安全に確実に決勝に上がるために……。

「もし俺が嫌だと言ったら？」

「お前の個性を他の連中にばらす……と言うのはどうだ？」

「!?……ヒーロー科のくせに相手を脅すのか？」

「相手の不利について、交渉を有利に進めるのも戦略だよ。それを言ったら、お前の行いも良い行いとは言えないんじゃないか？」

「なっ!?……お前!」

まあ当然の反応だな。

正直に言っただけ俺も自分でこんな事を言っていてあまりいい気分ではない。

だが、あくまで俺はリアリスト……ロマンチストではない。

「それで？ 俺と組んでくれるのか？ 別に断ってくれても構わないぞ?」

「……………」

しばし考え込む心操、……………そして

「……………分かった組んでやる。だけど！」

「分かっている。個性のことは誰にも言うつもりはない」

潔くとは言えないが了承をもらうことが出来た。

これでこの競技は圧倒的に有利になったな……緑谷や飯田あたりと組むことも考えていたが緑谷は集中攻撃を受けることは明白であつたし、飯田は轟のチームに行ってしまった為、これは断念。

正直に言つて轟や爆豪は挑発をしてみましたことで俺に対抗意識を燃やしているから俺と組んでくれるとは思えないしな……。

「15分経つたわ。……それじゃあ、いよいよ始めるわよ」

15分のシンキングタイムが終わり、フィールドには合計12組の騎馬が並び立った。

俺たちのチームは心操が騎手を務め、尾白が騎馬の先頭をやりB組の生徒が左後ろの騎馬、そして俺が右後ろの騎馬を務める。

チームのポイントは俺が第一種目で2位になったことで手に入れた

最初は俺が騎手を務めようかと思つたが心操は思いのほか力が無く、こいつに騎馬を務めさせるのはマイナスでしかなかった為、仕方なく騎手を心操にやらせ俺は騎馬を務めることにした。

ちなみに俺が騎馬の後ろを務めたのは心操の洗脳を警戒してのこと。

こいつは恐らく競技中に俺を洗脳すること考えているだろうからこいつを背後に置くのは得策では無いと判断した。

『よオーし組み終わったな!!?　いくぜ!!　残虐バトルロイヤル!　カウントダウン!!』

プレゼント・マイクの合図とともにカウントダウンが始まり……

『3!!』

『2!!』

『1!!……START (スタート)!!!』

戦いの合図が切つて落とされた。

——後は簡単であった。

序盤はやはり1000万のポイントを持った緑谷が集中的に狙われ、特に爆豪のチームがやたらと攻めていたがB組のチームが爆豪を挑発し、爆豪はB組のチームを狙うようになった。

緑谷のチームはとにかく逃げの一手を取っていたが轟のチームがそれを許さなかった。

轟はチームに飯田と八百万と上鳴を加えかなり戦略的な布陣を添えていて残り時間が半分になったところで多くのチームを手玉に取りハチマキをかすめ取っていた。

そして序盤に差し掛かった所で轟のチームが一気に攻めに転じ緑谷から1000万のハチマキを奪い暫定1位となり、これには俺も驚いた。

どうやら飯田が切り札を出し高速移動を行ったようだが大したものだ。

——そして残り時間が少なくなったところで俺たちも動き出す。

「動くぞ心操」

「分かったよ」

まず狙うはB組のチーム。

競技中に身を隠しながら他のチームを観察していたが、どうもB組のチームは動きがおかしい。

お互いを全然潰しあわないところを見るとあらかじめ手を組んでいたと言うところだろうか？・・・まあいい、俺たちはB組チームのハチマキを奪っていく。

やることは簡単だった。

心操の個性”洗脳”を駆使すればハチマキを奪うことは容易であり得点で一気に暫定2位まで上がる。

そして俺は閉めにかかろうとする。

「最後の仕上げだ」

「？・・・もう十分だろ」

「狙うは1位だ！」

俺たちのチームは緑谷チームと轟チームに近寄った。

見た所1000万のハチマキは轟の手に渡っているようだがこれは好都合だ。

緑谷に比べれば轟の方がやりやすい。

『そろそろ時間だカウントいくぜエヴィバデイセイヘイ!...10!』
カウントダウンが始まった。

残り十秒...十分だ!

『9』

「俺の合図と一緒に個性を発動しろ、心操」

「本当に上手くいくのか!」

「ヒーローに成る気があるなら少しは冒険して見せろ!」

「!?...分かったよ!!」

俺の目線の先には緑谷チームと轟チーム、そして爆轟チームが入り乱れていた...チャンスだ!

『8』

「《錬成!!》」

「!!!」

「造理!」

「造理君!」

轟チームが立っている所の地面を錬成して相手がこちらの向かってくるようにしむける。

『7』

「今だ心操!」

「無茶苦茶だなお前!」

俺は心操に合図を送る。

『6』

「ちよろい奴だな奴? お前!」

「くっ!? ふざけ...」

轟の動きが止まった。

心操の洗脳が掛かり意識が失われたようだ。

『5』

「轟くん!」

「どうしましたの轟さん!？」

「ウエ~~~~~イ」

飯田、八百万、上鳴が叫ぶが、それに意味は無い!

『4』

「《錬成》!!」

「!!!?」

「!!!」

俺はさらに個性を発動し畳みかける。

轟チームがものすごい勢いでこちらに向かってくる。

『3』

「獲れ心操!」

「分かってるよ!!」

向かってくる轟チームに心操が手を伸ばす。

『2』

「貰った!!」

轟が持つ1000万のハチマキが心操の手が掛かり・・・

『1』

「獲ったー!!!」

1000万ポイントのハチマキを手に入れた・・・そして

『TIMEUP (タイムアップ)!!』

競技が終了した。

『「YEAH!」ここにきて大どんでん返しだー!! 前半にほとんど行動してなかった心操チームが1000万ポイントのハチマキを手にしやがったぜえ!!』

上手くいったな。

まるで第一種目の緑谷のような感じだが、大逆転に成功した。

第二種目は俺と心操の勝利に終わった。

第24話

『一時間程、昼休憩を挟んでから午後の部だぜ！　じゃあな!!!・・・オ
イ、イレイザーヘッド、飯行こうぜ！』

「寝る」

『ヒュー!!』

第二種目が終わりお昼休憩になった。

騎馬戦の結果は錬が居た心操チームが圧倒的大差をつけて1位となり、2位には爆豪チーム。

轟チームは1000万のハチマキを奪われてしまった為、ポイントを大幅に減らし3位となり、4位には緑谷チームが入った。

緑谷チームは70ポイントしか獲得できていなかったが、心操チームが他のチームのポイントを全て奪っていた為、緑谷チームはギリギリ滑り込んだ形になっていた。

「飯田くんあんな超必持ってたのズルいや！」

「ズルとは何だ麗日くん!!　あれはただの”誤った使用方法”だ!・・・
どうにも緑谷くんとは張り合いたくてな」

「ですが、最後の最後に造理さんしてやられてしまいましたわ」

「ウエ~~~~イ（悔しかったアレ）」

競技を終えた後、A組のメンバーが会話を楽しんでいた。

「そういえばデクくんは・・・?」

「造理さんの姿もありませんわ?」

会話の話題に成っていた錬と緑谷の姿がそこには無かった。

◇◇

「お前・・・オールマイトの隠し子か何かか?」

「!?・・・違うよそれは・・・って言っても、もし本当にそれ・・・」

現在、俺と緑谷は轟と呼ばれ人通りの少ない通路で話し込んでいた。
た。

第二種目の騎馬戦において轟は緑谷に対してオールマイトに近い

何かを感じ取ったようで緑谷に疑問をぶつけてたが、的外れな疑問に緑谷は不定する。

俺が呼ばれた理由はよく分からなかったが、恐らく第二種目で俺に出し抜かれたことが気に入らなかつたんだろう……。

「個性婚……知ってるよな」

轟は突然、話しを切り出した。

個性婚と言えは”超常”が起きてから第二く第三世代間で社会問題に成っていた出来事であり、自身の個性をより強化する為だけに配偶者を選び結婚を強いる前時代的な婚姻である。

話しを聞くと、轟の父親であるナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”はオールマイトに対して強いコンプレックスを抱いており、自分ではオールマイトを超えることが出来ないと判断し、息子である轟をオールマイト以上のヒーローに育て上げるために強い個性を持った自身の妻の家族を丸め込み妻の個性を手に入れたと言う。

「俺をオールマイト以上のヒーローに育て上げることで自身の欲求を満たそうってこつた……うっとうしい！」

轟は父親を心底毛嫌いしているようだ。

父親の傲慢な行いによつて母親は苦しみ、その苦しみに耐えかねた母親は暴走し我が子である轟に煮え湯を浴びせ一生消えない傷を残したと言う……。

轟は顔の火傷後を手で押さえつける。

「俺は親父の個性を使わずに”一番になる”ことで奴を完全否定する」

睨みつけるかのような顔で俺と緑谷に語る轟。

轟の言葉で緑谷はすっかり黙り込んでしまった。

自分のいる世界とはあまりに違うことでどう答えればいいのかわからないでいる見たいだが、一般人からすれば当然の反応だろう……。「おまえがオールマイトの何であろうと俺は右だけでお前の上に行く。そして造理……お前にも負けない」

「……」

「時間を取らせたな・・・」

言いたいことを言いきった轟はこの場を後にし歩いて行った。

——だが、

「僕はずつと誰かに助けられてきた」

突然、緑谷が口を開いた。

自分がヒーローになる動機・・・オールマイトのようなヒーローになることを目指していることを語る。

「僕だって負けられない・・・僕を助け・・・救ってくれた人達に応える為にも・・・僕も君に勝つ！」

「・・・」

真剣な面持ちで轟を見ながらそう告げる緑谷。

その言葉を聞いた轟はしばらく緑谷を見続けた後、何も語らずにその場を去っていった。

しばらくたった後、俺もその場を去ろうと歩き始める。

——その時

「造理くん」

「？」

緑谷に声を掛けられる・・・一体何の用だ？

「さっきの轟君の話しだけど・・・造理くんはどう思ったの？」

轟の話しに対しての俺の考えを聞いてきた。

緑谷は自分以外の人間がどう考えているのか気に成っているようだ。

・・・そんなに気になるものか？・・・まあ、答えてやってもいいか。

「・・・別に？」

「えっ!？」

「轟に対して俺が思うことは無い」

「!？」

俺が轟に対して何か思いを感じることは無かった。

たしかに轟の生い立ちは確かに悲惨なものではあるが、今の世の中・・・”個性社会”では決して珍しい話ではなく個性を抜きにし

て考えてもよくある話した。

それにハッキリ分かったことがある。

「轟が言ってることがおかしいことに気づかないのか？」
「？」

「あいつの話しには矛盾があるぞ？」

「矛盾？」

俺の言葉に緑谷は首をかしげる。

轟は火の個性を使わずにナンバー1ヒーローになって父親を見返すことが目的のようだったが、轟の父“エンデヴァー”は轟をオールマイトを超えるナンバー1ヒーローにすることが目的とのこと。

轟がナンバー1ヒーローに成ってしまったら結局は父親の思惑通りに成ってしまう。

・・・おかしな話した。

「おそらく轟は、他に目指したい何かがあるんだろう・・・」
「・・・」

轟は父親に対する怒りが強すぎて目標を見失っているようだ。

残念なことに本人はそれに気づいていないようだが、俺がそれに対して口を挟むつもりは無い。

何より家族がいない俺には轟の気持ちは理解できない。

・・・逃げた親に対しては愛情も憎しみも無いからな。

「それじゃまた後でな・・・」

そう言い残し、俺はその場を後にした。



『最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ！』

昼休憩が終了した後、生徒全員が会場に集まった。

何でも最終種目の前にレクリエーションを行うらしく敗者にアピールチャンスを与えるための救済処置なんだろう。

それで何故かA組女子がチアガール衣装に成っていたが、どうやら峰田と上鳴の仕業みたいだ・・・二人とも満面の笑みで親指を立てて

いる。

『それが終われば最終種目！ 一対一のトーナメント!! ガチバトルだ!!』

最終種目は第二種目を勝ち抜いた上位4チーム総勢16名によるトーナメント形式。

「それじゃ組み合わせ決めにくじ引きしちゃうわよ。組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります」

くじの箱を取り出すミッドナイド。

尚、レクリエーションに関しては進出者16名は自由参加と言う事らしく参加のするしないは個人の判断で任せるとのことだ。

まあ、最終種目前に無駄に体力を使うのは愚かとも言えるし、進出者のほとんどは参加しないだろう。

「んじゃ1位のチームから順にくじを引きなさい」

1位のチームは俺と心操、尾白とB組の庄田と言う奴、まず俺が最初にくじを引き次に心操がくじを引いた。

次に尾白が前にでた……。

——だが、その時

「……すいません、俺……辞退します」

「!!!」

突然、尾白が辞退を宣言した。

「尾白くん! 何で……!?!」

「せっかくプロに見てもらえる場なのに!!」

尾白に辞退宣言にその場にいる連中が異議を唱える。

……まあ当然の反応だな、せっかく手に入れたチャンスをフイにしているのだから尾白の行動は愚かとしか言いようがない。

本人が言うには騎馬戦において何も出来なかつた自分が上に上がることが出来ないとの事……要するにプライドが許さないと云うことだ。

——さらに

「僕も同様の理由から棄権したい」

B組の庄田も辞退宣言をした。

こいつらは見た目の割りにプライドが高いようだな？ 果たして主審のミッドナイトはどう采配を下すか……。

「そういう青臭い話はさア……好み!! 尾白と庄田の棄権を認めます！」

OKとのこと……。

好みで決めるのは些か疑問だが、そこは考えないようにしよう。

繰り上がりになるのは5位の拳籐チーム、B組の女子メンバーだが拳籐も辞退し、後半まで奮闘していた鉄哲チームに席を譲り、鉄哲と塩崎と呼ばれる頭髪が茨になっている女子が繰り上がりになった。

たまたトラブルが起こったが、その後は無事に全員くじを引き終わり……

「組はこうなりました」

トーナメント表が巨大スクリーンに映し出され一回戦の組み合わせが決まった。

緑谷VS心操

轟VS瀬呂

飯田VS発目

造理VS麗日

塩崎VS芦戸

常闇VS八百万

鉄哲VS切島

上鳴VS爆豪

くじ運は……あまり良いとは言えないな。

近所には緑谷・飯田がいるし、轟は……今のあいつなら問題ない。

それは置いとくとして、俺の最初の相手は……麗日か。

麗日がいる方向に顔を向けると……

「!？」

チアガール姿で驚愕の表情を見せる麗日の姿があった。

出来れば戦いたくなかった相手だが、くじで公平に決まった以上致し方ない。

『よしそれじゃあトーナメントはひとまず置いて、イツツ束の間！ 楽しくレクリエーション！』

トーナメント発表が終わりレクリエーションタイムとなった。

・・・と言ってもやはりトーナメント出場者はほとんど参加はしなかった。

何名かはアピール目的で参加していたが、このレクリエーションはほとんどスポーツであり、俺自身は特に興味が無かったので参加はせず、出場者の情報収集をする事にした。

俺同様に情報を集めるも者。

神経を研ぎ澄ます者。

緊張を解きほぐそうとする者。

各々が思いを胸に、あつという間に時が過ぎていく・・・。

◇◇

「オツケーもうほぼ完成」

『サンキューセメントスー！』

セメントスの個性でステージが造られていく・・・。

『色々やってきましたが、結局これだけ・・・ガチンコ勝負!!』

ステージが完成した。

大きさは約40ヤードの二段上になっていて両サイドの角には炎が灯され、中央下部分に雄英のシンボルマークが刻まれている。

『頼れるのは己のみ！ 心・技・体に知恵知識!! 全力で駆け上げ!!』

トーナメント開始だア!!』

最終種目の合図が切って落とされた。

『最初に戦うのはこいつらだ!!』

最初の試合、対戦するのは緑谷と心操。

俺はそれを会場入り口付近で見ている。

本来生徒には会場にクラスごとに観戦席が用意されているが、A組の連中とは体育祭開始前に失礼な宣誓布告をした為、あえて距離を置

いている。

まあそれはいいとして試合は始まった。

——結果は

「心操くん場外!! 緑谷君二回戦進出!!」

緑谷が勝利した。

試合の内容は開始直後に緑谷は心操の個性”洗脳”を受けてしまい敗北寸前まで追い込まれたが、緑谷は個性を暴発させて洗脳を解き、心操を場外に叩き落した。

初戦にしては地味だが、緑谷の性格と心操の個性では仕方がないとも言える。

・・・何より心操は個性以外は完全にザルだ。

心操の身体能力はヒーロー科の誰よりも劣っている上に、これといった格闘術を嗜んでいる訳でもない。

正直に言う”本当にヒーローを目指しているのか?”と疑ってしまいうレベルだ。

あのヒーロー科の実技試験も本質を見抜いていれば個性に頼らずとも十分合格できるレベル。

同じクラスの”葉隠”がいい例だ。

彼女は透明であることを除けば無個性と指して変わらず、錬の助言があつたにせよしっかり合格している。

心操自身、大した努力をしていない証拠である・・・。

『お待たせしました!! 続きましては・・・こいつらだ!!』

第二試合の出場者が紹介される。

対戦カードは轟と瀬呂。

個性の強さだけで言えば轟の方が優勢。

『START!』

「負ける気はね——!!!」

先手必勝。

瀬呂はスタート後直ぐに肘からテープを繰り出し、轟の体に巻き付けそのまま場外に引きずり出す。

——だが

「悪いな」

「!!!?」

突然現れる氷の柱。

それはとてつもなく大きく、会場の外まで到達するほどであった。

——大したものだ。

「瀬呂くん・・・動ける?」

「動けるはずないでしょ・・・痛ええ・・・」

勝負は決まった。

会場に居る観客からはドンマイコールが鳴り響くが、致し方ないだろう。

「轟くん二回戦進出!!」

轟の勝利に終わり、次の試合に移る。

次の対戦カードは飯田とサポート科の発目と言う女子だが、俺も次に試合を控えている為その場を離れ設けられている選手の控室に向かう。

会場内部を歩き続け控室の近くまでたどり着く。

——だが

「・・・でもいい」

「え・・・」

?・・・控室の中から声が聞こえる。

声は二つ、緑谷と・・・麗日か?。

選手の控室は二つ用意されている見たいだが、こっちは麗日が使用していたのか・・・。

中には緑谷もいる見たいで、どうやら俺に対する策を考えそれを麗日に伝えに来たようだが、麗日はそれを拒否した見たいだ。

麗日は緑谷に感化されたみたいだな。

心が成長するのは人が強くなる事において大きな意味を持つ・・・。

——油断ならないな。

俺はその場を離れ、もう一つの控室に向かった。

第25話

「麗日さん．．．気を付けて」

場所は出場選手の入場口．．．そこには緑谷と麗日の姿が合った。緑谷は麗日が対戦する造理に対して対抗策を練り麗日に伝えようとしたが、麗日はそれを拒否してしまった。

でも戦いに行く麗日を心配する緑谷は見送りだけはしたかった為、この場に居た。

「ありがとデク君．．．準決勝で会おうぜ！」

麗日は震えながら親指を立て精一杯の笑顔を緑谷に見せステージに向かっていった。

「麗日さん．．．」

麗日を見送った緑谷はその場を離れ会場に設けられた生徒専用の観覧席に向かいA組の皆の合流する。

「来たか緑谷くん、どこに行ってたんだい？」

「飯田くん？」

先に観覧席に来ていた飯田が緑谷に声を掛けてくる。

麗日を見送ってきたことと造理の対策を伝えようとしたことを飯田に話す。

「麗日くんは勝てそうかい？」

「．．．正直に言うとなんか難しいよ。造理くんは強い．．．それも凄く」

「確かに．．．」

飯田の問いかけに苦悶な表情をしながら答える緑谷。

質問をした飯田もそれに同意する。

「造理くんの戦闘はほとんど隙無しで、個性は攻守共に万能に近い」

「おまけに身体能力も高いしな．．．個性把握テストの時を思い出してもA組では間違いなくトップを争う」

「たぶん一瞬の隙も見逃さないだろうね．．．」

造理のことを冷静に分析する緑谷と飯田。

二人は戦闘経験が豊富である造理の相手をする麗日のことや心配で仕方がなかった。

「方法があるとすれば速攻で接近して触れること。麗日さんの個性は相手に触れることさえできれば浮かすことが出来る・・・触れることさえできれば・・・」

「厳しい戦いを強いられるな、麗日くんは？」

「そうだね・・・」

二人は麗日の身を案じ、戦いを見据えることにした・・・。

『さア一回戦第四試合!! 選手入場だア!!』

プレゼントマイクの合図で出場選手が入場してくる。

「次は麗日と造理か・・・」

「造理の奴、あんだだけ失礼なことを貫かしやがったけど麗日相手にどう戦うんだ？」

「戦闘訓練の時はスマートに戦ってましたわ・・・」

「何だか不穏な予感がするわね・・・」

他のA組のメンバーも造理と麗日の戦いが気になる様子。

「(頑張れ麗日さん・・・)」

そんな中、緑谷は心の中で静かに麗日を応援した・・・。

◇◇

『さア一回戦第四試合の組み合わせはこの二人!!』

プレゼントマイクが実況をする中、俺はステージに上がる。

『第一種目は2位で第二種目で1位!! ここここまで成績だけならトツ

プ!! ヒーロー科、造理 錬!!』

俺が紹介される。

『もう一人は同じくヒーロー科!! 俺こつちを応援したい!! 麗日

お茶子!!』

続いて麗日が紹介される。

何とも鼻負染みた実況だが特に気にするものではないか。

気を引き締めて試合に専念しないとな・・・。

——その前に

「麗日」

「？」

試合が始まる前に伝えて置きたいことがある。

「・・・俺は戦うと決めた相手なら女や幼子でも容赦はしない。ひねり潰す」

「!？」

憐憫な俺の言葉に驚きの表情を見せる麗日。

冷酷なことを言うようだが今までの人生で油断や慢心が身を亡ぼすと言うこと重々理解しているつもりだ。

何より麗日は先日的事件（13話参照）で俺の境遇を多少成りとも知っている。

俺の言葉が冗談ではないことを理解できるはずだ。

「少なくとも」大怪我「は覚悟してくれ」

「!？」

俺の言葉を聞いて体を震わせる麗日。

傍から見たら完全に脅したが、これも立派な戦略だ。

少しでも相手の精神と集中力を乱すことが出来ればそれだけで勝率は大幅にアップする。

「それが嫌なら今の内に退くことを進め「造理くん!」・・・?」

俺の言葉に割り込んで麗日が声を掛けてきた。

「ウチ・・・負けないよ!」

「・・・」

俺にそう言い放つ麗日。

宣戦布告のつもりか? 体をビクビクさせながら震えて声をし

て・・・。

——だが、眼は本気だ。

負けるつもりが本当に無いことは感じ取れる。

戦う覚悟はちゃんと出来ているという事か・・・。

——なら

『一回戦第四試合!!・・・START!!』

容赦はしない!!

「退くなんて選択肢ないから!」

スタートと同時に動き出し迫ってくる麗日。

速攻で勝負を掛けてくるつもり見たいだがそうは行かない

「《錬成！》」

「!?」

俺と麗日の間に壁を造り、距離を取る。

麗日の個性は”無重力”、手で触れた物を一時的に無重力状態にすることが出来るかなり厄介な個性だ。

——間合いを詰められてはならない!

「触れさえすれば 《錬成！》 ・ ・ ・ぐうつ!?!」

『おーつと造理! 行き成り壁を造ったと思ったら周り込んで攻めた麗日を迎撃した! てか何だその拳は!?!』

壁を周り込んで攻めて来た麗日を岩拳で攻撃した。

実況していたプレゼントマイクが何故か驚いていたが見るのは初めてだったか?

俺はさらに岩拳を生成し麗日を要撃する。

「フン! ハアツ!!」

「ぐつ! あぶなっ!」

麗日は攻めるのを一旦控え俺と距離を取ったがこれは都合がいい。

このステージ上で麗日が取れる戦法は直接相手に触れることによる近接戦法が考えられる。

戦闘訓練の時はぶつといコンクリートの柱を個性でぶん回していたが何もないステージの上ではそんなことは出来ない為、距離さえとってしまえば麗日の個性を受けることはない。

万が一接近を許してしまい触れられて無重力にされてしまったら対処方法はほとんど無いに等しい。

近づけさせはしない!

「《錬成！》」

再び個性を発動する。

『オーツと造理! またまた個性を発動して何かを造り始めた!! . . . て、ちよつと待てオイ! それって!?!』

「”バズーカ砲”だな」

造り出したのは”バズーカ砲”。

実況していたプレゼントマイクは驚き、相澤先生は至って冷静だった。

俺が造ったバズーカ砲は持ち運びが可能な携帯式で移動しながら打つことが出来る。

「造理くん！ それって本物・・・!?」

「安心しろ。威力は押さえてある・・・発射！」

「ウソ!!」

麗日に向かって発射をする。

とは言っても直撃はさせず、麗日がいる付近のステージを狙って発射をしている。

流石にバズーカ砲を直撃させてしまったら麗日の命まで奪いかねない為、遭えてステージを狙う。

だがそれでも効果はある。

「ぶわア!!」

麗日の付近に被弾した砲弾は炸裂し爆発する。

その爆発による衝撃で麗日にダメージを与えるのが狙いだ。

麗日が居た場所は爆発による煙によって覆われた。

『撃ったア!! 女の子に向かってバズーカ砲を撃ったぞ!!』 何てへ

ビーだ!!!』

「おいおいマジかよ!」

「当たったら死んじまうぞ!」

プレゼントマイクの実況がうるさく響き渡り、会場で観覧していた観客も騒いでいた。

確かにバズーカ砲を人に向かって撃てば騒ぐのも無理はないが、ちゃんと死なないように考慮はしている。

それはいいとして、麗日が居る方向に目を向けるとまだ煙が立ち込めていて麗日の姿が確認できない。

直撃はしていないはずだからまだ動けるはずだ。

どう出る麗日?

「おらあああ!!」

叫び声と共に麗日が爆煙から飛び出して来た。

声を荒げながら特攻?・・・何かあるな。

「《錬成!》」

再び麗日に向けて岩拳を生成し放つ・・・!?

「上着?」

そこに麗日の姿は無く体操着の上着だけ・・・変わり身か。

よくある手だな。

なら、次の麗日の行動は・・・

「もらい!!」

当然、死角からによる接近攻撃。

戦法としては悪くない・・・だが!

「ここで浮かしちやえば「悪いな」ぶあつ!!」

俺には通用しない!

背後に向かつて大量の岩拳を放ち麗日を吹き飛ばした。

死角からの攻撃は戦いにおいて有効な手段だが、自分の死角さえ理解してればどこから攻撃してくるかは分かる。

なら、死角となる場所全てに攻撃すればいい。

「たっ、まだ!」

岩拳をくらった麗日は再び立ち上がろうとするが、隙は与えない。

「発射!」

「うわっ!!」

再びバズーカ砲を発射して麗日にダメージを与える。

「まだまだあ!!」

吹き飛ばされても尚こちらに向かってくる麗日。

爆発の衝撃でダメージを負っているにもかかわらず攻め込んで来るとは大したものだな。

「やれやれ。直撃させるわけにはいかないし、……ムダに長引きそう
だ」

俺は迫り来る麗日を迎撃し続けた……。

◇◇

「ダメだ、全く歯が立たない!」

「麗日くん！」

場所は生徒の観覧席。

そこで造理と麗日の試合を見ていた緑谷と飯田は青ざめた表情を見せていた。

「造理くんは強いだけじゃなく戦い上手なんだ。死角からの攻撃も振り向きもしないで対処してる」

「麗日くんの戦術が完全に殺されてしまっている。あれじゃあ手の出しようがない。塵損だ」

緑谷と飯田は一方的にやられている麗日を心配しながら観戦していた。

近くで観戦している他のA組のメンバーも・・・

「お茶子ちゃん・・・！」

「造理ってあんな成りしてるくせにそっち系なの!？」

「女の子相手に容赦無さすぎだろ！」

「何だか爆豪より悪く見えて来た！」

「んだとこらあ!!」

様々な反応を見せるA組一同。

どれも造理に対しての批判的な反応であった。

中には顔を両手で押さええてしまっている者もいる。

「ま、まだまだあ!!」

そんな中、麗日の叫び声が痛々しく響き渡る。

『休むことなく突撃を続けるが・・・これは・・・』

騒がしくてポジティブが売りのプレゼントマイクも言葉をつまらせてしまう。

「あの子、変わり身が通じなくてヤケ起こしてるんじゃないか?」

「このままじゃ不味いんじゃないか?」

「なア止めなくていいのか? 大分クソだぞ・・・」

「・・・」

観客席で観戦していたプロのヒーロー達も動揺し始め、監視員を務めているセメントスに向かって抗議をし出したが、セメントスはそれを無視して試合を監視し続ける。

「お……お、おらあああああ!!」

試合は一層激しくなるが、麗日が一方的にやられる状態が続いていた。

倒れたは立ち上がりまた倒れては立ち上がる。そのたびにボロボロ化していき、麗日の叫びはもかすれ始めてきた。

「ああもう見てらんねえ!!」

試合を見かねたヒーローの一人が立ち上がり叫び出した。

「おいお前、それでもヒーロー志望かよ!? そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよ!!」

試合をしている造理に対して罵倒し始めた。

そしてそれは会場にいる他のヒーロー達のトリガーとなった。

「お前には人情ってものがないのか!!」

「女の子いたぶって遊んでるんじゃないやねえ!!」

「そーだそーだ!!」

「この人でなし!!」

造理に向かって次々と罵声を浴びせるヒーロー達。

ブーイングまで始まり会場に嫌な空気が流れ始める。

「緑谷くん、これは……」

「すごく嫌な空気だね……」

ヒーロー達の罵声を目の当たりにした緑谷と飯田の二人は顔を歪ませていた。

真つ当な人間である二人において、この光景は毒でしかなかった。

『一部からブーイングが!……しかし俺もそう思……』

「喋るな」

『わぁ肘っ!! 何SOON……』

「黙ってる……」

実況するプレゼントマイクを隣で座って見ていた相澤が肘内をかまして実況を妨害する。

『おい、そこでブーイングしてるクソヒーロー共!!』

「[[[?]]]」

相澤はプレゼントマイクからマイクを奪いブーイングを起こして

いるヒーロー達に向かって叫び出した。

『お前から頭沸いてんのか？ プロ何年目だ？ これが遊んでるように見えるのか!? シラフで言ってるならもう見る意味ねえから帰れ!・・・帰って転職サイトでも見てろ!!』

「相澤先生・・・」

突然の出来事にヒーロー達もブーイングを辞め、それを聞いていた緑谷達は相澤が居る実況席に顔を向ける。

『相手を認めてるから警戒してるんだろが！ 本気で勝とうとしてるからこそ油断が出来ねえんだろが!!』

「二二二二二二」

相澤の言葉で会場に巻き起こっていたブーイングが収まり、静まり返った。

『それがわからねえなら、サツサと帰「やめてください!」・・・?』

ヒーローに対して更に説教を続けようとした相澤だったが、誰かが割り込んで来て途中で言葉を遮られてしまう。

——その人物は

「そう言う説教はお門違いですよ相澤先生？ ヒーローのあり方なんて人それぞれなんですから・・・」

現在試合を行っている”造理 錬”であった。

◇◇

「まだまだあ!!」

叫び声と共にこちらに向かってくる麗日。

そんな麗日に俺は容赦のない攻撃を繰り返す。

「《錬成》」

「ぐっ!」

「発射!」

「ぶあっ!!」

近づいてきたら個性で吹き飛ばし、距離が取れたらバズーカ砲の爆発でダメージを与えていく。

ルーチンのような戦いになっているが、効果は抜群だ。

「ゴホっ！ ハア、ハア・・・」

麗日の様子を確認するとかなりダメージが蓄積されてるみたいだ。動きも鈍くなっているし息も荒くなっている。

勝敗が決するのは近い・・・。

——しかし妙だ。

「おらおら!!」

さつきから麗日は同じ戦法しか取っていない。

始めはヤケを起こしているように思えたが、こう何度も同じ事を繰り返されると段々怪しく思えてきた。

——何より

「まだ・・・まだ・・・」

こいつの目・・・死んでない。

俺の個性の攻撃もちやんとガードをしているし、バズーカ砲による攻撃も完全でないが回避行動を取っている。

ヤケを起こしている人間の行動ではない。

——何か企んでいるな!

俺は警戒心を最大限に高め、戦いに集中した。

——するとその時

「おいお前!」

「?」

突然誰かに呼ばれ声がした。

声がる方向に目をやると、観客席にいたおそらくプロのヒーローであろう人物が立ち上がり叫んでいた。

「お前それでもヒーロー志望かよ!? そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよ!!」

「さつきと勝負決めろよ!」

「お前には人情ってものがないのか!!」

「女の子いたぶって遊んでるんじゃないやねえ!!」

「そーだそーだ!!」

「この人でなし!!」

そのヒーローから発せられた言葉は俺に対する罵倒。

さらにその周りにいたヒーロー達からも連鎖するがごとく罵声が飛びブーイングが巻き起こが・・・あいつら、バカか？

これが遊んでるように見えるのか？ 決め手が無く苦戦していることが分からないのか？ 麗日が何かを企んでいることに気づかないのか？・・・。

まだヒーローではない生徒や一般観客からの罵倒ならまだ致し方がないが、プロのヒーローが発する言葉ではないぞ？・・・。

何よりあいつらは、その罵声がこの場に置いて何を意味するのか気づいていない。

『おい、そこでブーイングしてるクソヒーロー共!!』

突然アナウンス室からマイク越しで声が発せられた。

この声は相澤先生か？・・・何だかご立腹みたいだな。

『相手を認めてるから警戒してるんだろうが！ 本気で勝とうとしてるからこそ油断が出来ねえんだろうが!!』

俺を罵っていたヒーロー達に向かってそう語る相澤先生・・・やはり理解あるヒーローの言う事は違う。

おそらく俺を罵っているヒーロー達はまだヒーローに成って日が浅いんだろうか、相手が格下であっても一瞬の油断が命取りであることが分かっていない。

現に審判のミッドナイトや監視員のセメントス、他の英雄ヒーロー達は一切口を挟まないでいる。

プレゼントマイクは少し微妙だったが、理解あるヒーロー達はちゃんと歩を弁えている。

——でもそれじゃ足りない。

『それがわからねえなら、サツサと帰「やめてください!」・・・?』

「そう言う説教はお門違いですよ相澤先生？ ヒーローのあり方なんて人それぞれなんですから・・・」

言葉を途中で遮らせてもらった。

相澤先生の言っていることは間違っていないが少し足りないんだ。

腹立たしいことだが、ヒーロー達の罵倒がこの場に置いて何を意味しているのか、それも本当の意味を理解出来てない。

だから俺はそれを分かせてやると同時に利用させてもらう。

「麗日」

「？」

「・・・今すぐ”降参”しろ」

「!？」

俺は麗日に降参を進めた。

突然の言葉に麗日は動揺するがそれもそのはず、まだ体力も残っているし何より戦う意思を失っていないのに降参を進められることを考えれば当然の反応だ。

「ま、まだ負けてへんよ？ 勝負は終わって「そうじゃない」・・・え？」

「観客の期待に答えてやれと言ってるんだよ」

「「「??」」」

麗日だけではなく観客席で観戦していた者達全員が俺の言葉の意味を理解できていないようだ。

「さっきヒーロー達が言ってただろ？」 それだけ実力差があるならさっさと勝負決めろよ””””””

「そ、それがどうしたの？」

まだ理解できてないか。

他の連中も俺の言葉の意図を理解出来ていないみたいだし、やはり遠回しに言っても伝わらないか？

——なら、ハッキリ言わせてもらおう。

「つまりだ。ここに居るヒーロー達全員が”お前の勝利を期待していない”と言うことだよ」

「!？」

「「「!!!」」」

俺の言葉で麗日を含め会場に居る全員が驚きの表情を見せた。

対戦において片方が一方的に相手を圧倒していれば優勢な方を驚いたり歓心したりするが度が過ぎてしまうと罵倒になってしまうのも確か。

——しかしそれを聞いていた劣勢の方はどう思うだろうか？

これがお遊びの対戦であればいいだろうが、このトーナメントに進

出した者は全員本気でヒーローに成ろうとする者が集まる真剣勝負だ。

個人差はあるが皆が確固たる意志を持って真剣に取り組んでいるんだ。

そんな者達が先程のヒーロー達の言葉を聞いたらどう思うか？・・・。

自分が哀れみを受けているよう聞こえないか？・・・人によっては屈辱以外の何物でもない。

俺でさえそう思ってしまう。

「残念なことにお前は、将来有望なヒーロー候補ではなく、哀れな”か弱い女の子”としか見られていないようだ。ま、実際に弱いのだから、そうなるのが必然だろうな」

「!!？」

俺の言葉の聞いてようやく理解したようで、何人かのヒーローは顔を歪ませている者もいる。

これはどの勝負でも言えることであり、球技のスポーツ試合などでよく見られるが圧倒的に点差を付けられた選手は哀れみを受けることがある。

そういつた試合は段々見苦しくなってきたて頭の悪い奴らからヤジが飛んでくるのがよくある話だ。

「さっさと降参してくれて負けてくれないか？ 観客もそれを望んでいるし、正直、俺も萎えてきてしまったよ」

「うっ！・・・」

麗日は更に動揺の姿を見せるが、それが俺の狙いだ。

例えば体力が消耗して弱っていても戦う意思が有り続ける限り万が一のことも有りえる。

なら相手の精神に揺さぶりを掛け心を乱せばいい・・・戦いに置いて最も有効な手段の一つだ。

現に効果は絶大みたいで、もう麗日は下を向いてしまっている。

傍から見たら俺の行動は完全に外道そのものだが、俺は決して手を緩めない。

この麗日はそれだけ厄介だからだ。

これで勝負が決まってくればそれに越した事はない。

もう少し・・・もう少しだ。

——だがその時、俺も予想だにしていなかったことが起こった。

「麗日さん!!」

「!？」

「えっ!？」

突然の呼ぶ掛けに俺も麗日も驚き、声がる方向に顔を向ける。

「緑谷!？」

「デクくん!？」

声の正体は緑谷。

観戦席で戦いを観戦していた緑谷が一人立ち上がり、麗日に呼びかけて来た。

何のつもりだ緑谷!？」

「負けるな!!」

「!!？」

緑谷は精一杯に声を上げ麗日に声援を送った。

「まだ勝負は終わってない!! 諦めちやダメだあ!!」

これは俺も全く予想だにしていなかったこと。

——これはマズいな。

「まだだ・・・まだだ!!」

「やっぱり。……まったく、余計なことを!」

戦意を失いかかっていた麗日は再び顔を上げ立ち上がる。

心身ともに未成熟であると思っていた為、心を乱す事は簡単だと思っていたが、思わぬところに伏兵がいた。

持つべき友を持たない俺では気づかない事か!

もう相手の決意を砕くことは出来ない。

「ありがとう造理くん・・・油断してくれなくて」

「?」

麗日は俺に呼びかけ手を合わせた・・・何かが来る!

俺は麗日の周囲を見渡すが特に何もなく、武器になるものは見当た

らず至って綺麗だ。

——綺麗過ぎるな。

あれだけバズーカ砲を発射したにも関わらず、ステージが綺麗過ぎる。

着弾した箇所は挟れたりしているが、破片がほとんど無い。

「まさか!」

俺は上を向き頭上を確認する。

位置は上空、そこにはバズーカ砲で出来た大量のステージの破片や瓦礫があつた。

「気付いたね造理くん!」

「何時からだ?」

この量は急ごしらえで蓄えられる量じゃない・・・バズーカ砲を見た時から練っていたか!?

あの絶え間ない突進もこれを蓄える為の行動。

やるな麗日。

でも甘い。

「勝あアアツ「残念だな」!」

俺は即座に麗日との距離を詰めた。

麗日が個性を解除する瞬間・・・そこを狙った。

麗日の個性”無重力”で触れた物を無重力にして本人が個性を解除することで効力を失う。

つまり個性を解除する瞬間は個性を受ける心配が無いということだ。

個性を受ける心配が無ければ防衛に勤しむこともない。

一瞬の隙を突く、これこそが勝利のカギだ。

バズーカを投げ捨てて身軽になった俺は麗日の顔面に向かって思いつき拳を繰り出した。

『決まったアー!! 思いつき決まったアアー!!』

俺の拳が麗日の顔面を捉えた。

「直撃したぞ!」

「ぎゃあああ! 女の子の顔を!」

拳は麗日の顔面に直撃。

実況のプレゼント 마이크も観客席の連中もうるさく騒がしいが、これで終わりだ!

「勝負は決まっ「捕まえた!」何っ!?!」

「!!!!?」

顔面に直撃を受けた麗日はそのまま倒れず、繰り出した俺の腕を両手を掴んでいた。

麗日は額から血を流し、笑いながら俺にそう告げる。

「やっと油断してくれたね!」

「くっ!?!」

俺の拳を額で受けてダメージを減らしたのか!?

マズい! これはマズいぞ!!

「今度こそ勝あアアツ「させるかあ!!」グウっ!!?」

俺は麗日に身を寄せ、体をスピンさせ背後に周り麗日の首に腕を回す。

所謂、チョークスリーパーだ!!

「このまま絞め落とす!」

「ぐっぐぐぐぐ...!!」

完全に決まったチョークスリーパーで麗日を攻め続ける。

麗日も必死に抵抗してくるが、これで落とさなければ浮かされてしまい敗北に追い込まれる。

絶対に離させない!!

「落ちろ!」

「があっ!...が...あ...あ」

麗日の力が徐々に抜けて行く。

——そして

「あ...あ...」

——限界だな?

俺はチョークスリーパーを解き、麗日を解放し、麗日はそのまま倒れ込む。

自分の身を確認すると麗日の個性を受けた跡は無い。

俺は麗日と距離を取り警戒を始めた。

「……」

顔を伏せ倒れ込んだ状態で体を震わせる麗日。

審判であるミッドナイトが確認する。

——そして

「麗日さん……行動不能。二回戦進出は造理くん——！」

ミッドナイトから試合終了の合図が出た。

勝負が決した瞬間であった。

「麗日さんをリカバリーガールの元へ」

「I Know……」

タンカーロボットに運ばれ医務室に向かって行く麗日。

——するとその時

「~~~~父ちゃん……」

「？」

意識を朦朧とさせる麗日の口から父親を名が発せられる。

——敗北しても心は死んでいないということか。

『ああ麗日……ウン造理一回戦とつぱ』

「やるならちゃんとやれよ……」

何ともやる気のない実況をするプレゼントマイク、無事に一回戦を突破したが危なかった。

まさかここまで手こずるとは思わなかつし、何より麗日が俺の拳を受けて一瞬の隙を付いてくるとは思わなかつた。

麗日はあれを狙ってやったのか？、俺が攻めてくるタイミングを待っていたのか？

いや、そんな素振りは見せなかつた。

なら咄嗟に出た行動なのか？、本能であんな事をやって退けたのか
!?

「末恐ろしいな」

俺は麗日の才を心の底から感心し認めた。

ようやく一息付けることが出来るがその前にやっておきたいことがある。

俺はステージに放置していたバズーカ砲を手に取り、空に向かって発射した。

「!!!」

発射したバズーカ砲の弾頭は空中で爆発する。

突然の行動に会場に居る全員が驚くが、これでいい。

「造理くん!、何をして」「一つこの場で言うておきたいことがある!」
!?

ミッドナイトが俺の行動に対して口を挟んできたが、俺はそれを静止し会場に響くように大きな声で言葉を続ける。

「ここには色んなヒーローが集まっているが、ヒーローと言っても所詮は人間だ!、誰かを批判したり軽蔑するのも致しかたないだろう!」

「!!!」

俺の言葉にヒーロー達は疑問の表情を浮かべるが俺は更に言葉を続ける。

「俺の戦い方や行動は決して褒められることではないことは十分に理解している!・・・だが、ヒーローであるあなた達が先ずすべきことは俺を罵倒することではなく・・・懸命に戦っていた麗日お茶子を応援することじゃないのか!」

「!!!」

これが俺がどうしてもこの場で言うて置きたかった事だ。

試合の最中から思っていたことだが、会場で観戦していたヒーロー達は誰一人として麗日に声援を送ることが無かった。

審判に抗議するわけでもなく、試合に乱入して止めに入るわけでもなく、真っ先に行ったのが俺を罵る事。

どちらか一方だけを応援することは見方によつては差別に繋がってしまいかもしれないが、ヒーローならその方が誰かを罵り罵声を吐くよりはずっと綺麗で美しい。

「俺は別にヒーロー全て高潔を求めなんてしない。このご時世、ヒーローなんて吐いて捨てるほどにいるのだから、クズの一人や二人混じってたって仕方の無いことだ。・・・だが!」

俺は眼を閉じ息を整える。

——そして

「キサマらの理想なんかを他人に押しつけるな！ 何が正しいか間違
いかなんて、その時の状況によって決まるんだ。俺は誰かの為なんか
じゃなくて、己自身のためにヒーローを目指してるんだ。ヒーローの
矜持なんて知ったことじゃあない！」

「！！!?」

「俺のことが気に入らないなら、好きだけ罵倒しろ。あんたらが同
情して憐れむ美しいヒーローの卵たちは、全員俺が蹴散らしてやる。
どのみち弱い奴は例外なく淘汰されるのが定めだ。せいぜい俺の淘
汰される対戦相手の応援している……以上だ！」

「……」

言いたいこと言い切ったので俺はステージを後にすることにした。

——少しスッキリしたな。

俺はそのまま歩みを進めて行った。

第26話

『さア次の試合に移るゼー!!、一回戦第5試合は女の子対決だアー!!』

「切り替え早いなお前・・・」

先ほどとは打って変わってハイテンションのプレゼントマイクを見ていた相澤先生は思わずツツコミを入れる。

造理VS麗日の試合での観客の反応は様々で、造理に対しては一方的に罵ってしまったことを悔いる者もいれば生意気だと腹を立てる者などが居て評価は微妙な所。

逆に麗日に対しては女の子でありながら勇猛果敢に相手に挑んだ姿に心を打たれるなどして評価はかなり高いものであった。

観戦していたA組の生徒達も様々な反応を示している。

「にしても造理の奴、エグイことしやがるなあ」

「か弱い女の子によくあんなことできるな」

「血も涙も無いって感じだったな」

「見るのがとても辛かった」

やはりどれも造理にたいしていい評価とは言えなかった。

造理の麗日に対する容赦のない攻撃はどうしても万民には受け入れがたい物であり、生徒達からは軽蔑するような物言いも出てくる。

「でも妙ね」

「ん?」

そんな中、蛙水 梅雨がさつききの試合で奇妙なことに気づく。

「何が妙なの梅雨ちゃん」

「造理ちゃんがお茶子ちゃんにしたことは好きになれないけど、造理ちゃんの実力ならあんな方法取らなくても十分勝てたんじゃないかしら?」

「造理ってそんなに強いのか?」

「強いわよ凄く、たぶん轟ちゃんや爆豪ちゃんよりも強いわ」

「ざけんなコラア!!」

蛙水の言葉に爆豪が怒りを現にするがいつものことなのでA組の

皆は特に反応を示さない。

造理の相手を貶めるやり方・・・あまりに容赦のない仕打ちを蛙水は疑問視していた。

「造理ちゃんて凄く危機感を持って戦ってるように見えたわ・・・何だか心に余裕を持たないみたいに」

「単に度胸が足りないだけじゃねえの？」

「それだったらまず戦わないわよ」

「確かに造理って少し変だよなあ、クラスの皆とも常に距離を置いてる感じだし」

「何か事情があるのかもしれないわね」

「・・・」

今にして造理のおかしさに気づき始めたA組一同、それを一緒に聞いていた飯田は造理の境遇をある程度知っている為、何も喋らず黙っている。

「そう言えば緑谷どこ行ったの？」

「緑谷なら麗日の様子を見に行っただぜ」

「麗日、大丈夫なのか？」

「リカバリーガールに見てもらえば大丈夫でしょ」

「次の試合が始まりますわ」

A組一同は造理と麗日の話しを切り上げ、次の試合の観戦に勤しむのであった。

◇◇

「負けてしまった」

「麗日さん・・・」

場所は変わって選手控室。

試合が終わって医务室に運ばれた麗日はリカバリーガールの治療を受けた後、選手控室にいた。

麗日を心配した緑谷は試合が終わった後直ぐに駆け付けたが、麗日は笑顔で緑谷を出迎えそれを見た緑谷はキョトンとした表情をしてみよう。

「麗日さん・・・ケガは」

「リカバリーされたから大丈夫。オデコの傷は少し跡が残っちゃうかもって言われちゃったけど他はちゃんと治るって・・・」

ケガの具合が心配する緑谷に対し麗日は無事であることを伝えるが、現在の麗日は額に包帯が巻かれ、頬にはガーゼ、腕にもテープなどが貼られ、傍から見たら痛々しい姿をしており大丈夫のようには見えなかった。

リカバリーガールによって治療は受けたが体力を削らないよう程々の回復しかしていない為すりキズなどの外傷は残ってしまったている。

「いやあーやっぱ強いねえ造理くんは、完膚なかったよ。もっと頑張らんといかんな私も！」

「・・・」

ハキハキと明るい表情しながら前向きな姿を見せているが、麗日は明らかに無理をしていた。

緑谷もそれを悟ってか無理をして元気な姿を見せる麗日を見て何とも言えない表情をしまっている。

「麗日さん・・・あまり無理し「大丈夫！」・・・!?!」

「デクくんだってすぐ先見据えてやってるし、負けたからって負けてられんよ・・・」

「・・・そんな」

やはり無理して空元気を見せているようで麗日の表情が少し曇ってしまいがそれもそのはず。

緑谷の助言をフィにし意気込んで試合に臨んだにも拘らず結果は散々、今の自分が出る全てを出し切ってもタダの一撃も与えることが出来なかった為その心の中は悔しさでいっぱいはずだ。

——その時

「邪魔するぞ」

「!?!」

突然、控室のドアが開く。

入ってきたのは・・・

「造理くん!？」

先程戦った造理であった。

◇◇

試合が終わった後俺は麗日を尋ねに医務室に向かったが、そこには既に麗日のすがたは無く治療を終えて控室に向かったことをリカバリーガールから聞いて控室にやって来た。

ドアを開けるとそこには麗日だけではなく緑谷の姿もあり目が合った瞬間、二人とも驚きの表情を見せる。

「ケガの具合はどうだ麗日?」

「う、うん大丈夫だよ」

返事を返す麗日は少し慌てた様子を見せるが、まあそれは仕方が無い。

先程の試合で麗日にはずいぶん酷いことをしてしまったからな。

それを見ていた緑谷も性格から考えてもまあ言う事は好まないだろうから何とも言えない表情をしまっている。

しかし麗日の姿を見るとあまり大丈夫とは言えないな? 額に包帯が巻かれてる所を見るとかなりキズは深いと見える。

「リカバリーガールから聞いたんだが、額の傷は一生残ってしまうかもしれないんだって?」

「別に気にしなくてもいいのに、造理くんも真剣に挑んでくれたんだから……」

——かなり無理をしているな。

明るい表情で俺と接する麗日だが、どこか笑顔がぎこちない。

「ちよつと失礼するぞ」

「いたっ!？」

俺は麗日の額に手を当てる。

やはり額のケガは深いようで手を当てた瞬間麗日は痛みを訴える。

試合の最後に繰り出した一撃で血を流していたところを見てひよつとしたらと思いきや医務室に向かったが、そこに居たりカバリーガールに聞いて麗日の額の傷は跡が残ると聞いてしまったのでここ

にやってきた。

「お前の額の傷を治す」

「へ?」

「少し痛い但我慢してくれ・・・《鍊成》」

俺は個性を発動した。

——すると

「いったああああああ!!」

「麗日さん!!」

麗日が悲鳴を上げる。

——無理も無いか? 聞いたところによると麗日の額の傷は皮下組織まで到達していたらしいか真皮まで分解して再構築したのだ。

痛み成れしていない奴からすれば激痛以外の何物でもない。

直ぐ近くで見えていた緑谷も悲鳴を上げる麗日の姿を見て大慌てしてるし・・・。

巻いてあった包帯は一緒に分解してしまっただが、これは後で直しておくでしょう。

「すつごく痛いんやけど!!」

「これで治ったはずだ」

「へ?・・・痛くない?」

俺の言葉を聞いて麗日は自分の額を触り痛みが無いことに気づく。

さらに控室にあった鏡で自分の額をその目で確認し、傷跡が全くないことが分かり多いに喜んだ。

「ありがとう造理くん!・・・でも何で?」

「リカバリーガールから話を聞いて傷跡が残ってしまうと言うから治しに来たんだ。これはあくまで祭典なんだから、こんなことで女の顔を傷物にしておくのは忍びなかった」

「あ、ありがとう! それにしても造理くんすつごく強かったよ全然歯が立たなかったよ」

明るく振舞っているが無理をしているのがよく分かる。

やはり相当悔しかったようだな? それだけ真剣に勝ちに来ていたと言うことか。

この場に俺や緑谷が居るせいで弱みを見せないようにしているんだろう。

「さっきの試合のことは済まなかった。真剣勝負とはいえ失礼なことをしてしまった」

「!? そ、そんなことあらへんよ！ むしろ本気で戦ってくれたことに感謝してるよ！」

「つ、造理くん!？」

俺の謝罪の言葉に二人が驚くが、そんなに驚くことか？ 確かに人に謝罪することはあまり無いがこれでもある程度の社交辞令は心得ているつもりだ。

「造理くんの境遇はある程度聞いてたし、ちゃんと真剣勝負をしてくれたんだからケガのことは気にしなくて「そうじゃない」・・へ？」

麗日はケガにことに対しての謝罪だと勘違いしてるようだがそうではない。

確かにケガに関しても悪いとは思っているが、俺が謝罪したいことは別にある。

「お前を過小評価していたことを謝りに来た。俺はお前を完全に舐め切っていた」

「？」

正直な所、俺は麗日は個性以外は全く脅威にならないと思っていた。

戦闘訓練の時も緑谷におんぶにだっこ状態だったし戦っても何の問題もなく終わると思っていた。

しかしいざ試合を試してみたら麗日はちゃんと戦略を練り、俺を翻弄した。

「予想以上の粘り強さを見せられて、お前を苦しめるような卑劣な手段まで取った。．．それは緑谷にしてやられたがな？」

「．．．」

そして最後には凄い罵まで仕込んでいた。

それを察知し勝負を決める為に容赦なく拳を顔面に叩き付けそれが決まった瞬間、俺は勝利を確信したがそれも空振りに終わってし

まった。

「お前が額から血を流して俺の腕を掴んだ時……俺は敗北を予感した」
「!?」

腕を掴まれた瞬間やられる思ったが、麗日が俺の腕を掴んだ時に一瞬だけ隙が出来たので何とか後ろに周り込み締め落とすことが出来た。

——自分の実力だけでは倒しきれなかったんだ。

「俺は油断はしていなかったが後一步まで追い込まれた。勝てたのは運の要素も大きかったよ……お前の強さには感服した」

「そ、そんなことあらへんよ！ ウチ何か全然まだまだだよ！」

「う、麗日さん？」

褒められることに成れてないのか麗日は少し照れてしまう。

勝者である俺が敗者である麗日にこんなことを言ってしまったら単なる皮肉と受け取られると思っていたが、どうやらその心配は無いみたいだな。

麗日も緑谷同様の人の良さがあるみたいだ。

「試合が終わってもお前の意志は砕け散ることが無かった。その時ハッキリ分かったことがあるから伝えて置きたいことがあるんだ麗日」

「？」

「——お前は必ず良いヒーローに成る」

「!!？」

「だからもっと自信を持ってくれ……お前は強い」

試合をしてこいつの中に確固たる意志と決意を見た。

こいつなら、このヒーロー飽和社会に蔓延っているようなヒーローには決してならないはずだ。

俺が今まで見て来た口先だけのいい加減なヒーローには決して……。

「ごめんデク君……ちょっと一人にさせて」

「麗日さん」

俺の言葉を聞いた麗日は両手で顔を抑え、一人になる事を望んだ。

「出るぞ緑谷」

「・・・うん」

俺と緑谷は控室を出た。

そして少し離れた所まで歩いた瞬間、控室から泣き声が聞こえてくる。

涙を流すのを相当我慢していたみたいだな・・・。

「麗日さん・・・」

「悔し涙だ。人前で流すにはどうしても抵抗があつたんだろ」

真剣に挑んだ勝負に負けて悔しくないわけがない。

こういう時は一人になって気が済むまで泣くしかない。

「僕は麗日さんの助けになれなかった」

「何もしなかった訳じゃないだろ？・・・それに助けになつてたぞ」

「えっ？」

「試合の時に前がした麗日への声援、あれで麗日は戦う意思を取り戻した。・・・会場に来ていたプロのヒーローよりもヒーローらしいことをしたぞお前は？」

「!？」

あの試合、誰もが俺を罵ったり軽蔑していたが緑谷だけが麗日を応援した。

今も俺と接しても嫌な顔一つさえない。

「あまり自分を卑下にするな緑谷。お前はヒーローとして正しいことしたんだ」

「造理くん・・・ありがとう」

助けになろうと思っただけでは何の意味もないが、助けに成るための行動をしたのならそれは気持ちだけでも大きな救いになる。

緑谷はそれが出来る人間だ。

『あ———おオ！ 切島と鉄哲の勝負が決まった!! 引き分けの末、キップを勝ち取ったのは切島だ!! これで二回戦目の進出者が揃った!』

プレゼントマイクのアナウンスが聞こえ一回戦が全て終わったことが告げられた。

二回戦・・・相手もどんどん手ごわくなってくるだろうな。

「気を付けろよ緑谷、次の相手の轟・・・今のあいつは見境がないぞ?」
「分かったよ造理くん・・・それじゃ最初だから行くね」

緑谷にささやかなエールを送る。

なんだが、今日はらしくないことばかりしているような気がするな。

普段の俺だったら、気にも止めやしないのに、こいつ（緑谷）と接していると何故か調子が狂ってしまう。

——気持ちを切り替えるべきだな。

次の対戦相手はおそらく飯田だ。あのスピードはやっかいだから、油断せずにはいかなければ・・・。

「造理くんも次の発目さんとの試合頑張って!」

俺にそう言い残し去っていった緑谷・・・。

——ん? 発目?

第27話

「轟くん三回戦進出!!」

二回戦第一試合の組み合わせは緑谷VS轟、勝利を収めたのは轟であつた。

緑谷は持ち前の大パワーの個性で轟の氷を防いで、その度に負傷していたがそれ臆することなく攻め轟を追い詰めた。

そして父親のことを気にし過ぎているせいかな試合に集中しきれない轟に渾身の思いをぶちまけて、それに影響された轟は左腕の炎の個性をし大パワー同士の個性がぶつかり合いステージ上で物凄い爆風が巻き起こりステージがボロボロになってしまった。

緑谷はその爆風で場外に吹き飛ばされたが轟はステージに留まっていた為、結果は轟の勝利で終わった。

「邪魔だ……とは言わんのか?」
「……………」

試合を終えた轟はステージを後にし通路を歩いていたが、その途中に轟の父であるナンバー2ヒーロー『エンデヴァー』が現れ轟の前に立つ。

『炎熱の操作……ベタ踏みでまだまだ危なっかしいもんだが、子どもじみた駄々を捨ててようやくお前は完璧な”俺の上位互換”となつた!』

「……………」

「卒業後は俺の元に来い! 俺が覇道を歩ませてやる!」

息子である轟が先の対戦で炎の個性を使用したことでエンデヴァーは喜びに震えていた。

息子の状態を目の当たりにしたエンデヴァーは上機嫌な様子で息子に手を差し出すが……。

「捨てられるわけねえだろう」

「?」

「そんな簡単に覆るわけねえよ」

轟は目の前に居る父親には目もくれず、ジッと自分の左手を見つめ

ている。

「ただ、あの時・・・あの一瞬だけはお前を忘れた」

「・・・」

「それが良いんか悪いのか正しいことなのか・・・少し考える」

父親に向かってそう言い残し、その場を後にしようとする轟。

「・・・まあ良い。少なくともお前がつまらない拘りを捨てつつあることは確かだ。これで次の対戦相手に成るであろう」造理 練 にも遅れは取らないだろう」

「？」

エンデヴアーの口から”造理”の名が出た瞬間、轟は驚きの表情を見せエンデヴアーの方に振り向く。

「お前・・・造理を知ってるのか？」

「彼の事に関してはヒーローならば大抵の者が知っている」

「どう言うことだ」

「彼・・・造理 練はある特殊な事情があつて多くのヒーローが認知しているのだ。その実力もな」

「・・・」

「右しか使わない状態のお前では勝ち目の無い相手だったが、今のお前ならば遅れは取らないだろう。存分にその力を振るえ」

「・・・あいつの事を知ってるなら教えてく「それは出来ない」・・・!？」

轟は造理に関しての自分が知らない情報を持つている父親に詳しい話を聞こうとしたがエンデヴアーはそれを拒絶する。

「彼に関しては守秘義務がある。故にヒーローと警察、後は政府の関係者以外に話すことが出来ないのだ」

「・・・」

「彼の事が気になつていようだが、まだヒーローの資格を持たないお前に私の口から話すことは出来ない。これはヒーローとしての責務だ」

「頼む、教えてくれ」

「話を聞いていたのか？ これはヒーローとしての責務で話せな「頼

む!」・・・焦凍?」

轟は声を大きく上げエンデヴァーに頼み込む。

「造理・・・あいつの事は入学してからずっと気になっていた。その強さも学校での振る舞い方もだ。あいつは他の奴らと違って異質だった」

「・・・・・・・・」

「今の俺は何か良くて何が悪いのかよく分からない。・・・でも、あいつのことを知れば何かが掴めるかも知れない。だから教えてくれ、造理 練のことを・・・」

「焦凍・・・」

エンデヴァーの顔を見て真剣に頼み込む轟。

普段見せない息子の姿を目の当たりにしたエンデヴァーは押し黙ってしまった。

——すると

「・・・いいだろう。だが、絶対に誰にも口外するな。これは彼を・・・造理 練”を社会的に追い込んでしまうことだ」

「?・・・分かった」

エンデヴァーは息子である轟に造理に関しての情報を話していた・・・

◇◇

一回戦の試合が全て終了し二回戦の進出者が決まった。

緑谷、轟、発目、芦戸、常闇、切島、爆豪、そして俺・・・。

以上8名が二回戦に進出し、最初の試合をしたのは緑谷と轟で勝利をしたのは轟だった。

総合的な実力なら轟の方が上だが、やはり緑谷だけあってとんでもないことばかりをしていた。

しかし轟は緑谷との試合で左腕のの炎の個性を使用し、力で押し切って緑谷を降し勝利を収めたのであった。

『さあ次の試合に移るぜえ!!』

そして次の対戦は俺の番であり、俺が試合をする相手は”発目 明

”だ。

サポート科に所属する発明マニアみたいだが、この発目と言う女子は飯田に勝利していた。

彼女はどうかやって飯田に勝ったんだろうか？ 麗日との試合の準備があつたため飯田と発目の試合は見る事が出来なかったのが悔やまれる……。

まあ過ぎたことは考えても仕方がない……今度はちゃんと試合を見ることにしよう。

『二回戦第二試合!! 選手入場だあ!! 先ずは一回戦でとんでもない悪役っぷりを見せ、プロヒーローにさえ物申してしまう怖いもの知らず! 造理 錬!!』

紹介の仕方がかなり酷くなってきたな……。

『そしてもう一人は意外や意外! 唯一ヒーロー科以外で二回戦に進出したアイテムガール!! 発目 明!!』

「ヨロシクお願いしますー!」

テンション高めで挨拶をしてくる発目 明。

可能な限り情報を集めた所、彼女は一回戦で飯田に自分が造ったサポートアイテムをフル装備させ会場に来ていた企業などの見学者にアピールさせていたようだ。

飯田は彼女の口車に乗せられていいように利用させられていた見たいだが、痺れを切らした飯田はサポートアイテムを脱ぎ捨て持ち前のスピードを生かして彼女を場外まで押し出そうとしたみたいだが、その時彼女が何かをしたらしく逆に飯田を場外に落としてしまったと言う……。

偶然なのか必然なのか、見たところ彼女は背中に大きな荷物を抱えているようだが、あれは装備か何かか? それが一体何なのかは分からないが油断ならないのは確かだろう。

『それじゃ二回戦第二試合、START!!』

スタートの合図が切られ、俺は身構える。

「メガネの人! あなたには私のベイビー達の活躍の為に協力していただきますー!」

やる気満々の様子を見せる発目 明、相手の出方が解らない以上迂闊に攻めることは出来ない。

彼女は先の対戦で飯田に勝利を収めている。

接近戦重視の飯田がいつも簡単に敗れてしまったと言うことは彼女の装備は近接戦闘に対して最も有効に働くと言うことだ。

——ならば

「《錬成》」

『造理！ 早速個性を発動して何かを造り出した!! ……って、おいおい！ またそれか?!』

「またバズーカか」

プレゼントマイクの言葉に相沢先生が続く。

バズーカ砲による遠距離攻撃、先の麗日との対戦で使用した物と同じだが弾は別物だ。

無闇やたらに接近戦が出来ない以上、これが有効な手段だ。

「WHAT！ それは本物ですか！」

「弾は模擬弾だから安心しろ。…発射！」

「NO!!」

俺は発目に向かってバズーカ砲を発射した。

模擬弾であるから当たっても命にまで関わる事では無い為、直撃狙いで発射した。

——だが、

「危ないですねえ、LADY（レディー）に向かって直撃狙いですか？」

「何っ!？」

「!!!?」

発目はバズーカ砲の弾を受け止めていた。それも唯、受け止めていた訳では無い。

「何だそれは…?」

「驚きましたか？ これは私が産み出した最高のベイビーです！」

発目の背後からアームのような物が出ていて、そのアームがバズーカ砲の弾を受け止めている。

「二回戦のエンジンの人との対戦で私のベイビー達のアピールは十分に出来ました。……だからあなたには私の最高傑作のアピールに協力していただきます！……フルオープン!!」

「?!?」
発目が上のジャージを脱ぎ去ると発目の背後から先程バズーカ砲の弾を受け止めたアームが複数飛び出してきた。

数は全部で四つ、その姿はまるでアメリカン映画に出てくる科学者みたいな姿だ。

「行きまあす！」

「早い?」

発目はアームを手足のように操りもの凄いスピードで接近してきた。

俺は発目に向かって再びバズーカ砲を発射するが……

「無駄でえす！」

「くっ！ 《錬成!》」

バズーカの弾は発目のアームによって簡単にはじかれてしまう。

俺は咄嗟に前方に壁を造り距離を取るが……

「壁なんて簡単に乗り越えられます！」

「ぐわっ！」

アームを使つていとも簡単に壁を乗り越えて来た発目に俺は突き飛ばされてしまう。

突き飛ばされた俺は直ぐに起き上がり、体制を整える。

「凄いパワーだな。かなり効いたぞ」

「驚きましたか？ 私が造ったこの最高のベイビーはアーム一本で軽自動車一台を持ち上げられる程の力があります！ 一人一人を突き飛ばす何て簡単な事です！」

「恐ろしいなそれは！」

「あなたも一回戦のエンジンの人と同じように、この最高のベイビーで場外まで突き飛ばして差し上げまあす！」

「くっ！ 《錬成!》」

四本のアームを巧みに操作しもの凄いスピードで急接近してくる

発目。

俺は金属製のトンファを二つ錬成し両腕に装備する。

「そんな装備では私のベイビーを退くことは出来ません!」

「くっ! はああっ!」

迫り来る四本のアームに対して俺は二本のトンファで応戦する。

『何と何と何とお!! サポート科の発目がヒーロー科の造理を圧倒してるぜえ!! これは思わぬ展開だあ!!』

「思わぬ伏兵が居たもんだ」

プレゼントマイクと相沢先生も驚いている様子だが、言っている事はまさにその通りだ。

彼女の言葉から察すると飯田もこのアームによって敗北したに違いない。

人一人を軽々と突き飛ばしてしまう程のパワーがあるアーム、これに掴まれてしまったら為す術はほとんど無いだろう。

「さあ、何時まで持ちますかな!」

四本のアームが縦横無尽に襲いかかってくる。

アーム一本のパワーが強すぎる為、直接受け止める事はせず受け流して攻撃を回避し何とか退いている。

しかし相手のアームの手数が多すぎて中々攻め入る事が出来ない。

旨く攻撃を回避して接近したとしても……。

「無駄です!」

「ぐはっ」

アームがうねり、接近を妨害されてしまう。

「このアームはスーパーAIを搭載しており私が考えるよりも早く動かすことが出来ます。さらに超高性能センサーによって360°全方位に対応が出来、不意打ちや視覚からの攻撃も通用しません!」

恐ろしく厄介な代物だ。

このアームはまるで生き物のような柔軟な動きをして、あらゆる方向に攻撃が出来るように成っている。

先端部分を回避しても直ぐに次の動作に移ってきて付けいる隙が

無い。

——ならば

「アームその物を破壊するしか無い！ 《錬成！》」

俺は個性で巨大な斧を造り出す。

「随分野蛮な物を造りましたね！」

「悪いがそれは破壊させて貰う。はっ!!」

俺は相手のアームの先端を紙一重で回避し、アームの横っ腹に向かって斧を思いつき振り落とす。

——しかし

ガキ——ン!!

「何っ!？」

アームは振り下ろした斧の一撃を受けても傷一つ付かず、逆に振り下ろした斧が刃が欠けてしまった。

「残念でしたね。私の造り出したこのアームは超合金、アダマンチウム」で出来ています。そんな攻撃では破壊は出来ません！」

「アダマンチウム!？」

その名は知っていた。

最近になってアメリカで開発された特殊合金で、今までの合金とは比べものにならない程の強度を持ち、世界最強の合金と言われている代物だ。

情報では強度実験で何十発もの戦車砲でも破壊できなかったらしい。

「何かすげえぞあの女の子！」

「あの装備ならヴィラン相手でも十分に戦えるな」

「レスキューの面でも十分に役立つ装備だ」

試合を観戦している観客達も発目のアームに目を奪われている。

「良いですね良いですね！ これは十分なアピールに成っています！ 高価な素材を使って造り出した甲斐がありました！」

観客達に目をやりながらも攻撃の手を緩めない発目、俺は何とか紙一重で回避を続ける。

スーパーAIに超高性能センサー、さらにアダマンチウム合金…

こんな代物を造るのにどれだけの予算を注ぎ込んだのやら……。

しかし、これで勝利への糸口が見えた。

「さあ、追い込みましたよ！」

「……………」

俺はステージの角にまで追い込まれた。

『オーツと造理！ 遂に追い込まれちゃった！ 最早打つ手無しか！?』

「ここで終わるか？ 造理……」

プレゼントマイクの実況がうるさく響く。

しかしステージの角に追い込まれてしまったことによって逃げ場は無くなってしまった。左右にも後ろにも一歩でも踏み出してしまえばそこで場外負けとなってしまう。

「決着が付きそうですねメガネの人」

「……………」

「あら、もう諦めましたか？ 潔いですね」

勝利を確信した様子を見せる発目 明。

「それじゃ遠慮無く場外に突き飛ばして差し上げます！」

発目のかけ声と共に四本のアームが同時に向かってきた。

これをくらってしまったら敗北は確定だ。

四本のアームの先端が俺に直撃した瞬間……。

『発目の強烈な一撃が決まったあー!! これで勝負は決まったか……』

へ?』

「!!!!!!」

四本のアームが粉々に成っていった。

「え？ 何が起き「残念だったな」うわっ!？」

アームが破壊されたことの動揺した発目に俺は急接近して掴み掛かって投げ飛ばし、そして……。

「だっ！ イタっ！」

発目を場外に落とした。

「発目さん場外！ 造理くん三回戦進出！」

ミッドナイトの宣言によって勝敗は決した。

『何と何と何と！ まさかの太どんでん返しだ!! 圧倒的窮地に追いやられてた造理が見事に逆転勝利を収めたぜ!!』

何とか勝利を収め、俺はようやく一息付くことが出来たが、今回の試合はかなり危なかった。

一回戦の麗日もそうだったが、まさか女子相手にここまで手こずるとは正直思わなかった。

麗日の時は事前に情報を仕入れることが出来たからまだマシだったが、今回の発目に関しては全くのNOマーク……この体育祭のダークフォースは間違いなく彼女だろう。

俺は場外に落ちた発目を見てみる。

——すると。

「私のベイビーが!!」

発目を見るも無惨に破壊されたアームを見て涙を流していた。

試合に負けたことよりも自慢の装備が破壊されたことの方がショックだったようで、壊れたアームをひたすら撫でて慰めている。

道具を慰めている光景はかなり異様であったが余程自分の造り出した発明品に愛情を注いでいたのあろう。

そんな発目を見た俺は少しばかり罪悪感が沸いてしまい、ステージを降り彼女の元に近づく。

「アームの事は済まなかった。大事な発明品を破壊してしまったな」

「ぐす、……謝ることはありませんメガネの人。これは試合なのですからこうなることも覚悟していました。すぐに直して、もっと強くして見せます!」

涙を拭いながら返事を返してくる発目。

彼女は思ったより大人みいだな、後ろを振り向かずしつかりと前を見て進んでいるようだ。

「それよりもメガネの人。あなたどうやって私のベイビーを破壊したのですか？ アダマンチウムで出来た私のベイビーは大砲を使っても破壊は不可能です。あなたは個性は、確か物を造り出す個性の筈なのに……」

「俺の個性はちよつと特殊でな、個性の発動に対して段階があるん

だ。．．．そしてアームを破壊できたのはお前のお陰でもある」
「？」

俺の個性”錬金術”は三段階の過程で成り立っている。

まずは素材の元になる物の”理解”から始まり、それを”分解”。
そして分解から”再構築”によって物を造り出す。

アームを破壊したのはこの二段階目の過程である”分解”の力を
使ってアームを破壊したのだが、”分解”をするには対象となる物や
素材の構造を正確に理解しなければならない。

試合前半ではこの”分解”の力を使用する事は出来なかったが、試
合後半での発目の発言が仇と成っていた。

「お前が試合中にそのアームが”アダマンチウムで出来ている」と
言ったお陰で破壊が出来たんだ。対象と成る物質の構造さえ解れば、
触れるだけで何でも分解することが出来、別の素材に再構築する事が
出来るんだ」

「．．．．」

「自慢の装備をアピールするためのおしゃべりが仇に成った「何と！」
ん？」

俺の説明を黙って聞いていた発目が突然大きな声を上げる。

「分解して別の素材に再構築出来る!? つまりあなたはどんな金属も
造れるって事ですか!？」

「!?．．．まあ、元素が同じ物であれば．．．」

「素晴らしいです、それは！」

発目は試合の時よりも大きくテンションを上げ、俺の腕に掴んで来
た。

「私あなたに興味が沸きました！ あなたとお近づきに成れば色んな
発明が出来そうです！ 是非、私とお友達成って下さい！ 後で携帯
番号とメールアドレスを交換しましよ！」

「あ．．．うん」

やたらと強引に押し込んでくる発目。

何だろうか、今までに見たこと無いタイプの女であるから、接し方
がよく分からない。

「こらそこの二人！ そんな所でイチヤイチヤしてないでさっさと退場しなさい！ 次の試合が控えてるんだから」

「あ、失礼。．．．とりあえず行こうか」

「はい！ 体育祭が終わったら沢山お話しましょう！」

ミッドナイトに注意を受け、俺と発目は早々に退場していった。

俺は二回戦も勝利を収めたが、何とも締まらない終わり方であったことは否めなかった．．．。

第28話

「死ねえ!!!」

「ぶはっ!!」

『爆豪の強烈な一撃が決まったあ!!』

プレゼントマイクの実況がうるさく響き渡る。

雄英体育祭決勝トーナメント二回戦第四試合、対戦カードは爆豪VS切島。

試合序盤は硬化個性を持った切島が鉄壁の防御力を駆使し優勢になっていたが後半になって失速、逆にスロースターターである爆豪が徐々に盛り返して行き切島に向かってとどめの一撃を食らわした。

「切島君戦闘不能! 爆豪君、三回戦進出!」

ミッドナイトの判定により試合終了、爆豪が勝利を収めた。

『二回戦が全て終了した! これでベスト4が出揃ったぜ!!』

決勝トーナメント三回戦。

進出者は轟、常闇、爆豪、・・・そして造理の四人となった。

「準決勝まで来たか」

「ここまで来たたら一気に盛り上がりそうだね」

「次の対戦は轟と造理だな」

「特待生同士の対戦か」

「ある意味で事実上の決勝戦ね」

観覧席にて試合を見ているA組一同、それぞれ次の対戦カードの意見交換をしていた。

そして別の場所では・・・。

「緑谷君」

「? 飯田君」

飯田に声を掛けられる緑谷。

二回戦で轟と対戦した緑谷は重傷を負いリカバリーガールの元で治療を受けていたが、歩ける程度には回復し会場に出入り口付近で立ち見していた。

「ベスト4まで出揃ったな」

「うん。造理くんは発目さんに勝ったみたいだね」

「ああ。僕が為す術無く敗北した相手に勝ってしまうなんて、やはり造理くんは強いな」

自分を降した発目に勝利を収めた造理を高く評価する飯田。

「造理くんのあの強さ——やはり、彼の境遇に関係するのかな？」

「それは——」

飯田の言葉に緑谷は口ごもってしまった。

そして緑谷は数日前の事を思い出す。

USJでのヴィラン襲撃の後、保健室でのオールマイトとの会話を——。

◇◇

「——これが、造理少年が歩んできた出来事だよ」

「そんな、そんなことって……」

USJでヴィランの襲撃にあった日、重傷を負った緑谷とオールマイトはリカバリーガールの治療の元、保健室のベットにて安静をしていたが、襲撃してきたヴィランが発した言葉が気になっていた緑谷がそのことをオールマイトに質問し造理の境遇の全てを知ることと成った。

ヴィランの狙われていること、親が逃亡したこと等々を……。

「家族が見捨てたんですか！」

緑谷が最も驚いたのはそこであった。

以前、飯田や麗日と共に造理がヴィランと遭遇した所を居合わせた事で造理がヴィランに狙われて居る事は知っていた緑谷だったが、造理が親に捨てられている事は信じられないようで居た。

「造理少年の両親は海外に逃亡し名前を変えているらしい。警察が調べ本人達に問いただしても知らないの一点張りらしく、それ以来彼は警察の管理下の元、今も一人で暮らしている」

「そんな……」

緑谷自身、元・無個性で合ったこともあって、人がどのような状態であっても親だけは味方であり見守ってくれる存在であると言う事

を疑っていなかった。

その親が造理を見捨て逃亡したことに緑谷は驚きを隠せずに居る……。

「でもそれなら何故一人で暮らしてるんですか？ 警察やヒーローなどと一緒に暮らした方が……」

「それはあの子を狙っているのがヴィランだけじゃないからださね」

「！ リカバリーガール！」

緑谷とオールマイトとの会話を側で聞いていたリカバリーガールが口を挟んできた。

「全く、あまり口が軽いのも考え物だよオールマイト？ 政府の人間以外にはヒーローと警察にしか話しちゃいけないことを話すのは……」
「う、申し開けない。——しかし、緑谷少年はヴィランを通じて知ってしまったから仕方が無いのです」

「それは聞いたね。緑谷もこの事は絶対に口外しちゃダメだよ」

「はい、分かっています。——それよりもさっきの事は一体……」

リカバリーガールに念押しをされた緑谷だが、先程リカバリーガールが発した言葉が気になって仕方が無かった。

「言葉の通りだよ。警察や一般人、——それにヒーローの中にもあの子を狙っている者が居るのさ」
「？」

「私が説明しよう」

リカバリーガールの言葉に首を傾げる緑谷。

その仕草からしてリカバリーガールの言葉の意味を理解出来ないようであり、代わりにオールマイトが答える。

「一般人を含めて警察やヒーローは必ずしも全てが善良な人たちとは限らない。——中には、よこしまな心を持つ者もいて、犯罪に手を染めてしまう者もいる。」

「！——まさか！」

オールマイトの言葉の意味を察した緑谷が驚きの声を上げた。

「そう、そのまさかだ。警察やヒーローの中にも造理少年に目を付け、犯罪を犯した輩がいたのだ」

「で、でも、そんなことが公になったら…」

「情報規制によつてそのことは一切明るみに成つてはいないよ。そしてそのことは造理少年自身にも口止めがされている」

「そんな…」

緑谷は言葉を失つたが、それもそのはず。

本来ならば一般市民を守る立場にあるはずの警察やヒーローの中に悪事を働く者が居ること、特にヒーローの中に居ることが緑谷に取つては信じられないことであつた。

緑谷に取つてヒーローは憧れであり神格化まで為れているもの、そのヒーローが悪事を働き一般人に危害を加えていることが信じられずに居た。

「造理少年に対してあまりにも身勝手な行いで有ることは私も重々承知しているよ。と言うより、造理少年にも呆れられているからね」
「えっ?」

「当時…まだ造理少年が幼かつた頃に警察やヒーローの悪事を口止めするために彼の元に警察と複数のヒーロー達が赴いたんだ。しかしその者達に対して造理少年の対応はとてもサツパリしていたらしい」
「?」

「その者達に対して彼は無表情で『精々、お仕事を頑張つて下さい』—と、言つたそうだ」
「……」

その言葉を聞いて緑谷は黙つてしまう。

『精々、お仕事を頑張つて下さい』…それはどう聞いても皮肉としか捕らえることが出来ない言葉であり、造理が警察とヒーローに対して如何に失望しているかを示していた。

「それ以来、造理少年は誰かを信じ、人に頼ると言う事をしなく成つてしまつたのだ」

「じゃあ、造理さんの強さの秘密って…」

「誰にも頼らず宛てにしない。彼は独学で戦闘術、護身術、戦略術、そして個性の扱いを磨き上げて行き、己に仇名す者達と戦つてきたのだ。決して他人を巻き込まないように…」

「……………」

言葉を失う緑谷は以前の事を振り返る。

入学当初、飯田や麗日と共に造理とお近づきに成ろうとしたがことごとく断れてしまったこと。

そして学校外においてのヴィランとの遭遇の日にハッキリと拒絶されてしまった時のことを…。

「今の造理少年にとって”ヒーローに成る”と言う事は、単なる”個性を自由に使用出来る権利を得る”と言う事でしか無くなつてしまっているんだ。——他ならぬ自分自身を守る為に」

「……………」

「造理少年を何とかして真つ当な人生を歩めるように我々ヒーローは導こうとしているが中々上手くいかない。彼は表向きは平常に振る舞っているが心の中では未だに人を信じようとしていない様子」それは違うと思います——?」

オールマイトの言葉を途中で遮る緑谷。

「造理くんはちゃんと人を信じる事が出来る人だと思います。USJの時だって造理くんは僕と一緒に死ぬ覚悟だつて見せました」

「! 緑谷少年、それはどう言う…」

「それは……………」

緑谷はUSJで起こっていた事を話し出した。

オールマイトが到着する前に造理が相沢と共に強敵と戦っていたこと、ヴィランの主犯格に連れ去られ欠けていたこと、そしてそれを緑谷自身が阻止し一緒に死ぬ覚悟でヴィランの前に立ち戦おうとしていた事を…。

「造理くんはその気に成れば一人で逃げることも出来たはずなのに、その素振りさえ見せませんでした。——そして、オールマイトが到着してヴィランに苦戦していた時も、僕やかっちゃん、轟くんや切島くんに協力を仰いで戦いました」

「そんなことが……………」

「だから、造理くんは決して自分の事だけを考えているとは思えないんです。少なくとも僕は臆すること無くヴィランに立ち向かう造理

くんの姿はヒーローのように見えました」

「……………」

緑谷の言葉に今度はオールマイトが黙ってしまった。

自身が知らなかったことを聞かされて、自分の生徒達がそのような目に遭っていた事を知り、悔いる気持ちが湧くオールマイトであったが、それよりも愛弟子である緑谷から聞いた造理の振る舞いが気に成っていた。

「緑谷少年。君は造理少年の事をちゃんと見ていてくれているようだな」

「造理くんには助けしてくれたこともあります。——だから彼にはちゃんと向き合いたいと思ってるんです」

自分の真意をオールマイトに伝える緑谷。

緑谷の言葉を聞いたオールマイトは感銘を受けたかのような様子を見せる。

「緑谷少年。造理少年の事をこれからも見てあげてはくれないか？」
「え？」

「話を聞く限り、造理少年は君の事を信用しているようだ。だから彼の事を見てあげてほしい」

「信用！ 僕はそんな…」

オールマイトの言葉に緑谷は声を上げた。

いきなり造理から信用されている等と言われて、驚きと戸惑いを見せているが、オールマイトがさらに言葉を続ける。

「共に戦い、共に死ぬ。——そんなことはプロのヒーローでさえ早々出来ることではないし、その覚悟も無いだろう。しかし造理少年は君と一緒にそれをしようとした。つまり彼は緑谷少年の事をそれだけ信用していたと言う事だ。君は知らず知らずの内に彼の信用を得ていた——いや、勝ち取っていたと言える」

「造理くんが僕を……」

「そんな君だからこそ、彼を見てあげて欲しいんだ。君は我々教師陣が出来ずにいたことを誰よりも早くやってのけてしまったのだよ」

「……………」

オールマイトの言葉に対して緑谷は沈黙を貫く…。
——そして。

「分かりました。僕に出来る事なら何でもします」
「おお、ありがとうございます緑谷少年！」

緑谷はオールマイトのお願いを心良く引く受け、それを聞いたオールマイトは喜びの声を上げた。

「青春さあね。——さあ、おしゃべりはそこまでにしてゆっくり休みな。今は身体を休めて怪我の治療に専念しないと…」

「あ、はい」

「うむ、しっかり休むでしょう」

リカバリーガールの注意を受けた緑谷とオールマイトはゆっくり休み眠りについて行った…。

◇◇

「聞いた話だと造理くんはこの雄英体育祭で活躍してその強さを示し、テレビの向こうに居るヴィラン達を牽制しようとしているらしいけど決してそれは簡単な事じゃ無い」

造理の素性もこの雄英体育祭で目的も知った緑谷は造理に対して並々ならぬ思いを抱いているた。

——すると、その時。

「緑谷君。この対戦、どうなると思う？」

「え？ あ、うん、…轟くんも造理くんもどちらも有力な個性の持ち主だから正直に言っただけ分からないよ」

次の対戦カードが気になっている飯田が突然、緑谷に質問をぶつける。

緑谷自信もこの対戦カードが気になっていたが、どうなるかは検討がつかずにいた。

「轟くんは僕との対戦で本気を出した。造理くんの力は未だに未知数。…どっちが勝ってもおかしくないと思う」

「注目の戦いだな」

二人は真剣な面持ちでステージに目をやる。

——そして。

『さあ、焦らしたくねえからさっさと始めようぜ！ 準決勝第一試合はこの二人だ!!』

プレゼントマイクによって第一試合の対戦カードが紹介される。

『まずはこの男！ ここまで圧倒的な強さを見せつけて勝ち上がった来たナンバー2ヒーロー『エンデヴァー』血を引くサラブレット！

ヒーロー科A組、轟 焦凍!!』

プレゼント・マイクの紹介と共に姿を現す轟。

『対するは、こちらにもヒーロー科A組！ 予選では圧倒的な成績を収め、この決勝トーナメントでも余裕を見せて勝ち進んできた男、造理練!!』

そして反対側から造理が姿を現した。

『さあ、お互いここまで好成绩をたたき出ししてる強者同士の対決だあ!!』

ステージに上がり互いを見つめ合う轟と造理。

造理は無表情で轟を見ていたが、対する轟は真剣な面持ちで造理を見つめていた。

「(こいつの戦法は相手の出方を伺うカウンターが主体。それ以外は個性で武器を造つての遠距離攻撃がほとんどだ。)」

今までの造理の戦いを見ていた轟は相手の戦術を分析していた。

「(こいつは戦いにおいて隙を造らないようにしている様子だ。——なら)」

何かを決めたかのように轟は身構える。

対する造理は変わらず無表情で棒立ちしていた。

『さあ、準決勝第一試合!! 全員心して観戦しろ!!』

プレゼン・トマイクの実況に観客全員が息を飲んだ。

——そして。

『スタ——ト!!』

「(一瞬で終わらせる！ 食らえ!)」

「!!!」

スタートの合図と共に轟が個性を発動しステージが氷結した。

一回戦第二試合での瀬呂との対戦の時とは違つて氷柱を出すわけでは無くステージ全体を氷結させて相手が完全に逃げられないようにしていた。

その結果、造理は……。

「……………」

「つ、造理くん……う、動ける?」

首から下が完全に凍り付いていた。

質問していたミッドナイトも身体の半分が凍り付いていて、かなり辛そうにしていたが、その光景は一回戦第二試合の轟VS瀬呂での事と同じようであつた。

しかも氷結の範囲は広く、ステージを超えて観客席の直ぐ近くまで凍り付いている始末、危うく観客まで凍り付けに成りそうであつた。

「あぶなかつたなあ」

「これって一回戦と同じパターンじゃね?」

「またドンマイか?」

氷が直ぐそこまで迫つて来てヒヤツとした観客、——しかし、一回戦と同じパターンを思い出されてしまつて呆れる様子も見せていた。

——だが、その時。

「《錬成・分解》」

「!?」

「!!!」

「!!!」

ステージ上に張り巡らされていた氷が一瞬で消え去ってしまった。

造理の身体を覆っていた氷もミッドナイトを覆っていた氷も綺麗さっぱり無くなつていた。

「轟。仮にもヒーローを目指してるなら、主審に被害が出るような攻撃はするな。無用な被害を出すのはヒーローとしてナンセンスだと思ふぞ?」

「くっ!」

涼しい顔をして轟に注意を投げ掛ける造理。

轟の攻撃に対して全く堪えたようには見えなかった。

「ミッドナイト先生、一切問題有りません」

「！　　そ、そうね、氷を片してくれて有り難う。――試合続行！」
造理の言葉を受けたミッドナイトは感謝の言葉を述べながら試合を続行させた。

「さあ、続きを始めよう」

「――覚悟しやがれ」

二人の対決が再開されて行った――。

第29話

「まさか、ここまでとは……」

会場の誰かがそう言った。

雄英体育祭決勝トーナメント準決勝第一試合、轟VS造理の試合が行われていた。

しかし、現在の試合の状況は……。

「ぐわあっ！」

「おそい」

造理が轟を圧倒する一方的な状態に成っていた。

試合開始直後、轟が個性を発動し強烈な一撃を造理に食らわしたが、造理はそれを難無くと突破。

試合は再開され、轟はさらに個性を繰り出すも……。

「無駄だ」

「ぐっ！」

轟によつて繰り出された氷による攻撃は造理の個性によつて全て打ち消されてしまい、その隙を突かれて接近を許してしまった轟は再び攻撃を食らってしまう。

『オーツと轟！ またもや強烈な一撃を食らっちゃまった！ 大丈夫か

おい!？」

「おいおいマジかよー！」

「エンデヴァアの息子が圧倒されてるぞー！」

プレゼントマイクの実況がうるさく鳴り響く中、観客達が声を上げる。

今まで圧倒的な強さを見せここまで勝ち上がってきた轟が一方的にやられている姿を一体誰が予想しただろうか。

圧倒的勝利とまでは行かなくても接戦を期待している者の方が多かったであろうこの試合、蓋を開けて見たらこの有様。

ナンバー2ヒーロー”エンデヴァア”の血を引く者がことごとく蹂躪される姿を目の当たりにして驚きを隠せない者が多く見られた。

「(何をやっている焦凍!)」

観客席にて息子を観戦していたナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”はやきもきしていた。

二回戦が終わった時、相手である造理が手強い相手であることを忠告したにも関わらずいいようにやられているこの状況。

——何より。

「(何故、”左”を使わない!?)」

そう、ここまで試合が進む中と言う訳か轟は”左”を使用していなかったのである。

「(”左”を使え! 出なければお前に勝利は無い!)」

エンデヴァーは心の中でそう叫びながら試合を観戦していく。

——場所は変わって。

「轟の奴、一方的にやられてるぞ!」

「造理ってあそこまで強かったの!」

「でも、轟ちゃん”左”使っていないわよ?」

「それでも一方的過ぎるだろ!」

A組の面々も一方的な試合展開に驚きを見せていた。

そんな中、緑谷は・・・。

「(——何だろう、何か変だな)」

A組の皆と一緒に試合を観戦していた緑谷だけはこの試合の展開に疑問を抱いていた。

「(造理くんはともかく、轟くんはちょっとおかしいぞ? さっきから

同じような攻撃しかしてない)」

他の面々は轟の個性の強さばかりに気を取られていたから気付いていないが、ヒーロー分析を得意とする緑谷は気付いていた。

試合開始直後から轟は造理に対して氷の個性でのワンパターンな攻撃しか行っていないと言う事を・・・。

「(一体どうしたんだ轟くんは? 僕と試合をした時よりもおかしい)」

轟のおかしな行動に疑問を抱きながらも、試合の行く末を見守る緑谷であった・・・。

◇◇

「フンっ！」

「ぐふっ！」

俺は轟に向かって攻撃を繰り出した。

試合が開始してから数分、試合は俺が一方的に圧倒している状態であった。

轟が繰り出す氷の個性も……。

「無駄だ」

「くっ！」

「何度やっても同じだ」

問題なく打ち消している。

そもそも俺に対して轟の氷結の個性はあまりにも相性が悪かった。

轟の氷の個性は圧倒的な攻撃力を誇っているが、所詮は”氷”と言う物質を放っているだけ。

物質の構成さえ理解してれば、あらゆる物を分解出来る俺に対して全く意味を成さないものである。

触れさえすれば氷は直ぐに分解出来てしまう。

一瞬で脳みそまで凍結されれば話は別だが、試合である以上はそのようなことは出来ないし、何の問題も無かった。

さらにそれだけじゃない。

「ふんっ！」

「当たるかー！」

「こっちだ」

「ぐはっ！」

俺はフェイントを交えた攻撃を繰り出し轟の腹部を捕らえる。

俺と轟とでは戦闘技術にも差があった。

轟は父親であるエンデヴァーによって幼い頃から厳しい特訓を受けていて、その戦闘技術は大したものだが所詮は”訓練”だけで得た力だ。

変則的な攻撃に全く対処が出来ていない。

対して俺は幼い頃からヴィランに狙われてそれらを撃退してきた

事によって得た”実戦”で得た力、訓練と実戦では違いが明らかであり、実戦を縁に経験していない轟と俺とでは、どうしても差が生まれてしまう。

「体育祭が始まる前にも言った筈だぞ？」 今のお前では俺には勝てない” って」

「ちっ」

「なあ、轟」

「？」

俺は動きを止めて、轟に声を掛ける。

ここで俺は轟に対して抱いていた疑問をぶつけた。

「お前、…一体何に悩んでるんだ？」

「!？」

俺は轟に問いかけた。

試合開始からここまでの間、試合をしながら轟を観察して分かった事なんだが、どうも今の轟は集中力が欠けていた。

試合内容がとても単純に成っており、轟が氷の個性を発動し俺がそれを相殺し、そして俺が轟に向かって個性を使用しない攻撃を繰り返す。

さつきからこれを繰り返している状態だ。

派手な個性を打ちまくりそれを相殺する事が目立ちすぎて気付いていない者も多いみたいだけど、実際に戦っている俺からして見たら何とも締まりが無い展開であった。

「やる気が無いならさつきさと降参しろ。俺は戦う意思が無い奴と戦う気は無い」

「……」

俺の言葉に轟は何も答えない。

こいつは今、一体何を考えているのかどうもよく分からない。

この試合で轟は”左”使わずに居る。てつきり父親であるエンデヴァーに対して、まだ拘りを抱いているのかと思っていたが、どうも違うようだ。

試合そのものに集中出来ていないように見える。

今のこいつなら居眠りしながらでも勝てる気がしてしまう……。

「……」一つ聞きたい」

「？」

しばらくすると轟が声を出し俺に話しかけてきた。

一体何を言うのやら……。

「お前……親を恨んでないのか？」

「!？」

轟の言葉に俺は声は出さなかったが驚いてしまった。

今こいつは言った言葉、その言葉の意味を直ぐ理解してしまったから……。

「——誰から聞いた」

「……」

俺の問いに轟は何も答えない。

しかし轟は視線だけを別の方向に向けていて、その視線の方角に居るのは……。

「——エンデヴァーか」

轟の視線の先には観客席にて試合を観戦しているナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”の姿があった。

どうやら轟は父親から俺の事を聞いたみたいだ。

俺の素性に関しては一様、守秘義務に成っているのに何故こいつに話したのやら……。

「それを聞いてどうする？」

「——俺自身、何か変わるかも知れないと思った」

どうやら轟は俺の素性を知ったことで試合に集中出来ていなかったようだが、何とも身勝手な理由だった。

他人の家庭事情がそこまで気になる事なのか疑問に思うが、俺の家庭事情に何か親近感でも抱いたのだろうか？ 自分の境遇と重ねて居るのだろうか？

——でもそれならまだマシだと俺は思ってしまった。

もし俺に対しての同情であったなら容赦なく叩きのめしてやろうと思ったが、あくまで自分の為であると言う事を明確に表している。

その辺にたむろって居る無意味な善意を振りまく偽善者達に比べたら遙かにマシだ。

「——意味が無い」

「？」

「親を恨むと言う行為自体が、今の俺に意味をなさないんだよ」

「……」

俺は観客席に聞こえないように小さな声で答えてやった。

逃げた親に対しては……全く気にして居ないと言えば嘘になるが、気にした所で何かが変わるわけではない。

俺が幾ら親を恨んだ所で俺自身が救われる訳じゃ無いし、今の俺の現状が変わるわけでもない。

つまり逃げた親に構った所で俺には何のメリットも無いのだ。

それよりもっと優先するべきとことの方が俺には多いいから、そちらに時間を費やした方が有効である……

「逃げた親に時間を割く余裕が俺には無い。今を必死に生きて未来に備えるだけだ」

「……」

「逆に聞くが、お前——母親が大事か？」

「!？」

俺の言葉に轟は意表を突かれたかのような顔を見せる。

決勝トーナメントが始まる前、轟から自分の境遇を聞かされたが、その内容からしてこいつは母親のことがとても大事なんだろう。

自分に煮え湯を被せ顔に大やけどを負わされてにも関わらず、それをやった母親は恨まずに母親を追い詰めた父親に怒りを向けていた。

如何に母親を大切に思っているのかがよく分かる……

——だから。

「いい加減、気付いたらどうだ？」

「？」

「お前……オールマイトのようなヒーローに成りたいんだろ？」

「!？」

俺の言葉に轟は再び驚きの表情を見せる。

これは二回戦第一試合での緑谷と轟の対決で気付いたことなんだが、緑谷との対戦で”左”を使用した時の轟は笑みを浮かべており、緑谷と同じような雰囲気を出していた。

緑谷に感化された事で内に秘めていた思いが湧き出したんだろう。こいつも緑谷同様、オールマイトのようなヒーローに憧れているに違いない。

「正直、今のお前を見ると呆れを通り越して、イライラする。堅実でもなければ冷酷でもない、天秤のように揺らされている迷い人だ。」

「そんなことは言われなくたって分かる、」

「分かっただろう？ 成りたいものがあるなら他の事なんかは気に取られるなんて、時間を無駄にするだけだ」

「……」

「それにお前には父親に復讐するよりも成すべきことがあるんじゃないのか？」

「？」

轟は俺の言葉の意味が分からないようで疑問の表情を浮かべた。

ちよつとお喋りが過ぎているかも知れないが、正直に言っただけだ。は見るに堪えなかった。

決勝トーナメント開始直後の轟は父親に対しての怒りに身を任せていたけどまだ真っ直ぐに突き進んでいるように思えたから特に何も思わなかったが、今のこいつは何をすべきか分からずに居る迷える子羊のようだ。

俺は優柔不断な奴が好きでは無いから、そういう奴の相手をするのはあまり気分が良くないし、俺自身が萎えてしまう。

だから俺は轟に対してある程度の助言をすることにした。

「もしお前が本当にオールマイトのようなヒーローを目指してるなら……」

「……」

「まずは身内である——母親を救って見せろよ。それがお前の目指すヒーローの形だろ？」

「!!？」

轟はこれまでに無いような驚きを見せた。

こいつは母親を大切に思っている、ならばこいつが真っ先にすべき事は直ぐ近くに居る救わなければ成らない人物、——母親に手を差し伸べて救ってやることだ。

ヒーローが本当にしなければならぬことは人を”救う”ことなのだから……。

「……………」

俺の言葉を聞いた轟は沈黙を貫いていた。

「おいおいどうした?」

「何で二人とも動かないんだ?」

少しお喋りが長かったようであり観客達から声が上がりに始めていた。

俺も柄にも無い事を喋ってしまったから特に弁明は無いのだが、唯何もせずに時間だけが過ぎてく状態は流石に良くないと俺も思ってしまう。

——すると、その時

「——フフ」

「?」

「フフ、ハハハハ、ハハハハハハハハ!」

「「??」」

突然、轟が声を上げて笑い出した。

『おいおいどうした事だこれは!? 突然、轟が笑い出したぞ!!』

「轟が笑う? ……初めて見たな」

プレゼント・マイクだけでは無く、側に居た相沢先生まで驚いている様子だがそれも仕方が無い。

学内において常に無表情でいてろくに感情を見せなかった轟が声を上げて笑っていたのだから……。

「俺が言ったことがそんなにおかしかったか?」

「ハハハハ、ハハ…、はく…いや、違う」

「?」

「——スッキリしただけだ」

轟は俺を真っ直ぐ見てそう告げてくる。

その表情は先程までの集中力を乱し迷える子羊のような表情とは違い、迷いが晴れ真剣に何かを見据えたかのような、決意を固めた表情であった。

「札を言う造理。これまでに無いほど爽快な気分だ」

「それは良かったな」

「ああ、だから」

「？」

意味深げな言葉を吐く轟。

——すると。

「——ここからは”全力”で行く！」

「!!」

そう言った瞬間、轟の左腕から炎が飛び出した。

今まで使用しなかった”左”を使ったと言う事だ。

「——迷いが晴れたのか？」

「ああ、綺麗サツパリな」

笑みを浮かべながら答える轟、どうやら本当に迷いが晴れたようだ。

——これは少し、厄介なことに成りそうだな。

「もうさつきまでのようにはいかねえ。タツプリ借りを返してやる！」

「——掛かってこい。返り討ちだ」

再び轟との戦いが始まって行った……。

第30話

『さあさあ！　ここにきて轟が本気に成った！　この試合分からなくなってきたぜえ!!』

造理VS轟の対決、試合の序盤は造理が一方的に轟を追い詰める状態であったが、轟は“左”の火の個性を解放し本領を發揮する。

「はあっ！」

「くっ！　《錬成！》」

轟は火の個性を駆使し造理に向かって放ち、造理は壁を錬成しそれを防ぐ。

しかし、轟がその隙を突いて・・・。

「もらった！」

「くっ！　何の！」

「ちっ！」

轟が造理に急接近し攻撃を繰り返すが、造理はそれを危なげなく交わした。

『惜しい！　造理の奴、急接近を許すも何とか凌いだけ!!』

「造理が押され始めてきたか・・・」

現在の試合状況は轟が優勢の状態であった。

「おいおい今度はエンデヴァーの息子が押し始めたぞ！」

「あの火の個性は凄いな！」

「流石ナンバー2ヒーローの息子だ！」

試合展開が変わったことで観客達は驚きの声を上げる。

——そしてこの男も。

「(そうだ、それでいい焦凍！　それでこそ俺の息子だ！)」

同じく観客席に居たナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”は、“左”を使用し本領を發揮したことで口には出さないが喜びの声を上げていた。

——さらに場所は変わり。

「おいおい、轟が急に強くなったぞ！」

「立場が逆転したね！」

「造理が押されてるぜ！」

「どうなるんだこの試合！」

ヒーロー科A組一同も全員が驚きの声を上げている。

その中でこの男は……。

「轟くんの火の個性に対して造理くんは何も出来ていない。防戦一方だ……」

造理VS轟の試合を静かに観戦していた緑谷は、造理が押されているこの試合展開を冷静に分析していた。

「(ひよつとして造理くん……火に対する対処が出来ない？ ならこの試合は……)」

緑谷はこの後の試合展開を予測するのであった……。

◇◇

「はっ！」

「くっ！《錬成！》」

轟は再び火を放つが造理はそれを壁を錬成して防ぐ。

さらに轟はその隙を突いて急接近をするが、造理はそれを許すまいと距離を置く。

「造理」

「？」

「お前、——火を分解することが出来ないだろ？」

「(見破られたか)」

轟の言ったことにはある意味正しかった。

造理の個性“錬金術”は対象に触れなければ発動することが出来ないものであり、正確に言えば火を分解出来ないわけでは無いのだが、対象に成る物が“火”であることが問題だった。

”火”と言うのは高温で有るが故、近づくだけでダメージを負ってしまう。

——つまり、”触れて分解する”と言う行為が出来ないのだ。

大火傷を覚悟で行えば話は別だが、それは意味が無い。

「どんどん行くぞ！」

「くっ！」

轟は火を纏いながら造理に向かって接近する。

現在の轟は自身の左半身を火で纏いながら近接戦闘をしかけていて、例えば大火傷を覚悟して火を分解したとしても、無造作に火を発生させることが出来る今の轟には全く意味を成さない。

ある意味に置いては今の轟は造理が最も苦手とする相手に成っていた。

『強いぞ轟！ 先程までの劣勢が嘘みたいだ！ 造理をどんどん追いかけてやがる!!』

プレゼント・マイクの実況がうるさく響く。

しかし言っていることは正しく、現状に置いて造理は轟に対して有効な手立てが無い状態である。

造理はこの状況を打破する為に知恵を絞っているが……。

「これで決める！」

それよりも早く轟が仕掛けてきた。

「くっ！そうは行かない！」

「どうかな？」

「何？ ぐはっ!？」

轟が中距離で炎を放ち、造理はそれを危なげなく回避したが、回避した先で何かに衝突する。

——そこにあっただのは。

「何だ！ 氷!？」

造理が振り向くとそこには氷の壁がそびえ立っていた。

「まさか、個性を同時に発動したのか!？」

「上手く行った！」

轟は俺を追い詰める為に右の氷と左の火を同時に発動したのであった。

「今度はよけれねえぞ！ 食らえ！」

「不味い！」

行き場を失った造理に向かって轟は炎を放ち、造理は炎に包まれ

た。

『轟の火が造理に決まったあ！ 造理が炎に包まれる……つて、これヤバくねえか!?』

『よく見る。燃えてるのは造理じゃない』

『へっ? ……ジャージ!?!』

燃えていたのはジャージの上。

造理は身に付けていたジャージの上を掴にして何とか直撃を避け
ていた。

「あつついな、全く……」

ジャージを掴にして何とか難を逃れた造理。

しかし完全に回避できた訳では無く多少のダメージを受けてしま
う。

「ちっ！ 避けやがったか。だが、同じ手は使えねえ」

「確かにな……(あれをやるしかないか)」

これ以上の回避が困難と判断した造理はある策を思い浮かべる。

「驚いたよ。まさかお前相手にここまで手こずるとは思わなかった」

「? 負け惜しみ……じゃないな。何を企んでやがる」

「お前を倒す必勝法だ」

「何!」

造理は焼け焦げてボロボロに成ったジャージの上を拾い上げ、両手
に巻き付けた。

『《錬成》』

『へいへい！ 危なげなく危機を回避した造理が個性を発動した！

今度は何を造る気だ!?! ——つて、何だそれ?』

「手袋……だな」

造理が個性を発動して造ったのは手袋、造理は両手に手袋を装備し
ていた。

「何だあれ?」

「どう見ても唯の手袋だよな?」

「一体何するつもりだ?」

実況しているプレゼントマイクや相沢先生も含め観客達から疑問

の声が上がる。

一見してみれば造理が身に付けているのは唯の手袋でしか無いが、この手袋には秘密があった。

「何のつもりだか知らねえが、そんな物で俺の個性は防げねえ！」

「それはどうかな」

痺れを切らした轟が炎を纏いながら造理に接近をしてくる。

しかし、造理は接近してくる轟に向かって手をかざし……。

『パチッ！』

指を鳴らした。

——すると次の瞬間。

「何っ！・ぐわっ!!」

「!!?!」

造理と轟の間が炎に包まれる。

突然現れた炎、轟は驚き接近を辞め距離を置いたが強烈な炎によって発生された暴風で吹き飛ばされてしまった。

『おいおいどう言うことだ?! 突然、造理と轟の間にファイヤーが発生したぞ?!』

「何が起きた?」

突然現れた炎にプレゼントマイクや相沢だけでなく、試合を観戦していた全員からも驚き気の声が上がっていた。

「お前……何をした?」

「火を起こしたただけだ」

「?! どう言うことだ!」

突然現れた炎に付いて轟が造理に訪ね造理はそれに答えていく。

原理は簡単だった。

造理の個性”錬成術”で空気中の酸素を濃度調節し、空気中の塵を導火線代わりに利用して点火源である火種を起こし、それを燃焼物となる対象に目掛けて放つ。

そして対象に命中したら炎が起こると言う仕組みだ。

一般入試試験の時に置いて造理が超大型仮想敵を破壊した時に用いた手段と同じ原理であるが、入試試験の時とは違う点が一つだけあ

る。

——それは。

「この手袋は特殊な細工がしてあり、強い摩擦を掛けると火花が散るようになっているんだ」

そう、造理が両手に身に付けている手袋だ。

入試試験では発火石を造ってそれを火種にしたが、発火石では両手を使わなければならず一回の動作に手間が掛かってしまう。

しかし手袋ならば片手でフィンガースナップ・・・分かりやすく言えば指パツチンで火種を生み出すことが出来、両手で行えば高速で連続使用できるのだ。

「目には目を、火には——火だ！ 『パチンツ！』」

「くっ！・ぐわっ！」

造理は再び指を鳴らし轟に向かって火種を放つ。

轟は済んでの所で交わすが火種がステージに命中する事で炎が起こり、轟にも多少のダメージを与えていく。

「どんどん行くぞー！」

「くっ！・嘗めるな！」

造理は次々と指を鳴らして火花を起こし、轟に向かって放つ。

対する轟はそれを危なげながら回避。氷を形成して防御に徹し逃げ回っていた。

『おいおいおいおい！ また造理が押し始めたぞ！ 一体何なんだこれは!?!』

「良い手だな。”火”の個性を持つ轟だが、自身に火が効かないわけじゃ無い。さつきまで轟が造理にやっていた事をそのまま返しさせているようなものだ』

『こいつはデンジャラスっ!! ヒーロー科A組”造理”! こいつに造れない物は無いのか?! ——て言うかちよつと火力が強すぎねえか? ステージがどんどん吹っ飛んでいくぞ?』

「随分威力が強いな? 威力の調整が出来ないのか?」

プレゼントマイクと相沢先生が疑問の声が上がる。

造理が炎を起こす度にステージが破壊されていくが、実はこの炎を

起こす攻撃には一つ欠点があった。

この火を起こす攻撃は射程・攻撃範囲・命中精度がとても高く攻撃方法としてはとても優秀なのだが、”威力”の調整がとても難しいのだ。

下手に抑えてしまったらライター程度の火しか起こす事が出来ず攻撃と呼べるような状態には成らない為、攻撃に用いる場合はどうしても高威力に成ってしまい、下手に使用したら大惨事を招きかねないのだ。

造理自身、出来れば使いたくない手段であったのだが、轟の炎に対抗するにはこれ以外に思い付かずになっていたのだ。

そのお陰でステージがボロボロに成って行く……。

「轟、そろそろ降参しないか？ このままじゃステージが無くなっちゃうぞ？」

造理もステージを破壊していくことに後ろめたさを感じているのか轟に降参を進めてくるが……。

「巫山戯るな！ このままで終わらせるか!!」

轟はそれを良しとしない。

造理の挑発とも取れる言葉に激怒した轟は大出力の炎を放ち始めた。

さらに右の個性も発動し、氷も発生させている。

「これで終わらせてやる！ 覚悟しろ！」

「全力か、（今の轟、緑谷の時と同じだな……これはチャンスだ）ならこつちも！」

次の一撃にフルパワーを注ぐ轟に対し造理も全力で答えようと両手を前にかざした。

お互い次の一撃で勝負を決めようとしていた。

——そして。

「食らえ造理！」

最大出力の炎と氷が造理に向かって放たれる。

「させるか！ 『パチッ!!』」

造理も両手で指を鳴らし最大出力で挑んだ。

「やり過ぎよ、二人とも！ セメントス!!」

「分かった!!」

審判であるミッドナイトとセメントスが危険を察知した様であり、セメントスが個性を発動し、造理と轟の間に分厚く巨大なセメントの壁を幾つも造り出す。

そして二人の全力の一撃が壁に激突した瞬間

「!!!」

轟の氷によって冷やされた空気が炎による熱で膨張、さらに造理が発生させた炎も合わさり巨大な爆風が起こる。

それは二回戦で轟と緑谷の試合で起こったものよりも大きかった。

『さっきの試合よりも大きいぞこれは!! 勝負はどうなった!?!』

「ステージがまた滅茶苦茶だ。ミッドナイト、確認を」

「いたたた…、分かったわ」

ミッドナイトが確認を急ぐ。

爆風による煙幕でステージが何も見えない状態であったが、徐々に晴れていきステージが現になっていく。

——そしてステージに立っていたのは。

「! 轟くん!」

「はあ、はあ、はあ」

轟であった。

息を切らしボロボロに成っていたが、轟は何とかステージの上に立っていた。

一方の造理は……。

「造理くんは……何処?」

造理の姿はステージの上には無かった。

『おいどうしたのか!? 造理の姿が何処にも無いぞ!?!』

「よく確認しろ! 何処かに居るはずだ!」

実況席にいる相沢が声を上げる。

しかし、確認しても造理の姿は見えず、場外にも観客席にも目をやるが姿が無い。

「はあ、はあ、何処だ……造理……」

意気消沈ながらも周りに目を配る轟、既に体力を使い果たしており戦う力を残して居ないが造理に姿が確認できない以上、勝敗はまだ決まって居らず今だに警戒を続けている。

——すると、次の瞬間。

「ぐはっ!!」

「!!??」

突然、轟の真下から何かが出現し、轟は真上に吹き飛んだ。

——そこに現れたのは。

「「っ、造理っ!」」

造理であった……。

◇◇

「上手く行ったな」

轟に攻撃が命中して俺は満足の声を上げる。

「っ、造理くん! あなた一体何処に」

「ステージの下に居ました」

「し、下?」

俺が突然現れたことに驚いたのかミッドナイトが問いただしてきたが、俺の言葉にミッドナイトは疑問の声を上げてくる。

簡単に言ってしまうと爆風が発生した瞬間、俺は自分がいた位置のステージを分解して地下に逃れたのだ。

轟が炎と氷を同時に発生させた時、これは二回戦で緑谷との試合で起こったものと同じ事が起こると判断した俺はその後に奇襲を行うことを思い付き、地下に逃れた。

そして、そのまま轟の居る位置まで掘り進め、ほとぼりが冷めた瞬間に地上に飛び出して轟に奇襲し見事に成功。

あれだけの大出力で攻撃を放てば流石の轟も体力を使い果たし緑に身動きが取れないと判断し、それも的中。

俺は轟に向かって拳を繰り出して、それが轟のアゴに命中し轟は宙を舞った。

「がはっ！ あ……あ……」

俺の攻撃を受けて宙を舞った轟はそのまま場外に落ちて意識を失っていった。

「ミッドナイト先生。——勝負有りです」

「!? と、轟くん場外！ ——この勝負、造理くんの勝利!!」

この瞬間、勝負が決まった。

『決まったあ——っ!! 度肝を抜かれた白熱バトルっ！ 勝利をもぎ取ったのは造理だあ——っ!!』

ミッドナイトの判定の元、勝敗は決した。

俺は轟を降し何とか勝利を勝ち取った……。

「また、ステージがスツゴいことに成っちゃったね。これ直すの大変だよ」

「セメントス先生。良ければ俺が直しますが……」

ステージの状態を見てか苦悩の声を上げているセメントスを見た俺はステージを直そうと声を掛ける。

「君はこれから決勝があるからしなくていいよ。今は身体を休めて決勝に備えなさい」

「……分かりました」

セメントス先生の言葉に俺は了承する。

ステージをこんなにしてしまった原因は俺にもあるから少し後ろめたさが有ったが、セメントス先生が言うことも正論であるためそれに従うことにした。

「轟くんは……気を失っているだけね。すぐにリカバリーガールの元へ」

「I know」

場外に落ち意識を失った轟はタンカーで運ばれていき、俺はそれを見送った。

この決勝トーナメント、一回戦の麗日、二回戦の発目、——そして今回の轟、苦勞する戦いの連続であった。

予想外の展開続きで、調子が狂わされっぱなしだが、次の決勝はどうなることやら……。

|

第31話

「う、う・・・ここは・・・」

「気が付いた用だね。ここは医務室だよ」

「リカバリーガール」

場所はリカバリーガールの医務室。

先程の造理との試合で敗北し気を失った轟は医務室まで運ばれベットのの上に寝かされていたが、リカバリーガールの治療で治療されて、たった今、目を覚ました所であった。

「俺は・・・負けたんですか」

「そうだね。良い勝負だった見たいだよ」

「そうですか・・・」

勝敗の事をリカバリーガールに訪ねた轟は自分が勝負に負けたことを知る。

「治療は済んであるから起きても大丈夫だね。——後は好きにしな」

「有り難うございます」

轟はベットから起き上がり、リカバリーガールに挨拶を交わした後、に医務室を後にした・・・。

「・・・」

医務室を後し会場の通路を無言で歩いていく轟、その表情は、まるで何も無かったかのように平常心を保っていた・・・。

——ように思えたが。

「くそっ！」

やはり内心はかなり悔しかったようであり、痛惜の言葉が飛び出していた。

「(全力でやって勝てなかった・・・)」

造理との試合による敗北、これは前回の戦闘訓練での敗北とは比較にならないほど無念なことであった。

才能に満ち溢れ父親であるエンデヴァーによって厳しい特訓を課せられ同年代においては負け無しの環境で育ってきた轟にとっての

今回の敗北、それも「左」を使用し全力を振り絞って挑んだ勝負での敗北は轟にとつて初めての経験であったのだ。

——しかし。

「(こんなんじや、オールマイトみたいに強く成れねえな……)」

轟は後ろを見ては居なかった。

今の轟は二回戦の緑谷に続き準決勝で造理にまで悟された事で自分が何がしたいか何をするべきなのかを明確に理解した轟の心は真っ直ぐ向いていた。

——すると、その時。

「目を覚ましたようだな、焦凍」

「!? 親父!」

通路を歩いて居た轟の前に轟の父”エンデヴァー”が姿を現した。

「何故ここにいる」

「お前を様子を見に来たのだ。試合に負けて気を失ったお前をな。……だが、問題は無いようだな」

「……」

造理に敗北して医務室に運ばれた轟の様子を伺いに来たエンデヴァー。

息子である轟の無事な様子に安堵な様子を浮かべている。

「試合は残念な結果に終わったが仕方が無い。あれは相手の方が一枚上手だった」

「……」

試合の結果に冷静に受け止め感想を述べるエンデヴァー。

しかし、轟はそれを黙って聞いていた。

「お前は「左」を使わないことに拘らなくなった。これからお前はどんどん強く……」

「一つ聞きたい」

「?」

息子の成長に満足な様子で語っていたエンデヴァーであったが、途中で轟がそれを遮る。

「お前……母さんの事をどう思ってるんだ?」

「？」

エンデヴァーに向かつてそう語りかける轟、この質問は轟にとって長年疑問に思っていた事であった。

父親が個性婚で母親と結婚したことは知っていたが本当にそれだけなのか、本当に個性だけを目当てに母親と結婚したのかと・・・。「それを聞いてどうする？」

「俺は母さんを救いたい。——だから答えろ」
「・・・」

轟は真剣な面持ちでエンデヴァーを見つめた。

これまで父親の前では決して口に出さなかったに母親への思い、その母親を救うべくまず行ったのが父親に母親に対する思いを問うことであった。

そして、この答えによつては轟は父親であるエンデヴァーに見切りを付けるつもりでいた。

——しかし、父親の回答は。

「——最低な女だ」

「っ!? てめえっ!!」

「ふんっ！」

「ぐっ！」

エンデヴァーの答えを聞いて激怒した轟は殴り掛かったが、エンデヴァーは轟の拳を片手で受け止める。

「弱くて軽い拳だ。まだまだ鍛えなければ成らないようだな？」

「黙れ、てめえのせいで母さんは！」

怒りに満ちた轟はエンデヴァーの言葉に耳を傾けようとしなない。

しかしエンデヴァーはそんな息子を顧みず話を続ける。

「お前が何を言おうと母さんに対する私の評価は変わらない。母さんはそれだけの事をしたのだ」

「何を言ってもやがる！ お前が母さんを追い詰め・・・」

「どんな事情があろうと子供に危害を加える親は最低だ！」

「!?」

今度はエンデヴァーが轟の言葉を遮った。

それを聞いた轟は冷静さを取り戻し、力を抜いてエンデヴァーから離れる。

「俺が母さんを追い詰めてしまった事は十分理解している。だが、理由はどうであれ母さんは実の息子であるお前に危害を加え罪を犯してしまったのだ。実の子供に危害を加える、——これは人の親として最低な行いだ」

「……」

エンデヴァーの言葉に轟は黙ってしまう。

確かにエンデヴァーの言う事も事実であった。

第三者から見ても轟に対するエンデヴァーの行い、これはお世辞にも良いとは言えない仕打ちである。

それを間近で見ても来た事で気が狂ってしまった母親の心情も察するものがあるが、だからと言って母親が轟にしたことは許される事では無い。

エンデヴァーに対してならまだしも、何の罪も無い実の息子に危害を加える。

言ってしまうえば、これは轟に対して悪質な当て付けであった。

「俺は人の親でもあるが、ヒーローでもあるのだ。お前がどう思おうと俺がヒーローである以上は母さんがやってしまった過ちを見過ごす訳に行かない。……だから母さんを施設に入れた」

「……」

「お前が消えない傷を負わされながらも母さんの事を大切に思っているのはよく分かった。俺を嫌うのも構わんし、もしお前がヒーロー以外の道を選ぶのであれば好きにすれば良い。——だが、お前がヒーローを目指している以上は一切の甘えは許さないし許されない」

「……」

轟に対して豪語するエンデヴァー。

息子の本音を聞いたことでエンデヴァー自身も胸の内を語っているようであった。

「ヒーローにとって綺麗事は上等だ。だが、綺麗事だけでまかり通るほど世の中は甘くないし、罪を犯せば罰せられる。それが大人の世界

だ」

「……」

ナンバー2ヒーローでこそあるがヴィランの検挙率はナンバー1を誇っており、誰よりもヒーローとしての活動に勤しんでいたエンデヴァー。

彼の言葉には他の者には無い重みがあった。

「お前は彼と……造理 練の事を知って分かっただろう。後ろを見て寄り道する事が如何に愚かな事なのかを……」

「……」

ここで造理の名を口にしたエンデヴァー。

本来ならば守秘義務であるにも関わらず息子にせがまれて喋ってしまったエンデヴァーの行いはいけないことではあるのだが、エンデヴァーはそれを理解しても尚、造理を引き合いに出した。

「彼は悲惨な境遇でありながら決して後ろを見ずに、己を磨き上げて常に前進をしている。お前もヒーローの道を行き、私を超えるナンバー1ヒーローに成るつもりならば余計な事はせずに前に進め。……ではな」

そう言い残し、エンデヴァーは去って行った。

——しかし。

「待て、親父！」

轟がそれを呼び止める。

「最後にこれだけ聞かせろ！」

「? ……何だ?」

轟に呼び止められて身体を向けるエンデヴァー。

「お前……母さんを愛しているのか?」

「……ふん、何を言っている」

轟の問いに対してエンデヴァーは鼻で笑い背中を向けてしまった。するとエンデヴァーは目を閉じながらゆっくりと口を開く。

「——愛してもいない女と誰が結婚などするか」

そう言い残してエンデヴァーはその場を去って行った……。

「……」

去って行く父親の背中を黙って見つめる轟。

父親の言葉を聞いて無言を貫いているが、それは轟の中でまた一つ何かが変わった瞬間でもあった……。

◇◇

『閃光弾（スタングレネード）!!』

「ぐあっ！」

場所は変わって会場ステージ。

今現在ステージ上では爆豪VS常闇の試合が行われていた。

互いに準決勝まで上がってきた強者同士、接戦を予想されていたが、試合中……爆豪に対して常闇は防戦一方の状態であり、背後を取られると爆豪の個性を利用した閃光を浴びてしまい、その隙を突かれ羽交い締めになられてしまった。

「詰みだ」

「……まいった」

光を苦手としていた常闇は弱点を突かれてしまった事で為す術を失い、敗北を認めた。

「常闇くん降参！ 爆豪くんの勝利!!」

『決まったー!! 準決勝第二試合の勝者は爆豪！ よって決勝は造理VS爆豪に決定だあ!!』

勝敗は決し爆豪が勝利を収めた。

「フ……」

勝利を収めた爆豪であったが、その表情に嬉しさと言う感じは一切見せず真剣な面持ちその物であった。

そして爆豪は会場の観客席に目を向け、その先にいるのは……。

「（次はお前だ錬金野郎!）」

次の試合、決勝で戦う造理 練であった。

爆豪は会場の片隅にて試合を観戦していた造理を睨み付ける。

「（やっとだ。やっとてめえと戦えるっ!）」

造理と戦うことを心待ちにしている様子を見せる爆豪だが、それは仕方が無い。

爆豪にとって造理には並々成らぬ思いが有ったからだ。

——それは。

「俺は本当の一番じゃない！」

雄英一般入試試験を一位で合格した爆豪だが、本来ならば一位で合格していたのは同じく一般入試試験を受けていた造理であった。

しかし造理は入試試験で他の追従を許さない好成绩を収めた事で”特待生”に成ってしまった為に一般入試の合格から抜け、推薦で雄英に入学してしまった。

つまり、爆豪が入試試験一位に成ったのは造理が抜けたことによる繰り上げによる結果であったのだ。

——更にそれだけじゃ無い。

「錬金野郎は俺と同じ会場で試験を受けていやがった。それなのに俺よりも遙かに高い成績を収めていやがった……」

爆豪は造理と同じ試験会場にいたが、仮想敵退治でも造理に負けていたのだ。

さらに超大型仮想敵が現れた時も爆豪は戦わずポイント稼ぎのためにあえて逃亡を選択したが、造理は逃亡せずに立ち向かい、それを撃破。

さらにそれによって得られた救助ポイントが加算され爆豪の倍を超える成績をたたき出していたのだ。

入試試験に置いて爆豪は造理に完全敗北をしていたのである。

そして爆豪が最も気に入らないのは……。

「あの野郎は注意するのは”デク”と”メガネ”と”丸顔”だけと言いやがった。——俺は眼中にねえって事か!？」

そう、これであった。

雄英体育祭開始直前、控え室でA組一同に言った造理の言葉”俺が注意するのは緑谷と飯田と麗日だけで他は取るに足らない”……この言葉が気に入らなくて仕方が無かった。

つまりそれは造理にとって爆豪の存在は意識すらしない程度の”格下”と言うことであるのだから……。

だからこそ爆豪は宣誓の後に造理に向かって宣戦布告をしたのだ。

「(あいつはあの半分野郎を倒しやがった。悔しいがあいつは間違はなく俺の上を行っている)」

プライドの塊である爆豪であるが造理が自分より上に行っているのは理解していた。

入試試験に始まり入学後の個性把握テスト、戦闘訓練で勝てないと思ってしまった轟に勝利を収めた事やUSJでヴィランと対峙した時の振る舞い。

そして雄英体育祭でのこれまでの成績で全て上を行かれてしまっているこの現状。

爆豪にとって悔しい事ではあるが、その結果は認めざる終えなかった。

故に次の決勝に対する思いはとてつもなく強い。

「(あいつは間違いなく一番つええ。あいつを倒せば——俺は一番に成れる!!)」

爆豪は歯を食いしばり、改めて造理を睨み付ける。

『決勝まではしばらく休憩にするぜ！ 40分後に決勝スタートだ!!』

プレゼントマイクの実況の元、決勝までに猶予が出来、爆豪は決意を改めステージを降りる。

「(てめえを上からねじ伏せる！ そんで、俺がトップだっ!!)」

造理に対して心の中で改めて宣戦布告をした爆豪は、会場から去り決勝に備えるのであった……。

第32話

『さあ遂に来たぜ、決勝戦！ 選手入場だあっ!!』

「うおおおおおおお——!!!」

うるさく鳴り響くプレゼントマイクの実況、雄英体育祭も残すとこ決勝トーナメントの決勝戦のみとなり、会場は声を上げて盛り上がっていた。

「遂に決勝だな！」

「爆豪対造理、どっちが勝つのかな？」

「俺、爆豪に賭けるぜ」

「乗った！ 俺、造理に賭ける」

「俺も造理」

「じゃあ俺は爆豪」

観戦しているA組一同も試合開始を心待ちにしている様子。そしてこの男も……。

「(かっちゃん、……造理くん)」

無言で試合会場を見つめる緑谷。爆豪に造理、緑谷にとってはどちらも気に成る人物であり、緑谷もどっちが勝つかは分からないで居た……。

『さあ、選手入場だ！ 先ずは体育祭開始前に一位宣言をここまです勝ち上がって来たクレイジーキッド！ 爆豪 勝ち!!』

「うっしやああああああ!!」

爆豪が声を上げながら姿を現す。そして反対側から……。

『そしてもう一人は優勝候補だった轟を降し、圧倒的な力を見せてきたスタイリッシュボーイ！ 造理 練!!』

「……」

造理が姿を現した。

爆豪のように声は上げては居ないが、とても落ち着いた様子を見せていた。

『さあ、さっさと始めようぜ！ 爆豪VS造理！ 試合開始だ!!』

「スタートっ!!」

活きよい良く開始された決勝戦、すると……。

「死ねええええええ!!」

真っ先に動いたのは爆豪、スタート開始直後に飛び出し、造理に向かつて爆破を繰り返した。

爆破は造理に命中したように見え、爆煙が立ち込めるが……。

「フーン！」

「食らうかつ!？」

造理は爆豪の爆破を難無く回避しており爆煙に紛れて爆豪の真横に現れて攻撃を繰り返すが、爆豪はを両手でガードし防いだ。

「食らええ!!」

「フーン！」

爆豪は至近距離まで近づいてきた造理に向かって再び爆破を繰り返したが、造理も再びそれを躲して爆豪と距離を置く。

「おらおらおらおらっ!!」

造理に向かって猪突猛進に攻撃を繰り返す爆豪、造理はそれをひたすら回避し、爆豪との距離を置いていく。

『爆豪の怒濤の連打が炸裂してるぜ!! あまりの猛攻に造理は逃げればかりだあ!!』

爆豪の猛攻に騒ぎ立てるプレゼントマイク、更に会場の他の場所でも……。

「爆豪凄え！」

「造理を圧倒してやがる！」

「これこのままいつちまうんじやねえか!？」

試合を観戦していたA組一同は爆豪の戦いっぷりに驚きの声を上げていた。

爆豪が造理を押ししている試合展開、会場の誰もが爆豪が勝利をするのでは無いかと思っっているようだった。

——そんな中。

「(……おかしい)」

緑谷、この男は違っていた。

分析を得意とする緑谷は目の前で繰り広げられている爆豪と造理の試合に違和感を感じていた。

そして他にも……。

「(何やってるんだ造理?)」

プレゼントマイクの隣に座っていた相澤先生も試合の違和感に気付いていた。

他にも会場いる殆どの人間が盛り上がっている中、何人かの人間は試合の違和感に気付いていた……。

——その時。

「おい、錬金野郎!!」

「?」

爆豪が唐突に造理に向かって声を上げた。

「てめえ、巫山戯てやがるのかあ!!」

「何のことだ?」

爆豪の一方的な責め立てに造理は声を上げる。どうも爆豪は苛立ちを見せているようだが、それも仕方が無い。

何せ造理はここまでの試合に置いて……。

「何で”個性”を使わねえんだ!!」

”個性”を全く使用していなかったのだから……。



「何で”個性”を使わねえんだ!!」

……流石に気付いてきたか。

現在俺は爆豪と決勝戦を繰り広げて居るのだが、個性は一切使用しないで居た。

別に個性が使えなく成った訳では無いが、使わないのには理由があった。

——それは。

「自己アピールの為だ」

「!?」

この雄英体育祭が始まってから一次予選と二次予選、・・・そしてこの決勝トーナメントで俺の個性の強さは十分にアピールすることが出来た。

しかし俺は”個性の強さ”その者の強さ”と言う考えは好きでは無い。

個性でしか物事を捕らえることしか出来ないヒーロー達の目に止まった所で何のメリットも無いし、ならば個性抜きで俺自身の力を示して、理解あるヒーロー達の目に止まった方が良いと言うものだ。

そして、この決勝戦で、もし個性を使用せずに勝利することが出来ればこの上ない実力アピールに繋がる。

「俺のアピールに付き合っつて貰うぞ爆豪?」

「!? ふざけんなあつ!!」

「フン!」

「!? のわあつ!!」

俺の言葉を聞いて怒りに狂ったのか爆豪は急接近して来て右手をかざし個性を発動してくるが、俺はそれよりも早く動き爆豪の右手をそらしてその拍子に腕を掴み爆豪を反対側に投げ飛ばした。

「右の大振り、・・・弱点を直して来なかつたようだな?」

「ぐっ!」

弱点を突いてステージに叩き付けたが、爆豪は即座に立ち上がり体制を整える。

「ハッキリ言っつてやる。お前じゃ俺には勝てない」

「ぎげんなつ!! 何を根拠に言っつてやがんだつ!!」

「根拠ならあるぞ。主に三つな?」

「!?」

決勝が始まる前、爆豪の試合は一回戦から観察していたが、こいつには大きな欠点が三つあった。

「巫山戯やがっつて!! 『閃光弾(スタングレネード)!!』」

「!?」

急接近してきた爆豪は俺の目の前で閃光を放っつてきた。

目くらましをされたことで爆豪の姿が見えなくなっただが……。

「甘い」

「なっ!？」

俺は背後に回った爆豪の攻撃を交わして距離を置いた。

「何で避けられた!？」

「予想出来たからだ」

「!？」

これが一つ目の理由、——爆豪の攻撃はとても読みやすい。

爆豪の攻撃は爆破の個性に寄る物が殆どでありその威力は大した物だが、掌からしか発動できない個性の攻撃はとても分かりやすい。

威力が強い故に変則的な攻撃はし辛い為、手の向きや肩の動き等を見ればどう攻撃してくるかが、簡単予測できてしまう……。

「お前の攻撃方法は分かりやすい。見た目が派手なだけで、例えば目くらましをされても回避なんて造作も無いことだ」

「うるせえっ!!」

爆豪は声を張り上げ、俺に向かって個性を発動してくる。

だが。

「遅いな?」

「ぐふっ!？」

俺は爆豪が個性を発動する前に爆豪の懐まで接近し、爆豪の腹部に拳を繰り出した。

「ぐ、うおー!」

「思いのほか打たれ弱いな?」

コレが二つ目の理由、——爆豪は意外と打たれ弱い。

爆豪は爆破という強力な個性による近接戦闘で相手を蹂躪するのが主な戦法だが、爆破によって相手を寄せ付けない事が多かったのか、自分にダメージを受けると言う事があまり無かったようだ。

現に腹部に直撃を受けた爆豪は苦しそうに腹部を押しさえている……。

「げほっ! おわあ!」

「大丈夫か爆豪? よかったら今すぐ降参するか?」

「ぐっ！・・・巫山戯んな！」

俺の言葉にいきり立った爆豪は再び俺に向かって来て個性を発動しようとする。

——だが。

「遅い！」

「!?」

俺は即座に動き、個性を発動してきた爆豪の右腕を掴んだ。

「く、クソが！」

「分かりやすいな？」

「!?」

爆豪は更に左腕で個性を発動して来たが、俺はそれも防いで爆豪に左腕を掴んだ。

「捕まえた」

「クソ！ 離れねえ!？」

俺はガツチリと爆豪の両腕を掴み爆豪を拘束する。

そして爆豪の両腕を引っ張って伸ばして行き……。

「ふっ！」

「ぐふおー！」

爆豪の腹部に膝蹴りを入れ、そして……。

「はっ！」

「ぐはあっ！」

爆豪を大きく蹴り上げた。

蹴り上げられた爆豪は宙を舞ってそのまま場外に落ちていく……。

——と思ったが。

「く、クソがっ！」

爆豪は爆破の個性を使って自分の身をギリギリの所でステージに止まらせた。

「上手く場外を逃れたな爆豪？ だがこれ以上はやめておいた方が身のためだぞ?。」

「うるせえ 鍊金野郎！ 俺は負けねえ!!」

「なら仕方が無い」

「くっ！」

俺は再び爆豪に急接近する。

流石に学習したのか爆豪は要撃はせず、俺から距離を置こうとした。

「逃げられないぞ？」

「くそっ！　ぐわっ！」

しかし、動くスピードは俺の方が上のため簡単に追いつくことが出来、再び爆豪に攻撃を仕掛ける。

「もう諦める爆豪。お前じゃ俺には勝てない」

「巫山戯るな！　まだ勝負は付いてねえだろうが！」

「お前と俺とじゃレベルが違う」

「!？」

俺はハッキリと爆豪にそう告げる。

そしてコレこそが三つ目の理由であり、爆豪が俺に勝てない理由の一番の理由。

——爆豪では戦闘能力での根本的な実力が俺より低いと言う事だ。

コレは爆豪に限った話では無いのだが、雄英の一年生・・・ヒーロー科を含めたその他のクラスの殆どの人間全員は、ハッキリ言っても”弱い”のだ。

特にヒーロー科の奴は派手で強力な個性が持っている者が多く居るため気付いていない奴が多いが、その実力は高い訳では無く、寧ろ低い。

中には例外も居るが、爆豪はその例外には含まれては居らず、爆豪がやたら強く目立っているのは爆豪が強い訳では無く、周りにいる連中が弱いから目立っているに過ぎない。

「ハッキリ言ってるよ。・・・お前は弱い！」

「!？」

爆豪の試合を観察していて思ったのだが、爆豪が決勝まで勝ちの上でやってこれたのは単純にくじ運が良かったに過ぎない。

一回戦では個性は強力だが一撃必殺を気取りあつという間に戦闘不能に陥った上鳴。

二回戦ではノーガードで猪突猛進に単純攻撃を繰り返した切島。
……俺ならば居眠りしながらでも勝てる相手だ。

準決勝での常闇との対戦は単純に個性の相性が良すぎたに過ぎない。

もし轟や飯田、そして緑谷辺りと対戦していたら、ここまで勝ち上がって来る事は出来なかっただろう……。

「お前が決勝まで来れたのは相手が弱かった事と、くじ運が良かったからに過ぎない。お前の実力じゃ、俺には決して勝てないぞ?」

「!!? ほぎきやがれえ!!」

俺の言葉を聞いて完全に頭に來ていた爆豪は叫びながら俺に向かってもう突進して来るが……。

「分かりやすい行動だ」

「!?!」

俺は向かってくる爆豪の動きを利用してクルツと爆豪の背後に戻る……爆豪の右腕を掴んだ状態で。

「な!?! ……ぐわっ!!」

爆豪の右腕を掴んで背後に回った俺は更に爆豪の後頭部を掴み地面に押しつけた。

「ぐっ!!」

「決まったな? もう逃れることは出来ないぞ?」

「クソがつ!」

「降参しろ爆豪。出なければこの右腕をへし折るぞ?」

爆豪の右腕を掴み頭を地面に押しつけ完全に爆豪を拘束した俺は、爆豪に脅しを掛けて降参を催促した。

だが爆豪は……。

「巫山戯るなクソがつ!! 俺は負けてねえ!! 例え右腕を折られてもテメエをぶっ倒してやるっ!」

「そうか……」

何とも往生際の悪い男だ。

ここまででされているのに未だに勝つ気で居るとは、その神経は呆れる物だ。

——ならば俺も容赦はしない。

俺は爆豪の右腕を拘束している腕に力を入れ……。

『グギッ!!』

爆豪の右腕をへし折った。

そしてそれと同時に。

「ぐわああああああああああああ!!」

爆豪から悲鳴が上がった。

「ぐわっ！　があっ！」

右腕を折られた事で痛みもがく爆豪。

俺は爆豪から距離を置き、離れたところから見つめる。

『うわおっ!!　て、あれマジで折れてねえか!?　ヤバくねえ!!』

「ミッドナイト。直ぐに確認を……」

実況席のプレゼントマイクが声を上げ、それに続き相澤先生が指示を出す。

そして、主審のミッドナイトが爆豪の近づいて行き様子を伺う。

「右腕が完全に折れてるわ。これ以上は無理ね」

これ以上試合を続けるのは不可能と判断したミッドナイトは試合を終了させようとした。

——だが。

「待つて下さいミッドナイト」

「!?　造理くん？」

俺はそれに口を挟ませて貰った。

「そいつはまだ降参していません。試合はまだ継続中です」

「これ以上は危険よ。この状態で戦えば障害が残るかも知れないわ」

「それがどうしました？」

「!？」

俺はミッドナイト言葉を一喝した。

爆豪は右腕が使えないだけで他はダメージこそは負っているが戦えないようなレベルでは無い。

そもそもヒーローを目指して居る者が骨の一本く二本へし折れたぐらいでへこたれているようじゃ話に成らないし、そんな軟弱な奴が

いざヒーローに成ったとしても直ぐに辞めるか殺されるのが落ちだ。
「まだ爆豪は戦うことが出来ます。本人が負けを認めない限りは試合を続行すべきです」

「大事なものは生徒の身の安全よ。危険が伴うと分かりきった事を見過ごす訳には行かないわ」

「なら、俺が先に降参して負けを認めます」

「えっ!？」

「「「えっ!!?」」」

俺の言葉にミッドナイトだけでは無く会場に居た全員から驚きの声が上がった。

『おい造理。どう言うつもりだ?』

実況席に居た相澤先生がマイク越しに俺に尋ねてきた。

「俺は曖昧な事が大嫌いです。爆豪自身が負けを口にした訳でも無いのに第三者に勝ち負けを決められるのは納得がいきません」

『そんな身勝手な我が儘が通じると思ってるのか?』

「思っていないですよ?・・・だからルールに則って、俺が負けを認めて気持ち良く試合を終わらせようと思っっています」

『・・・・・・・・』

正論をぶつけた為、相澤先生は黙ってしまう。

そして俺は再び爆豪の方に目を向けた。

「さっさと立て爆豪。それが出来なければ、早く降参しろ」

「・・・・・・・・」

「おいおい、ただか骨が一本へし折れただけで戦意喪失か? 普段から威張り腐ってくせに、意外と根性が無いんだな?」

「・・・・・・・・」

俺の言葉に対して無言を貫く爆豪。

「・・・・・・・・どうやらこいつは、骨折などの重傷を負った経験が無いようだな。」

こう言う経験をしてしまうと身に怪我に対する恐怖が生まれてしまう物であり、そうなってしまえば身体は無意識に危険を回避しようとしてしまう。

一度こうなってしまうと中々立ち直れず、踏み出すのに躊躇してしまふ物だ。

——しかし、命が掛かっている訳でも無いのに、これでは話に成らない。

「呆れた物だな。良くそんなんでヒーローを目指したものだ」

「……………」

俺の挑発紛いの言葉を聞いても爆豪は無言を貫き顔を下に向けている。

こいつはヒーローに夢でも見て他のだろうか？ ヒーローに幸福でも抱いていたのだろうか？

死と隣り合わせであるヒーローを目指しているのならば当然、覚悟ぐらいは持っているだろう思っていたが、情けないにも程がある。

「残念だよ。…………お前には『緑谷』のような根性は無かったようだな」

「っ!？」

USJでヴィランに襲われたときに見た緑谷の姿はまさにヒーローの塊みたいな物であった。

己を身を顧みず、死ぬ覚悟を持ってヴィランと対峙しようとした緑谷には確固たる信念があった。

プロのヒーローでさえ中々持ち合わせない本物の信念が…………。残念ながら爆豪にはそれが無かったようだ。

——その時。

「…………巫山戯んな」

「ん?」

「巫山戯んじゃねえ!!」

爆豪は怒りの声を上げながら立ち上がった。

「俺が弱えだど！俺が情けねえだど！巫山戯んなっ!!俺はデク何かに負けちゃいねえ!!」

俺に向かって怒号をぶつけてくる爆豪。

どうやら緑谷を引き合いに出したのが相当イラついたのか、戦う意

思を取り戻したようだ。

「ミッドナイト!! 試合は続行だ!! 例え手足がもがれても勝利してやらあつ!!」

「落ち着きなさい爆豪くん! 少しは冷静になつて……」

『試合続行だ』

「!? イレイザーヘッド!」

ミッドナイトが爆豪を窘めていたが、実況席に居た相澤先生が試合続行を宣言してきた。

『ここまではヒーローに成るためにここに居るんだ。そしてその覚悟を見せようとしている。この試合はどちらかが負けを認めるか戦闘不能に成るまで継続する』

「……」

相澤先生の言葉にミッドナイトは黙ってしまふ。

——そして。

「……試合続行よ!」

試合は続行された。

「ここまで煽つてやったんだから、少しは根性を見せろよ爆豪? 俺に個性を使わせたら、お前に勝利をくれてやる」

「黙りやがれ、鍊金野郎!! てめえをぶつ倒して俺が勝つ!! sonunda俺が一番だつ!!」

俺と爆豪は再び構え、試合を再開して行つた……。



「……(強い)」

場所はヒーロー科A組がいる観客席、そこに居たA組一同は造理と爆豪の試合を見て、声が出ないほどの驚きを見せていた。

彼らにとつて爆豪は自分たちよりも上を行く存在……”強者”として捉えていたが、その爆豪を圧倒……それも個性を使わずに圧倒する造理の存在が信じられずに居た。

彼らは全員、優れた個性を持つ者であり、その個性の強さにこそ自

信を持っていた。

個性を使わずに爆豪を圧倒する造理の存在は彼らの常識を覆すには十分な出来事であった。

そしてこの男も。

「(かつちゃん、造理くん……)」

幼なじみである爆豪が個性を使わない造理に圧倒される姿を目の当たりした緑谷は、造理の戦いを真剣に考察していた。

「個性だけが強さじゃ無い。僕も鍛えれば造理くんのようにやれるのかな……？」

かつて無個性であった緑谷は個性に頼らない強さを真剣に考え始めた。

さらにこの男……。

「(ここまで差があるのか……)」

準決勝で造理と対決した轟。

「(戦闘技術は俺よりも明らかに高い。俺が善戦出来たのは個性の相性に寄る物か……)」

造理の強さを改めて思い知らされたようであり、造理の戦いから目を離さないでいる。

A組一同それぞれが違う形で試合を考察する中、造理と爆豪の試合は……。

「はっー！」

「ぐわっ!!」

佳境を迎えていた。

試合が続行され、戦い続ける造理と爆豪だが結局は造理が圧倒する状態が続いていた。

爆豪の意気込みは大した物であったが、右腕を骨折している状態では所詮は付け焼き刃、多少は善戦するも殆ど無傷の状態であった造理に対抗することは出来なかった。

「ハア！ンアッ！ハア……」

「動きが止まってるぞ爆豪？」

既にフラフラの状態であり立っているのがやっつとである爆豪。それでも倒れないのは並々成らない爆豪の意地とプライドによる物だが、既に戦う力は殆ど残されていない。

「……………」

「(…限界だな。決めるか!)」

手は既に下がっており視線も合わず棒立ちの状態の爆豪。

造理は勝負を決める為に爆豪に向かって行った。

そして。

「はっ!」

『決まったあー!! 造理の拳が決まったあー!!』

爆豪の顔面に向かって造理の拳がヒットする。

そして爆豪はそのまま場外にまで吹き飛ばされる……………。

——と思われたが。

「……………捕まえたぜ錬金野郎!!」

「!?!」

爆豪は造理の腕を掴んでいた。

「(これは麗日の時と同じ!)」

腕を掴まれて驚く造理。

爆豪は造理の拳が当たる寸前、爆豪は姿勢をほんの僅かだけ下げて造理の攻撃が額に当たるように仕向けたのである。

これは一回戦で造理と対決した麗日がやった事と同じであった。

「(不味い、これは!)」

「逃がさねえ!!」

「!?!」

爆豪は残された力を振り絞って動き出し、掴んだ造理の腕に両足を絡めてガツチリとホールドした。

「これなら避けられねえだろ? 錬金野郎!」

「くっ!」

造理を捕らえる事に成功した爆豪は無事であった左腕を造理に向かってかざし、そして……………。

「ぶっ飛びやがれえっ!! 榴弾砲着弾 (ハウザー・インパクト)!!」
爆豪から強力な爆破が放たれ、造理は閃光に包まれて行っ
た……。

第33話

「榴弾砲着弾（ハウザー・インパクト）!!」

会場を包む爆破による閃光。

造理と爆豪による決勝戦で片腕を折られ一方的に追い込まれて居た爆豪はギリギリの所で造理を拘束する事に成功し、造理に向かって強力な一撃必殺を繰り出した。

『決まったあつ!! 爆豪の強烈な必殺技が造理に決まったあつ!!』

「……つて、ヤバいんじゃないかあれ!」

「造理の奴、至近距離で食らっちゃまったな。ミッドナイト、直ぐに確認を!」

慌ただしい様子で確認を急がせる相澤先生。

本来であれば危険と察知されたら主審であるミッドナイトと副審のセメントスが手を下し、生徒の身の安全を守るのだが、爆豪に掴まれたことで密着していた造理は爆豪の強力で危険な個性をモロに受けてしまった。

現在ステージ上は爆破による煙に包まれており、爆豪の姿はかろうじて確認出来るが、造理は爆豪によつて掴まれている右腕だけしか確認出来なかった。

そして煙が段々と晴れて行くと……。

『煙が段々晴れてくぜ! 果たして造理はどうなつ……つ!』

「「「つ!」」」

プレゼントマイクが言葉を詰まらせ、会場の誰もが驚きを見せていたが、それも仕方が無かった。

爆豪の強力な一撃を至近距離で浴びてしまった造理の身を会場の誰もが安じていたのだが、煙が晴れて、いざ造理の姿を確認しようとした所、そこには造理の姿が無かったからだ。

——爆豪がしがみ付いて居た”右腕”だけを残して……。

「おい! あの右腕つて……」

「そんな、まさか!」

「おいおい、マジかよ!?!」

観客席にて試合を観戦していた観客達から同様の声上がる。

そして彼らも……。

「まさか、造理!?!」

「造理ちゃん、何処行っちゃったの!?!」

「まさか消し飛んじまったのか!?!」

造理が右腕だけを残して姿を消してしまった事でA組一同も慌ただしい様子。

そして、その右腕を掴んでいる爆豪も……。

「……………」

今起きている事に頭が着いて行かず、無言で静止してしまっていた。

右腕一つを残して消えてしまった造理、誰もが最悪の事態を想定してしまい、動揺を隠しきれずに居た……。

——その時。

「危なかったな」

「!!?!?!」

突然の声に会場に居た全員が驚きを見せる。

ステージに舞い上がっていた煙がほとんど薄れ、ステージが完全に現に成った時……。

「今のは本当に危なかった……………」

造理が姿を現した。

右腕を失った状態で……………。

◇◇

「ぐっ!」

右腕を失ったことによる痛みで俺は思わず顔を歪ませてしまう。

しかし今のは本当に危なかった。爆豪に腕を掴まれて個性による強力な一撃が放たれた瞬間、咄嗟に個性で右腕を切り離して何とか直撃を避ける事は出来た。

もしまともに食らっていたら会場の外まで吹き飛ばされていたか

も知れない。

「造理くん！ あなたその腕……」

「問題ありません」

主審のミッドナイトが慌てた様子で俺の安否を伺ってきたが、俺は問題無しと伝えた。俺は倒れ込んでいる爆豪に近づいて行く……。「クソがつ！ 避けやがったか！」

「流石にあれを食らったら一溜まりも無かったからな。それと俺の右腕を返せ」

俺は爆豪が掴んでいた俺の右腕を無理矢理回収した。そして、その右腕を左手で持ち切り離れた腕の部分に添える。……そして。

《錬成》

個性を発動し切り離れた右腕をくっつけ元に戻した。

「(指が上手く動かない。……元の状態に戻るまで数日は必要だな)」
一度切り離してしまった為、上手く右腕が機能しないが今この場で出来る処置は完了した。

試合が終わったらリカバリーガールに見てもらおうとしよう……。「今のが切り札だったようだな爆豪？」

「くっ……」

俺の言葉に苦し紛れに反応する爆豪。どうやら力を使い切ってしまったようだな。立ち上がる様子を見せない。

「(このまま押し出せば俺の勝利だが……)」

爆豪は場外のギリギリの位置に居て、身構える素振りも見せない。爆豪自信も負けを悟ったのか顔を下に向けてしまっている。

それでも負けを宣言しないのはプライドが原因だろう。自分で負けを口にしないのは負けを認めたことを人に見せたくないと言う思いがあるに違いない。

このまま場外に落として爆豪の思い通りにするのはしやくだ。

——だから、俺は。

「降参だ」

「「っ!?!」」

俺は降参を宣言した。

「造理くん！ あなた何を言って……」

「降参と言いました。この試合は俺の負けです」

俺は主審のミッドナイトに改めて降参を宣言する。

「錬金野郎っ！ てめえどう言うつもりだっ!？」

下を向き戦意を失っていた爆豪が叫んで来たが、まあそれも仕方無いことだ。敗北を悟っていた爆豪からしたら俺の降参宣言は全くと言って良い程、納得が出来ない物だろうからな……。

「俺は自分が決めたルールに従っただけだ」

「何っ!？」

俺はこの試合……爆豪との決勝戦では「個性を使わない」と予め決めていたのだ。

この決勝で個性を使わず圧倒的な勝利を収める事で、全国ネットを通じて俺を狙って居るであろうヴィランとその他の連中に俺の力を示そうと考えて居た。

後、これは個人的な考えなのだが、もしこの決勝で個性を使用してしまつたら降参するつもりで居た。

「個性を使わずにお前に勝利するつもりで居たが、それは叶わなかった。だから俺は自分で決めたルールに則って敗北を宣言したんだ。それに言っただろ？ 個性を使わせたら勝利をくれてやるって」

「……ふざけんなあっ!！」

爆豪が力の限り叫ぶ。

「こんな勝敗に納得出来るかあ!! 試合は俺が負けてたんだ!! それなら俺が降参する!!」

俺のしたことが余程納得出来なかった様であり、爆豪はヤケを起こしていた。

このままでは埒が空きそうに無いな？ 俺は爆豪を横切りそのまま場外に降り立った。

「なっ!？」

「ミッドナイト。俺は場外に成りました。俺はもう戦う意思がありません」

「……そのようね」

ミッドナイトも俺の心情を察してくれたようだ。

「造理くん場外！・・・爆豪くんの勝利!!」

『決まったあーっ!! 今一盛り上がらない終わり方だけど、勝敗は決まったぜっ!! 優勝は爆豪だあ!!』

勝敗は決した。俺が負け、爆豪が勝利を収めた。

会場は今一盛り上がっていない様子だけど、俺はそれを気にせずにステージを後にする・・・。

——だが。

「待ちやがれ錬金野郎っ!!」

爆豪が俺を呼び止めて来た。

爆豪はフラフラに成りながらも立ち上がり、俺に近づいてきて胸ぐらを掴んできた。

「まだだ！ まだ勝負は終わってねえ!! 俺と戦えっ!」

爆豪は試合の続行を要求してきた。

「俺もお前もまだ動けるんだ！ 降参なんてまどろっこしい物は抜きで、もう一度俺と戦・・・」

「調子に乗るな!」

「ぐわあっ!?!」

俺は胸ぐらを掴んでいた爆豪の腕を払いのけ、そのまま投げ飛ばした。

「お前の感情なんか知ったことじゃない。そもそも”降参”と言う唯一の選択権をはじめから棒に振ったお前に口を出す資格なんてあるのか?」

「ぐっ!」

「そもそもお前には選択権すらもないんだよ!・・・”弱者”であるお前にはな!」

「!?!」

俺は爆豪に向かってハッキリと宣言した。

この人の社会では常に強者によって成り立っている。

実力や権力・・・形は違えどこれらを持つ強者が選択権を生み出し、積極的に決定を降す。弱者は強者に決められたルールに従い、決

められた生き方で生きるしか無い。

——弱者では生き方も選べないんだ。

だからこそ俺は己を磨き、今まで必死に鍛えて来たのだ。……誰かに生き方を決められない為に。

「お前は弱者で、俺よりも弱い！ だからこそ俺に勝敗を決められてしまったんだ。……そこに、お前なんかの意思が入り込む余地なんてない」

「くっ！」

「それが嫌ならせいぜい強くなることだな。文句なんてものは勝った人間だけと言えるセリフなんだから、俺よりも強く成ってひざまずかせてみせろ。……それまでその勝利はお前に預けて置く」

俺はそう言い残し、爆豪から離れる。

「クソがっ!!」

後ろから爆豪の悲痛の叫びが聞こえるが、俺はそれを気にしない。

俺はそのまま会場を後にして行った……。

——それから、しばらくして。

「それではこれより！ 表彰式に移ります！」

時が過ぎて夕暮れ時。雄英体育祭1年の部は全ての種目が終了し上位四名の表彰式が行われていた。

3位には轟と常闇。3位決定戦は行われなかった為、3位が二人に成ってしまった。

そして2位はこの俺で、そして1位は爆豪。

爆豪が雄英学校1年の中で頂点に立った訳だが、等の本人は……。

「……………」

無言で居た。

リカバリーガールの治療を受け、俺がへし折ってやった右腕は既に治っているようだが、1位に輝いた爆豪は優勝台の上で下を向きながらズツと無言を貫ぬき拳を握りながら立ち尽くしていたのだ。

先程の試合の事が相当答堪えた見たいであるけど、プライドの高い爆豪の事だからってつきり表彰式をバツクレると思っていた。

それとも逆に逃げる事が恥だと思っただのかな・・・？

「さあ、メダルの授与よ！ 今年のメダルを贈呈するのはもちろんこの人！」

「私がメダルを持って来た——っ!!」

ミッドナイトの合図と共にオールマイトが現れる。

そしてオールマイトはメダルを取りだし、順番に授与して行った。

「常闇少年、おめでどう！ 強いな君は！」

「もつたいないお言葉」

先ず授与されたのは3位の常闇。オールマイトの褒め言葉に常闇は恐縮の態度を見せるが・・・。

「ただ！ 相性差を覆すには”個性”に頼りつきりじゃダメだ。もつと地力を鍛えれば取れる選択が増すだろう」

「・・・御意」

オールマイトから苦言を受けた事で反省の態度を示した。

「轟少年、おめでどう」

「・・・」

次にメダルを授与されたのは同じく3位の轟。

「準決勝はとても残念だったな！」

「全力で挑んだ結果ですので後悔はありません。それにあの試合のお陰で色々吹っ切れました。・・・あなたのようなヒーローになるために、これから色々と清算して行くつもりです」

「うむ。顔が以前と全然違う。今の君ならきつと清算できるだろう」

色々吹っ切れた様子の轟はオールマイトに励ましの言葉を受けた。色々と吹っ切れた様子の轟はオールマイトに励ましの言葉を受けた。

「造理少年。準優勝おめでどう！」

「ありがとうございます」

そして俺の番が回ってきた。オールマイトが俺の首にメダルを掛ける。

クラスの皆の前で堂々と優勝宣言をしたのにも関わらず2位に甘

んじてしまうのは情けない限りの話だが、自分で選んだ結果だから、特に何も言うことは無い。

「決勝での敗北……己のルールに従ったの行動なのだろう。君の心得を覆すには並大抵ではないようだね」

「……」

「だけど、あまり自分を苦しめるような事はしてはいけないよ。たとえどのような境遇にあらうとも、我々ヒーローは常に君の味方でいるつもりだ」

「……」

オールマイトの忠告とも言える言葉に対して、俺はあえて無言を貫く。

今までの人生でヒーローに狙われたこともあったから、オールマイトの言葉をあまり真に受けては居ないが、真つ当なヒーローであるオールマイト相手に物申すのはお門違いでもあったから、ここは素直に忠告を受けとっておこう……。

そして、次は……。

「さて、爆豪少年！ 優勝おめでとう！ 伏線回収は見事だったかな？」

「……」

優勝者である爆豪。開会式での宣誓で優勝宣言をした爆豪は宣言通りに見事優勝の美を飾ったが、ズツと下を向き黙って居た。

「決勝戦の結果は納得が行かない物があるだろうけど、絶対評価に晒され続けるこの世界で不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそう多くない。……このメダルは“傷”として受け取って起きたまえ」

「……」

オールマイトは優勝メダルを爆豪の首に掛けようとする。

……だが。

「くっ！」

「？」

爆豪は首に掛けられる前に優勝メダルを手で掴んだ。

「どうした爆豪少年？」

「このメダルは首には掛けねえ！」

爆豪は首に優勝メダルを掛けることを拒んで来た。

「この優勝は実力で手に入れた物じゃねえ！でもルール上、仕方がねえ事だからこのメダルは素直に受け取っておいてやる！……だけど、首にだけは絶対に掛けねえ！これは俺に許される最低限の我が儘だ！」

「爆豪少年……」

オールマイトに向かって内に秘めた悔しい思いをぶちまける爆豪。そして。

「おい、錬金野郎！」

「何だ？」

突然俺に向かって叫んで来た。

「悔しいがためえは俺よりも強え！勝利を譲られた事は納得が行かねえが、実力で劣る俺がとやかく言う資格もねえ！だからこのメダルは素直に受け取っておいてやらあ！」

「……」

「でも、忘れるなっ！俺は強く成っていつか絶対ためえを超えてやる！そして、ためえを超えたその時に堂々とこのメダルを首に下げてるっ！」

俺に向かって思いの丈をぶつけて来る爆豪。これは俺に対する下克上であった。

普段の俺ならば軽く受け流している事なのだが、今の爆豪にそれをやっても意味は無さそうだろう。

「好きにしろ。……出来るならな」

「ああ、好きにしてやらあ!!」

「ははは、青春してるじゃないか！良いよそう言うの！」

俺と爆豪のやり取りを側で見てオールマイトは感心するように笑っていた。

別にこれは青春という訳では無いのだが、あえてそれをここで言う必要は無いだろう……。

「さあ！今回表彰台を勝ち取ったのは彼らだったが、しかし皆さん

！」

オールマイトが振り向き、会場に居る人全員に向かって語り出す。「この場の誰もがここに立つ可能性があった！ ご覧頂いた通りに、次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!! 競い合い、高め合い、さらに先へと登って行くだろう!! ……てな感じで最後に一言!!」

オールマイトが天に向かって指を指す。

「皆さんお唱和下さい! ……せーの」

オールマイトのかけ声と共に ……。

「プルス」プルス「プルスウ」ウル…「おつかれさまでした!!!」…」

全くかみ合わない唱和が行われてしまった。

「そこはプルスウルトラでしょ、オールマイト!」

「ああいや…、疲れたろうなと思って…」

注意を受けてしまうオールマイト。何、とも締まらない終わり方だが、これで全て終了。

長く続いた雄英体育祭は無事に終了し幕を下ろして行った…。

第34話

雄英体育祭が終えてから2日後の事、その日は雨が降り注いでいた。体育祭の疲れを癒やす目的で2日間の休校を与えられ、生徒達はゆっくりと休息を取る。

俺も体育祭決勝トーナメントで切り離してしまった右腕が上手く機能を果たして居なかったが、この2日間の休みを利用してリハビリを重ね何とか通常の動作を行えるまでに回復をさせることが出来た。

そして2日過ぎた後、俺は学校に向かう為に傘を差し本を片手に通学をしているが……。

「おい。あいつ見てみるよ」

「あいつは確か……」

「ああ。雄英体育祭で滅茶苦茶凄いことやってた奴だぜ！」

道歩く人からヒソヒソと声が聞こえる。全国ネットで放送されていた雄英体育祭見ていたであろう一般市民達が俺の顔の見るやいなや小言を垂れている状態。顔を広く知られてしまったようだ。本来ならば俺にとってこの状態はあまり良くは無いなものだけど、不思議とヴィランなどに付け狙われる事は無かった。

「どうやら雄英体育祭での俺の目的で合った」実力を見せ付けることによるヴィランへの牽制”が上手く行った用であり、この休みの2日間は特に何事も起きずに安全に過ごすことが出来た。

中にはそんなことをお構いなしに付け狙って来る奴もいると思っていたけど、世に蔓延るヴィランの殆どは碌に覚悟も無いチンピラばかり。身を危険に晒してまで向かってくるような奴は居なかった用だ。

そんな訳で俺はごく至って平常で平和で静かに通学が出来てい……。

「造理さくんっ！」

「?………発目か」

静かには通学出来なかった。突然、声をかけられて振り向くとそこには、雄英体育祭決勝トーナメントの二回戦で対戦したサポート科”

発目 明”の姿があった。

「おはようございます造理さん！」

「……ああ、おはよ……」

「造理さん！ さっそく昨日の話の続きなのですが……」

俺の事はお構いなしに話をしてくる発目 明。実は彼女とは対戦の後に連絡先を交換していた。最初は断ろうとしたのだけど、彼女はサポートアイテムの知識が凄まじく俺も思わず感心してしまう程の物であった。故に俺は彼女と関係を持って居た方が後々の利益に繋がると判断し彼女に連絡先を教えたのだが、それで一つ困ったことが起きてしまった。……それは。

「実は新しいベイビーに付いて考えついたのですが……」

彼女は異常なまでに良く喋る。

体育祭が終わった後に連絡先を伝えたのだが、彼女はその日の夜に連絡をして来て引つ切り無しに、アイテム開発の話をしてきたのだ。俺も知識は豊富に揃えて居たから彼女の話は理解出来たし会話も成り立っていたけど、それを良いことに彼女はどんどんとエスカレートして行き、この休みの2日間の内に20時間も会話をしてしまった。

ネットワークカメラでの会話だったからさほど苦労はしなかったけど、それでも1日10時間の会話は精神的にもかなり辛かった物があり、少し寝不足気味であった。

「それでそのベイビーの素材なのですが……」

「発目。もう学校に着いたからその話はまた後日だ」

「？ おや、もう学校に着きましたか!？」

彼女が長々と語っている内に俺達ふたりは雄英の校門を潜っており、校舎の前まで来ていた。

「では造理さん！ またお話しましょう！」

「ああ……出来れば今度はもう少し手短にな」

発目と別れた俺はA組の教室に向かって行った……。



「超声かけられたよ、来る途中!!」

「私もジロジロ見られて何か恥ずかしかった!」

「俺も!」

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ」

「ドンマイ」

俺がA組の教室に辿り着くとA組の奴らが賑わって居た。どうやらこいつらも登校途中で一般人達から色々ちよつかいを受けた用だが中には喜んで居る奴も居る。やはり雄英体育祭だけ合ってた1日で一気に注目の的に成ってしまったようだ……。

すると。

「おはよう」

「二「おはようございます!」二」

相澤先生がもの凄くさり気なく教室に入って来て、その途端クラス全員が席に着きピタッと静かに成る。この数日間で相澤先生の人間性を理解した皆は迅速に行動出来るように成ったみたいだ。

「相澤先生、包帯取れたのね。良かったわ」

「婆さんの処置が大ゲサ何だよ」

ほんの2日前まではミイラ男同然の姿をしていた相澤先生であったが、今は包帯を取り素顔を晒してした。どうやらリカバリーガールの治療で怪我を一気に回復させたようだけど、たった2日間であれだけ回復させるのは大した物だ。

「んなことより今日は”ヒーロー情報学”だ。ちよつと特別だぞ……

『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」

「二「胸膨らむヤツきたああああ!!」二」

『コードネーム』ヒーロー名の考案。その言葉を聞いたクラスのほぼ全員から歓喜の声上がる。……しかし、相澤先生が直ぐに睨みを聞かせて全員が静かに成った。

「というのも先日話した”プロからのドラフト指名”に関係してくる……」

相澤先生の話は続く。プロからのドラフト指名……それは所謂、

プロヒーローがサイドキックを求めての指名だ。こう言った指名が本格化するのは経験を積み即戦力として判断される2年生3年生からの話であり、1年で来た指名は将来性に対する”興味”に近いものだと言う。卒業までにその興味がそがれたら一方的にキャンセルなんてこともよくある話だそうさ。

「で、その指名の集計結果がこうだ」

くA組指名件数く

轟	4073
爆豪	3526
常闇	360
飯田	301
上鳴	272
八百万	108
麗日	100
切島	68
造理	51
瀬呂	14

「例年ならもつとバラけるんだが、二人に注目が偏った」

相澤先生の合図と共に後ろの電子黒板に集計結果が表示された。

「だ——白黒ついた！」

「見る目ないよねプロ」

「3位の轟が一番か」

「優勝した爆豪が二番に成ってるぜ」

「て言うか造理が随分少なくねえか？ 2位だったろ？」

クラスの皆が騒いでいるが確かに俺の指名の数は低かった。トツプを争う轟、爆豪は派手で強力な個性を兼ね備え、轟に至ってはナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”の二世であることもありそれがこうして指名が集まっていた。個性だけで判断すれば俺も負けては居ないが、俺の場合は先の二人とは決定的に違う所がある。それは……

「俺は厄介者扱いか……？」

そう。俺の名はヒーロー達に知れ渡って居ると言う事だ。

プロのヒーローであれば成り立ての新人以外ならば俺の素性は誰もが知っている事であり、当然俺が置かれている状況も理解している筈。雄英体育祭での俺の振る舞いも多少は影響しているのだろうけど、指名が集まらなかつた一番の原因はプロのヒーロー達が俺の置かれている状況を理解し厄介者であると判断した結果。

それでも俺を指名してきたのは余程の物好きか唯の愚か者だろうな……。

「これを踏まえ……指名の有無関係なく、職場体験つてのに行つてもらう。おまえらは一足先に経験してしまつたが、プロの活動を実際に体験してより実りある訓練をしようつてこつた」

職場体験。つまりヒーローの現場を知るための課外授業のことだな。それでヒーロー名と言う訳か……。

「まあ仮ではあるが、適当なもんは……」

「付けたら地獄を見ちゃうわよ!!」

突然ドアの方から、相澤先生の言葉を遮るように大きな声が鳴り響いた。そこに居たのは……。

「この時の名が世に認知され、そのままプロ名になつてる人も多いからね!!」

「「ミッドナイト!!」」

18禁ヒーロー・ミッドナイトの姿があつた。

「まあそういうことだ。その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう。将来自分がどうなるか、名を付けることでイメージが固まりそこに近づいてく。それが『名は体を表す』つてことだ。……オールマイトとかな」

相澤先生はそう語る。そして15分の時間が与えられ俺達A組一同はヒーロー名を考察しているのだが、俺は少し悩んでいた。”ヒーロー名”に関して何だが俺は特にそう言った物は気にしていなかつた為、どう名付ければ良いのか検討が付かなかつたのである。……そして。

「じゃ、そろそろ出来た人から発表してね!」

「!!!」

あつという間に時間が過ぎていった。どうやら発表形式だったらしく名前が決まった者から教卓に立ちボードに書いたヒーロー名を皆の前で発表するようだ。

それで最初に発表したのは青山だったがヒーロー名とはほど遠い短文的な名前であり、直ぐにミッドナイトに略されて改稿されてしまった。続いて発表したのは芦戸だったが、発表したヒーロー名はどっかの映画に出てくるような名前。それはミッドナイトに直ぐに却下されてしまった。

変なヒーロー名が続けて発表されてしまった為、何とも言えない変な空気が漂ってしまったが、続いて蛙水が可愛いヒーロー名を発表したお陰で何とか空気を変えて行った。

空気が変わった事に寄って躊躇していた連中が次々と発表して行きクラスの半数以上が発表をし終え、ヒーロー名が決まって行った。

「良いじゃん良いじゃん！ さあどんどん行きましょー!!」

発表は尚も続く。途中、爆豪が『爆殺王』等と言うヒーロー名としてはどう考えても0点の名前にを発表し一悶着があつたがその後は順調に決まって行った。

「思ったよりずつとスムーズ！ 残ってるのは再考の爆豪くと飯田君と緑谷君。そして造理君ね」

残ったのは四人。飯田は自分の名前をヒーロー名にし、緑谷はあだ名に成っていた“デク”をヒーロー名にしていたが、俺はかなり悩んでいた。俺も飯田と同じように自分の名をヒーロー名にしようとも考えていたが、それでは味気ない。だから俺は真っ先に思い付いた名前をボードに書き教卓の前に立った。

俺が書いたヒーロー名は……。

「錬金ヒーロー『ヘルメス』」

「ヘルメスって、ギリシャ神話に出てくるヘルメス神のこと？」

「少し違いますね」

俺が書いたこの『ヘルメス』という名は錬金術師の祖として語られている『ヘルメス・トリスメギストス』から取ったもの。神秘思想・

錬金術の文脈に登場する神人であり、伝説的な錬金術師である。

他にも候補として『アリストテレス』や『ニコラ・フラメル』と言った伝承に記載されている錬金術師達の名前を文字って使おうかと思っただが、この『ヘルメス』が一番シンプルしっくり来たからこれに決めたのである。

「まあ、シンプルで呼びやすいから良いわね。合格よ！」

こうして俺のヒーロー名は決まった。ついでに言う最後に残った爆豪は最後まで決まらず結局、本名を使う事に成った。

「全員決まったわよ」

「有り難うございますミッドナイトさん」

無事にクラス全員のヒーロー名が決まった事で相澤先生が教卓に立った。

「職場体験は一週間。肝心の職場だが、指名のあった者は個別にリストを渡すからその中から自分で決めろ。指名のなかった者は予めこちらからオフアールした全国の受け入れ可の事務所40件……この中から選んでもらう」

相澤先生からリストが渡される。ヒーローはそれぞれ活動地域や得意ジャンルが異なるからこう言った事は慎重に考えて選ばなければ成らない。俺は手渡された指名リストに目を向けた。すると内容は意外なものだった。

- ・ エンデヴァー ヒーロー事務所
- ・ ホークス ヒーロー事務所
- ・ ベストジーニスト ヒーロー事務所
- ・ エツジシヨット ヒーロー事務所
- ・ ミルコ ヒーロー事務所
- ・ クラスト ヒーロー事務所
- ・ ヨロイムシャ ヒーロー事務所
- ・ ギヤングオルガ ヒーロー事務所

その他諸々……。

顔には出さなかったが、この内容にはかなり驚いてしまった。

上から見てみるとヒーロービルボードチャートJ.P.、しかもトップ10入りをしている内の8人が俺を指名していた。他にも見ても10位以内に入っているヒーローの指名が多くこの内容からすると、どうやら俺を指名してきたヒーローは愚か者ばかりでは無かったようだ。

基本単身で行動をする忍者ヒーロー・エッジショットやラビットヒーロー・ミルコが俺を指名してきたのは驚いたけど、最も驚いたのは現在チャートで3位に付いているウイングヒーロー・ホークスだ。

18歳でヒーロー事務所を立ち上げて、その年の下半期には十代で史上初のトップ10入りを果たしたヒーロー界きつての異端児。常にマイペースで居ながら不遜な態度も目立つ変わり者だが、何故俺を指名してきたのだろうか？

「何か裏がありそうだな・・・」

人気も実力も申し分ないが、俺はどうもこのホークスと言うヒーローが今一信用成らない。これはあくまで俺の直感なのだけど、こう言ったヒーローは裏で何かをやっているように思えて仕方が無い。

故に俺はホークスは候補から除外する事にした・・・。

「(となると、この中で選ぶべきヒーロー事務所は・・・ここしかないな)」

行く事務所を決めた俺は指名用紙に記入し相澤先生に提出した。

「早いな造理？」

「選ぶのは意外と簡単でした」

「そうか・・・ん？ お前ここに行くのか？」

「意外でしたか？」

「確かに意外と言えば意外だ。だがお前が選んだなら特に何も言わない」

「それはどうも」

俺が出した指名用紙を手にした相澤先生が少し驚いていたようだが、直ぐに納得したようだ。

こうして俺は無事にヒーロー名と職場体験の事務所が決めたのだった・・・。

「職場体験当日」

「コスチュームは持ったな？ 本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ。落したりするなよ」

あつという間に一週間が過ぎた職場体験の当日。俺達Aクラス一同はそれぞれがコスチュームを手にし、駅に集合していた。

「くれぐれも失礼がないように！・・・じゃあ行け」

相澤先生の見送られ、各自が指名した職場体験のヒーロー事務所に向かうために出発をする。

「楽しみだなあ！」

「お前九州か、逆だな」

「俺はこっちな」

職場体験を楽しみにしている様子のA組一同。しかしその中で・・・。

「・・・・・・・・」

飯田だけは何故か黙って居た。普段ならば人一倍口うるさく率先して話してくる飯田なのだが、ここに来て緑に喋ろうとしない。と言うよりも体育祭が終わってからここ一週間、飯田の雰囲気はどうもおかしかった。

「(インゲニウムの事件が関係しているのか?)」

これは体育祭後にニュースで知った事なのだが、飯田の兄であるプロヒーロー・インゲニウムはヴィランの襲撃に合い再起不能に追い込まれたと言う。インゲニウムを襲ったヴィランは過去に17名ものヒーローを殺害し23名ものヒーローを再起不能に陥れた者。”ヒーロー殺し”等と言うあだ名まで付けられた凶悪ヴィランらしい。

「ヴィラン名は確か”ステイン”・・・」

「飯田くん。本当にどうしようもなくなったら言ってね。友達だろ？」

そんな飯田を心配するかのように声を掛ける緑谷。その隣で麗日も心配そうに面持ちをしていた。

「……ああ」

そんな二人に唯一言、簡単に返事を返した飯田はそのまま行ってしまった。

「飯田が向かった方角は……保須か。」

保須と言えばヒーロー殺しが出没している地域だ。飯田の職場体験のヒーロー事務所が保須にあると言う事は……何か良からぬ事をするつもりのような。飯田の奴。

俺はそんな飯田を事の頭の片隅に留めて置きながら、自分が指名したヒーロー事務所に向かって行くのであった……。

——ナンバー2ヒーロー・エンデヴァーヒーロー事務所に。